福井県埋蔵文化財調査報告　第90集

糞 置 遺 跡

県営圃場整備事業担い手育成型（区画整理）半田地区に伴う調査

２００６

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　文

福井市南東部の文殊山は、福井平野の南の要衝に位置しており、今日でも信仰を集めている神奈備山です。そのためか、山麓部周辺には、実に多くの遺跡が集中しています。とりわけ、現在の半田・二上両地区にまたがる北麓部周辺では、遺跡の存在のみならず、のどかな田園風景が広がっていて、奈良時代に東大寺糞置荘が置かれた面影を今に伝えています。

この度調査を実施した糞置遺跡は、糞置荘の推定荘園域と重なるかのように広がる複合遺跡です。昭和48・49年度の北陸自動車道建設に伴う発掘調査によって、荘園が置かれた8世紀代をさらに遡り、主に縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての集落跡や墓跡などが確認されました。

今回の調査は、当遺跡における30年ぶりの大規模な発掘となり、古墳時代前期の土器や木製品を中心に、貴重な成果を得ることができました。

この報告書によって、新たな調査の成果が広く公開、活用され、文化財に対する理解をより一層深めていただくことになれば、幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ地元の皆様方からあたたかいご支援を賜りました。深く感謝いたします。

平成18年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所長　中　司　照　世

例　　言

1. 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文に略）が、平成14･15年度に実施した、福井市半田町･二上町に所在する糞置遺跡の発掘調査報告書である。調査の原因は、半田地区における「県営圃場整備事業担い手育成型（区画整理）半田地区」による。発掘調査および遺物整理は、冨山正明（県埋文主任調査員）、鈴木篤英（県埋文主査）が主担当となり、県埋文主査である山本孝一、田中勝之と、県埋文嘱託調査員である岡田幸、西本智子、田邊和歌子、日聖祐輔の協力を得た。
2. 発掘調査は、事業によって遺跡に影響が及ぶ範囲を対象とした。発掘調査期間、遺物整理期間は下記のとおりである。遺物整理は県埋文城東分室にて実施した。

   発掘調査期間　平成14年４月２日　～ 平成16年３月31日

   遺物整理期間　平成15年４月２日　～ 平成18年３月31日
3. 本書の編集は鈴木が行い、冨山が補佐した。遺構･遺物の写真撮影は鈴木が行った。遺構に関する挿図の作成については、冨山、鈴木が担当した。遺物に関する挿図･表の作成は、縄文土器、弥生土器、土製品については山本が担当した。土師器、須恵器、墨書土器、木器については、岡田、西本、日聖が担当した。石器やその他の遺物は田中、田邊が担当した。文責は下記のとおりである。

   鈴木篤英･･･第1章 第2章 第3章 第5章第1節　山本孝一･･･第4章 第1･2節Ⅰ･Ⅱ、第3節、第5章第2節

   西本智子･･･第4章 第2節Ⅲ　岡田　幸･･･第4章 第2節Ⅳ･Ⅴ、第7節　田中勝之･･･第4章 第4～6節
4. 調査関係資料は県埋文城東分室で保管している。
5. 現地調査から本書作成に至るまで、下記の方々からご協力を得た。( )内の役職は当時である

   大谷忠勝(半田土地改良区委員長)　大谷信尚　沖田義男　加藤浩一　川端清昭　谷田正實　(上文殊･文殊村の歴史懇話会)　福井農林総合事務所　(以上敬称略五十音順)
6. 本書作成にあたって下記の方々にご指導･ご教示を得た。

   赤澤徳明　岩田隆　工藤俊樹　中司照世　中川佳三　仁科章　野原大輔　冨加見泰彦　水村伸行　山口充　吉岡泰英

   (以上敬称略五十音順)

凡　　例

1. 遺構に関する挿図中の方位は磁北を示す。高さは標高を示す。遺構･遺物の縮尺は挿図中のスケールのとおりである。
2. 遺構実測や遺物の採り上げについては、地形に沿って1辺8mの大グリットを設定し、大グリットをさらに４分割した小グリットを最小単位とした。その上に国土調査法第Ⅳ座標を重ねた。
3. 遺構図中の遺構の略記号については、掘立柱建物をSB、柱穴をＰ、井戸をSW、方形周溝墓をSX、土坑や土器集中区をSK、溝をSD、遺構断面をSとした。特殊な遺構については遺構の性格を示す名称を用いた。
4. 土器の種別表記については、「甕形土器」、「壺形土器」などは省略して「甕」、「壺」とした。
5. 遺物番号の表示は図版･挿図･表･本文を通じて同一である。写真の縮尺は不同である。

目　　次

頁
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2
第２章　調査の経緯と概要 …… 3
　第１節　調査の経緯 …… 3
　第２節　調査の概要 …… 5
第３章　遺　構 …… 7
　第１節　①区の遺構 …… 7
　第２節　⑥区の遺構 …… 7
　第３節　①区･⑥区の川 …… 8
　第４節　②区の遺構 …… 10
　第５節　③区･④区の遺構 …… 10
　第６節　⑤区の遺構 …… 11
　第７節　⑦区の遺構 …… 11
第４章　遺　物 …… 53
　第１節　出土遺物の概要 …… 53
　第２節　土　器 …… 53
　第３節　土製品 …… 77
　第４節　石　器 …… 79
　第５節　玉作り関係遺物 …… 84
　第６節　骨角器 …… 85
　第７節　木　器 …… 86
第５章　まとめ …… 115
　第１節　遺構のまとめ …… 115
　第２節　遺物のまとめ …… 117
付　章　糞置遺跡の縄文土器・弥生土器の検討 …… 119
　第１節　縄文土器の検討 …… 119
　第２節　弥生土器の検討 …… 122

図版目次

本文対照頁
図版第１　遺構　①区
（1）①区遠景（北から） …… 7･折込
（2）①区遠景（南西から） …… 7･折込
図版第２　遺構　①区
（1）①区全体（南から） …… 7･折込･19
（2）SB-1（南から） …… 7･12･20
（3）SB-1P76（南西から） …… 7･12･20
（4）SK-5（南から） …… 7･12･20
（5）SK-6（南から） …… 7･12･20
（6）SK-7（南から） …… 7･12･20
（7）SK-9（北西から） …… 7･12･21
図版第３　遺構　①区
（1）SK-10（南から） …… 7･12･21
（2）SD-10･11（南東から） …… 7･12･22
（3）SD-21･22（南西から） …… 7･12･22
（4）SD-23（南西から） …… 7･12･22
（5）SK-11（南西から） …… 7･12･21

本文対照頁

図版第４　遺構　①区
(1) SK-12（南から） …… 7･12･25
(2) 弥生･古墳時代川底面（東から） …… 9･13･19･25
(3) 川の木器出土状況（西から） …… 9･21･折込
(4) 水場遺構（東から） …… 9･21･25
(5) 川の木器出土状況(B3ｸﾞﾘｯﾄS3付近)（西から） …… 9･22
図版第５　遺構　①区　川の木器出土状況
(1) D1ｸﾞﾘｯﾄ周辺（東から） …… 8･9･23
(2) E1ｸﾞﾘｯﾄ周辺（南から） …… 8･9･23
(3) E1ｸﾞﾘｯﾄ周辺（東から） …… 8･9
(4) E1ｸﾞﾘｯﾄ周辺（南から） …… 8･9
(5) B3ｸﾞﾘｯﾄ周辺（東から） …… 8･9･23
(6) B3ｸﾞﾘｯﾄ周辺（南から） …… 8･9･23
図版第６　遺構　⑥区
(1) ⑥区遠景（北から） …… 7～9･折込･26～29
(2) ⑥区遠景（南西から） …… 7～9･折込･26～29
図版第７　遺構　⑥区
(1) SX-1（南から） …… 8･13･30
(2) SX-2（東から） …… 8･13･30
(3) SX-3（南から） …… 8･13･30
(4) SK-9（南から） …… 8･13･30
(5) SK-10(東から） …… 8･13･30
(6) SK-13(南から） …… 8･13･30
図版第８　遺構　⑥区
(1) SK-21（I7･I8ｸﾞﾘｯﾄ）（西から） …… 8･14･31･32
(2) SK-24（南東から） …… 8･13･30
(3) SK-22（南から） …… 8･14･33
(4) SD-30第1面(K2ｸﾞﾘｯﾄ）（南西から） …… 8･14･33
(5) SD-30第1面(J2ｸﾞﾘｯﾄ）（南から） …… 8･14･33
図版第９　遺構　⑥区
(1) SD-30第1面(K2ｸﾞﾘｯﾄ）（東から） …… 8･14･30
(2) SD-30第2面(L2ｸﾞﾘｯﾄ）（東から） …… 8･14･33
(3) SD-30第2面(L2ｸﾞﾘｯﾄ）（南から） …… 8･14･34
(4) SD-30第2面(L2ｸﾞﾘｯﾄ）（南から） …… 8･14･33
(5) SD-30完掘（J2･K2ｸﾞﾘｯﾄ）（東から） …… 8･14･折込
図版第10　遺構　⑥区
(1) SD-32完掘（東から） …… 8･14･折込
(2) SD-69第1面(南から） …… 8･14･34
(3) SD-69第2面(南から） …… 8･14･34
図版第11　遺構　⑥区
(1) SD-70第1面（南から） …… 8･14･35
(2) SD-74（南から） …… 8･14･35
(3) 堰出土状況（北東から） …… 9･14･39
(4) 堰（北西から） …… 9･14･39
(5) 堰（北西から） …… 9･14･39
(6) 堰（南西から） …… 9･14･39
図版第12　遺構　⑥区　川の木器出土状況
(1) J5･J6･K6ｸﾞﾘｯﾄ周辺（南から） …… 9･37
(2) 67-33琴板（東から） …… 9･37
(3) 66-２鍬（南から） …… 9･37
(4) 66-３ｴﾌﾞﾘ（南から） …… 9
(5) 66-13漕（北西から） …… 9･37

本文対照頁

(6) 66-13付近出土板材（南東から） …… 9・37
(7) 66-8田下駄・板材（南東から） …… 9・37
図版第13　遺構⑥区　川の木器出土状況他
(1) L7・L8ｸﾞﾘｯﾄ周辺（南から） …… 9・38
(2) J5ｸﾞﾘｯﾄ周辺（南から） …… 9
(3) 68-42割材（南東から） …… 9・38
(4) 67-24機織具（南から） …… 9・37
(5) SD-80（東から） …… 8・14・36
(6) SD-84（南から） …… 8・14・35
図版第14　遺構　②区
(1) ②区全体（南から） …… 10・40・41
(2) SK-1（南から） …… 10・14・42
(3) SK-6（南西から） …… 10・15・42
(4) P24柱根（東から） …… 10・14
(5) SK-9（東から） …… 10
図版第15　遺構　②区
(1) SK-8（東から） …… 10・15
(2) SK-10・11（北西から） …… 10・15・42
(3) SK-17（南西から） …… 10・15
(4) SW-2　（北西から） …… 10・15・42
(5) SD-1　（北東から） …… 10・15・43
(6) SD-1　（東から） …… 10・15・43
図版第16　遺構　②区・③区
(1) SD-15（南東から） …… 10・15・43
(2) SD-15（東から） …… 10・15・43
(3) ③区全体（北西から） …… 10・44
(4) SK-1　（南西から） …… 10・16・45
(5) ③区SD-6・7（南西から） …… 10・16・45
図版第17　遺構　④区
(1) ④区全体（西から） …… 10・44
(2) P1（北から） …… 10・16・45
(3) SK-2・3（南東から） …… 10・16・44
(4) SK-1（北から） …… 10・16・45
(5) SK-1拡張区（南から） …… 10・16・45
図版第18　遺構　⑤区
(1) ⑤区全体（南西から） …… 11・46
(2) SK-2（北東から） …… 11・17・47
(3) SK-9（南から） …… 11・17・47
(4) SK-10～12（南西から） …… 11・17・49
(5) SK-13（北西から） …… 11・17・49
(6) SK-14（南から） …… 11・17・47
図版第19　遺構　⑤区
(1) SK-16（南から） …… 11・17・47
(2) SK-19第1面（南東から） …… 11・17・48
(3) SK-19第2面（南東から） …… 11・17・48
(4) SK-20（北から） …… 11・18・47
(5) SK-18（北東から） …… 11・17・47
(6) SK-21（西から） …… 11・18・48
図版第20　遺構　⑤区
(1) SK-31・32（南から） …… 11・18・48
(2) SD-93（北西から） …… 11・18・49
(3) SD-89～92（北西から） …… 11・18・50
(4) SD-90～93（北西から） …… 11・18・50

本文対照頁

図版第21　遺構　⑦区
(1) ⑦区全体（北から） …… 11･51･52
(2) ⑦区全体（西から） …… 11･51
(3) SD-1第1面（西から） …… 11･18･51
(4) SD-1第2面（南から） …… 11･18･51
(5) SD-4（西から） …… 11･18･52
図版第22　遺物　土器　①区･⑥区包含層出土　縄文土器　弥生土器
(1) 縄文土器 …… 53･54･59･60
(2) 弥生土器 …… 54～56･59･60
図版第23　遺物　土器　①区･⑥区包含層出土 …… 56･61
図版第24　遺物　土器　①区遺構出土
(1) ①区SK-5 …… 56･61･63
(2) ①区SK-2 …… 61
(3) ①区SK-7 …… 56･62
(4) ①区SK-9 …… 56･62
(5) ①区SK-11 …… 56･62
図版第25　遺物　土器　①区･⑥区遺構出土
(1) ①区SK-12 …… 63
(2) ①区SK-12 …… 63
(3) ①区SK-6 …… 63
(4) ①区SK-13 …… 63
(5) ⑥区SK-21 …… 56･63
図版第26　遺物　土器　①区･⑥区遺構出土
(1) ①区SD-1･11･22･23 …… 64
(2) ⑥区SD-70 …… 65
(3) ⑥区SD出土縄文土器、弥生土器 …… 53･54･65
(4) ⑥区SD-80、SD-85 …… 56･65
図版第27　遺物　土器　①区･⑥区遺構出土
(1) ⑥区SD-80 …… 66
(2) ①区SD-21 …… 66
(3) ①区SD-81 …… 66
(4) ⑥区SD-30 …… 66
(5) ⑥区SD-30 …… 66･67
図版第28　遺物　土器　⑥区遺構出土、①区･⑥区川出土
(1) ⑥区SD-30 …… 67
(2) ⑥区SD-31 …… 67
(3) ⑥区SD-69 …… 67
(4) ①区･⑥区川出土縄文土器、弥生土器 …… 53～56･67･68
図版第29　遺物　土器　①区･⑥区川出土 …… 68～70
図版第30　遺物　土器　①区･⑥区川出土 …… 69･71
図版第31　遺物　土器　①区･⑥区川出土 …… 7
図版第32　遺物　土器　①区川出土、②区遺構出土
(1) ①区川出土 …… 72
(2) 土製品 …… 77･78
(3) ②区SK-1、SD-15 …… 73･74
図版第33　遺物　土器　⑤区･⑦区遺構出土
(1) ⑤区遺構出土 …… 56･74
(2) ⑦区遺構出土 …… 56･75
図版第34　遺物　須恵器･墨書土器･土師皿･灰釉
(1) 土師皿　灰釉 …… 58･75
(2) 墨書土器 …… 58･75
(3) 須恵器 …… 57･76

本文対照頁
図版第35　遺物　石器(Ⅰ)
(1) 石槍、石鏃、石錐、石核、石庖丁 …… 79･80･81
(2) 石鍬 …… 79･80･81
(3) 磨製石斧 …… 79～82
(4) 砥石 …… 80･82
(5) 砥石 …… 80･82
図版第36　遺物　石器(Ⅱ)･玉作り関係遺物
(1) 石皿 …… 80･83
(2) 石皿、凹石、敲石 …… 80･83
(3) 玉作り関係遺物 …… 84･85
図版第37　遺物　木器(Ⅰ) …… 86･87･89
図版第38　遺物　木器(Ⅱ) …… 87～92

挿図目次

頁
第１図　福井平野の地形図 …… 1
第２図　糞置遺跡周辺の遺跡分布図 …… 2
第３図　糞置遺跡範囲図 …… 3
第４図　糞置遺跡調査区位置図 …… 4
第５図　発掘風景 …… 6
第６図　①･⑥区遺構全体図 …… 折込
第７図　①区S1･S2層位図 …… 19
第８図　①区SB-1･SK-1･SK-4～7･SD-41 …… 20
第９図　①区SK-9～11･SD-8 …… 21
第10図　①区SD-10･11、S3(川)、SD-21～23 …… 22
第11図　①区川の木器出土状況その1(E1･D1ｸﾞﾘｯﾄ周辺) …… 23
第12図　①区川の木器出土状況その2(D1･C1ｸﾞﾘｯﾄ周辺) …… 24
第13図　(1) ①区川の水場遺構、(2) ①区SK-12 …… 25
第14図　⑥区S1層位図 …… 26
第15図　⑥区S2層位図 …… 27
第16図　⑥区S3層位図 …… 28
第17図　⑥区S4層位図 …… 29
第18図　⑥区SX-1～3、S3～5、SK-2･3･9～12･24、SK-13 …… 30
第19図　⑥区SK-21(H7･H8･I7･I8ｸﾞﾘｯﾄ周辺) …… 31
第20図　⑥区SK-21(I8･I9･J8･J9ｸﾞﾘｯﾄ周辺) …… 32
第21図　⑥区SK-22、SD-30(K2･J2ｸﾞﾘｯﾄ周辺第1面・第2面)、SD-30(M2･L2ｸﾞﾘｯﾄ周辺第2面) …… 33
第22図　⑥区SD-30･32･53･69、S8(SD-31)・9(SD-53･31･32) …… 34
第23図　⑥区SD-70(第1面･第2面)･74･84･87 …… 35
第24図　⑥区SD-80 …… 36
第25図　⑥区川の木器出土状況その1(J5･J6･K6ｸﾞﾘｯﾄ周辺第1面および第2面) …… 37
第26図　⑥区川の木器出土状況その2(L7･L8ｸﾞﾘｯﾄ周辺) …… 38
第27図　⑥区堰出土状況(I4ｸﾞﾘｯﾄ周辺) …… 39
第28図　②区遺構全体図 …… 40
第29図　②区S1層位図 …… 41
第30図　②区SK-1～3･6･10～13、SW-2 …… 42
第31図　②区SD-1･15、SW-1 …… 43
第32図　③区･④区遺構全体図 …… 44
第33図　③区SK-1、SK-2～4層位図、SD-7、④区P1、SK-1、SK-5･7遺構面、S1～S5、⑤区SB-1、P3 …… 45
第34図　⑤区遺構全体図 …… 46

頁
第34図　⑤区遺構全体図 …… 46
第35図　⑤区SK-2～4・9・14～16・18・20 …… 47
第36図　⑤区SK-19・21・28～32・36 …… 48
第37図　⑤区SK-5・10・12、SD-93、P23・27・30 …… 49
第38図　⑤区SD-37・89～91・94 …… 50
第39図　⑦区遺構全体図、SD-1(第1面・第2面) …… 51
第40図　⑦区S1層位図、SK-1～3、SD-4 …… 52
第41図　①区・⑥区包含層出土遺物 その1（縄文土器1～3・5～44　弥生土器4） …… 59
第42図　①区・⑥区包含層出土遺物 その2（縄文土器4～9・12・13、弥生土器1～3・10・11・14～20） …… 60
第43図　①区・⑥区包含層出土遺物 その3（弥生土器1・2、土師器3～29）、
①区遺構出土遺物（SK-2出土30、SK-5出土31・32） …… 61
第44図　①区遺構出土遺物（SK-7出土1～5、SK-9出土6～15、SK-11出土16～20） …… 62
第45図　①区遺構出土遺物（SK-5出土12、SK-6出土3・4、SK-10出土1、SK-12出土5～12、SK-13出土2・3）
⑥区遺構出土遺物（SK-21出土13～27） …… 63
第46図　①区遺構出土遺物（SD-11出土24、SD-22出土25・26、SD-23出土21～23）
⑥区遺構出土遺物（SK-21出土1～20） …… 64
第47図　⑥区遺構出土遺物（縄文土器1～18、弥生土器19～21、SD-80出土28～31、SD-85出土22・24～27、SD-70出土23） …… 65
第48図　⑥区遺構出土遺物（SD-21出土8・9、SD-30出土10～21、SD-80出土1～4、SD-81出土6・7、SD-87出土5） …… 66
第49図　⑥区遺構出土遺物（SD-30出土1・2、SD-31出土8・9、SD-53出土10、SD-69出土3～7）
川出土遺物その1（縄文土器11～20、弥生土器21） …… 67
第50図　川出土遺物その2（縄文土器11～13、弥生土器1～10・14～17） …… 68
第51図　川出土遺物その3（弥生土器1～23） …… 69
第52図　川出土遺物その4（縄文土器4、弥生土器1～3・5～11） …… 70
第53図　川出土遺物その5（土師器1・2、弥生土器3～20） …… 71
第54図　川出土遺物その6（弥生土器1・2、弥生土器3～14） …… 72
第55図　川出土遺物その7（土師器1～4）
②区遺構出土遺物（SK-1出土14、SD-15出土5～13） …… 73
第56図　②区遺構出土遺物（SD-15出土1～3）
⑤区遺構出土遺物（SK-2出土6、SK-5出土7・8、SK-12出土11、SK-15出土9、SK-19出土10、SK-30出土12
SD-79出土14、SD-93出土15・16、P5出土13） …… 74
第57図　⑦区出土遺物（SD-1出土7～13・14～18）、墨書土器、土師皿、灰釉陶器 …… 75
第58図　須恵器 …… 76
第59図　土製品 …… 78
第60図　石器(1) 1～13 …… 80
第61図　石器(2) 14・15～30 …… 81
第62図　石器(3) 31～43 …… 82
第63図　石器(4) 49～50 …… 83
第64図　玉作り関係遺物 …… 85
第65図　弭 …… 85
第66図　木器(1) 1～14 …… 89
第67図　木器(2) 15～36 …… 90
第68図　木器(3) 37～42 …… 91
第69図　木器(4) 43～52 …… 92
第70図　縄文土器分類図 …… 126
第71図　弥生土器変遷図(1) …… 127
第72図　弥生土器変遷図(2) …… 128

表 目 次

頁
第１表　①～⑦区主要遺構観察表 …… 12
第２表　遺物観察表 …… 93

第１章　地理的･歴史的環境

第１節　地理的環境（第1図）

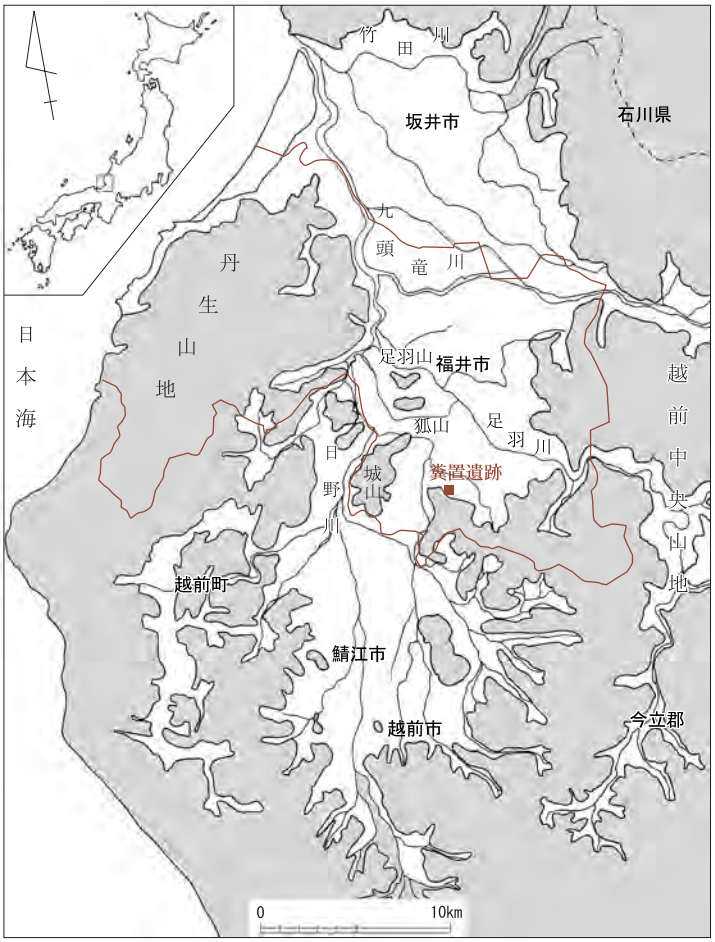
日本海に面した福井県の嶺北地方は、沖積平野と山塊からなる地形であり、九頭竜川下流域には坂井平野、足羽川流域には福井平野、日野川流域には武生･鯖江盆地が形成されている。県の中心部である福井平野は、九頭竜川、足羽川、日野川の三河川によって形成された総合的な沖積平野といってもよく、東方の越前中央山地と西方の丹生山地の間に挟まれた福井断層の凹地に、河川堆積物が流れこんで形成されたと考えられる。

福井平野は、越前中央山地、丹生山地に挟まれながらも、これらの山麓に洪積世台地や緩傾斜地が形成されず、平野南部に島状の独立丘陵が点在していることが特徴であり、河川が扇状地を残さず、堆積地に大きな比高差がないため、福井平野や坂井平野は、全体が徐々に沈む「沈降地形」である可能性が指摘されている(第1図)。

福井市南端には、標高299ｍの文殊山がそびえており、西側に5km離れて位置する城山と東西に伸びる文殊山の尾根線上は、南の鯖江市との市境となっている。文殊山の西側からは高橋川、東側からは江端川といった小河川が流れ、二河川の合流点の地名が「大土呂」と呼称されるように、一帯は大雨になると比高差が低いため冠水しやすい土地条件を有している。

今回調査した糞置遺跡が立地する文殊山北麓は、広大な低湿地と微高地で形成されており、平成13･14年度に実施した試掘調査の結果、北陸本線が走る半田集落西側に広がる水田は、山麓裾まで腐食した植物を多く含む、深い沼地であることが判明した。半田集落から大土呂駅周辺の水田においても同様な地質が展開し、半田集落の西側全体は遺構･遺物密度が極めて薄いと推定される。

しかし、半田集落東側においては、現在の北陸自動車道と重なるように舌状微高地が存在していたようであり、遺跡の大部分は、この舌状微高地と二上集落を中心に大きく広がっていると考える。



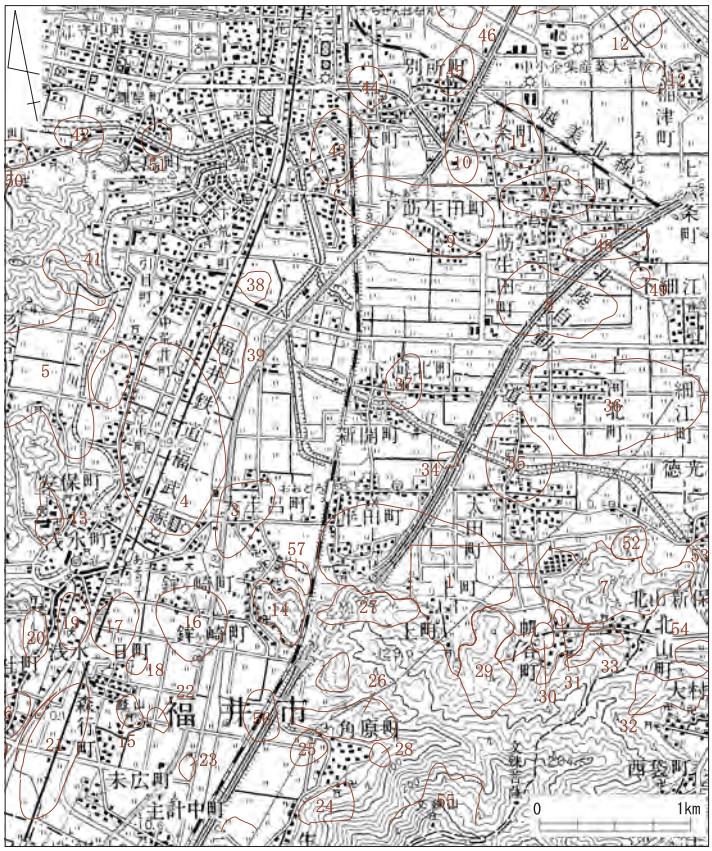
第１図　福井平野の地形図（縮尺1:400,000）

第２節　歴史的環境（第2図）

文殊山の西方を概観すると、北西に約5km隔てた距離に標高202mの城山が位置し、東の文殊山と西の城山の間は、武生･鯖江盆地と福井平野をつなぐ狭隘な微高地となっている。一帯は、古代北陸道の駅家である「朝津駅」が置かれた推定地として有力視されており、交通の要衝地であった。そのため、周囲の丘陵や水田には、縄文時代から中世にかかる実に多くの遺跡が密集している。第2図を参照すると、縄文時代では、三十八社遺跡(6)（文４）から前期から晩期の土器や石斧･石匙･板状土偶の出土が報告され、文殊山の南山麓では縄文時代後期～晩期に四方谷岩伏遺跡（文７）が調査され、後期の貯蔵穴や晩期の豊富な遺物が報告されているが、平地に立地する遺跡では今市遺跡(4)（文１）、上莇生田遺跡(8)（文５）、小稲津遺跡(12)（文６）のように、糞置遺跡と同様、弥生時代～古墳時代を主体としているものが圧倒的に多い。文殊山から派生する山麓尾根には､弥生時代から古墳時代の方形台状基、方形周溝墓等で構成される太田山古墳群(7)（文４）や、鉾ヶ崎古墳群(14)（文４）が存在している。奈良時代になると、現在の二上町、太田町の谷湿地に､東大寺領荘園糞置荘が置かれたことが､正倉院の２枚の開田絵図（天平宝字3年(759)銘、天平神護2年(766)銘）（文３）に記録されている。

参考文献
1. 赤澤徳明「今市遺跡」『第9回発掘調査報告会』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター1995年
2. 角川日本地名大辞典編纂委員会　竹内理三　『角川日本地名大辞典』18福井県　角川書店　1989年
3. 福井市　『福井市史』資料編別巻　絵図･地図　1989年
4. 福井県　『福井県史』資料編13考古　1986年
5. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『六条和田地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第11集　1987年
6. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『小稲津遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第59集　2003年
7. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『四方谷岩伏遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第71集　2003年

番号	県番号	遺　跡　名	番号	県番号	遺　跡　名
1	01181	糞置遺跡	25	01284	角原中町遺跡
2	01182	東大寺領糞置荘	26	01285	角原古墳群
3	01177	大土呂遺跡	27	01180	二上･半田古墳群
4	01173	今市遺跡	28	01286	角原遺跡
5	01172	杉谷遺跡	29	01295	二神古墳群
6	01278	三十八社遺跡	30	01296	帆谷谷田遺跡
7	01184	太田山古墳群	31	01297	帆谷西ノ坊遺跡
8	01191	上莇生田遺跡	32	01300	大宅山古墳群
9	01192	下莇生田遺跡	33	01298	北山横穴墓群
10	01195	別所遺跡	34	01190	下河北藤之木遺跡
11	01197	下六条遺跡	35	01187	太田遺跡
12	01203	小稲津遺跡	36	01189	上河北江原町遺跡
13	01176	安保山古墳群	37	01188	下河北遺跡
14	01179	鉾ヶ崎古墳群	38	01168	下荒井遺跡
15	01280	鼓山古墳群	39	01169	今市免鳥遺跡
16	01276	主計中今村遺跡	40	01171	中荒井高畑遺跡
17	01275	真木遺跡	41	01164	引目古墳群
18	01277	浅水二日町谷山遺	42	01158	江守中遺跡
19	01274	跡	43	01154	合谷遺跡
20	01273	浅水二日町遺跡	44	01193	下莇生田杉縄手遺跡
21	01299	三十八社城	45	01194	大町遺跡
22	01281	北山遺跡	46	01196	別所寺田遺跡
23	01282	末広下町遺跡	47	01201	下馬福丸遺跡
24	01287	森行青田遺跡			



第２図　糞置遺跡周辺の遺跡分布図（縮尺1:50,000）

第２章　調査の経緯と概要

第１節　調査の経緯

Ⅰ. 調査の経緯（第３図）

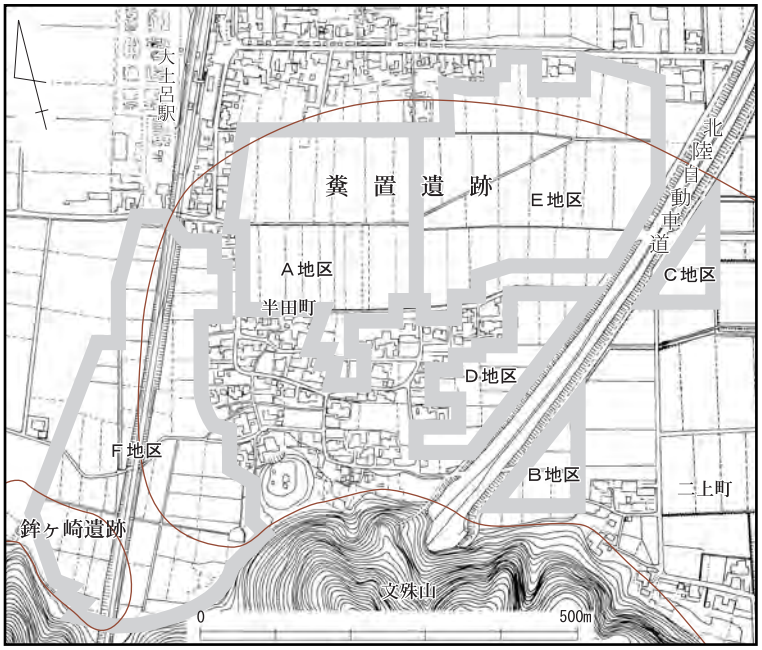
今回の調査は、「県営圃場整備事業担い手育成型(区画整理)半田地区」に伴う発掘調査である。事業が予定される一帯の水田は、奈良時代、東大寺領糞置荘が置かれた荘園遺跡として著名であり、昭和48･49年度に実施した北陸自動車道建設に伴う発掘調査によって、縄文時代から中世にわたる糞置遺跡が糞置荘の荘域と重なって存在することが判明した。

調査に至る経緯を説明すると、福井農林総合事務所(以下、農林と略)から「平成12年９月20日付け福農総第1608号」文書で事業地内の埋蔵文化財確認調査が依頼され、県埋蔵文化財調査ｾﾝﾀｰ(以下、県埋文と略)は、「平成12年11月２日付け埋文第７-49号」文書で試掘調査の必要範囲を示して回答した。

「平成13年８月30日付け福農総第2419号」文書において、次年度の見通しを得るため、農林から試掘可能な用地だけでも、遺構の範囲と規模を確認したいという要望あり、平成13年９月４・５日に地元から掘削許可を得たB地区の一部とC～E地区の部分的な試掘調査を行い、「平成13年９月14日付け埋文7-42号」文書において、試掘し得た範囲内での調査必要面積は約4,500㎡になると暫定的に回答した。

その後、平成13年10月11～16日、19日にＢ～Ｄ地区で本格的な試掘調査が可能となり、「平成13年10月30日付け埋文7-58号」文書においても、試掘し得た範囲内での調査必要面積は、約4,500㎡になると暫定的に回答した。設計変更後の埋蔵文化財の取り扱いについては、農林から「平成14年２月６日付け福農総第303号」文書が提出され、県埋文は「平成14年３月20付け埋文第42号」文書でこれに回答し、調査が必要となった箇所を①～⑦区に分け、事業地において本格調査が必要な総面積は7,600㎡になると回答した。最終的に平成14年度は、①区1,400㎡、②区480㎡、③区240㎡、④区480㎡、⑤区400㎡の計3,000㎡を調査し、平成15年度は、⑥区3,800㎡、⑦区約210㎡の計4,010㎡が調査対象地となり、２ヶ年度にわたる調査面積は合計7,010㎡におよんだ。

調査中にも、周辺の試掘調査を実施し、平成14年度に半田集落北西のＡ地区で34ヵ所、平成15年度に半田集落西側のJR北陸本線周辺の水田であるＦ地区において38ヵ所の試掘を実施したが、遺構、遺物は確認できず、「平成15年11月21付け埋文第42号」文書で、この地区の本調査の必要はないと回答した。

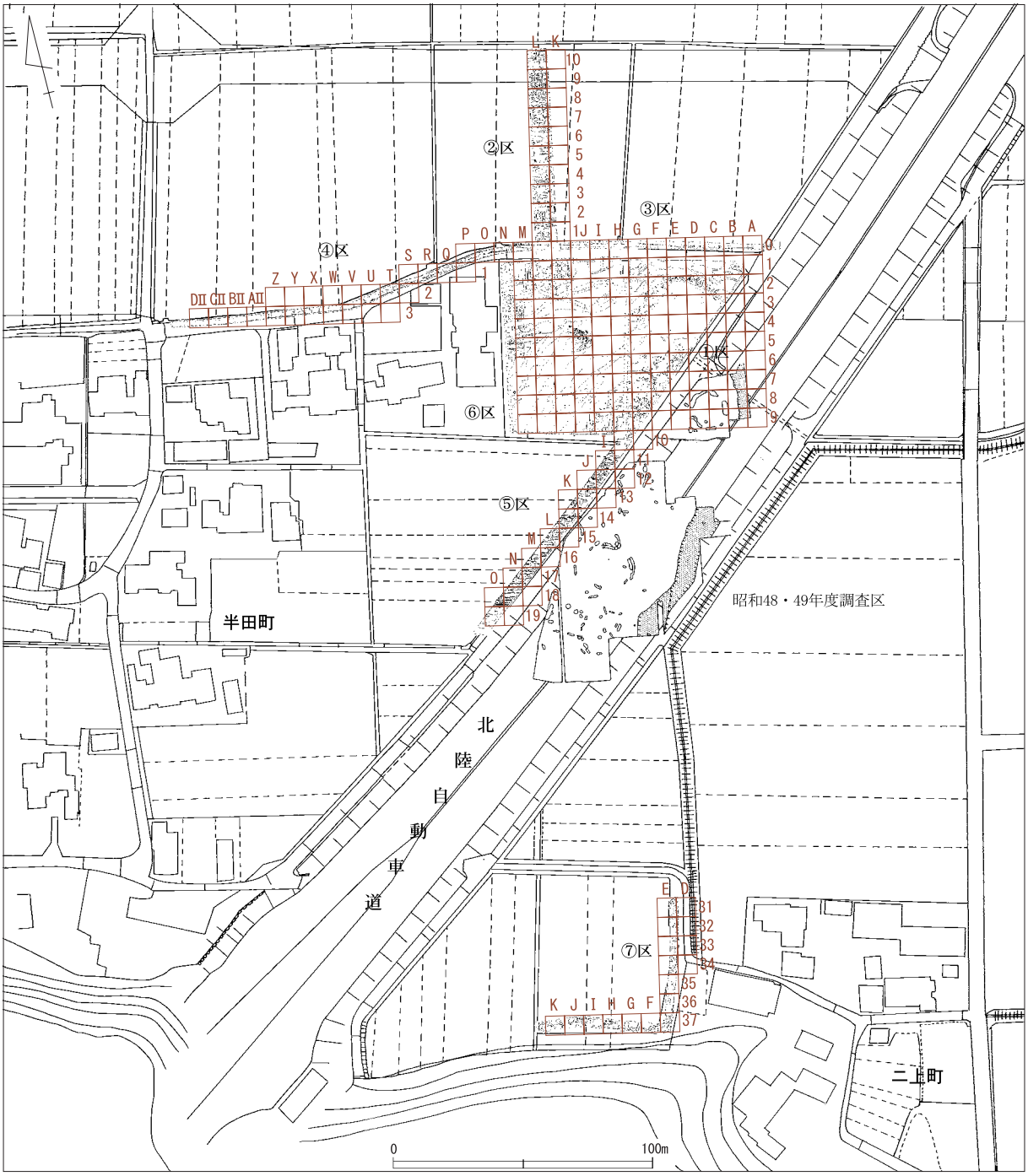


第３図　糞置遺跡範囲図（縮尺1:10,000）

Ⅱ. 調査の方法（第４図）

調査の方法は、重機による表土剥ぎを行った後、国家座標に従って8m間隔の大ｸﾞﾘｯﾄを①～⑦区全体に設定し、①区北東隅の大ｸﾞﾘｯﾄA0を基点とした。A0から西へ向かう横列にはA～Z（以降AⅡ～DⅡ）、南へ向かう縦列には0～38、北へ向かう縦列には0～10の番号を付けた。

遺構の実測や遺物の取り上げには、大ｸﾞﾘｯﾄをさらに4分割した1辺4mの小ｸﾞﾘｯﾄを設定し、各大ｸﾞﾘｯﾄの北西隅に位置する小ｸﾞﾘｯﾄを基点として時計回りに小番号1～4を設定した。遺物を伴う遺構は、縮尺1/10で実測図を作成し、遺構断面図は縮尺1/20で作成した。土層観察には標準土色帖を用いた。



第４図　糞置遺跡調査区位置図（縮尺1:2,500）

第２節　調査の概要

Ⅰ. 調査の概要

調査区の大部分を占める①区･⑥区は、昭和48･49年の北陸自動車道建設に伴う調査区の隣接地であり、舌状微高地の先端に立地している。①区･⑥区の合計調査面積は約6,200㎡を測り、包含層は北側で約10㎝、南側で30～50㎝の厚さをもって広がり、弥生時代中期から古墳時代後期、平安時代から中世の土器を大量に含んでいた。

包含層を除去すると、緑灰色砂質土の地山面となり、この面が遺構検出面となった。主要な遺構は、①区では掘立柱建物1棟、土坑12基、⑥区では方形周溝墓３基、土坑22基、溝９条などを検出しており、大半は弥生時代後期～古墳時代前期のものである。

①区･⑥区を通して流れる川は、昭和48･49年度調査で確認された川と同一であり、自然木を合掌形に組んだ古墳時代の「堰」や、縄文時代晩期の「水場遺構」を検出している。川の層位は、大きく３つに区分され、上層では奈良～平安時代の須恵器、中層では弥生時代後期～古墳時代前期の土器と木器、下層では弥生時代中期の土器を含んでいた。木器には、鍬･鋤･田下駄･木庖丁･槽といった実用品に加えて、刀･戈･盾･琴などの祭祀具も含んでいた。②区は、川の北側に展開する遺構であり、土坑17基、井戸２基、溝２条を検出した。土坑は弥生時代後期～古墳時代前期のものが多いが、弥生時代中期の土器を大量に含む溝も１条検出している。⑤区は、北陸自動車道の西側に沿った調査区であり、掘立柱建物１基、土坑37基を検出した。⑦区は、二上集落の山裾に接した調査区であり、柱穴群と土坑５基、溝２条を検出した。今回の調査によって糞置遺跡が弥生～古墳時代の集落、墓域であることが判明した。

Ⅱ. 調査日誌（第５図）

平成14年度

平成14年

４月３日	①区表土剥ぎ開始、器材準備
４月23日	包含層の灰色粘土除去開始。基本測量
５月23日	A～F-1･2ｸﾞﾘｯﾄ包含層除去終了。農林と調査工程について協議。
６月５日	文殊小学校林校長から児童見学会の依頼
７月９日	台風6号接近　E1･F2で川の北岸確認
７月11日	灰色粘土下の黒色粘質土を除去。D5･D6包含層から土師器が多く出土。
７月15日	台風7号接近。SD-8～11確認。
７月31日	足羽1中生徒7名職場体験。
８月６日	②～⑤区の表土剥ぎ開始。
９月11日	①区空撮終了。木器採り上げ作業開始。
９月13日	工事日程に変更が生じ、農林と調査日程短縮の協議。対応策を検討する
９月18日	①区水場遺構を精査。②～④区調査開始。
９月21日	①区調査終了。
10月15日	⑤区調査開始。
10月16日	文殊小学校見学
10月30日	②･③区中央測量空撮終了。
11月19日	④区中央測量により空撮終了。
11月21日	⑥区西側半分表土剥ぎ開始。
12月16日	⑤区空撮終了。

平成15年

１月15日	②･⑤区工事立会調査。
３月17日	⑥区東側半分表土剥ぎ開始。
３月20日	14年度出土遺物を城東分室に搬送。

平成15年度

平成15年

４月２日	⑥包含層灰色粘土除去。器材設置。
４月16日	北西側から遺構精査。農林と協議。
５月13日	方形周溝墓SX-1,2、SD-30～32を検出。
５月23日	A～F-1･2ｸﾞﾘｯﾄ包含層除去終了。農林と調査工程について協議。
５月29日	足羽中学校見学。
６月４日	排土置場について農林と協議。
６月12日	SD-69、SD-74精査。
６月19日	台風6号接近。SD-53･75精査。
７月３日	土器集中区SK-21確認。
７月15日	川から木器を大量に検出。
７月30日	足羽1中生徒7名職場体験。
８月７日	台風10号接近。
９月９日	道端組発掘排土撤去。
10月３日	川の南西側精査。木器多数検出。
10月６日	⑦区表土剥ぎ開始。
10月15日	I4ｸﾞﾘｯﾄで堰検出。
10月21日	⑥区中央測量により空撮終了。
10月22日	⑦区調査開始。
10月24日	⑥区堰解体。
11月７日	⑦区SD-1･4検出。
11月18日	E･D31･32の柱穴群精査。
12月11日	⑦区捕捉調査。

平成16年

３月５日	⑥区工事に伴う立会調査。
３月24日	現場撤収。

(1)　①区包含層掘削

(5)　⑥区SD-30(SD-69)精査

(2)　①区SK-9 精査

(6)　⑥区SK-21精査

(3)　②区見学会

(7)　⑥区堰解体作業

(4)　⑥区遺構精査

(8)　⑦区遺構実測

第５図　発掘風景

第３章　遺　構

第１節　①区の遺構（図版第1～5、第6～13図、第1表）

・層位（第７図）

①区の調査面積は1,200㎡である。厚さ約30㎝の水田表土を除去すると、調査区全面にわたって厚さ30～50㎝の包含層の堆積を確認した。①区東辺のS1（第7図）と、①区中央東西間のS2（第7図）の観察結果から、①区の包含層は上から1層灰色粘土、2層暗灰色粘質土、黒色粘質土(S1の4層、S2の3層)で主に構成されていることがわかる。1･2層では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を主としながらも、他の時代の遺物(古墳時代後期、奈良･平安時代)が少なからず混入し、須恵器は1･2層中のみに含まれる。黒色粘質土は、ほとんど弥生時代後期～古墳時代前期の土器で占められるが、弥生時代中期の土器も若干含んでいる。S1の11～13層は川の堆積土である灰黒色粘質土であるが、基本的には前述した黒色粘質土と同質である。①区の川で検出した木器は11～13層に含まれていた。S1の10層暗青灰色粘質土は、地山の緑灰色砂質土が粘性を有し、植物の腐食土を多く含んだ層である。後述する水場遺構は、この層中で検出し、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器を確認している。

・遺構（図版第2～5、第6･8～10図）

遺構検出面は、標高7.5m前後に位置する緑灰色砂質土の地山面で捉えることができた。本来の遺構面は少なくとも50㎝以上上であったと推定される。主要な遺構としては掘立柱建物1棟、土坑12基、土器集中区2基、溝22条がある(第６図)。

SB-1(図版第2、第8図)は、主軸を北東にとる掘立柱建物であり、桁行3間×梁行1間の規模を有していたと考える。柱穴には礎板を含むものもあり、桁間は布堀で結ばれていた。土坑の大部分は、出土遺物から弥生時代末古墳時代前期に属すものが多く、土坑の大きさに比べ、土器の量が少ないことから、SK-1～7(図版第2、第8図)は土壙墓であった可能性もある。SK-11(図版第3、第9図)とSK-12(図版第7、第13図)は⑥区SK-21と一連となる土器集中区であり、北東から南西方向に流れる川の南岸に沿って、弥生時代末古墳時代前期の土器が大量に廃棄されていた。SK-13は弥生時代中期の土坑であるが、明確な形は検出できなかった。溝については、川の北岸で検出されたものは幅1m内、深さ10cm前後を測る小規模なものが多く、S1の1層灰色粘土が堆積土となっている。A1･B1ｸﾞﾘｯﾄで検出した数本の溝とSD-8･9(第9図)は奈良･平安時代以降に掘削された新しい時期の溝と推定する。SD-11(図版第3、第10図)は⑥区SD-30と接続し、SD-10(図版第3、第10図)は⑥区SD-74と接続する。SD-21～23(図版第3、第10図)は古墳時代前期の土器を含み、SD-21は⑥区SD-80と接続する。

第２節 ⑥区の遺構（図版第7～13、第6･14～27図、第1表）

・層位（第14～17図）

⑥区の調査面積は3,800㎡である。①区と同様に、厚さ約30㎝の水田表土を除去すると、調査区全面にわたって厚さ30～50㎝の包含層の堆積を確認した。⑥区東辺であるＳ１（第14図）の観察結果から、⑥区西側における層位は１・２・４層の青灰色粘質土を包含層とし、８～10･29･43層の褐灰色粘質

褐灰色粘質土と砂質土を含む遺構と、25･26･38･39層の灰色粘土を含む遺構に大別できる。

1･2･4層では弥生時代後期から古墳時代前期の土器を主とし、①区の包含層と同様に他の時代の遺物が少なからず混入している。褐灰色粘質土や砂質土は古墳時代前期の土器を多く含み、灰色粘土は弥生時代中期の土器を含む。⑥区中央北南間のS2(第15図)の観察結果から、29･38･43･46層面から上の61･55層などが包含層となり、①区で確認された黒色粘質土は、調査区の南に進むに従って57･59～60層として厚く堆積していることがわかる。黒色粘質土は古墳時代前期の土器で占められるが、弥生時代中期の土器も若干含まれている。玉作り関係遺物や石器も主にこの層から出土している。

･遺構（図版第7～13、第18～24図、第1表）

⑥区は①区の西側に接し、遺構検出面は、標高8.2m前後に位置する黄灰色粘質土の地山面で捉えることができた。本来の遺構面は少なくとも30cm以上上であったと推定される。主要な遺構として、方形周溝墓3基、土坑22基、溝9条がある(第６図)。

SX-1～3(図版第7、第18図)の方形周溝墓は、調査区北側に位置し、埋葬施設は既に消失していたが、周溝に含まれていた土器から、これらは古墳時代前期のものと考える。SK-2～12(第18図)･14は不定形の土坑であり、土器は古墳時代前期の土師器が上層でわずかに含まれているものが多い。SK-13(第18図、図版第7)は、方形周溝墓SX-2の南東隅の下層から検出され、黒褐色砂質土中に弥生土器片が含まれ、土壙墓と考えられる。SK-21（図版第8、第19図）は、川の南岸に沿って廃棄された古墳時代前期の土器集中区であり、S2(第15図)の57層黒色粘土中に含まれる。SK-24(図版第8、第18図)は上面を方形に組んだ板材を重ねて覆い、小型の井戸状施設に見えるが、内法は40cmを測り、極めて規模が小さい。時期や用途は不明である。溝は、調査区の北東から南西へ流れる川を中心として、それにほぼ平行するように大小の溝が掘削されている。SD-30(図版第8･9、第21･22図)、SD-32(図版第10、第22図)、SD-69(図版第10、第22図)においては、弥生時代中期前半の土器が灰色粘土や褐灰色粘質土中に廃棄されていた。SD-53(第22図)は、SD-31･32の合流点南岸で検出された浅い溝である。SD-70(図版第11、第23図)は短い溝であり、弥生時代中期の土器を黒褐色砂質土中に多く含み、底面では炭化材が出土している。SD-74(図版第11、第23図)は、SD-30の東端でSD-30を切り、古墳時代前期の土器と田下駄や加工痕が残る木片を含んでいた。SD-75(第22図)は青磁碗が出土し中世以降の掘削によるものと考えられる。川の南側に位置するSD-80(図版第13、第24図）（①区ではSD-21）には、古墳時代前期の土器が多く廃棄されていた。SD-84(図版第13、第23図)は、L7-4ｸﾞﾘｯﾄで川の北岸に接して検出した溝である。SD-84を除去すると、南側でSD-87(第23図)が検出され、古墳時代前期の土器が多く廃棄されていた。

第３節　①区･⑥区の川（図版第1･6、第4･6･7図、第1表）

①区と⑥区を通して南西へ流れる川は、昭和49年度調査区において確認した川の続きであることが判明した(第４図)。旧地形を見ると、かって文殊山から舌状の微高地が派生していたことが知られており、位置的に現在の北陸自動車道とほぼ重なっている。川は、この舌状微高地に沿っており、本来は最大幅約30m以上、深さは最大約2m以上の規模であったと推定できる。川の調査にあたり、①区においては、調査後、構造物が立つため川の規模をできる限り把握することに努めたが、作業の安全と構造物の位置を考慮した結果、弥生～古墳時代までの川底面までを検出し、縄文時代の底面は一部を確認し

て止めざるを得なかった。⑥区においては、事業者側と破壊影響深度を協議し、G3～5ｸﾞﾘｯﾄ、H3～5ｸﾞﾘｯﾄの範囲については包含層掘削作業のみを行い、川幅を確認するだけに止めた。

･層位（第7･15図）

①区の川の断面(第7図)を観察すると、上層の1層と6～9層は包含層であり、中層の11～13層灰黒色粘土に弥生時代中期～古墳時代前期の土器や木器(鍬･鋤･槽･戈･盾･儀器など)を含んでいることが判明した。下層の10層暗青灰色粘質土に至ると、F3ｸﾞﾘｯﾄにおいて包含層上面から深度1.7mを測る高さで自然木をコの字形に組んだ水場遺構を検出した。⑥区の川の断面S2(第15図)を観察すると、上層の23･28･30･31･55･57･58･61層が包含層であり、中層の29･32～37･39･40･43～46･48～54･56層が、弥生時代中期～古墳時代前期の土器や木器(鍬･槽･琴･機織具･田下駄など)を含んでいることが判明した。下層の38層暗青灰色粘質土に至ると弥生中期の土器が多く含まれ、I4ｸﾞﾘｯﾄにおいて包含層上面から深度0.8mを測る高さで、38層上に構築された堰を検出した。

･木器の出土状況（図版第5･12･13、第11･12･25･26図）

①区と⑥区において、川の中層で検出された木器は流木と混ざり散乱した状態で出土している。木器は未加工品のものが多く、農具や槽は完成直前の形状である。また、E1-3ｸﾞﾘｯﾄ、D1-4ｸﾞﾘｯﾄで検出した鍬未製品Aや鍬未製品B(第11図)のような分割以前の原型割材や、D1-3ｸﾞﾘｯﾄで検出した鍬未製品C(第12図)やL8-2ｸﾞﾘｯﾄで検出した木器82(第26図)は大型荒割材であり、おそらく川を貯木場として利用し、材を水漬けにすることで木のクセや樹脂抜き、必要に応じて木器を製作してたと考えられる。ただ、完成品で廃棄された木器もあり、琴、盾形、戈形、刀形、人形などの木器は川辺の祭祀具として用いられたようであり、川が用水の役割も担っていた点も注意したい。

･水場遺構（図版第4、第13図、第1表）

①区で検出した水場遺構は、縄文時代晩期の時期と推定され、F3ｸﾞﾘｯﾄに位置し、直径25～50cm、長さ4.0～5.4mの樹皮のない自然木を南北長約6.5m、東西長約6.5mの規模でｺの字形に配置している。自然木は土圧による影響のためか、断面が扁平化しており、木芯まで炭化して黒色に変色していた。周辺にはトチやドングリの皮、加工痕が残る木片が散乱しており、合わせて縄文時代晩期の土器がまとまって検出されている。4本の自然木は「木道」であり、採集した木の実などを加工する足場であったと考える。水場遺構の上面は、弥生~古墳時代の川底面とほぼ高さを同じくし、縄文時代晩期と弥生~古墳時代における川の北岸は、ほぼ重なるようであるが、縄文時代晩期の南岸についてはSK-12の手前まで広がる可能性が高い。

･堰（図版第11、第27図、第1表）

⑥区で検出した堰は、古墳時代前期の時期と推定され、I4ｸﾞﾘｯﾄに位置し、川に直交して構築され、全長約5.90m、幅約3.00mの規模を測る。堰の構造は、弥生時代中期の土器を含む緑灰色砂質土上面に、直径8～15cm、長さ1.5～2.5mを測る先端を鋭角状に加工した樹皮のない自然木を突き刺して、合掌形に組み、横木を架したものであった。堰の北側の木組は、やや小ぶりな木を二重にして密に組み、南側の木組は、大ぶりな木を組んで北側の木組に架かる水圧に耐えていたようである。堰の機能は、SD-31へ一定量の水を供給することが目的であったようである。S10(第27図)の川断面を観察すると、下層の9層灰色砂質土、10層灰色粘質土は、SD-31断面のS8(第22図)下層の7～9層褐灰色砂質土と類似しており、両者はほぼ同時期に埋没したと想定できる。堰を解体した断面b-b'間(第27図)を観察すると、緑灰色砂質土を掘り起こした1～6層が重なり、弥生時代中期の土器を含んでいた。

第４節　②区の遺構（図版第14～16、第28～31図、第1表）

・層位（第29図）

②区の調査面積は480㎡である。②区西辺であるS1の層位断面の観察結果(第29図)から、厚さ約20㎝の水田表土である1層灰黒色砂質土を重機で除去すると、包含層はほとんどなく、遺構検出面に至った。

・遺構（図版第14～16、第28・30・31図、第1表）

遺構検出面は、標高7.5m前後に位置する3層暗灰茶色粘質土と15層暗灰茶色砂質土の上面で捉えることができた。本来の遺構面は少なくとも50㎝以上上であったと考える。主要な遺構として、土坑17基、井戸2基、溝2条がある。K8～10ｸﾞﾘｯﾄ、K1～2ｸﾞﾘｯﾄで検出した格子状に見える小規模な溝は、近代の畑の畝跡である(第28図)。

SK-1・2・6・10・12・13(図版第14・15、第30図)は不定形の土坑であり、古墳時代前期の土器を上層でわずかに含んでいるものが多く、①区の土坑群と同様に土壙墓であった可能性もある。井戸はSW-1とSW-2の2基が検出され、SK-11(図版第15、第30図)は、井戸SW-2上層であることが判明した、SW-2(図版第15、第30図)は井桁を構え、井桁の外側からは、箸が出土している。時期は13世紀後半と推定される。

SD-1(図版第15、第31図)は、調査区と直交して東西に延びる溝であり、調査区西辺で最大幅約4m、深さ0.4mの規模を測る。断面a-a'間を観察すると、2層灰褐色砂質土と3層灰茶色粘質土に古墳時代前期の土器片を多く含んでいた。SD-1の中でP5、P6の柱穴には柱根が確認されたが、構造物の実体は不明である。SD-15(図版第16、第31図)は、調査区と直交して東西に延びる溝であり、最大幅約1.8m、深さ0.35mの規模を測る。断面a-a'間を観察すると、2層暗灰茶色砂質土と3層灰茶色粘質土中に弥生時代中期の土器を多く含んでいた。

第５節　③区・④区の遺構（図版第16・17、第32図、第1表）

・層位

③区の調査面積は③区約240㎡、④区の調査面積は約480㎡である。共に厚さ約20㎝の水田表土を重機で除去すると包含層はなく、地山に至った。

・遺構（図版第16・17、第33図、第1表）

遺構検出面は、③区、④区ともに標高7.5m前後に位置する黄褐色砂質土の地山面で捉えることができた。本来の遺構面は少なくとも50㎝以上上であったと考える。③区ではC～E0ｸﾞﾘｯﾄにおいて土坑や小規模な溝を検出し、SK-1～3の土坑は、暗茶褐色砂質土に古墳時代前期の土器をわずかに含んでいた。

SD-7では時期不明の草鞋を1点検出した。東西に伸びるSD-2・5は幅約0.4m、深さ0.15mの区画溝と考えられるが、時期は不明である。

④区ではL0ｸﾞﾘｯﾄのSK-1の土器集中区において古墳時代前期の土器を検出した。SK-1は位置的に⑥区方形周溝墓SX-1の周溝である可能性が高い。P～T１ｸﾞﾘｯﾄでは緑灰色砂質土の地山を掘り込んだSK-2～6の不整形な土坑を検出し、SK-1～3・7は、灰黒色粘質土に古墳時代前期の土器をわずかに含んでいた。調査区西側のY3～CⅡ3ｸﾞﾘｯﾄの地山は暗青灰色粘土となり、西方は沼地と考える。

第６節　⑤区の遺構（図版第18～20、第33～38図、第1表）

・層位

⑤区の調査面積は700㎡である。厚さ約20㎝の水田表土である灰黒色砂質土を重機で除去すると、包含層はなく地山に至った。

・遺構（図版第18～20、第33～38図、第1表）

遺構検出面は、標高7.5m前後に位置する緑灰色砂質土の地山面で捉えることができた。本来の遺構面は少なくとも50㎝以上上であったと考える。主要な遺構として掘立柱建物1棟、土坑37基がある(第34図)。

SB-1(第33図)の建物規模は不明だが、P1・3には柱根が残存していた。土坑の大部分は不整形であり、SK-2～18(図版第18・19、第35図)からは古墳時代前期の土器が少量出土しているのみである。SK-19(図版第19、第36図)は、弥生時代中期の土器を上層1・2層暗灰色砂質土に含み、底面から粘土状となった棺材の一部が検出され、木棺墓であることが確認できた。SK-21(図版第19、第36図)は底の浅い土坑であるが、⑥区の土器集中区SK-21と同様な黒色粘質土を含み、古墳時代前期の土器が密集して出土している。溝については、N18ｸﾞﾘｯﾄで東西に伸びるSD-37とSD-89～92の切り合った溝を(図版第20、第38図)検出した。SD-90とSD-91は古墳時代前期の土器を少量含み、両者はSD-91に切られている。SD-37はSD-89に切られ、SD-89はSD-90に切られているが三者は古墳時代前期の土器を含み、大きな時期差は窺えない。SD-93(図版第20、第37図)は、調査区最南端のO19ｸﾞﾘｯﾄに位置し、灰茶色粘質土の下層に木板片と須恵器を含んでおり、糞置荘関連の溝の可能性もある。

第７節　⑦区の遺構（図版第21、第39・40図、第1表）

・層位（第40図）

⑦区の調査面積は210㎡である。南北に伸びるE・D～31～36ｸﾞﾘｯﾄの層位は、S1の層位断面の観察結果(第40図)から、厚さ約20㎝の水田表土である35・36層黄灰色粘質土を除去すると、1・37層灰色粘土が包含層として部分的に薄く堆積して地山に至る状況であった。東西に伸びるE～K37・38ｸﾞﾘｯﾄの層位においても、厚さ約20㎝の水田表土である黒褐色粘質土を除去すると、F37ｸﾞﾘｯﾄの範囲において厚さ約30㎝の黒色粘質土が包含層として堆積し、地山に至る状況であった。

・遺構（図版第21、第39・40図、第1表）

遺構検出面は、標高8.0m前後に位置する黄褐色砂質土の地山面で捉えることができた。本来の遺構面は少なくとも30㎝以上上であったと考える。⑦区の主要な遺構は、柱穴と土坑5基、溝2条である(第39図)。柱穴はD・E31・32ｸﾞﾘｯﾄにおいて集中し、柱根が残るものも確認したが、建物の数や規模などは不明である。SK-1～3・5・6(第40図)は不整形の土坑であり古墳時代前期の土器を少量含み、SK-3(第40図)では甕の上半部のみが上層の褐色粘質土から出土している。SD-1(図版第21、第39図)は、D33・E33ｸﾞﾘｯﾄに位置し、調査区と直交する溝である。古墳時代前期の土器を大量に含み、上層の5層灰白色粘質土、6層黄灰色粘質土中の土器群は第1面として捉え、下層の7層黄灰色粘質土の土器群は第2面として捉えた。完形品や祭祀用土器を含み、儀礼に伴う廃棄と考える。SD-4(図版第21、第40図)はD34・E34ｸﾞﾘｯﾄに位置し、褐色粘質土中に古墳時代前期の土器を含んでいた。山側に沿ったE～K37・38ｸﾞﾘｯﾄは緑灰色粘土が地山となり、不整形の土坑を10基以上検出したが、遺物は含んでいなかった。

（鈴木）

第１表　①～⑦区主要遺構観察表

①区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SB-1	E5-3	梁行　4.40 桁行　3.40 深さ　0.60	暗灰色粘土	P76から土師器片出土。	不明	N55°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む掘立柱建物である。P76、P86に礎板が残る。柱穴間は布堀でつながれている。西側柱列の南端にも柱穴があれば、梁行3間、桁行1間となる。	8	2-2
SK-1	G9-2	長軸　2.00 短軸　1.00 深さ　0.10	灰色粘土	土師器片わずかに出土。樹皮状の敷物を確認。	弥生時代末～古墳時代前期	N67°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は長方形で底面は平坦である。樹皮状の木質が南西隅でまとまって検出された。	8	-
SK-4	F7-4	長軸　2.30 短軸　1.60 深さ　0.15	暗灰色粘土	土師器片少量出土。遺物採集番号No1～3。	弥生時代末～古墳時代前期	N23°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形で底面は平坦である。	8	-
SK-5	F6-3	長軸　3.20 短軸　1.50 深さ　0.55	暗灰色粘土	弥生土器片出土。遺物採集番号No1～7。	弥生時代中期	N87°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は長楕円形で底面は平坦である。	8	2-4
SK-6	F6-1	長軸　1.80 短軸　3.60 深さ　3.50	暗灰色粘土	土師器片多量出土。上層遺物採集番号No1～9。下層遺物採集番号No1～4。板材1枚と木片を含む。	弥生時代末～古墳時代前期	N66°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。	8	2-5
SK-7	F6-2	長軸　1.30 短軸　1.18 深さ　0.35	暗灰色粘土	土師器片少量出土。遺物採集番号No1～9。土器を入れた後、15cm大の角礫を投げ込んでいる。木片を少量含む。	古墳時代前期	N25°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形であり、断面は漏斗状を呈す。	8	2-6
SK-9	E6-3 E6-4	長軸　3.35 短軸　1.85 深さ　0.70	暗灰色粘土 緑灰色砂質土	土師器片多量出土。遺物採集番号No1～27。加工痕のある木片多し。	古墳時代前期	N87°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は長楕円形で底面は平坦である。	9	2-7
SK-10	G6-3	長軸　0.60 短軸　0.40 深さ　0.10	暗灰色粘土	土師器片多量出土。上層遺物採集番号No1～9。下層遺物採集番号No1～4。板材1枚と木片を含む。	古墳時代前期	N26°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は卵形である。隣接するP039に同一個体となる土師器片を確認。45-1は混ざり込みのもの。	9	3-1
SK-11	D5-1 D5-2	南北長　8.00 東西長　1.50 深さ　-	暗灰色粘土	土師器片非常に多し。遺物採集番号No1～10まで	古墳時代前期	暗灰色粘質土中に含まれ、緑灰色砂質土の地山から10cm以上の高さで出土する個体の多い土器集中区である。	9	3-5
SK-12	E5-4 F5-3	南北長　8.00 東西長　12.00 深さ　-	暗灰色粘土	土師器片極めて多量出土。遺物採集番号No1～25。	古墳時代前期	遺物は暗灰色粘質土中に含まれ、緑灰色砂質土の地山から10cm以上の高さで出土する。土器集中区である。	13	4-1
SD-8	E1-1 F1-2 F1-3	最大幅　0.70 下幅　0.50 深さ　0.18	暗灰色粘質土	土師器片わずかに出土。遺物採集番号No1～4。	弥生時代末～古墳時代前期	N90°W。黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い溝である。	9	-
SD-10	F1-4 F1-3	最大幅　1.60 下幅　0.80 深さ　0.20	暗灰色粘質土	土師器片少量出土。木片を少量含む。遺物採集番号No1～5。	弥生時代末～古墳時代前期	N65°W。黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い溝である。⑥区SD-30へつながる可能性あり。	10	3-2
SD-11	F2-1	最大幅　1.60 下幅　0.60 深さ　0.20	暗灰色粘質土	土師器片少量出土。木片を含む。遺物採集番号No1～4。遺物は底面直上で出土。	古墳時代前期	N65°W。黄灰色粘質土の地山を掘り込む浅い溝である。	10	3-2
SD-21	G8-2	最大幅　1.30 下幅　0.40 深さ　0.10	暗灰色粘質土	土師器片少量出土。甕が多い。	弥生時代末～古墳時代前期	N65°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。⑥区SD-80へ繋がる。	10	3-3
SD-22	G7-3 G8-2 F8-1	最大幅　1.00 下幅　0.40 深さ　0.20	暗灰色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N20°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。	10	3-3

①区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SD-23	F7-4 F8-1 F8-2	最大幅　0.21 下幅　0.40 深さ　0.16	黒灰色 粘質土	土師器片わずかに出土。 遺物採集番号No1～10。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N30°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。底面から10cm以上の高さで出土する個体が多い	10	3-4
川の 東端	B3-1 B3-2	上幅　6.00 下幅　4.00 深さ　0.46	暗灰色 粘質土	ホゾ穴をもつ丸太材と板材が左岸に沿って出土。 土師器片をわずかに含む。 木片を少量含む。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N40°Wへ流れる緑灰色砂質土の地山を掘り込む深い川である。	10	4-5
水場 遺構	F2-3 F3-3	南北長　8.00 東西長　7.00 深さ　1.50		丸太材の下から縄文晩期の土器片とトチ、クルミ、クリの皮が出土。	縄文時代 晩期	N90°W方向へ流れる川の中に、樹皮を剥いた丸太材を3本コの字に設置している。	13	4-4

⑥区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SX-1	L1 M1	南北長（7.00） 東西長（7.00） 周溝幅　2.00 深さ　0.26	黒褐色 砂質土 褐灰色 砂質土	周溝内から土師器片出土。 ④区SK-1の土師器もSX-1のものと考えられる。	古墳時代 前期	N3°E。黄灰色粘質土の地山を掘り込む。埋葬施設は確認できず。④区SK-1はSX-1の周溝である可能性が高い。その場合、SX-1の規模は、1辺9m以上の方形周溝墓と推定される。	18	7-1
SX-2	J1 K1	南北長（8.00） 東西長 12.00 周溝幅　2.30 深さ　0.20	黒褐色 砂質土 褐灰色 砂質土	土師器片出土。 遺物採集番号No1～21。	古墳時代 前期	N10°W。黄灰色粘質土の地山を掘り込む。埋葬施設は確認できず。1辺12m以上の方形周溝墓と推定される。	18	7-2
SX-3	F7-4	南北長（4.00） 東西長　8.00 周溝幅　0.60 深さ　0.20	暗灰色 粘土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期	N20°W。黄灰色粘質土の地山を掘り込む。埋葬施設は確認できず。1辺8m以上の方形周溝墓と推定される。	18	7-3
SK-2	K1-2	長軸　1.00 短軸　0.65 深さ　0.12	褐灰色 砂質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期 弥生時代 末～	N40°E。黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形で底面は平坦である。	18	7-4
SK-3	K1-2	長軸　1.10 短軸　0.95 深さ　0.32	褐灰色 砂質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期 弥生時代 末～	N40°E。黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形である。	18	7-5
SK-9	M3-3	長軸　1.85 短軸　1.15 深さ　0.40	暗褐灰色 砂質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期 弥生時代 末～	N45°E。黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。SD-31と接している。	18	7-4
SK-10	M4-2 M4-3	長軸　1.60 短軸　（1.50） 深さ　0.30	黒褐色 砂質土	土師器片少量出土。	古墳時代 前期 弥生時代 末～	N80°W。黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。	18	7-5
SK-11	M1-2	長軸　0.60 短軸　0.64 深さ　0.10	暗灰色 粘土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期 弥生時代 末～	N10°W。黄色灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は円形で底面は平坦である。	18	7-8
SK-12	M1-2 M1-3	長軸　1.06 短軸　0.80 深さ　0.15	褐灰色 粘質土 黄褐色 粘質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期	N50°W。黄灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形で底面は平坦である。	18	7-9
SK-13	J1-3 J2-2	南北長　4.60 東西長　1.00 深さ　0.50	黒褐灰色 粘質土	弥生土器片が上層でわずかに出土。	弥生時代 中期 弥生時代 末～	N25°E。黄灰色粘質土の地山を掘り込む土坑である。形状は長楕円形である。	18	7-6
SK-21	I7-3 I8-2 H7-4	南北長 20.00 東西長　6.00 深さ　-	暗灰色 粘質土	土師器片極めて多量出土。 遺物採集番号No1～33。 川の南岸に沿って廃棄されている。	古墳時代 前期	N45°E。遺物は暗灰色粘質土中に含まれ、緑灰色砂質土の地山から10cm以上の高さで出土する。土器集中区である。①区SK-11、12と一連である。	19 20	8-1

⑥区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SK-22	L7-4 L8-1	南北長　2.20 東西長　1.40 深さ　－	暗灰色 粘質土	土師器弥生土器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N30°E。緑灰色砂質土の地山直上で検出された土器集中区。	21	8-3
SK-24	L7-1	長軸　1.10 短軸　0.93 深さ　0.90	黒色 粘質土 暗灰色 粘質土	遺物なし。	不明	N55°E。黄灰色砂質土の地山を掘り込む井戸である。上面を方形に板材で覆い、方形組の内法は0.40×0.32mである。井戸断面は2段に掘り込み組む。	18	8-2
SD-30	G~M2	最大幅　1.50 下幅　0.40 深さ　0.35	黄褐色 粘質土 暗青灰色 砂質土	弥生土器片多量出土。K2-3、J2-4、L2-1、L2-4グリットで遺物が集中。 上層遺物採集番号No1～9。 下層遺物採集番号はK2-3でNo1～4。K2-3、J2-4でNo1～40。L2-3、L2-4でNo1～10	弥生時代 前期 中期	N60°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。弥生土器が多く廃棄されている。	21 22	8-4 8-5 9-1 9-2 9-3 9-4 9-5
SD-32	J2-4 K3-2	最大幅　1.45 下幅　0.50 深さ　0.44	黒褐色 粘質土 暗灰色 粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N130°Wへ流れる緑灰色砂質土の地山を掘り込む川である。	22	10-1
SD-69	J2-3 I3-1	最大幅　0.70 下幅　0.40 深さ　0.40	黄橙色 粘質土 褐灰色 粘質土	弥生土器片多し。 上層遺物採集番号No1～18。 下層遺物採集番号No1～6。	弥生時代 中期	N40°W方向へ流れる黄灰色砂質土の地山を掘り込んだ溝である。	22	10-2 10-3
SD-70	L5-1	最大幅　1.60 下幅　0.65 深さ　0.40	黄橙色 粘質土 褐灰色 粘質土	土師器片多量出土。 上層遺物採集番号No1～10。 下層遺物採集番号No1～11。 炭化材を含む。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N45°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。底面から10cm以上の高さで出土する個体が多い。	23	11-1
SD-74	G2-1	最大幅　2.20 下幅　1.50 深さ　0.15	赤茶色 砂質土	土師器片わずかに出土。田下駄1点出土。木片出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N20°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。川の埋没後の遺構である。	23	11-2
SD-84	L7-4	最大幅　(0.80) 下幅　(0.4) 深さ　(0.20)	暗灰色 粘質土	土師器片多量出土。 遺物採集番号No1～2。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N80°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。溝の規模は確認できず。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。川の埋没後の遺構である。	23	13-6
SD-87	L7-1 L7-4 M7-3	最大幅　(0.80) 下幅　(0.4) 深さ　(0.20)	暗灰色 粘質土	土師器片多し。 遺物採集番号No1～5。	古墳時代 前期	N80°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。溝の規模は確認できず。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。川の埋没後の遺構である。	23	－
SD-80	H8-3 H8-4 H9-1	最大幅　1.80 下幅　1.90 深さ　0.28	暗灰色 粘質土	土師器片多し。 遺物採集番号No1～25。木片を含む。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N50°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む浅い溝である。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。	24	13-5
堰	I4-3 I4-4 I5-2	最大長　10.00 最大幅　5.00 高さ　0.50		堰の中の堆積土と下層から弥生土器片が多く出土。	弥生時代 中期～ 古墳時代 前期	N30°W。緑灰色砂質土の川底地山に樹皮を剥いだ直径10cm前後の枝材を合掌形に組んでいる。組まれた木には横木が副えられている。	27	11-3 11-4 11-5 11-6

②区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
P24	L5-3	長軸　1.00 短軸　1.85 深さ　0.60	暗灰色 粘質土 灰褐色 粘質土	直径10cmの柱根あり。	不明	N55°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む柱穴である。形状は不整形である。	－	14-4
SK-1	L5-3 K2-4	長軸　2.00 短軸　1.00 深さ　0.10	暗灰色 粘質土	土師器片少量。遺物採集番号No1～8	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N70°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。底面は平坦である。	30	14-2

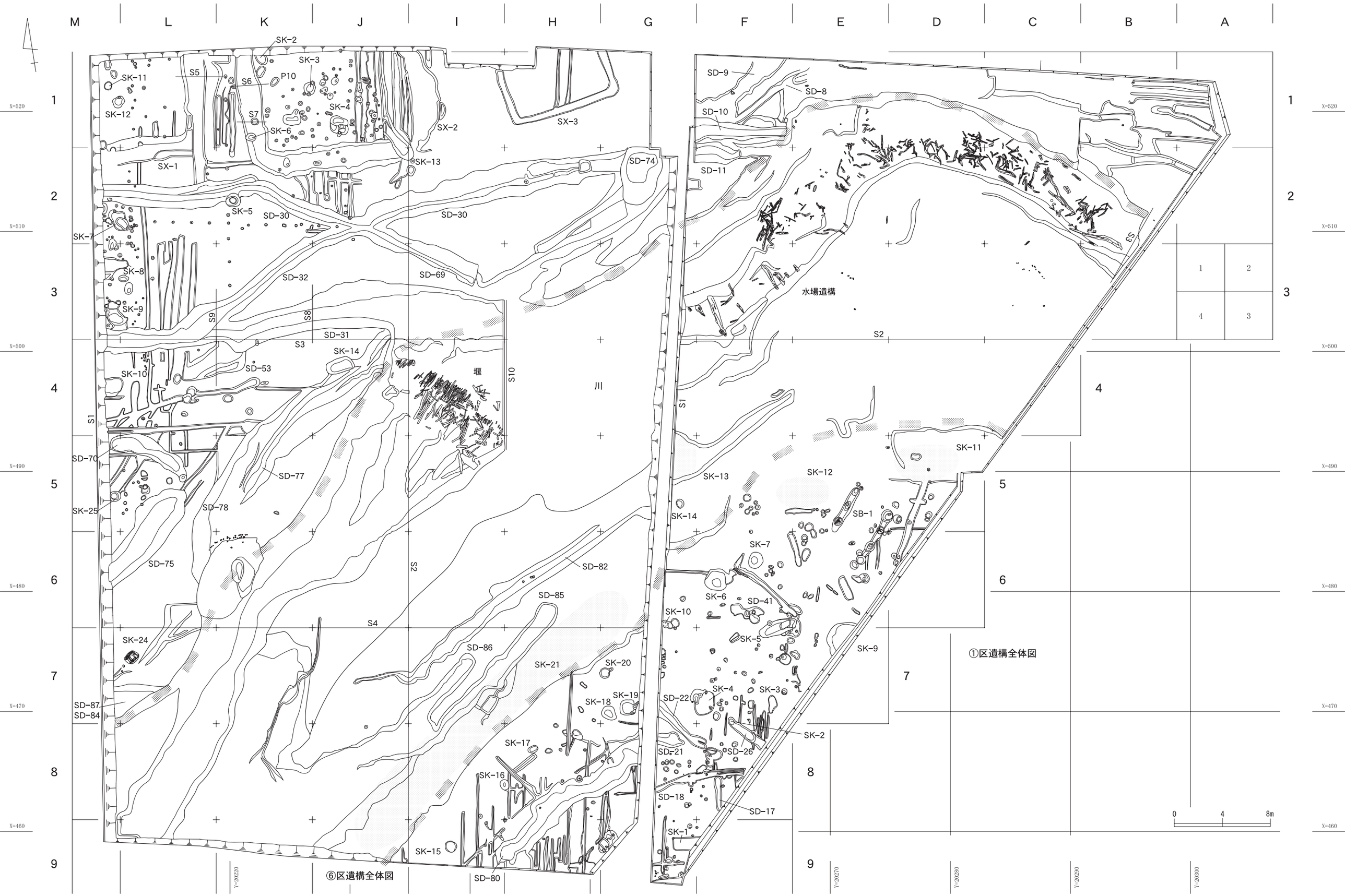
②区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SK-2	L1-2 L1-3	長軸　1.50 短軸　－ 深さ　0.15	暗灰茶色粘質土 灰黒色粘質土	土師器片少量。	弥生時代末～古墳時代前期	N20°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。SK-3と接している。	30	－
SK-3	L1-2 L1-3	長軸　1.10 短軸　1.00 深さ　0.15	灰黒色粘質土	土師器片少量。	弥生時代末～古墳時代前期	N20°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。	30	－
SK-6	K4-1 K4-4	長軸　2.06 短軸　1.20 深さ　0.35	灰黒色粘質土	土師器片少量出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N25°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。	30	14-3
SK-7	K4-1 L4-2	長軸　2.27 短軸　1.16 深さ　0.18	灰黒色粘質土	土師器片少量出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N5°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は楕円形である。	－	－
SK-8	L4-2	長軸　1.60 短軸　1.00 深さ　0.30	暗灰色粘質土	土師器片少量出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N65°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。2つの小穴と重複する。P24と並んで建物の柱穴となる可能性あり。	－	15-1
SK-10	K2-2	長軸　2.60 短軸　1.00 深さ　0.35	暗灰茶色粘質土 灰茶色粘質土	土師器片多量出土。 遺物採集番号No1～6。	弥生時代末～古墳時代前期	N28°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。底面は平坦である。	30	15-2
SK-11	K2-2	長軸　3.00 短軸　(1.20) 深さ　0.45	暗灰色粘土	土師器片わずかに出土。 遺物採集番号No1～13。 20cm大の角礫を7つ投げ込んでいる。	鎌倉時代	N15°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。当初は古墳時代前期の土坑と考えられていたが、SW-2の上層面と判断した。	30	15-2
SK-12	K3-4	長軸　1.88 短軸　0.80 深さ　0.22	暗灰茶色粘質土 暗灰色粘質土	土師器片わずかに出土。 遺物採集番号No1～4。	弥生時代末～古墳時代前期	N50°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。底面は平坦である。	30	2-7
SK-13	K3-1	長軸　2.15 短軸　1.43 深さ　0.25	灰褐色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N51°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。底面は平坦である。	30	3-1
SK-17	K7-1	長軸　1.45 短軸　0.68 深さ　0.15	暗灰色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N52°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は楕円形である。底面は平坦である。	－	15-3
SW-1	K6-2	長軸　1.67 短軸　1.37 深さ　0.88	暗灰茶色粘質土	遺物なし	不明	N50°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む井戸である。形状は不整円形である。底面は平坦である。	31	－
SW-2	K2-1	長軸　3.20 短軸　(1.50) 深さ　(1.20)	暗灰色粘質土	越前焼破片わずかに出土。	13世紀前半代	N15°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む井戸である。形状は不整円形である。一辺2.2m規模の井桁の一部を検出した。井桁は井戸の内側へ向かって倒れており、一辺あたり柾目の板材を約23枚を立て、それらに横木を渡している構造が判明した。遺構の大部分は調査区外に残存する。	30	15-4
SD-1	K3-3 K3-4 L2-2 K2-1	最大幅　3.80 下幅　0.80 深さ　0.60	灰褐色砂質土 灰茶色粘質土	土師器片を多量に含む。 遺物採集番号No1～5。 遺物は溝の底面に近い位置で出土。	古墳時代前期	N90°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。東側の床面において段差があり、別の溝が重複している。西側で幅が広くなる。溝内に柱根が残る柱穴が2基ある。	31	15-5 15-6
SD-15	K6-3 K6-4 L6-3	最大幅　1.80 下幅　1.30 深さ　0.35	灰茶色粘質土 暗灰茶色砂質土	弥生土器片を多量に含む。 遺物採集番号No1～13。遺物は底面直上で出土。	弥生時代中期	N50°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。南岸はSK-14と接している。	31	16-1 16-2

③区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SK-1	I0-1	長軸　(1.00) 短軸　0.70 深さ　0.13	暗茶褐色 砂質土	土師器片少量出土	古墳時代 前期	N5°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。	33	16-4
SK-2	E0-2	長軸　1.16 短軸　(0.15) 深さ　0.50	暗茶褐色 砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N10°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形である。中央に直径25cmの柱穴が上から重複している。	33	-
SK-3	D0-1	長軸　0.85 短軸　(0.61) 深さ　0.36	暗茶褐色 砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N10°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形である。	33	-
SK-4	D0-1	長軸　0.53 短軸　(0.36) 深さ　0.22	暗茶褐色 砂質土	土師器片わずかに出土。	不明	N80°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑もしくは柱穴である。	33	-
SD-6	C0-2	最大幅　1.20 下幅　(0.45) 深さ　0.23	暗茶褐色 砂質土	土師器片わずかに出土。	不明	N20°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。SD-7と並行している。	33	16-5
SD-7	C0-2	最大幅　1.25 下幅　(0.43) 深さ　0.24	暗茶褐色 砂質土	草鞋1点出土	不明	N20°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。	33	16-5

④区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
P1	N0-2	長軸　0.53 短軸　0.53 深さ　0.20	暗灰色 粘質土	土師器片少量出土。	不明	N90°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は円形である。	33	17-2
SK-1	L0-1 M0-2	長軸　(6.50) 短軸　(1.20) 深さ　0.12	灰黒色 粘質土	土師器片多し。遺物採集番号No1～3。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N90°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。底面は平坦である。①区SX-1の周溝と考えられる。	33	17-4 17-5
SK-2	T2-1 T2-4	長軸　(1.63) 短軸　1.50 深さ　0.10	灰黒色 粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N5°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑もしくは溝である。形状は不整形である。底面は平坦である。	33	-
SK-3	T2-1 T2-4	長軸　(1.63) 短軸　1.50 深さ　0.10	灰黒色 粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N5°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑もしくは溝である。形状は不整形である。底面は平坦である。	33	-
SK-7	T2-1 T2-4	長軸　(1.63) 短軸　1.50 深さ　0.10	灰黒色 粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N5°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑もしくは溝である。形状は不整形である。底面は平坦である。	33	-

⑤区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
P3	I11-3	長軸　0.50 短軸　0.38 深さ　0.38	黒色 粘質土	遺物なし。	不明	N35°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む。SB-1の柱穴である。長さ0.52m、径0.2mの柱根が残る。	33	-
P23	K13-3	長軸　0.40 短軸　0.40 深さ　0.25	暗青灰色 砂質土	遺物なし。	不明	N35°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む。長さ0.27m、径0.12mの柱根が残る。	37	-
P27	J14-1	長軸　0.22 短軸　0.20 深さ　0.20	暗青灰色 粘質土	遺物なし。	不明	N35°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む。	37	-
P30	J14-1	長軸　0.52 短軸　(0.30) 深さ　0.23	暗青灰色 粘質土	遺物なし。	不明	N30°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む。	37	-

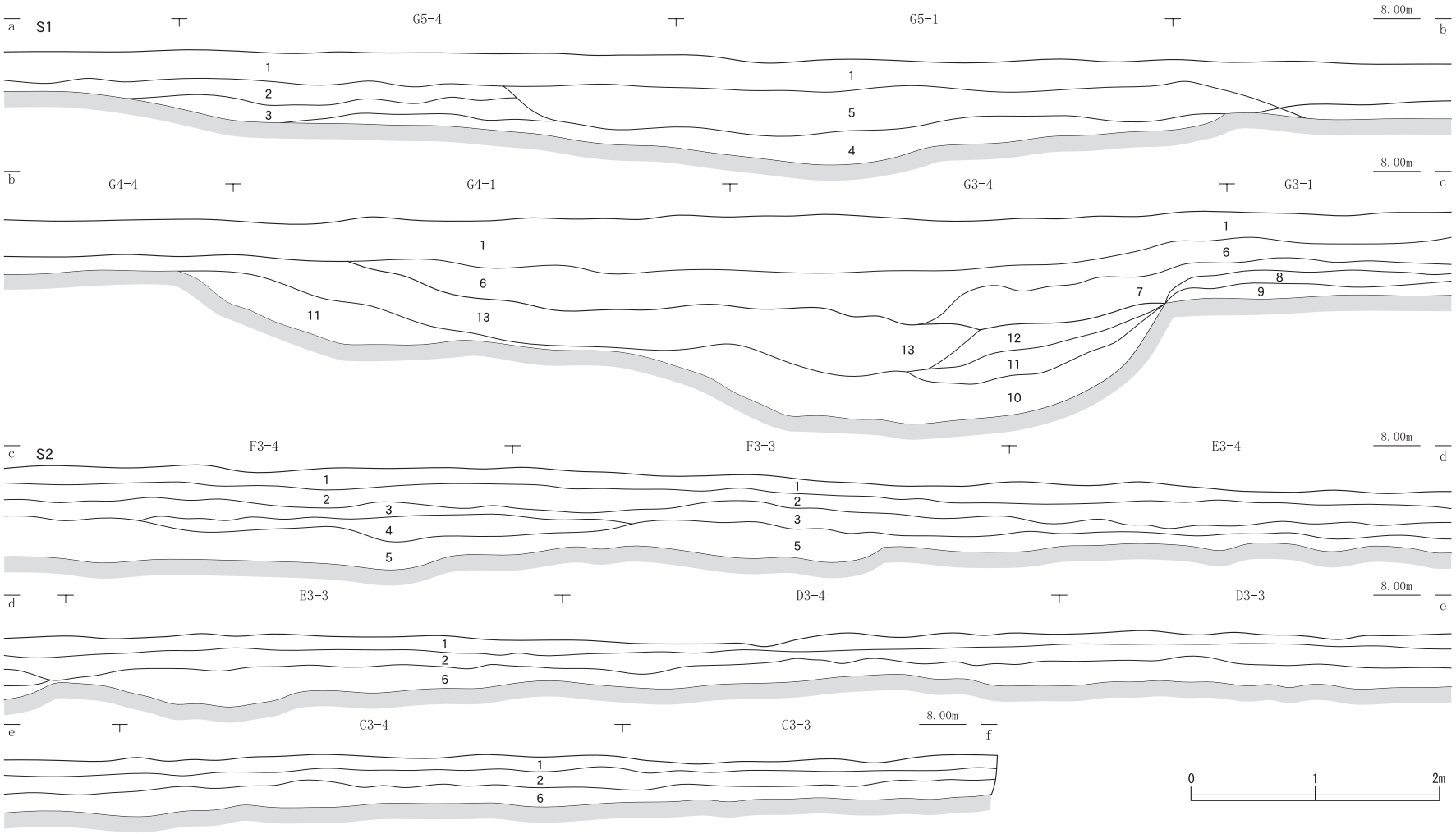
⑤区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SB-1	I11-3 I11-4	梁行　3.40 桁行　(1.50) 深さ　0.38	黒色 粘質土	遺物なし。	不明	N55°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む。P1に長さ0.50m、径0.15mの柱根が残る。梁行2間、桁行不明。	33	-
SK-2	H10-3	長軸　1.50 短軸　0.90 深さ　0.25	暗ｵﾘｰﾌﾞ 灰色土	土師器片少量出土。 遺物採集番号No1～4。 ﾐﾆﾁｭｱ土器を含む。	古墳時代 前期	N20°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。	35	18-2
SK-3	I11-2 I11-3	長軸　1.40 短軸　0.95 深さ　0.40	緑灰色 砂質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期	N87°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形で底面は平坦である。	35	18-3
SK-4	H11-4	長軸　0.90 短軸　0.70 深さ　0.50	青灰茶色 粘質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期	N5°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形で底面は平坦である。断面は袋状に下膨れ気味になり、再度掘り返されている。	35	-
SK-5	I11-3	長軸　1.67 短軸　0.94 深さ　0.20	暗青灰色 粘質土	土師器片わずかに出土。	古墳時代 前期	N60°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形で底面は平坦である。	37	-
SK-9	I12-1 I12-2	長軸　2.80 短軸　1.30 深さ　0.40	黒色 粘質土 暗緑灰色 砂質土	土師器片少量出土。 遺物採集番号No1～7。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N40°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。	35	18-3
SK-10	I12-1 I12-2	長軸　2.30 短軸　1.45 深さ　0.70	暗灰色 砂質土 黒色 粘質土	土師器片非常に多し。 遺物採集番号No1～5。	古墳時代 前期	N40°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形で底面は平坦である。SK-11に切られている。	37	18-4
SK-11	I12-1 I12-4	長軸　1.00 短軸　0.60 深さ　0.50	黒色 粘質土	土師器片少量含む。	古墳時代 前期	N30°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。SK-10を切る。	37	18-4
SK-12	I12-1 I12-4	長軸　0.65 短軸　0.65 深さ　0.12	暗灰色 砂質土	土師器片極めて多量出土。 遺物採集番号No1～3。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N30°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形で底面は平坦である。SK-11に切られている。	37	18-4
SK-13	I12-4	長軸　1.50 短軸　0.53 深さ　0.17	暗灰色 砂質土	土師器片多量出土。 遺物採集番号No1～4。	古墳時代 前期	N35°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑もしくは溝である。形状は不整形で底面は平坦である。	-	18-5
SK-14	J12-3	長軸　(1.13) 短軸　(0.87) 深さ　0.30	緑灰色 砂質土	土師器片多量出土。 遺物採集番号No1～3。	古墳時代 前期	N67°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形で底面は平坦である。	35	18-6
SK-15	I12-4	長軸　1.80 短軸　0.60 深さ　0.22	暗灰色 粘質土	土師器少量出土。 遺物採集番号No1～8。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N70°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不定形である。	35	-
SK-16	J13-3	長軸　1.00 短軸　0.40 深さ　0.29	ｵﾘｰﾌﾞ黒色 粘質土	土師器片少量出土。 遺物採集番号No1～3。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N60°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は楕円形である。遺物は底面から20cm以上の高さで出土する。	35	19-1
SK-18	I13-3	長軸　1.15 短軸　1.04 深さ　0.24	暗灰色 粘質土 暗灰色 砂質土	土師器片わずかに出土。 遺物採集番号No1～2。	弥生時代 末～ 古墳時代 前期	N30°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は円形である。	35	19-5
SK-19	K14-1 K14-2	長軸　2.40 短軸　1.80 深さ　0.40	黒色 砂質土	土師器片少量出土。 遺物採集番号No1～6。	弥生時代 中期	N65°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。遺物は底面から20cm以上の高さで出土する。土器を除くと、底面において白色粘土状になった棺材の広がりを確認した。木棺を据えた土壙墓と考えられる。	36	19-2 19-3



第6図　①区・⑥区遺構全体図（縮尺 1:300）

⑤区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SK-20	K14-3	長軸 1.12 短軸 0.90 深さ 0.24	暗灰色粘質土	土師器片を少量含む。遺物採集番号No1～5。	弥生時代末～古墳時代前期	N25°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は円形である。	35	19-4
SK-21	K14-3	長軸 1.49 短軸 1.13 深さ 0.06	黒色粘質土	土師器片多量に出土。遺物採集番号No1～15。	弥生時代末～古墳時代前期	N26°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形である。遺物は底面直上で出土。	36	19-6
SK-28	L16-1	長軸 1.04 短軸 0.86 深さ 0.35	暗ｵﾘｰﾌﾞ色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N70°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整円形である。	36	－
SK-29	M16-2	長軸 2.26 短軸 0.80 深さ 0.13	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土 暗緑灰色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N55°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。	36	－
SK-30	L16-4	長軸 (0.90) 短軸 0.70 深さ 0.41	暗灰黄色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N70°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。遺物は底面から20cm以上の高さで出土する。	36	－
SK-31	M17-2	長軸 1.40 短軸 1.14 深さ 0.14	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土 暗灰色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N60°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。	36	20-1
SK-32	M17-1	長軸 (1.20) 短軸 (1.00) 深さ 0.14	暗灰色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N70°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。	36	20-1
SK-36	M17-4 M18-1	長軸 1.64 短軸 (0.73) 深さ 0.23	暗青灰色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N65°E。緑灰色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。遺物は底面から10cm以上の高さで出土する。	36	－
SD-93	N18-3 N18-4	最大幅 1.00 下幅 0.80 深さ 0.50	ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質土	須恵器片、木器片を含む。遺物採集番号No1～14。	弥生時代末～古墳時代前期	N100°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。	36	20-２
SD-37	N17-3 N18-2	最大幅 0.96 下幅 0.40 深さ 0.15	ｵﾘｰﾌﾞ褐色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N60°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。	38	－
SD-89	N18-2	最大幅 0.80 下幅 0.40 深さ 0.15	暗灰色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N60°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。SD-37を切る。	38	20-3
SD-90	N18-1 N18-4	最大幅 (1.40) 下幅 (0.60) 深さ 0.23	ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N60°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。SD-92に切られる。	38	20-3
SD-91	N18-4	最大幅 (2.50) 下幅 (0.90) 深さ 0.30	ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N60°W。緑灰色砂質土の地山を掘り込む溝である。SD-92に切られる。	38	20-3

⑦区遺構	ｸﾞﾘｯﾄ	規模(m)	堆積土	遺　物	時　期	備　考	挿図	図版
SK-1	E36-2	長軸 1.85 短軸 0.92 深さ 0.55	黒色粘質土	土師器片少量出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N30°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整楕円形である。土壙墓の可能性あり。	40	－
SK-2	E35-3	長軸 (1.00) 短軸 (0.70) 深さ 0.36	黒褐色粘質土	土師器片わずかに出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N15°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。	40	－
SK-3	E35-3	長軸 0.78 短軸 0.43 深さ 0.58	黒色粘質土	土師器甕1点出土。	弥生時代末～古墳時代前期	N30°W。黄褐色砂質土の地山を掘り込む土坑である。形状は不整形である。	40	－
SD-1	D33-4 E33-3	最大幅 3.80 下幅 2.50 深さ 0.55	黒色粘質土 黄灰色粘質土	土師器多量に出土。若干の木片を含む。第1面、第2面に分けて遺物採集。祭祀用土器が多い。	弥生時代末～古墳時代前期	N80°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。	39	21-3 21-4
SD-4	E34-3 D34-4	最大幅 1.30 下幅 0.35 深さ 0.15	褐色粘質土	土師器片少量出土。遺物採集番号No1～6。	弥生時代末～古墳時代前期	N70°E。黄褐色砂質土の地山を掘り込む溝である。	40	21-5



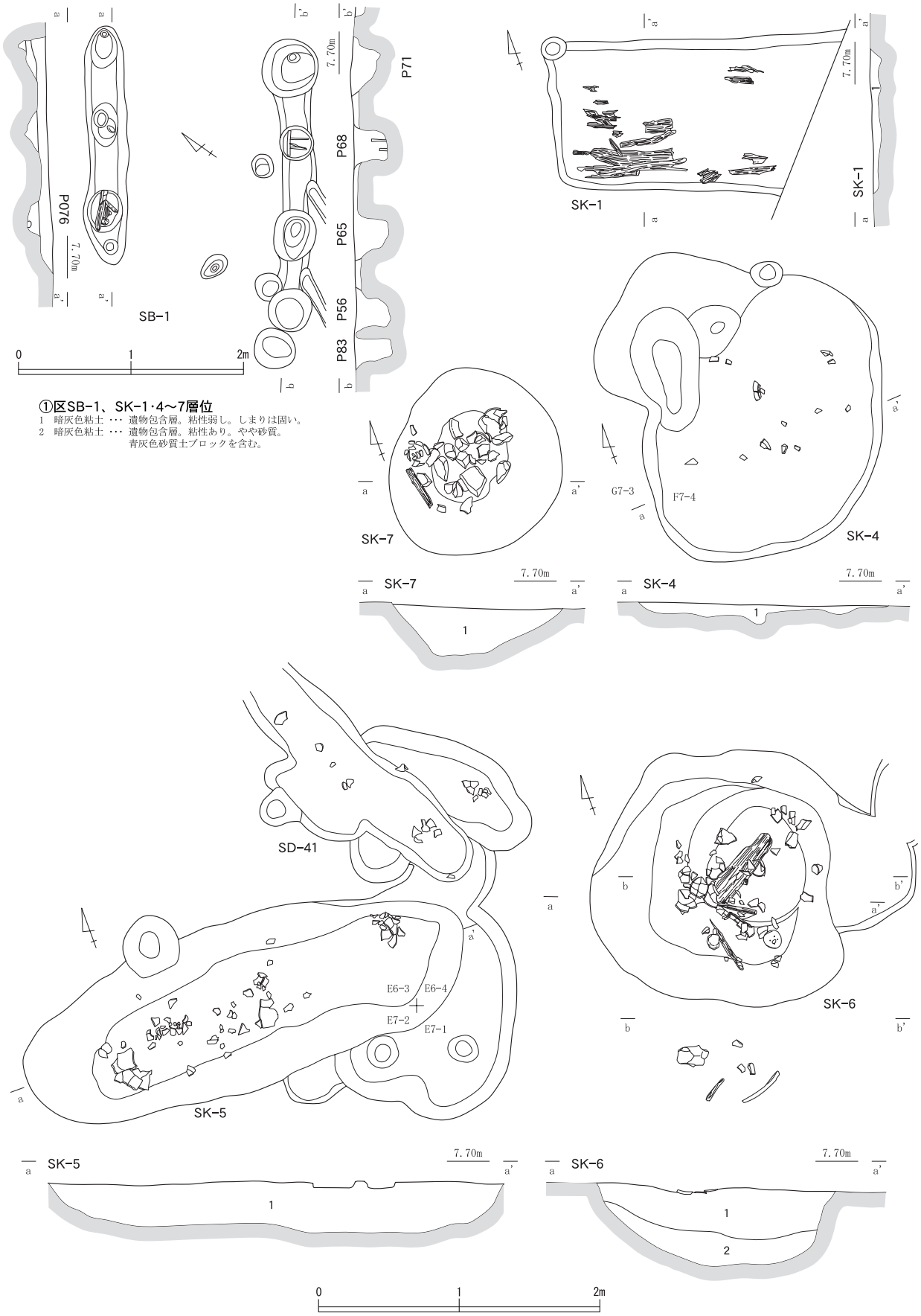
①区S1層位

1　灰色粘土　・・・　遺物包含層。粘性弱し。しまりは固い
2　暗灰色粘質土　・・・　遺物包含層。粘性あり。やや砂質。
3　灰色粘土　・・・　1よりやや褐色。粘性弱し。しまりは固い。
4　黒色粘質土　・・・　粘性強し。砂質分多し。土。腐食物を含む。
5　暗灰色粘質土　・・・　遺物包含層。しまりは固い。
6　暗灰色粘質土　・・・　遺物包含層。しまりは固い。
7　暗灰色粘質土　・・・　6より色調が強い。しまりは固い。砂質分多し。
8　暗灰色粘質土　・・・　遺物包含層。6と同質だが、色調がやや黒い。
9　暗灰色粘質土　・・・　遺物包含層。粘性弱し。しまりは固い。
10　暗青灰色粘質土・・・　川の堆積土。遺物多し。灰色ロームブロックを含む。粘性強し。
11　灰黒色粘土　・・・　川の堆積土。遺物包含層。粘性強し。有機質を多く含む。
12　灰黒色粘土　・・・　川の堆積土11と同質だが、混じりが少ない。
13　灰黒色粘土　・・・　川の堆積土。遺物多し。12と同質だが、有機質を非常に多く含む。

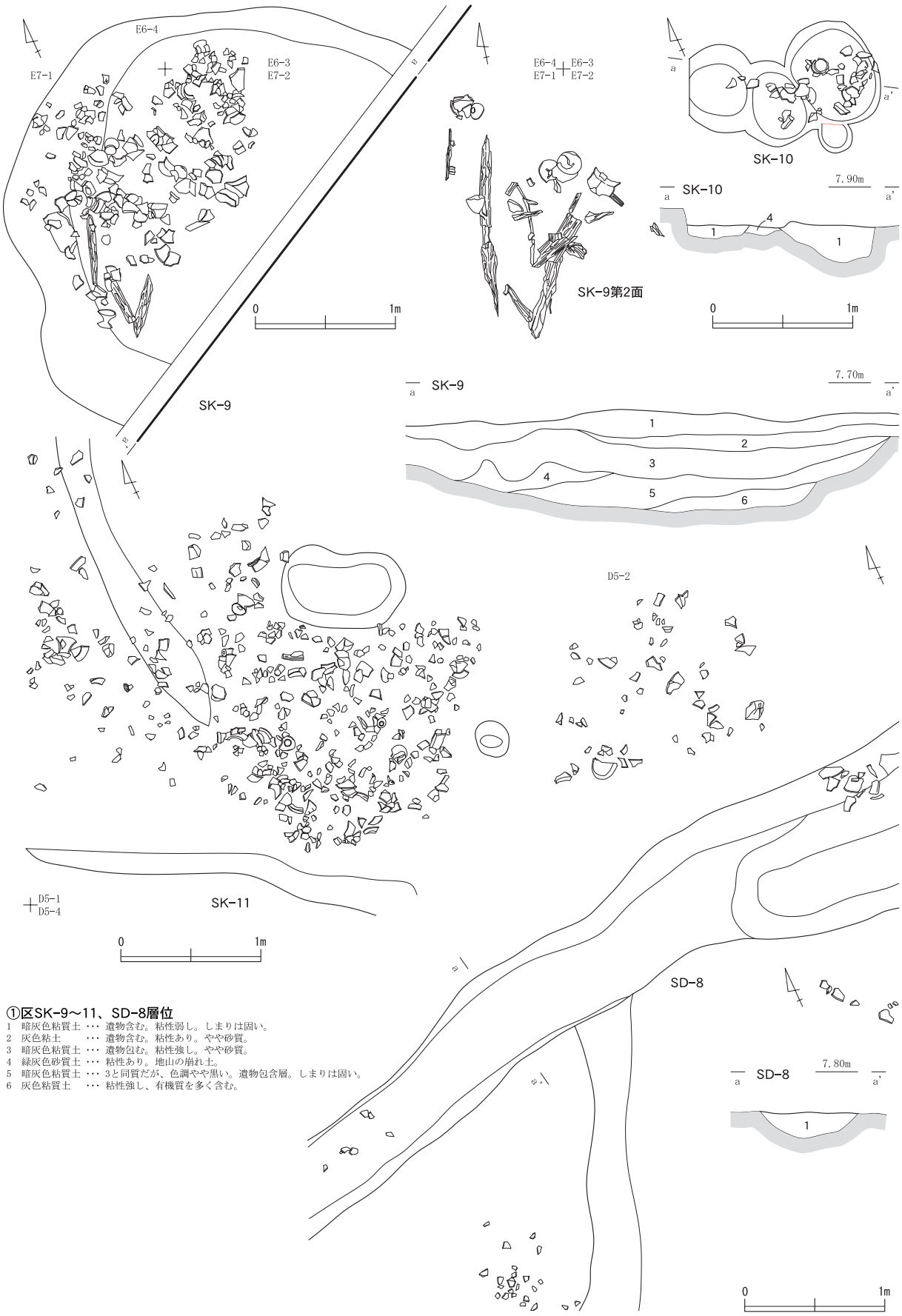
①区S2層位

1　灰色粘土　・・・　遺物包含層。粘性弱し。しまりは固い
2　暗灰色粘質土・・・　遺物包含層。粘性あり。やや砂質。
3　黒色粘質土　・・・　遺物包含層。粘性あり。砂質分多し。
4　暗茶色土　・・・　遺物包含層。粘性強し。有機質を多く含む。
5　暗青灰色粘質土・・　遺物包含層。黄灰色粘土ブロックを多く含む。砂質分多し。
6　暗灰色粘質土・・・　遺物包含層。粘性弱し。1と同質。

第７図　①区S1・S2層位図（縮尺 1:50）



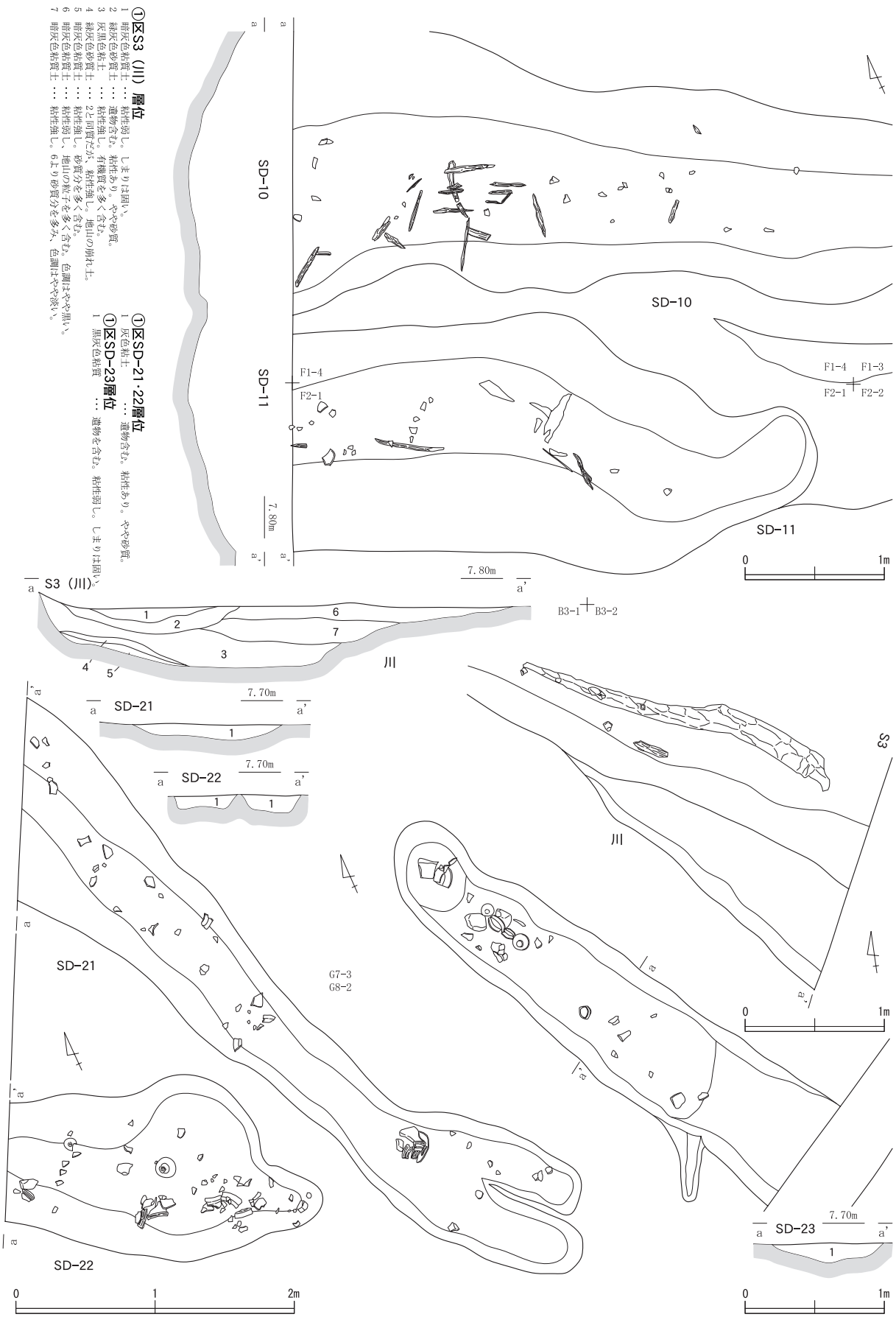
第８図　①区SB-1(縮尺 1:50)、SK-1、SK4~7、SD-41（縮尺 1:40）



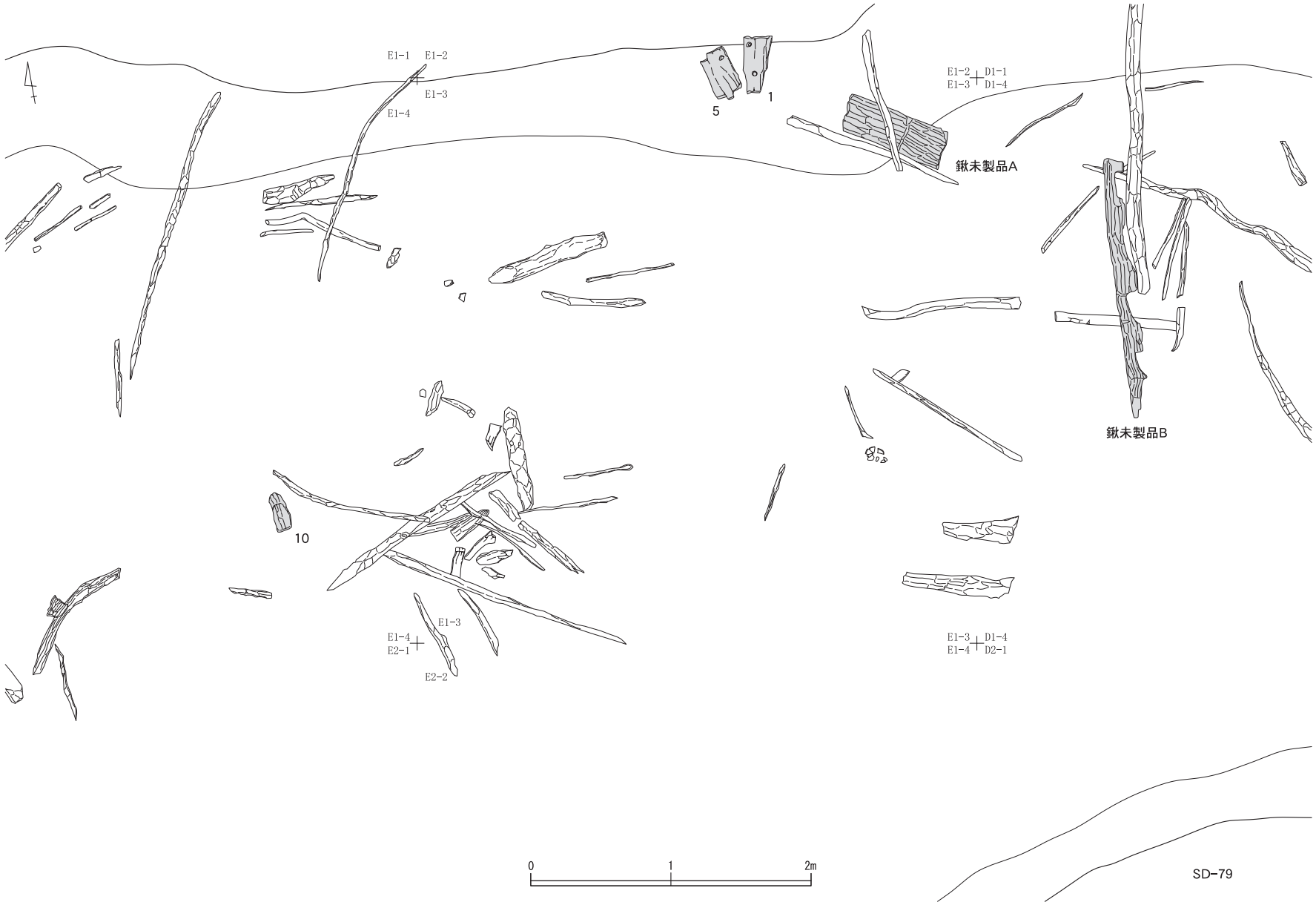
①区SK-9～11、SD-8層位

1　暗灰色粘質土 ･･･ 遺物含む。粘性弱し。しまりは固い。
2　灰色粘土 ･･･ 遺物含む。粘性あり。やや砂質。
3　暗灰色粘質土 ･･･ 遺物包む。粘性強し。やや砂質。
4　緑灰色砂質土 ･･･ 粘性あり。地山の崩れ土。
5　暗灰色粘質土 ･･･ 3と同質だが、色調やや黒い。遺物包含層。しまりは固い。
6　灰色粘質土 ･･･ 粘性強し、有機質を多く含む。

第９図　①区SK-9～11、SD-8（縮尺 1:40）

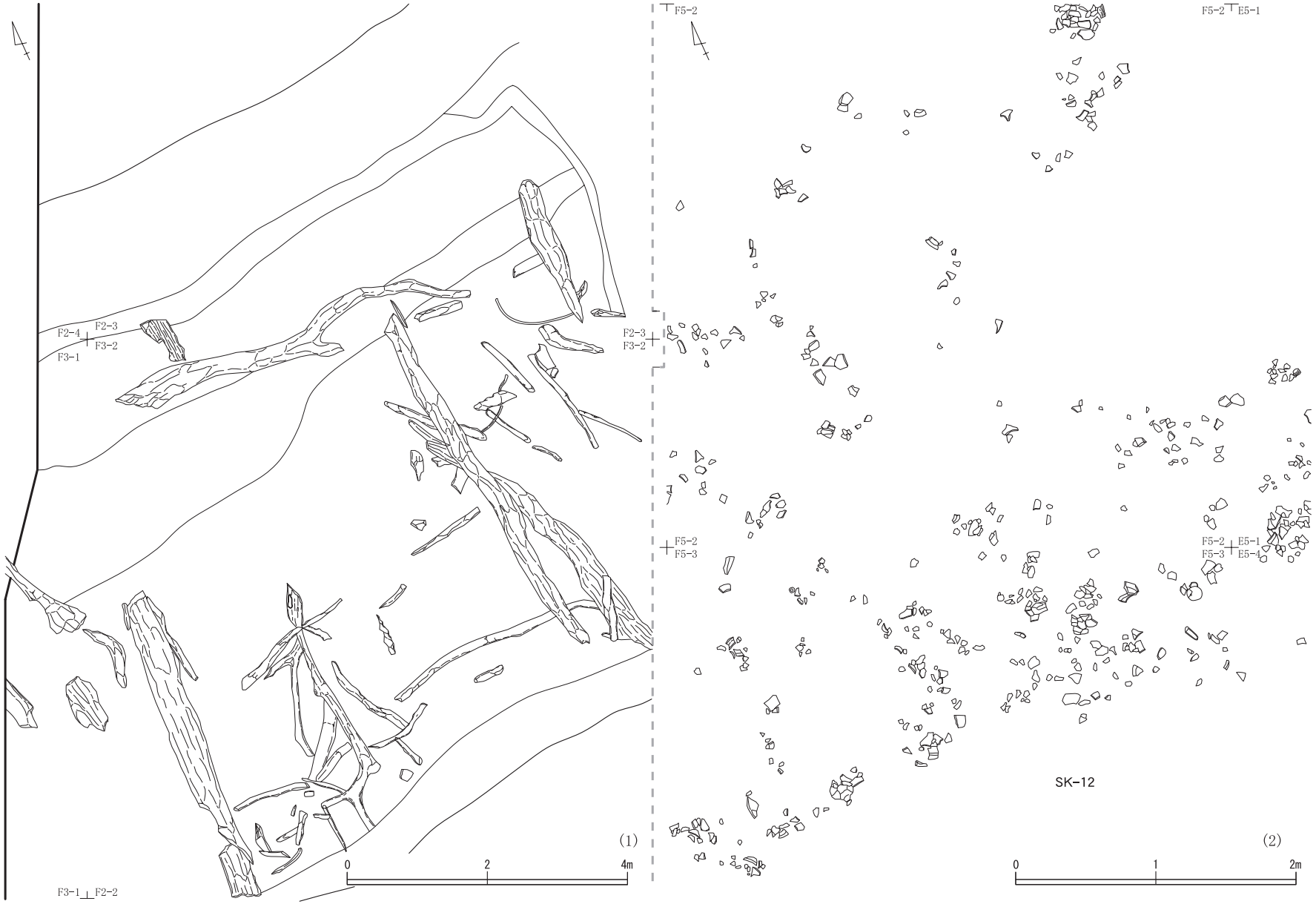


第10図　①区SD-10・11、S3(川)、SD-21~23（縮尺 1:40）

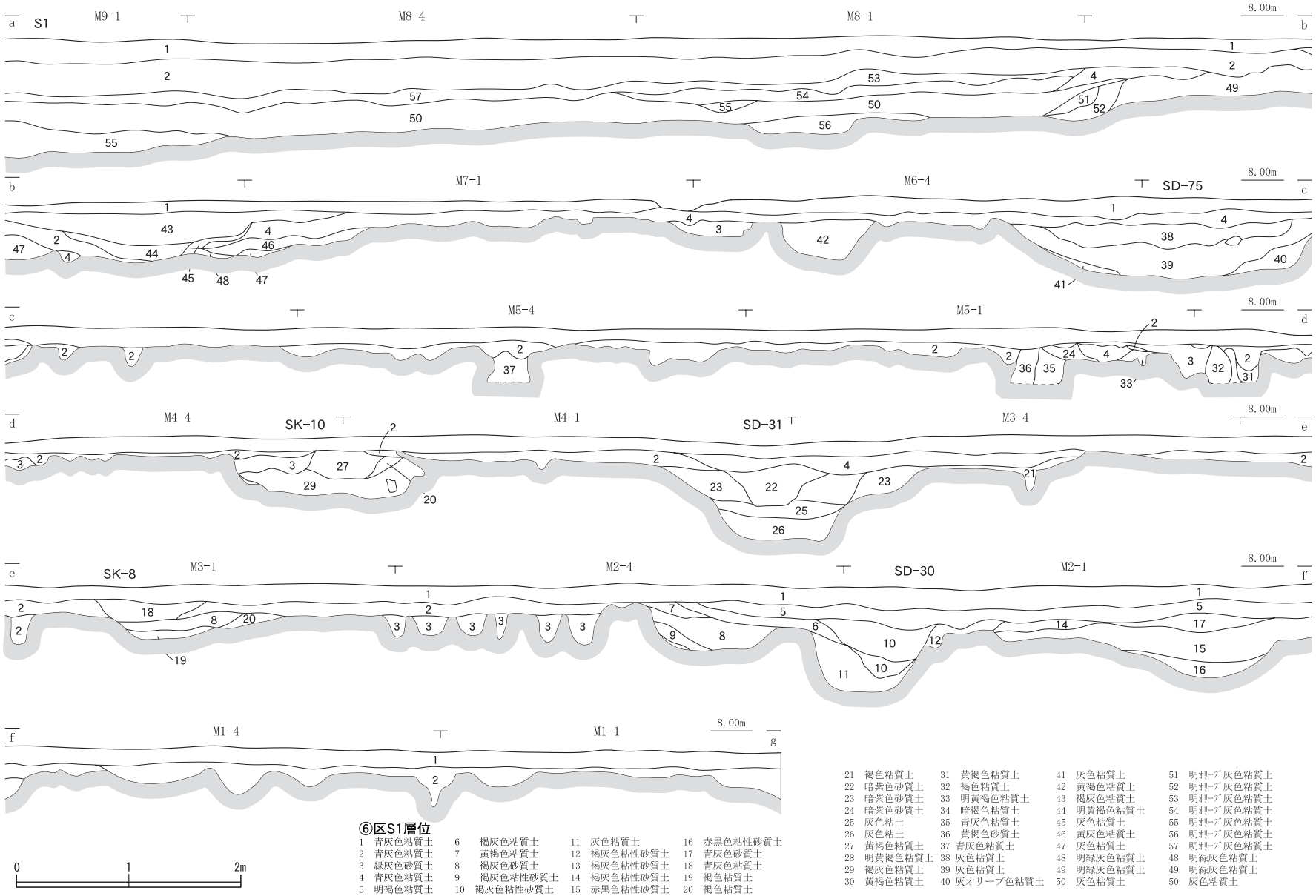


第11図　①区川の木器出土状況その１（E1･D1グリッド周辺）（縮尺 1:40）

第12図　①区川の木器出土状況その２(D1･C1グリッド周辺)（縮尺 1:40）



第13図　（1）①区川の水場遺構（縮尺 1:80）　（2）①区SK-12（縮尺 1:40）

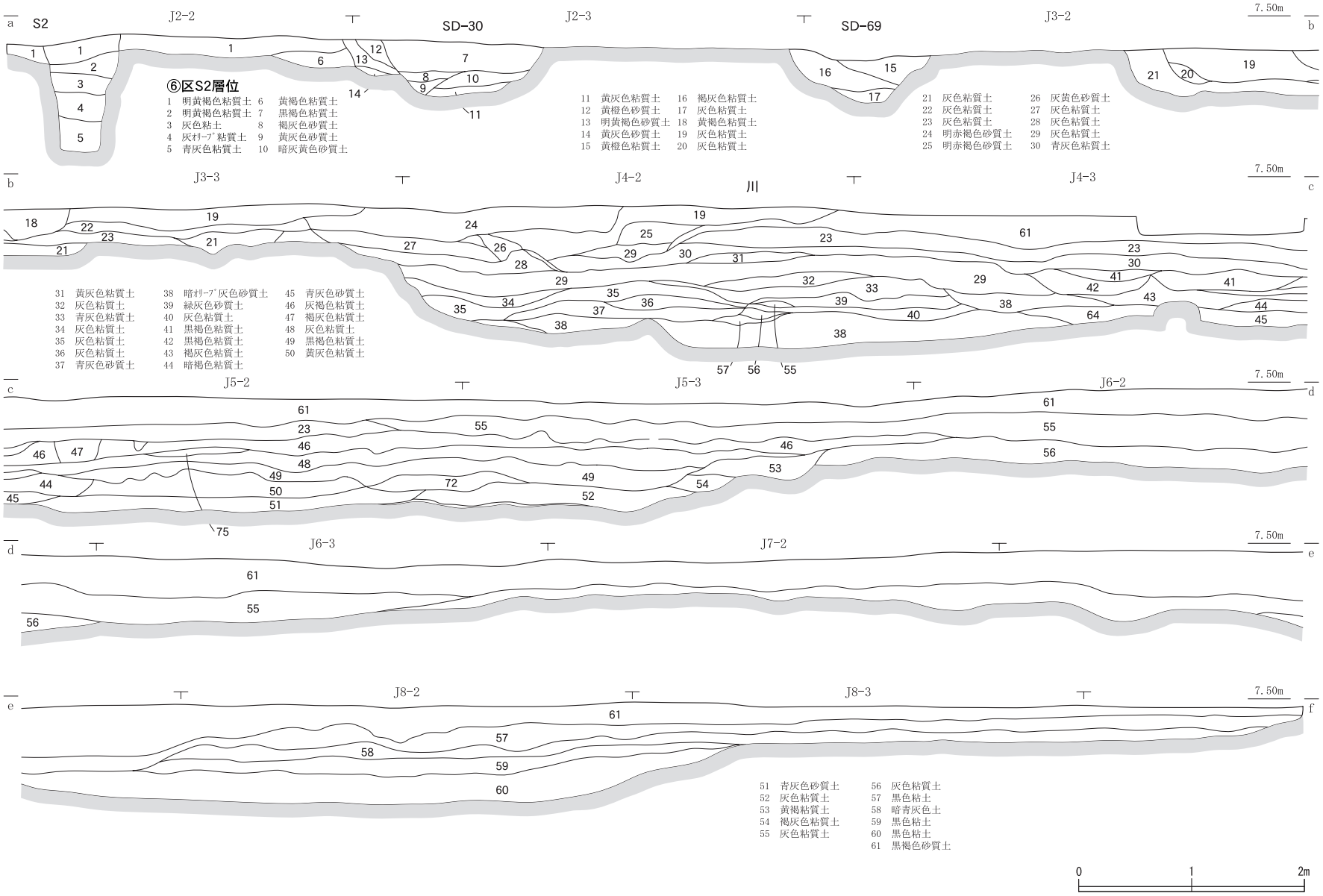


⑥区S1層位

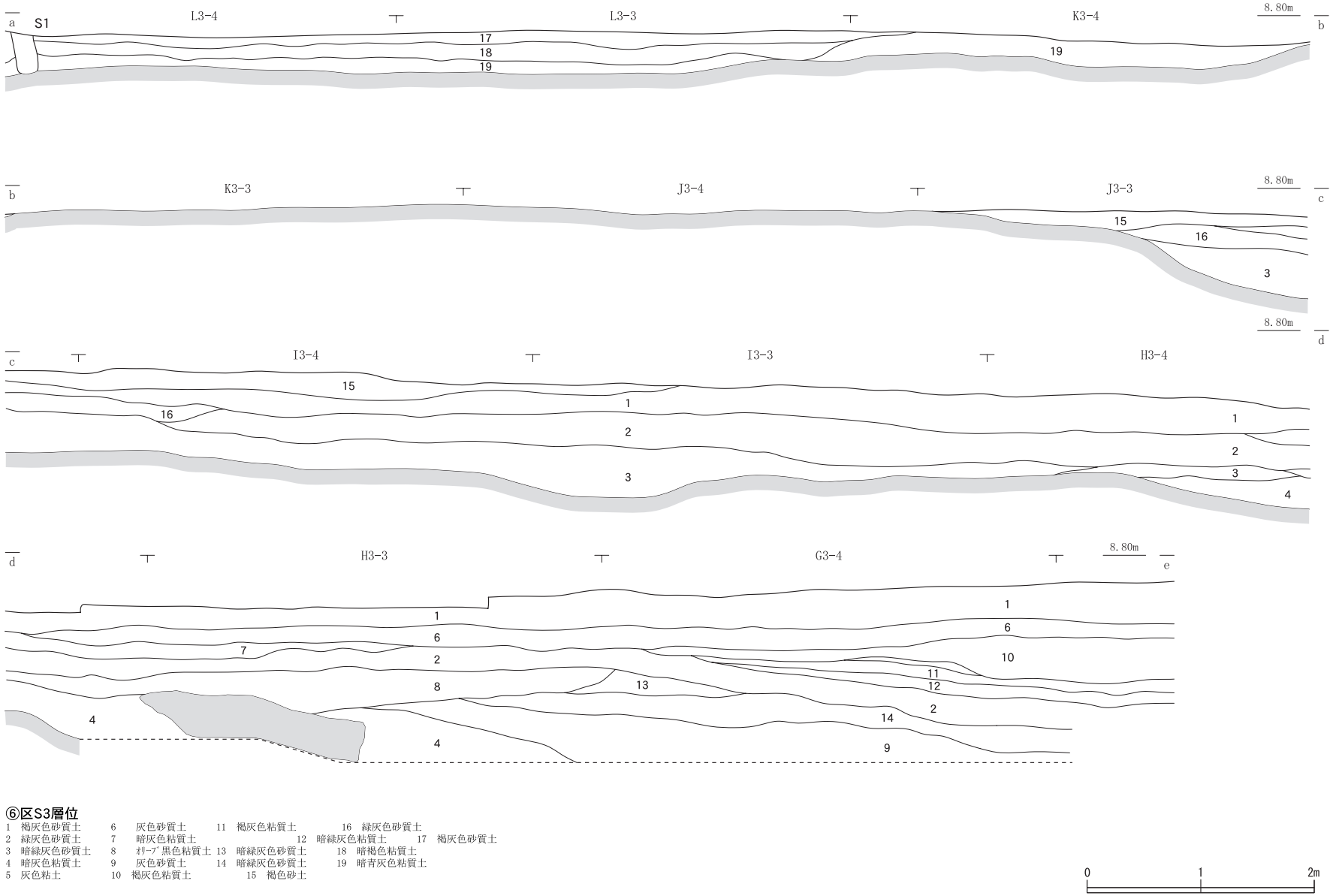
1	青灰色粘質土	6	褐灰色粘質土	11	灰色粘質土	16	赤黒色粘性砂質土
2	青灰色粘質土	7	黄褐色粘質土	12	褐灰色粘性砂質土	17	青灰色砂質土
3	緑灰色砂質土	8	褐灰色砂質土	13	褐灰色粘性砂質土	18	青灰色粘質土
4	青灰色粘質土	9	褐灰色粘性砂質土	14	褐灰色粘性砂質土	19	褐色粘質土
5	明褐色粘質土	10	褐灰色粘性砂質土	15	赤黒色粘性砂質土	20	褐色粘質土

21	褐色粘質土	31	黄褐色粘質土	41	灰色粘質土	51	明オリーブ灰色粘質土
22	暗紫色砂質土	32	褐色粘質土	42	黄褐色粘質土	52	明オリーブ灰色粘質土
23	暗紫色砂質土	33	明黄褐色粘質土	43	褐灰色粘質土	53	明オリーブ灰色粘質土
24	暗紫色砂質土	34	暗褐色粘質土	44	明黄褐色粘質土	54	明オリーブ灰色粘質土
25	灰色粘土	35	青灰色粘質土	45	灰色粘質土	55	明オリーブ灰色粘質土
26	灰色粘土	36	黄褐色砂質土	46	黄灰色粘質土	56	明オリーブ灰色粘質土
27	黄褐色粘質土	37	青灰色粘質土	47	灰色粘質土	57	明オリーブ灰色粘質土
28	明黄褐色粘質土	38	灰色粘質土	48	明緑灰色粘質土	48	明緑灰色粘質土
29	褐灰色粘質土	39	灰色粘質土	49	明緑灰色粘質土	49	明緑灰色粘質土
30	黄褐色粘質土	40	灰オリーブ色粘質土	50	灰色粘質土	50	灰色粘質土

第14図　⑥区S1層位図（縮尺 1:50）



第15図　⑥区S2層位図（縮尺 1:50）

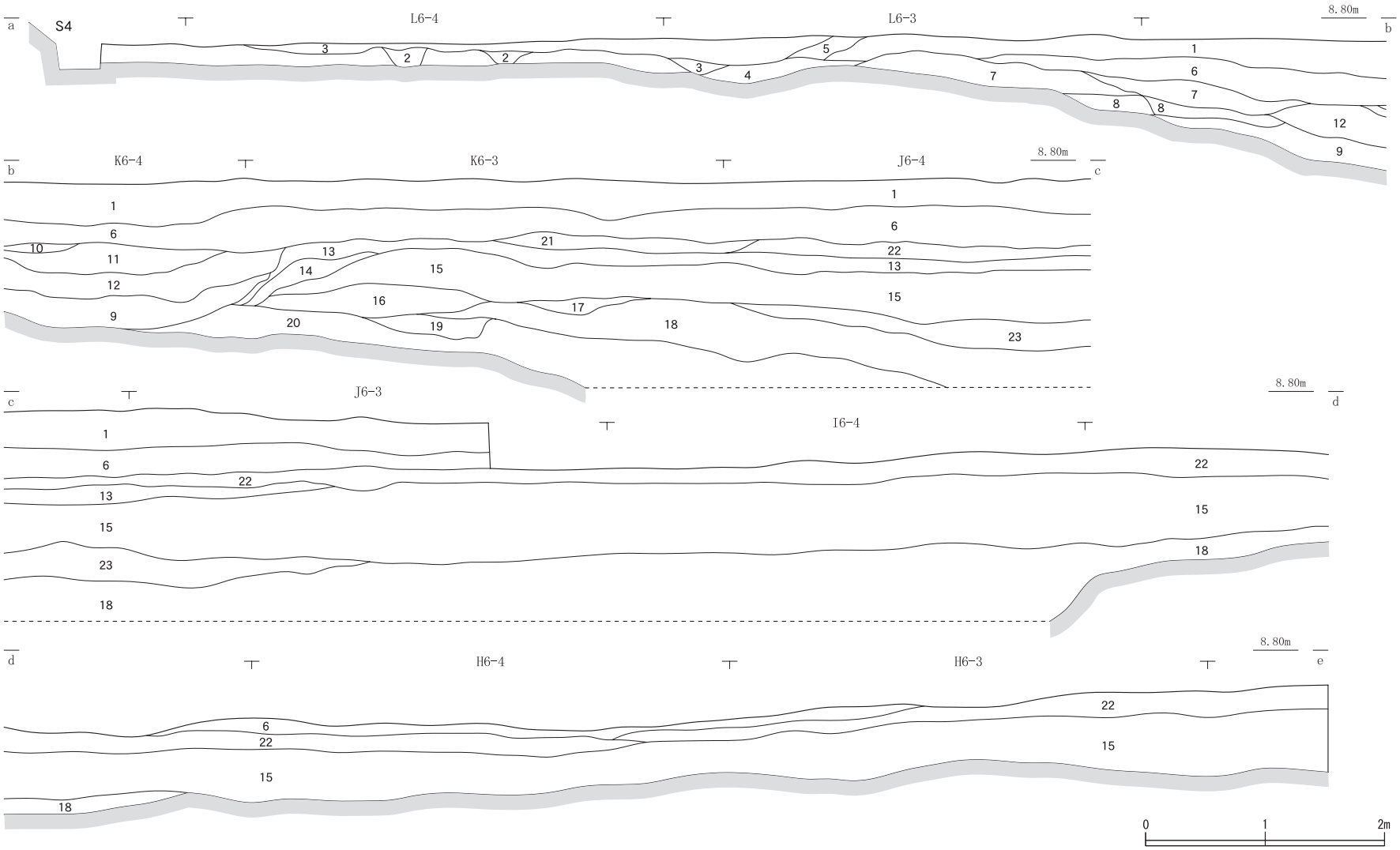


⑥区S3層位

1　褐灰色砂質土　6　灰色砂質土　11　褐灰色粘質土　16　緑灰色砂質土
2　緑灰色砂質土　7　暗灰色粘質土　12　暗緑灰色粘質土　17　褐灰色砂質土
3　暗緑灰色砂質土　8　ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土　13　暗緑灰色砂質土　18　暗褐色粘質土
4　暗灰色粘質土　9　灰色砂質土　14　暗緑灰色砂質土　19　暗青灰色粘質土
5　灰色粘土　10　褐灰色粘質土　15　褐色砂土

0　1　2m

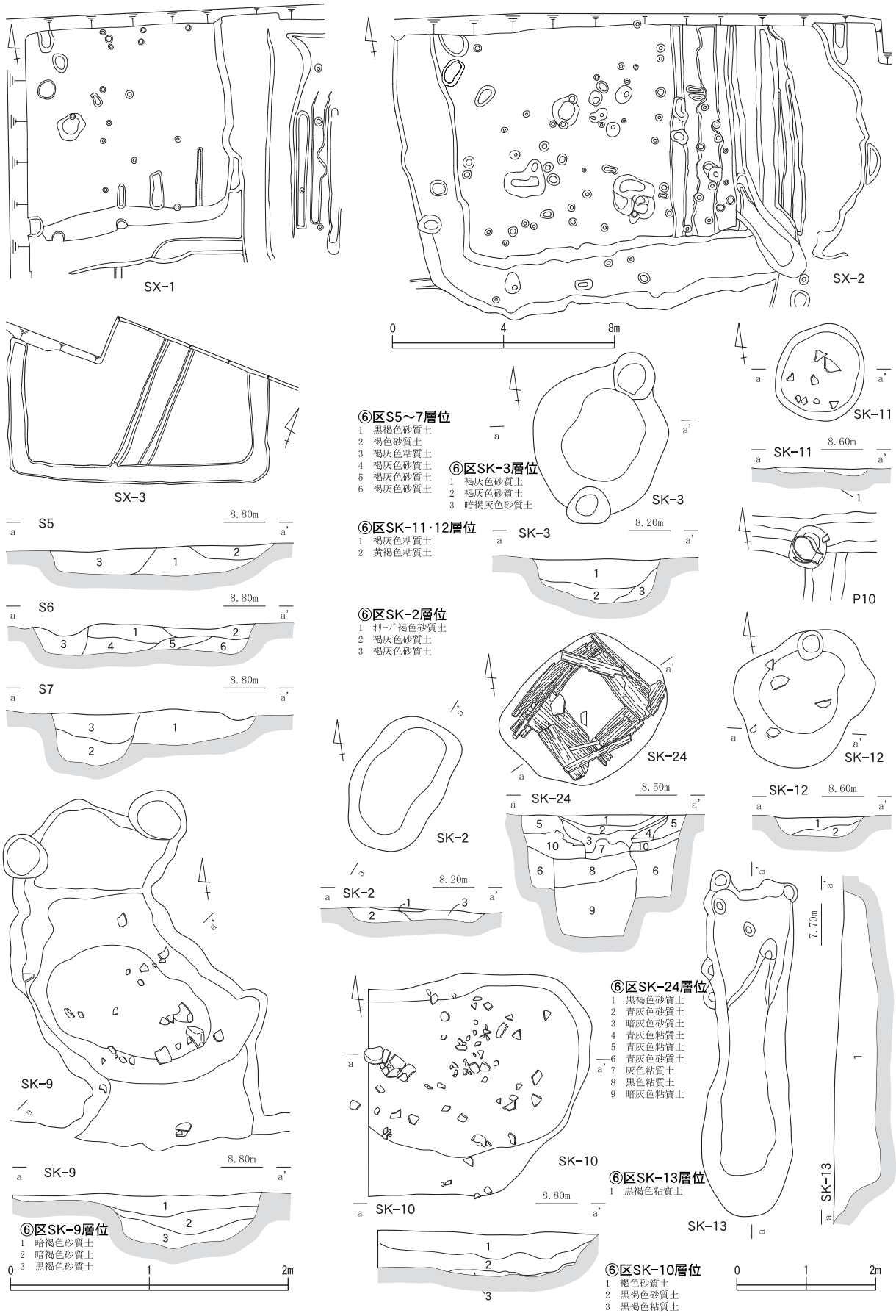
第16図　⑥区S3層位図（縮尺 1:50）



⑥区S4層位

1 灰色粘質土
2 ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘質土
3 灰色粘質土
4 ｵﾘｰﾌ灰色砂質土
5 灰色粘質土
6 灰色砂質土
7 ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂質土
8 ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂質土
9 暗灰色砂質土
10 暗青灰色砂質土
11 緑灰色砂質土
12 緑灰色砂質土
13 褐灰色粘質土
14 灰色粘質土
15 緑灰色砂質土
16 暗緑灰色砂質土
17 暗灰色砂質土
18 暗緑灰色砂質土
19 暗緑灰色砂質土
20 暗灰色砂質土
21 灰色粘質土
22 ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘質土
23 暗緑灰色砂質土

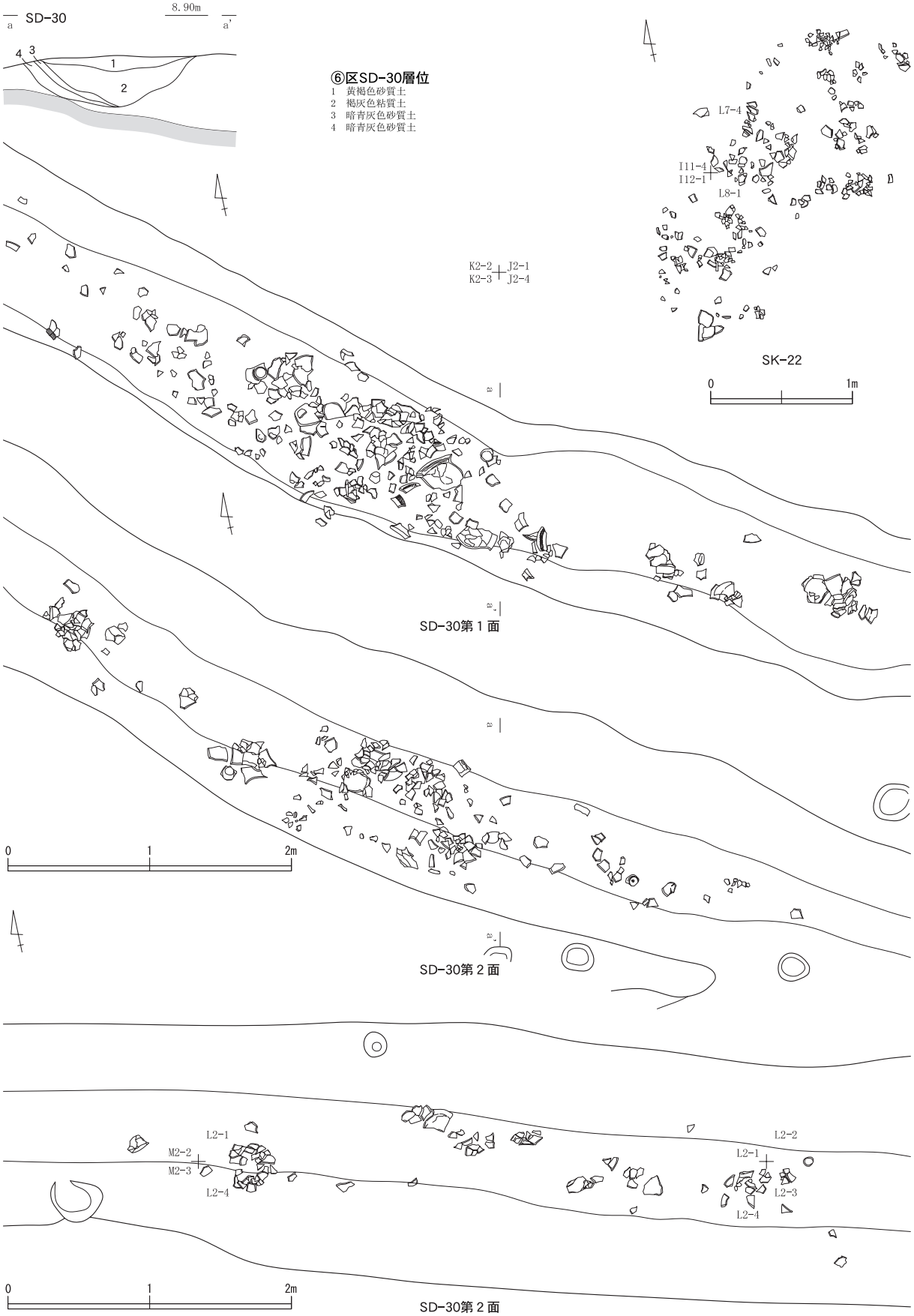
第17図　⑥区S4層位図（縮尺 1:50）



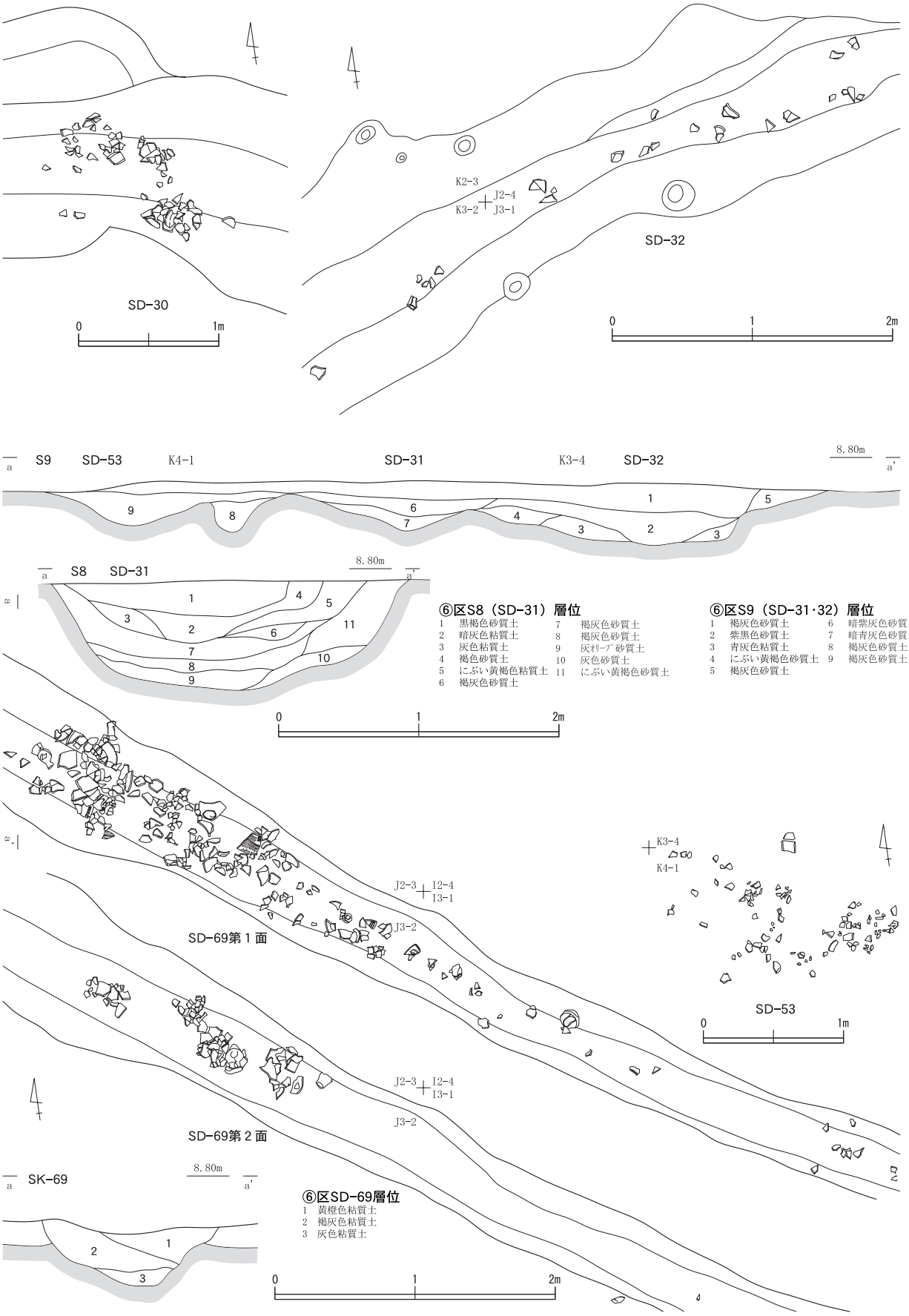
第18図　⑥区SX-1～3（縮尺 1:200）、S3～5（縮尺 1:50）、SK-2・3・9～12・24(縮尺 1:40)、SK-13（縮尺 1:80）

第19図　⑥区SK-21(H7・H8・I7・I8グリット周辺)（縮尺 1:40）

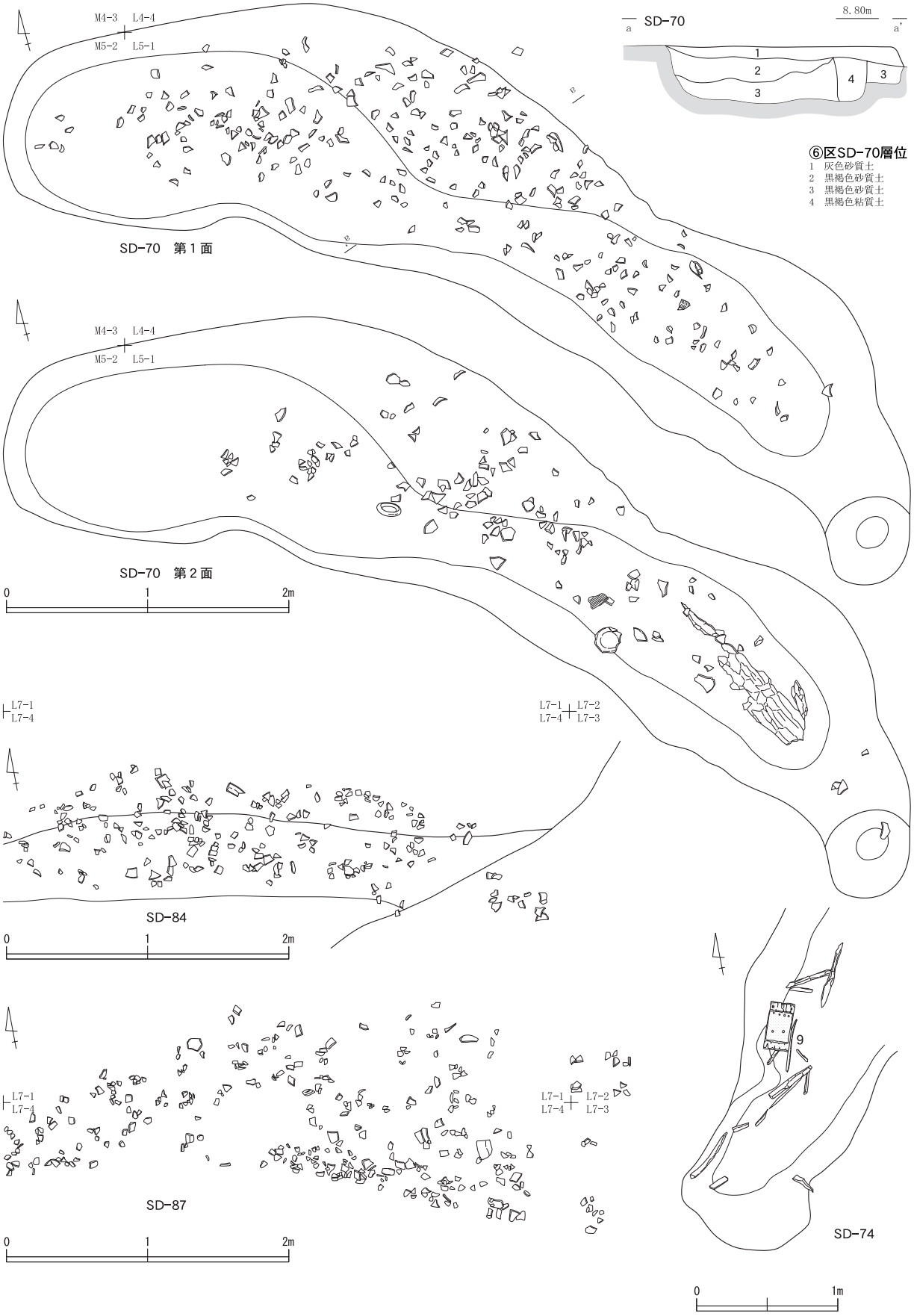
第20図　⑥区SK-21（I8・I9・J8・J9グリッド周辺）（縮尺 1:40）



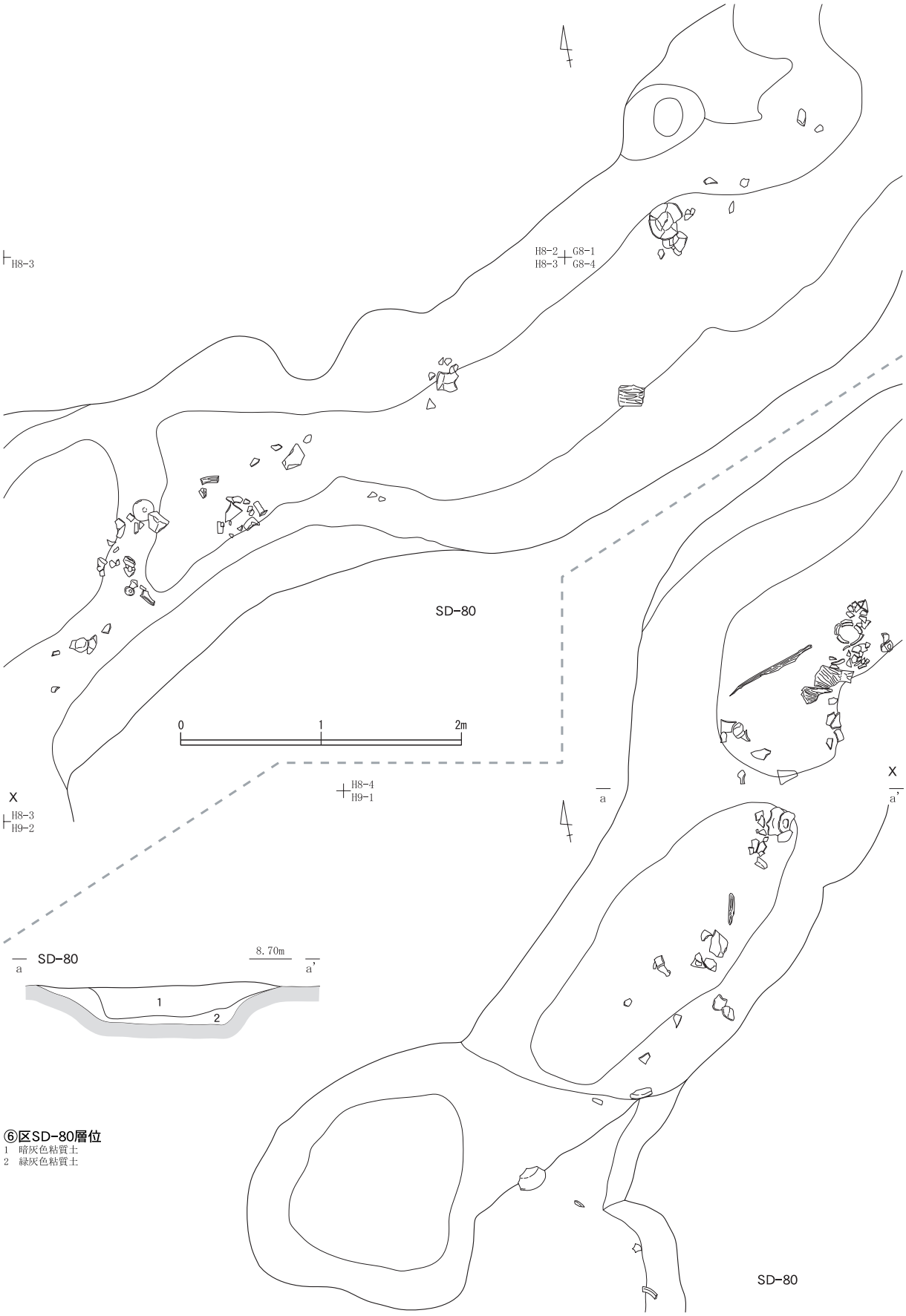
第21図　⑥区SK-22、SD-30(K2･J2グリッド周辺第1面･第2面)、SD-30(M2･L2グリッド周辺第2面)　(縮尺 1:40)



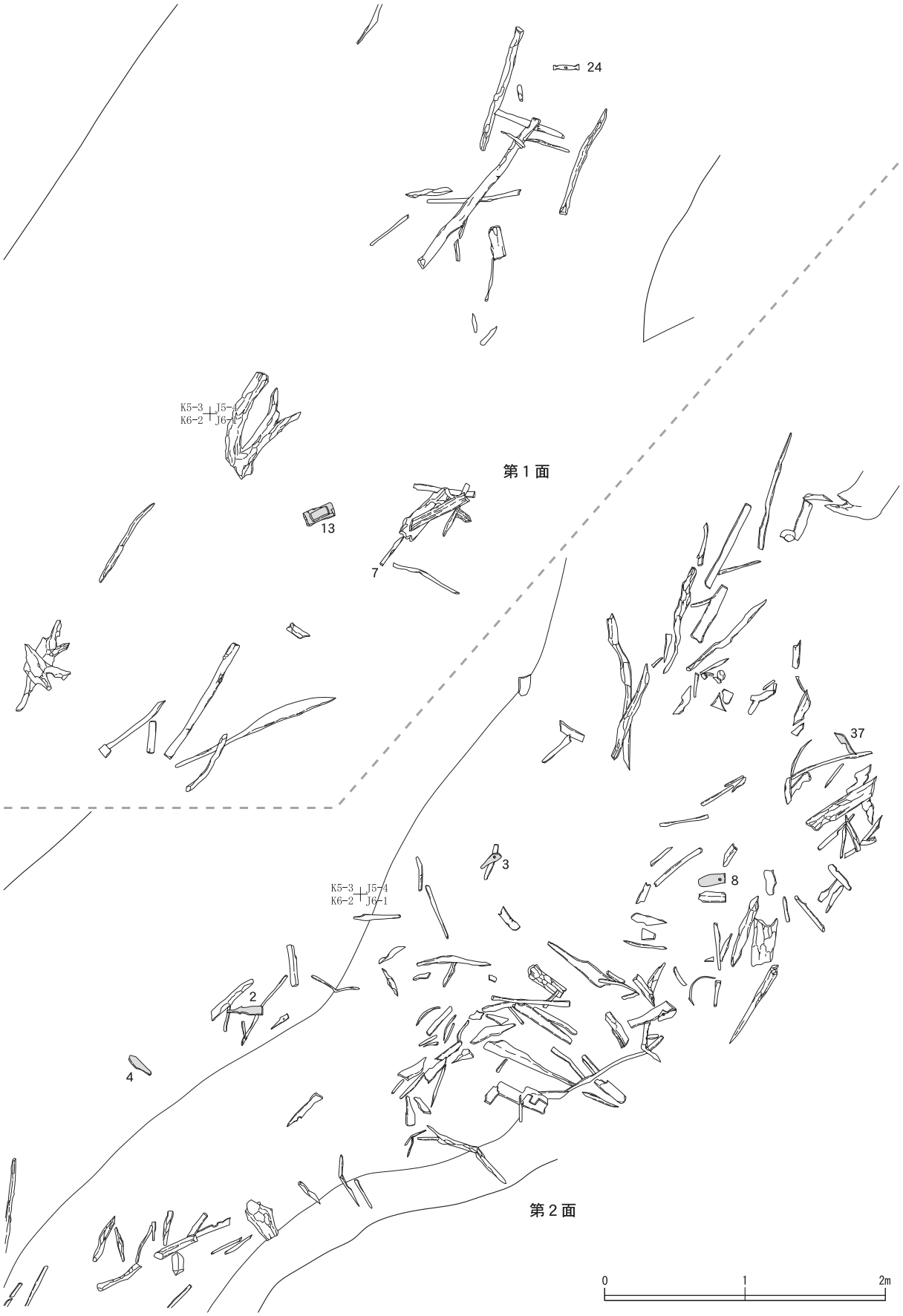
第22図　⑥区SD-30･32･53･69、S8(SD-31)･9(SD-53･31･32)　(縮尺 1:40)



第23図 ⑥区SD-70(第1面・第2面)・74・84・87 (縮尺 1:40)



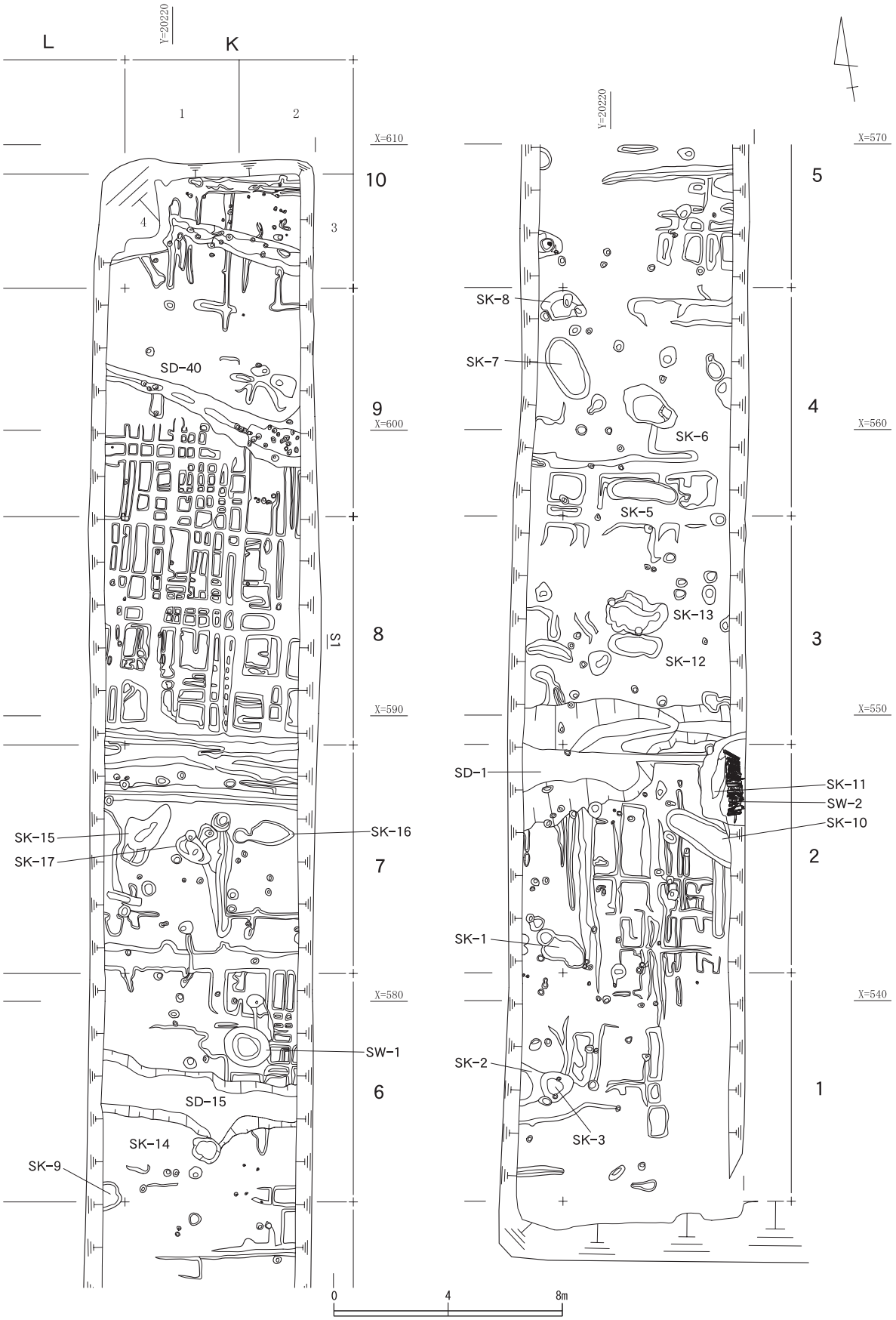
第24図　⑥区SD-80（縮尺 1:40）



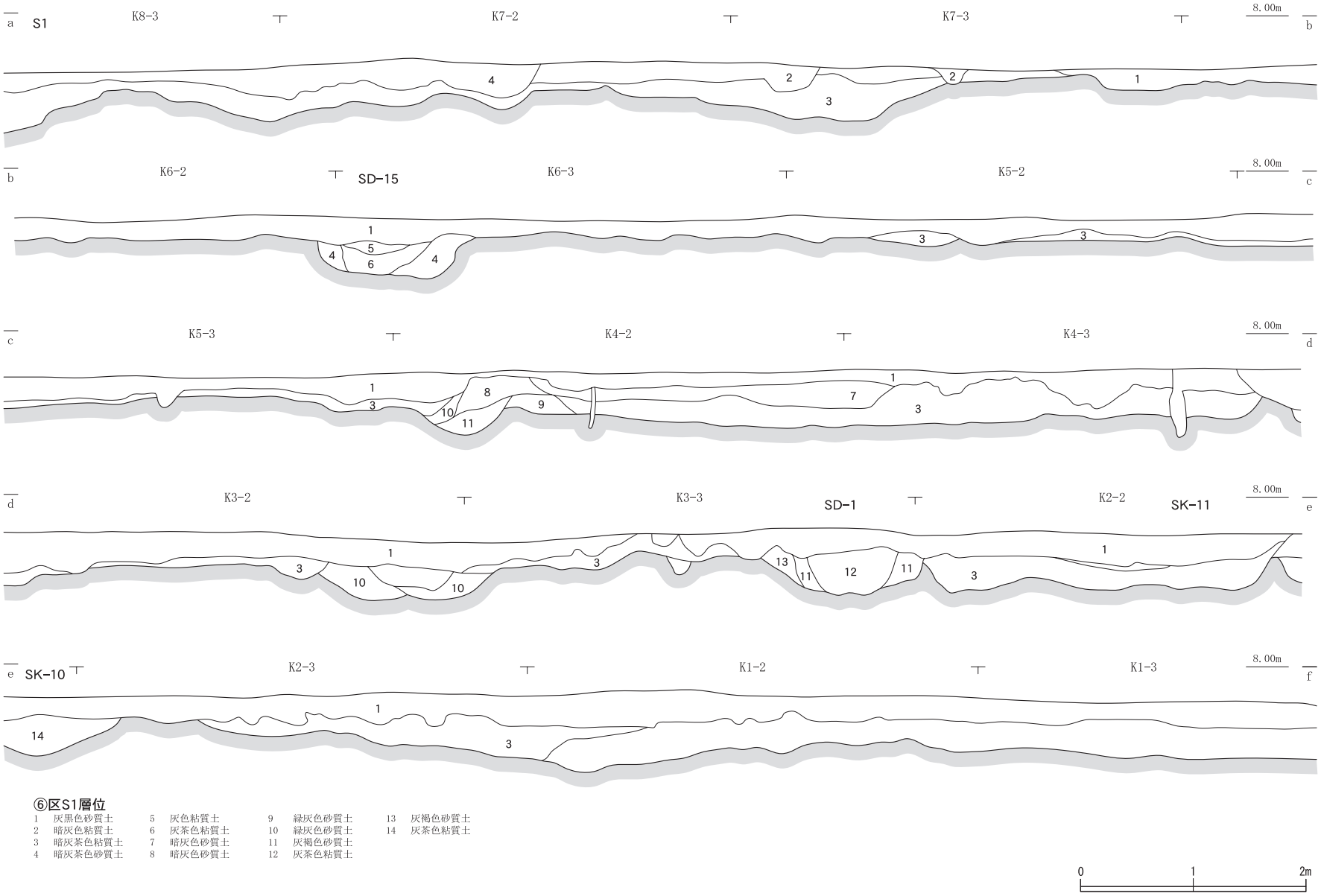
第25図　⑥区川の木器出土状況その１（J5･J6･K6グリッド周辺第１面および第２面）（縮尺 1:40）

第26図　⑥区川の木器出土状況その２（L7･L8グリット周辺）（縮尺 1:40）

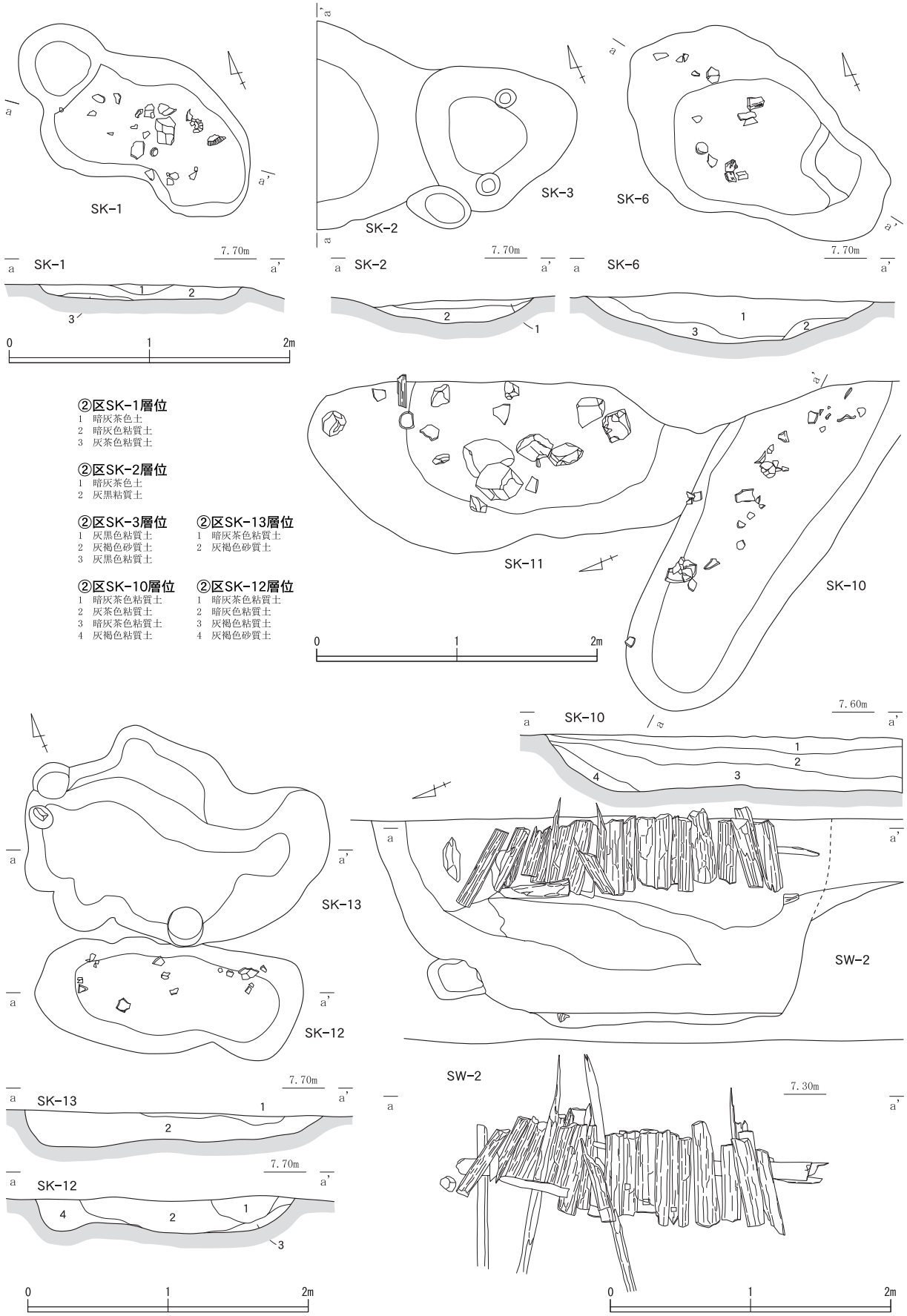
第27図　⑥区堰出土状況（I4グリット周辺）（縮尺 1:60）



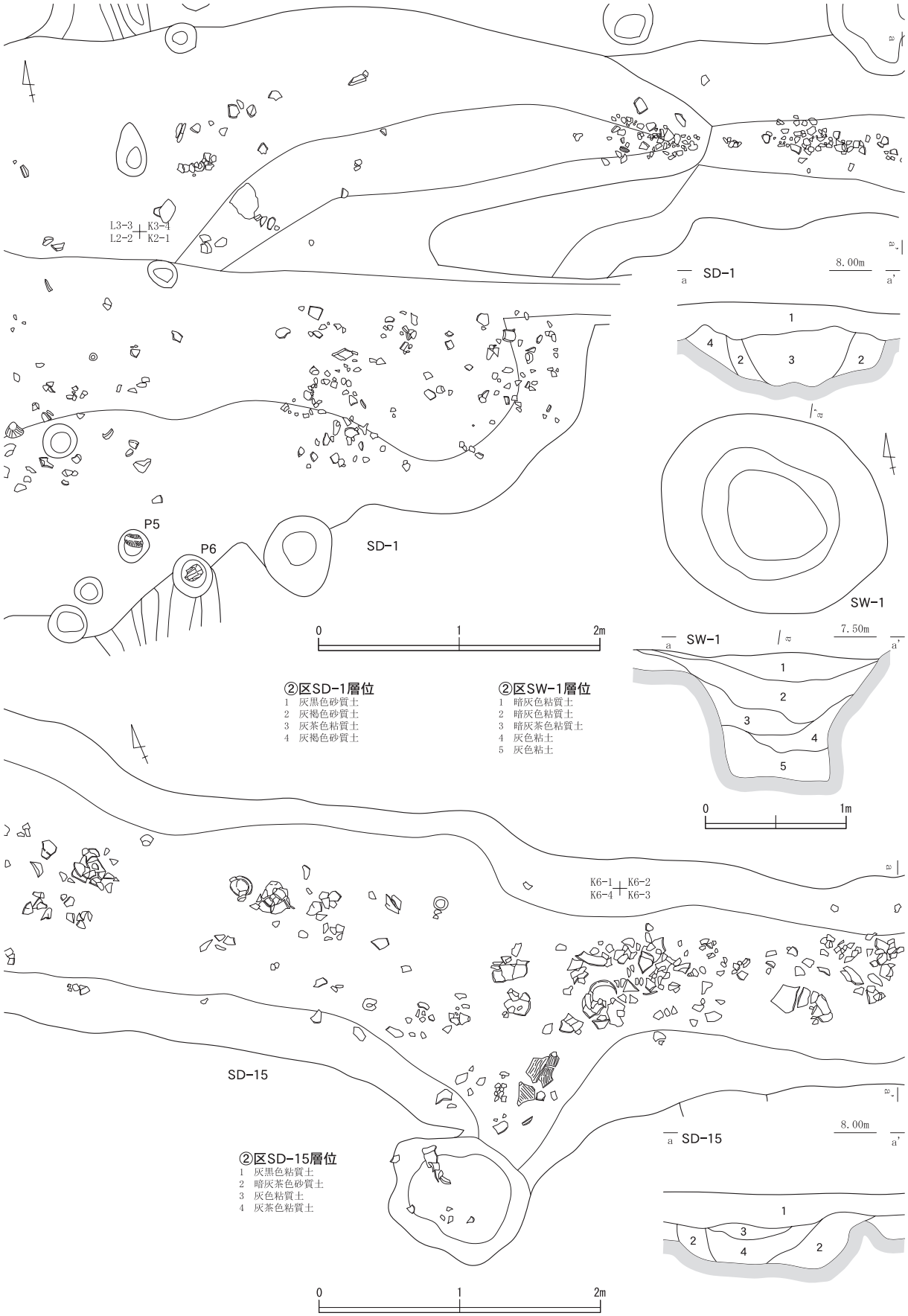
第28図　②区遺構全体図（縮尺 1:200）



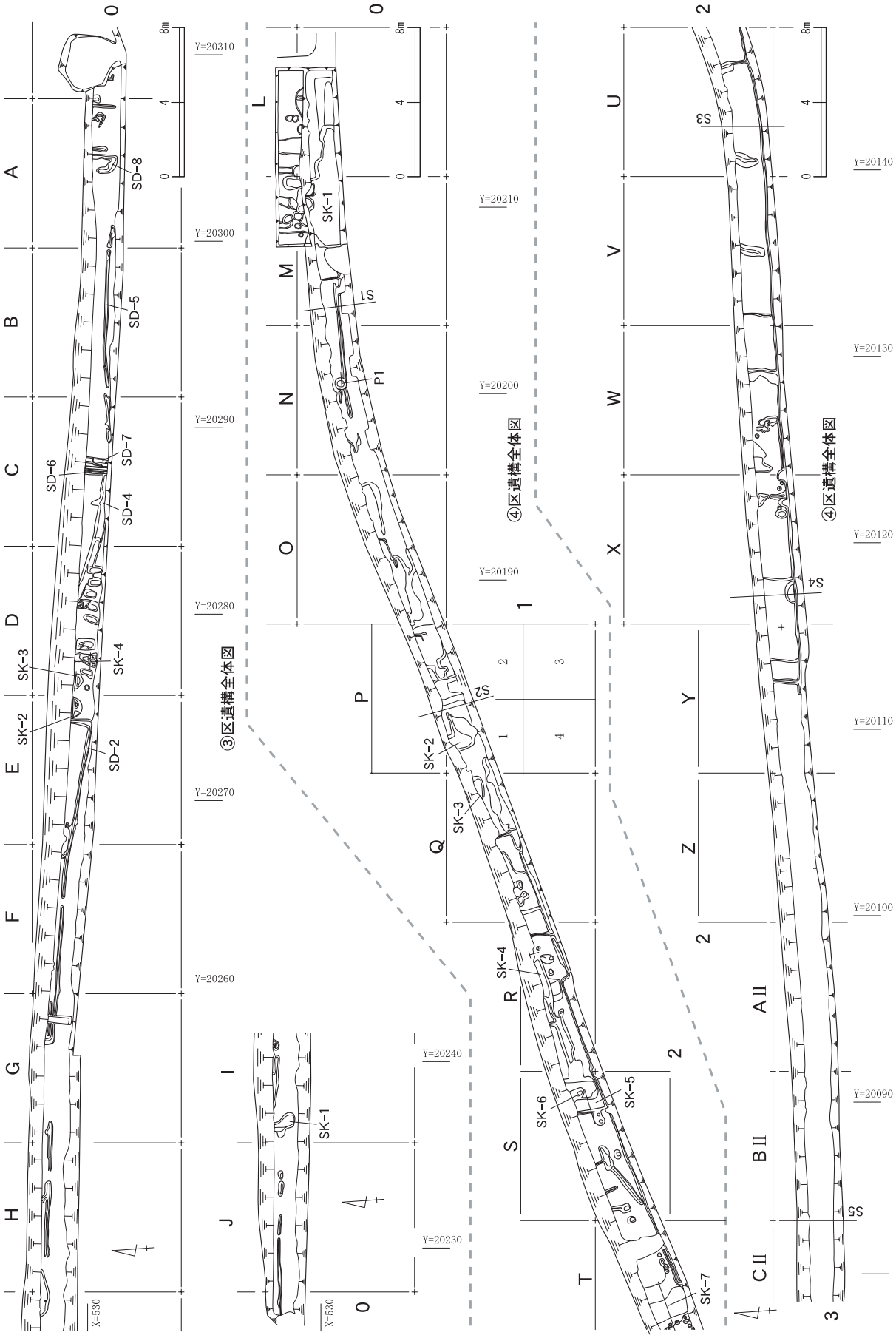
第29図　②区S1層位図（縮尺 1:50）



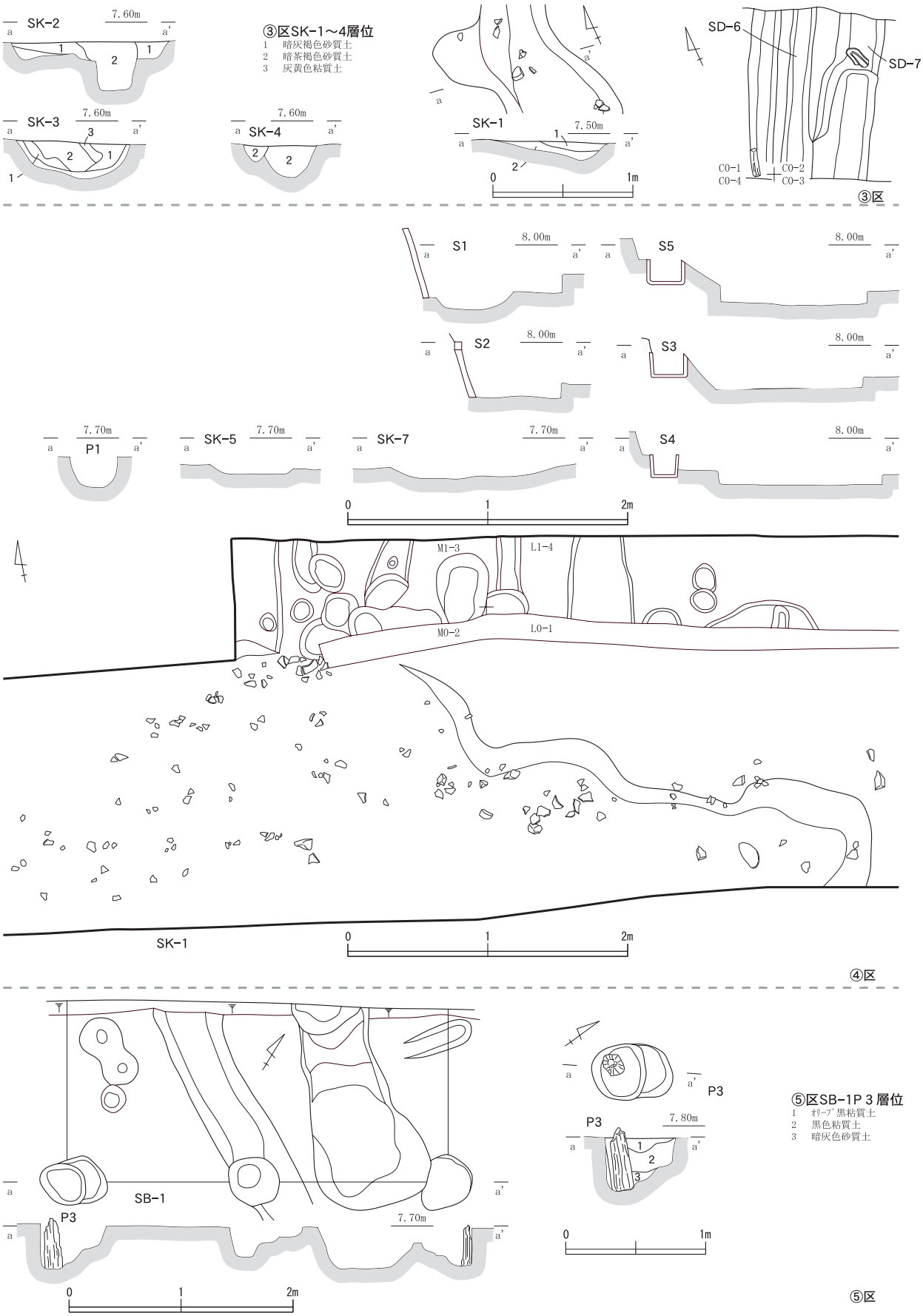
第30図　②区SK-1～3・6・10～13、SW-2（縮尺 1:40）



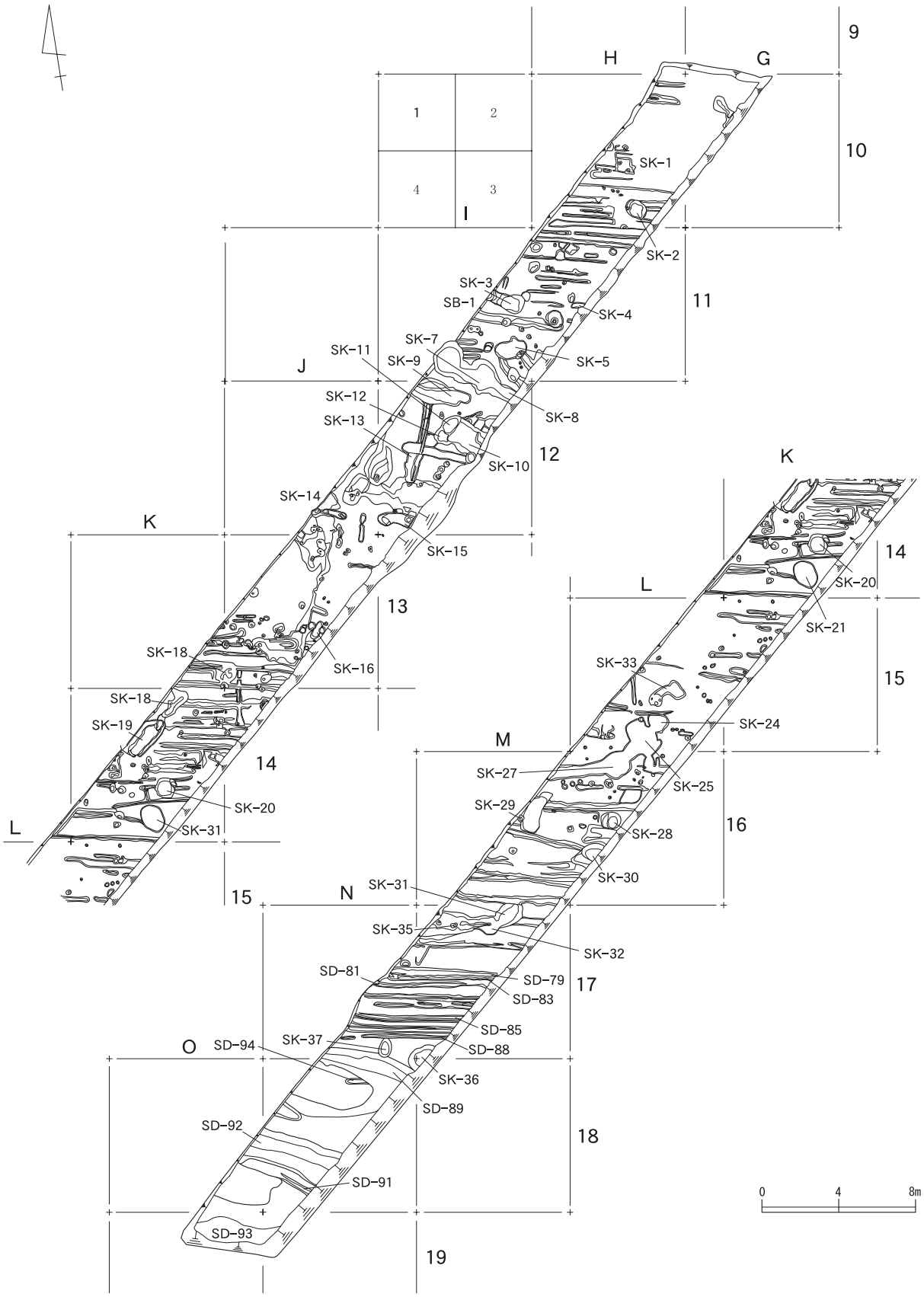
第31図　②区SD-1・15、SW-1（縮尺 1:40）



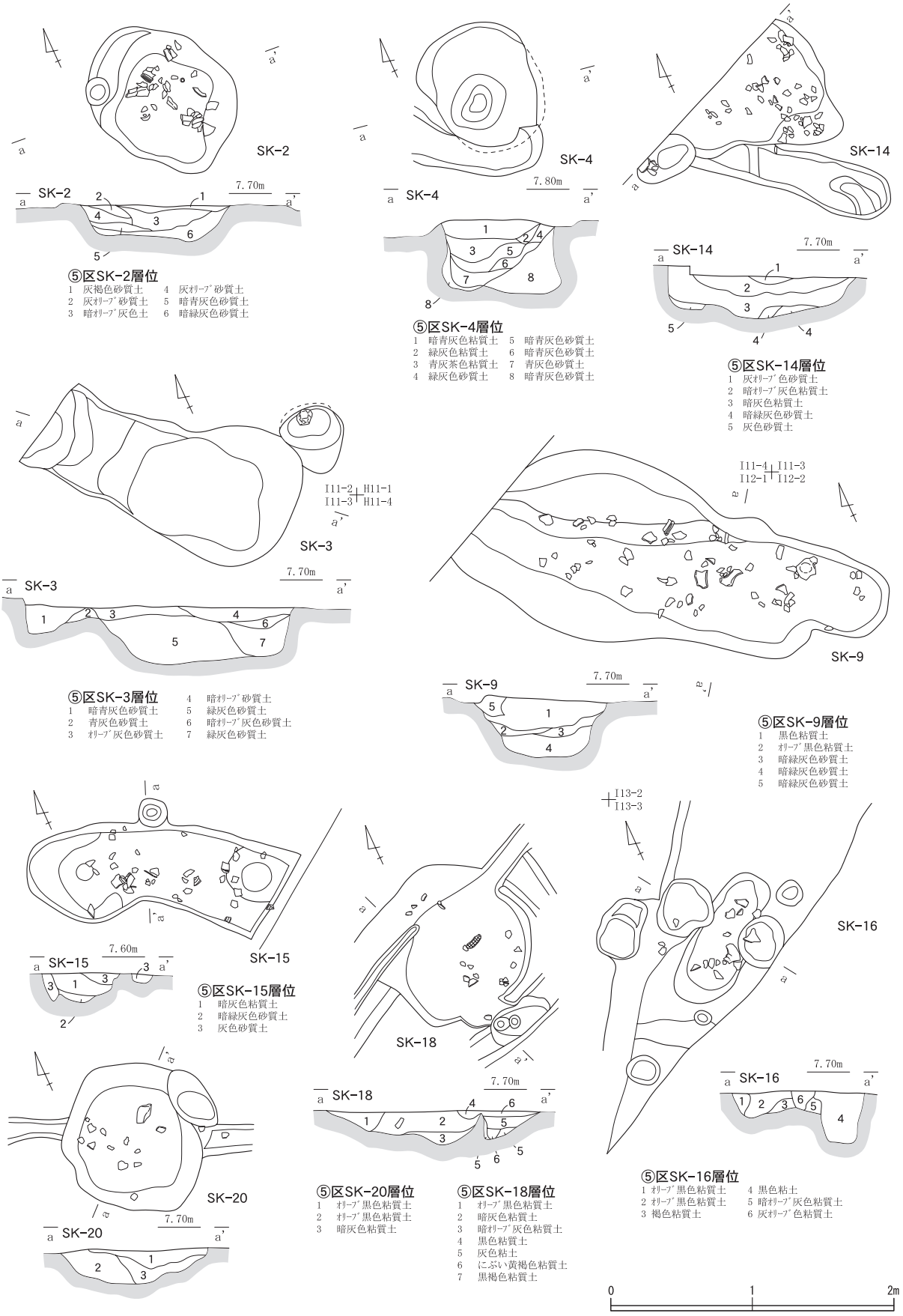
第32図　③区・④区遺構全体図（縮尺 1:300）



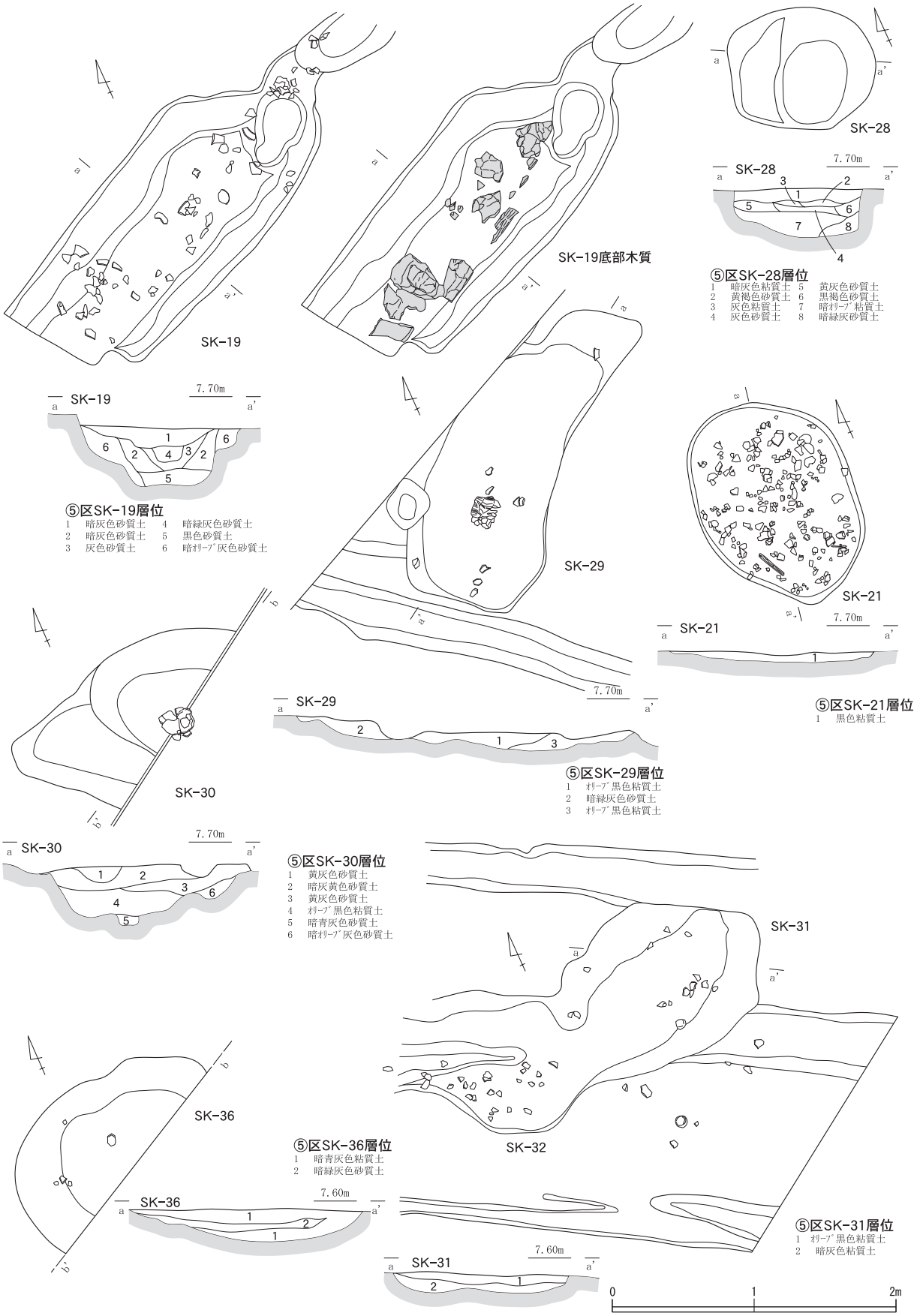
第33図　③区SK-1、SK-2～4層位図、SD-7、④区P1、SK-1、SK-5・7遺構面、S1～S5、⑤SB-1、P3（縮尺 1:40）



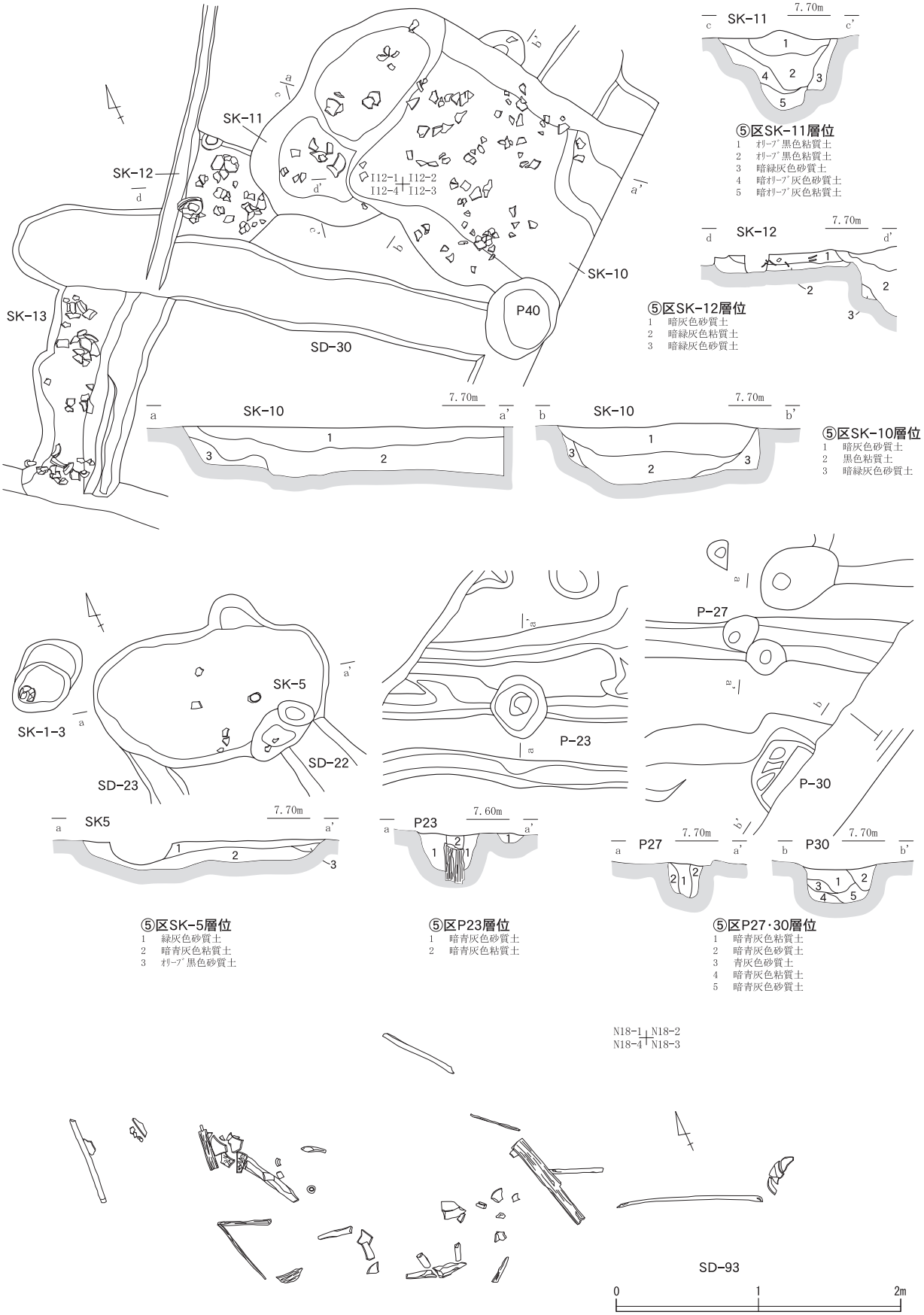
第34図　⑤区遺構全体図（縮尺 1:300）



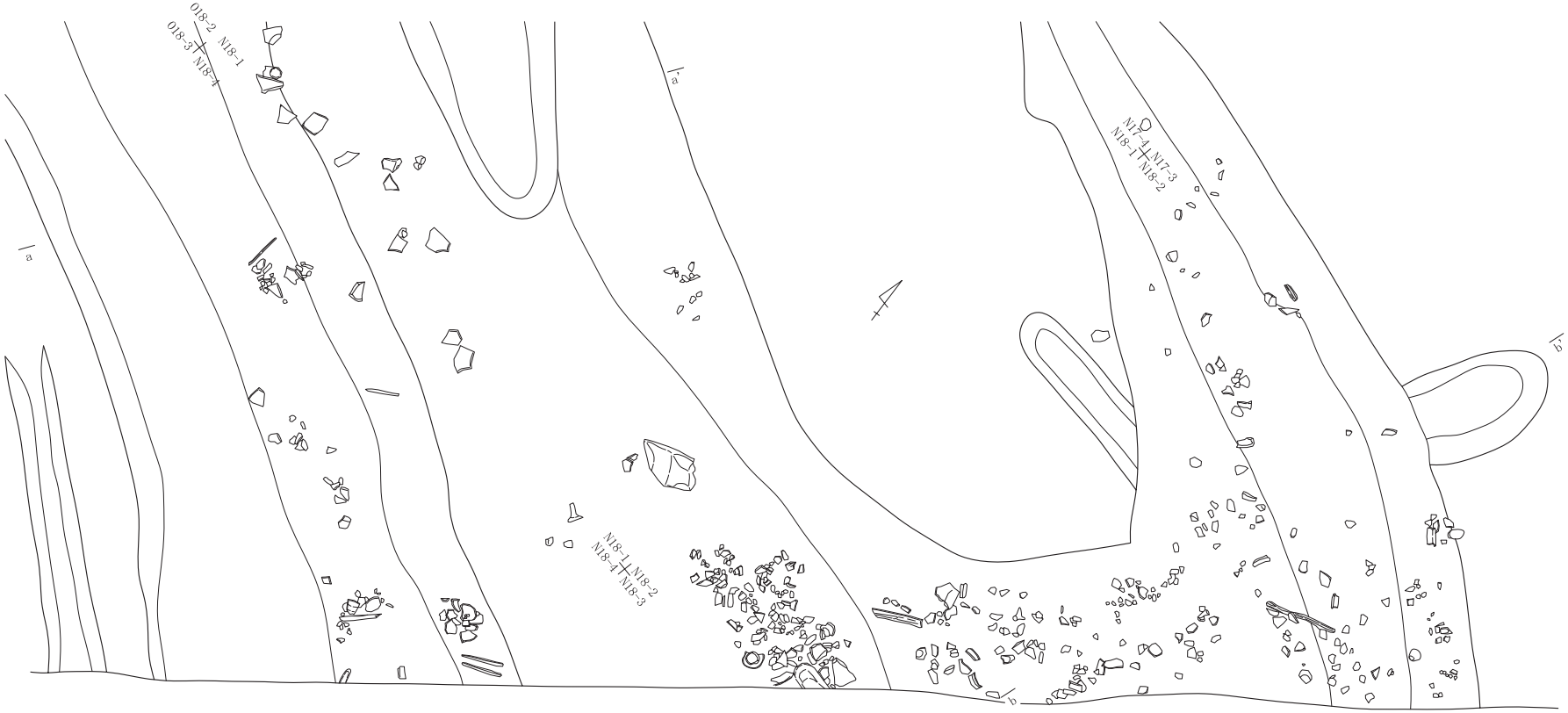
第35図　⑤区SK-2～4・9・14～16・18・20（縮尺 1:40）

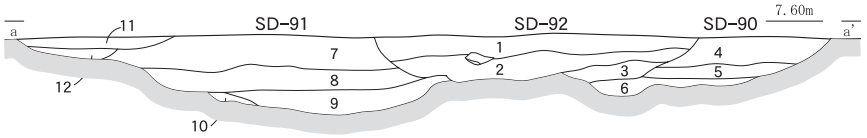


第36図　⑤区SK-19・21・28～32・36（縮尺 1:40）



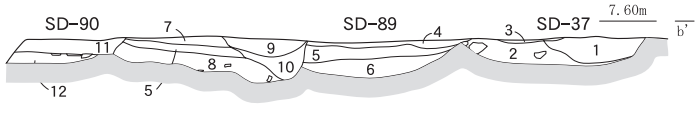
第37図　⑤区SK-5・10～12、SD-93、P23・27・30（縮尺1:40）





⑤区SD-90～93層位

1	暗灰黄色砂質土	7	黒色粘質土
2	黒色粘質土	8	ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質土
3	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂質土	9	暗緑灰色砂質土
4	ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質土	10	ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂質土
5	暗緑灰色砂質土	11	ｵﾘｰﾌﾞ褐色砂質土
6	暗青灰色砂質土	12	黒褐色砂質土



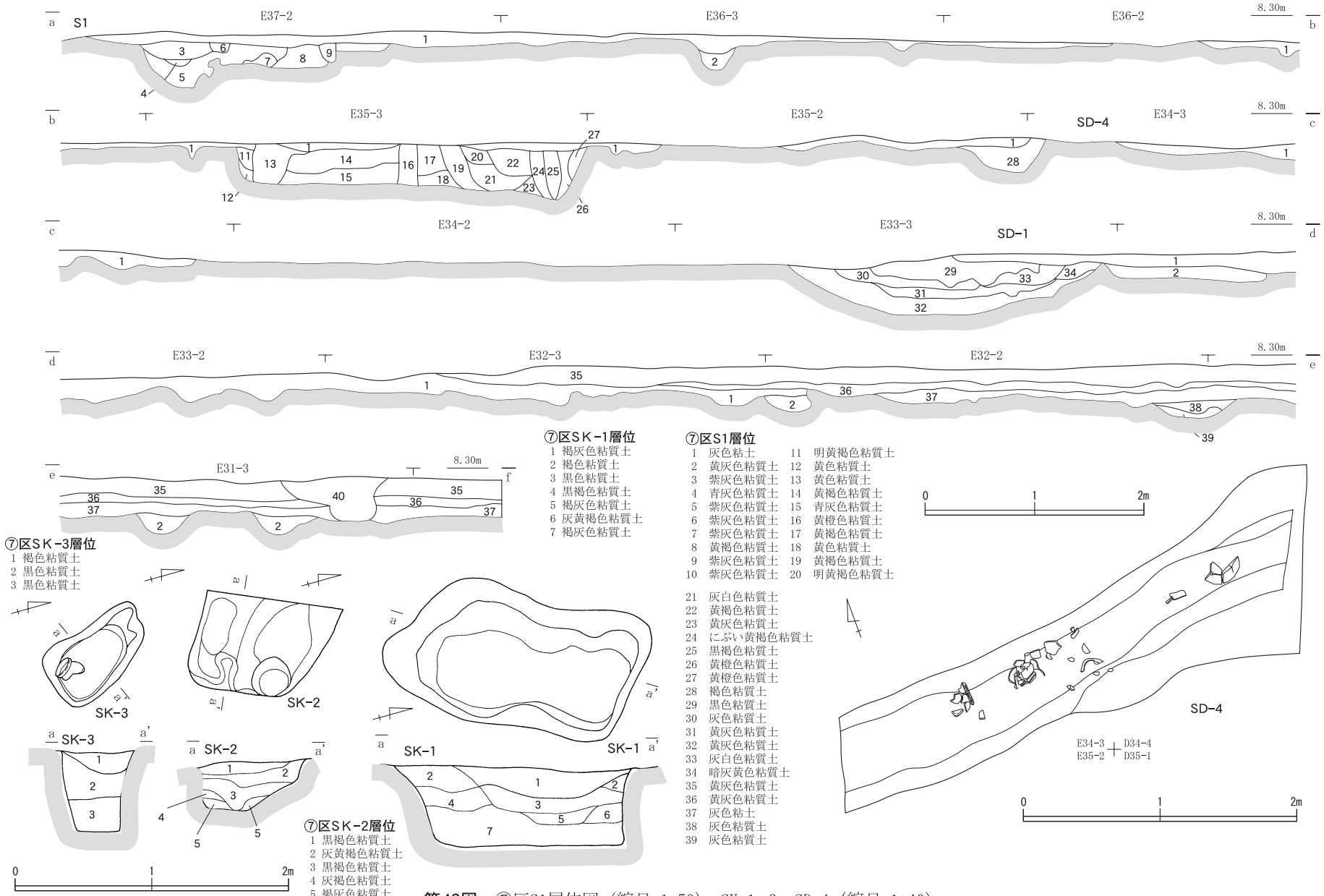
⑤区SD-37･89･90層位

1	黄褐色砂質土	7	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色粘質土
2	ｵﾘｰﾌﾞ褐色砂質土	8	ｵﾘｰﾌﾞ黒色砂質土
3	暗褐色砂質土	9	黒褐色粘質土
4	暗褐色粘質土	10	黒色粘質土
5	黄灰色砂質土	11	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色粘質土
6	暗灰色砂質土	12	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質土

0　1　2m

第38図　⑤区SD-37･89～91･94（縮尺 1:40）

第39図　⑦区遺構全体図（縮尺 1:300）、SD-1（第1面・第2面）（縮尺 1:40）



⑦区ＳＫ-3層位
1 褐色粘質土
2 黒色粘質土
3 黒色粘質土

⑦区ＳＫ-1層位
1 褐灰色粘質土
2 褐色粘質土
3 黒色粘質土
4 黒褐色粘質土
5 褐灰色粘質土
6 灰黄褐色粘質土
7 褐灰色粘質土

⑦区ＳＫ-2層位
1 黒褐色粘質土
2 灰黄褐色粘質土
3 黒褐色粘質土
4 灰褐色粘質土
5 褐灰色粘質土

⑦区S1層位
1 灰色粘土
2 黄灰色粘質土
3 紫灰色粘質土
4 青灰色粘質土
5 紫灰色粘質土
6 紫灰色粘質土
7 紫灰色粘質土
8 黄褐色粘質土
9 紫灰色粘質土
10 紫灰色粘質土
11 明黄褐色粘質土
12 黄色粘質土
13 黄色粘質土
14 黄褐色粘質土
15 青灰色粘質土
16 黄橙色粘質土
17 黄褐色粘質土
18 黄色粘質土
19 黄褐色粘質土
20 明黄褐色粘質土
21 灰白色粘質土
22 黄褐色粘質土
23 黄灰色粘質土
24 にぶい黄褐色粘質土
25 黒褐色粘質土
26 黄橙色粘質土
27 黄橙色粘質土
28 褐色粘質土
29 黒色粘質土
30 灰色粘質土
31 黄灰色粘質土
32 黄灰色粘質土
33 灰白色粘質土
34 暗灰黄色粘質土
35 黄灰色粘質土
36 黄灰色粘質土
37 灰色粘土
38 灰色粘質土
39 灰色粘質土

第40図　⑦区S1層位図（縮尺 1:50）、SK-1～3、SD-4（縮尺 1:40）

第４章　遺　物

第１節　出土遺物の概要

今回の発掘調査によって出土した遺物(図版第22～38、第41～69図)は、縄文時代～平安時代のものが主体となり、およそ二千年間の時間幅をもつ。遺物の種類は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、玉作り関係遺物、木器と、多岐にわたる。中でも、弥生時代中期の土器と古墳時代前期の土師器が圧倒的な量を占め、①区･⑥区においては、その大部分が包含層と川の中から出土している。

土器については、川が流れる①区･⑥区は一つとして扱い、縄文土器～土師器は、包含層出土、遺構出土遺物、川出土遺物に分けて記載した。②～⑦区の包含層が稀薄な調査区は、遺構出土の土器を掲載するように努めた。ただし、遺構の時期を端的に示す個体に絞りこんでいるため、掲載している点数と実際の出土量とは無関係であることを明示しておく。須恵器は遺構に伴うものが少ないため、①～⑦区出土のものを総括して掲載した。

土器の図化にあたって、実測図は縮尺１/４、拓本は縮尺１/３で統一した。土器断面は接合痕が確認できたものは、それを表現してある。土器以外の遺物は種別に分けて掲載し、縮尺は各挿図中のｽｹｰﾙのとおりである。本文や表、写真図版において、挿図中の遺物番号は、挿図番号と組み合わせ、例えば、第41図の1は「41-１」のように表記した。

以下、第２節で土器(Ⅰ.縄文土器、Ⅱ.弥生土器、Ⅲ.土師器、Ⅳ.須恵器、Ⅴ.墨書土器、Ⅵ.土師皿･陶器)、第３節で土製品、第４節で石器、第５節で玉作り関係遺物、第６節で鹿角製品、第７節で木器についての概要を述べる。個々の遺物の詳細については第2表を参照されたい。

第２節　土　器(図版第22～34図、第41～58図)

Ⅰ.縄文土器

縄文土器は、晩期後葉～末の短時期に限られ、他時期に比較して出土量は少ない。①区･⑥区を中心に、包含層や弥生時代中期以降の遺構から破片で出土し、その状況から混入したものと判断される。昭和48･49年の調査所見と照合しても、縄文時代の包含層は、⑥区の川の下層に存在すると想定される。

･有文土器について

浅鉢を主体として、鉢や壺(41-３･45-16)もある。浅鉢は、平行沈線と三角形ないしトゲ状の陰刻文を上下対向して施し、工字状文を描き出すものが中心となる。工字状文の文様集約部が粘土貼付によりやや突出するものもある(41-８･47-15)。陰刻文以外には彫刻する部分はなく、沈線は断面が三角形を呈し、斜上方から磨きを施されるものが多い。器形には、内弯ないし直立口縁でボウル状を呈すもの(46-１など)を主体とし、口縁部が大きく開いて立ち上がるもの(41-９など)、口縁部が外反し頸部で若干括れるもの(42-13)がある。外面調整は、沈線の施文後ナデないし研磨を施すものを主体とし、縦位条痕後にナデを施すもの(42-13)もある。鉢には、口縁部に眼鏡状隆帯を２条巡らすもの(42-12)などがある。

有文土器の色調は、暗褐色や黄褐色を主体とし、胎土は大粒の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。赤彩品は47－９のみである。また、肉眼による胎土観察では、搬入品を把握することはできなかった。

・無文土器について

深鉢を主体とし、壺(53-4・9)もある。有文土器より出土量は多く、器形がわかる復元個体が多い。両器種共に、内外面に多量の炭化物が付着している。

深鉢の主体となるものは、外面に板状工具による縦位条痕を施し、口縁部の条痕をナデ消している。口縁端部は、指で押圧を施すものや頸部に沈線を施すもの(41-1)が主体を占める。器形や口縁部の形態には、頸部に段をもつ外反口縁(42-8)や、直立ないし外反口縁(46-22)、緩やかな内弯口縁(41-27)をもつものがあり、その他、縦位条痕を施さず、外面調整がナデのみで、強い外反口縁をもつもの(49-11)もある。

壺には、小形品(52-4)や大形品で胴部がやや球形に近く張るもの(52－９)などがある。深鉢と同様に口縁部に横位のナデ、頸部に沈線、胴部に縦位条痕などの施文、調整を施している。両器種には、共通の特徴が認められ、時間的、系統的に同一の土器構成を示すと考える。その他、胴部の調整は不明であるが、外反する口縁側端部に弧状の突帯を貼付して押圧を施す口縁部片(41-45～48)がある。底部は、側部が底部円盤により突出するものが主体を占める(45-21・22)。

全体的に、色調は暗褐色を主体とし、胎土は大粒の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。これらの特徴は有文土器と近似することからも、本遺跡出土の縄文土器は、大枠において時間的に併行する土器組成を構成すると考える。

Ⅱ．弥生土器

弥生土器は、前期～後期のものが出土し、中期の土器が最も多く、前期、後期の土器は少量である。前述したように、器形復元個体を中心として掲載したため、挿図には破片資料を含めた出土土器全体に対する、系統性や器種、数量は反映しておらず、各時期における土器様相の実態を的確に表していない可能性がある。また、川出土の弥生土器においては、概して時期的に異なる混在品が認められ、川の上層は後期以降、下層は中期といった時期に大別されるが、細分土層と対応する時間的一括性を把握するまでには至らなかった。そこで、弥生土器の記述については、包含層、遺構出土の弥生土器を一括して、糞置遺跡を検討する上で、最も重要な時期である前期、中期の土器の概要を述べることにする。

・弥生時代前期の土器

前期に位置付けられる土器は出土数が少なく、遠賀川系土器と考えられる⑥区包含層出土の壺(42-14)、川出土の甕(51－４)などがあげられる。

42-14は、略完形で胴部に焼成時の歪みがある。口縁部は肥厚し、端部は丸く収めている。胴部から外反して立ち上がり、口縁部は強く外反する。口頸部の境、頸胴部の境には接合時の段を有し、胴部上端には3条の浅いヘラ描沈線をめぐらしている。最大径を測る胴中央部は、強く屈曲する。外面調整は、摩滅のため不明瞭であるが、横位のミガキが認められる。色調は明橙褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。口縁部形態や肩部に多条沈線をもつ特徴から、おおむね前期後半に位置付けられる。

・弥生時代中期の土器

中期の土器は、第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式にかけてのものが主体を占める。器種・系統ごとに概要を述べるにあたって、ヘラ描沈線文や半裁竹管状工具による沈線文を施すものを「ヘラ描文系」、櫛描沈線

文を施すものを「櫛描文系」、条痕文を施すものを「条痕文系」、ヘラ状工具や棒状工具などを用いた沈線文を施すものを「沈線文系」として大別した。また、「櫛描文系」土器においては、ハケやミガキ調整のみの個体は「無文土器」と区分した。搬入品の可能性については、色調や胎土をもとに推定した。以下、主要器種である壺、甕、深鉢、鉢について述べる。

・壺について

壺は、櫛描文系を主体とし、条痕文系、沈線文系およびヘラ描文系がある。櫛描文系土器には、複数の器種があり、主体となる広口壺には、口縁内面に二個一対の突起を有すもの(55-13、56-10)が認められる。細頸壺には、受口状口縁(53-３・７・13)、袋状口縁(55-14)、内弯口縁(53-4・5)などの口縁形態があり、櫛描文に精粗が認められる。その他、無頸壺(49-3、53-6)も若干認められる。52-５は、搬入品の可能性があり、口縁端部に波状文、頸部に単体構成の直線文を施している。

無文土器は、内外面ハケ調整で仕上げ、口縁端部にキザミや押圧を施す広口壺を主体とする。頸部以下にミガキを施すもの(51-23、52-2)やハケ調整後縄文を施すもの(52-3)、小型の壺(49-6)もある。ハケ調整は粗いものを主体とするが、木目の細かいもの(49-8)も若干ある。52-3は搬入品の可能性が高く、別の系統に属す可能性がある。

条痕文系土器は、東海地方の「岩滑式」に類似する受口状口縁をもち、広口壺を主体とする。口縁部や胴部に櫛状工具やヘラ状工具による沈線文を施し、口縁屈曲部下端に押圧やキザミを施す点が特徴である。条痕原体には二枚貝と櫛状工具の2種が認められる。調整が条痕ではなく、条線幅が広くて浅いハケを施し、櫛描文系の影響品(53-16)もある。53-10は、内面に文様帯を有し二枚貝条痕を施し、50-６は、頸部突帯上に二枚貝背面圧痕を施しており、共に搬入品の可能性がある。

沈線文系土器は、ヘラ状工具や櫛状工具を用いた集合沈線で文様を描出するものが主体を占める。比較的小型のいわゆる「大地式」の壺(50-16)などがある。他の地方の搬入品と考えられる53-15は、中部地方の「阿島式」系であり、55-13、56-10は、「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」の系統に入ると見てよい。また、器形や文様などから49-1も他系統に属す可能性が高い。

ヘラ描文系土器は出土量が少なく、内弯口縁を呈すもの(42-16)や、縦位ハケ後ミガキを行ない、やや肥厚する頸部に沈線文を施すもの(50-8)がある。

・甕について

櫛描文系や条痕文系に加えて、沈線文系がわずかに認められる。ハケ調整のみの櫛描文系無文土器が主体を占める。底部に直径約７㎜の焼成前穿孔をした個体が多くある。

櫛描文系土器は、器形復元個体数は少ないが、法量差がある。胴部と口縁内面に櫛歯刺突の羽状文を施すもの(48-11)や、胴部の櫛描直線文の下に二個一対の刺突文を施すもの(47-25)がある。櫛描文系無文土器は、外反する口縁端部に二個一対の押圧を施し、外面に縦位ハケ、口縁内面に横位ハケを施す、いわゆる「大和甕」に類似するものが主体を占める。内外面ともに斜位のハケを施し、頸部の括れが弱く、口縁部がわずかに外反する器形のもの(47-24)がある。その他、顎状に肥厚する口縁内面に、二条一対のハケ原体押圧を施し、屈曲部内面に押引きを施すもの(47-27)もある。

条痕文系土器は、二枚貝条痕を施すものが主体となる。器形復元個体は少ない。口縁部が強く外反するもの(41-11)、緩やかに外反するもの(45-1)、短く外反するもの(42-17)などがある。櫛描文系無文土器(47-27)と同様に、屈曲部内面に押圧を施すもの(51-12)もあり、その影響が窺える。沈線文系土器は、指による凹線を口縁屈曲部内外面に施すもの(41-4)も含めた。

・深鉢・鉢について

深鉢は、条痕文系のみで構成され、二枚貝条痕を主体とし、口縁端部に押引きを施す点で甕と共通する。器形には、口縁部が緩やかに内弯するもの(42-3)、底部から直線的に立ち上がり、口縁部が直立するもの(50-4･14･21)などがある。

鉢は、条痕文系と櫛描文系があり、条痕文系土器には、口縁部が短く外反し、口縁端部と屈曲部内面にキザミを施す小型のもの(43-8･47-19)がある。条痕原体は二枚貝ではなく、条線の末端が揃わない条痕を施す。43-8には、炭化物付着と二次焼成痕が顕著に残る。櫛描文系土器には、底部が凹底ないし低い脚状となり、口縁部に円形刺突文を施すもの(48-14)がある。

(山本)

Ⅲ. 土師器

土師器は、弥生時代終末～古墳時代前期のものがほとんどを占め、一部、古墳時代中期後半から後期初頭にかかるものが確認できる。土器を含む遺構は、古墳時代前期のものが圧倒的に多いが、弥生時代後期の土器が若干混入しているものもある。ここでは、①区･⑥区出土の特徴的なものを中心に述べる。

時期区分については、基本的に漆町編年(文9)に従い、「漆□群」といった表記をする。弥生時代後期の土器については楠編年(文6)に従うこととする。

包含層から出土した土師器の時期は、漆３群の器台(43-6)から13群の椀類(43-27～29)が確認できる。古墳時代前期に比定される小型器台、高杯が比較的多くある。

①区SK-7は在地系甕が主体を占める。甕の口縁部は有段で外反し、胴部は球胴化している。時期は漆6群に相当する。外面を叩き調整しているもの(44-4)もある。⑥区SD-80も在地系土器が主体を占め、①区SK-7よりも古い様相を示し、漆3･4群に比定できる。それに対し、①区SK-9では様相が一転し、在地系とされる土器は、口縁部の有段部が退化した甕の他はほとんどなく、山陰系の甕(44-9)が出土している。時期は漆7群の様相を示す。①区SK-11からは東海系の台付甕(44-17)が出土している。

⑥区土器集中区SK-21は最も出土量が多く、縄文土器や弥生土器も出土している。土師器は、漆4群に在地系の祭式土器として盛行する台付装飾壺(46-11)が見られる。さらに、漆7群の畿内系甕(45-25)も出土している。特に希少な器種としては、胴部に縦横方向に突帯を貼付した被籠状突帯壺(46-9)が確認できる(注1)。

全体的な様相としては、調査区南端に集中する溝からは、弥生時代終末に比定される土器が出土しており、器種は壺や小型甕が多い。それらより北に位置する土坑からは、やや時期が下る古墳時代初頭の土器が出土しており、器種は甕や高杯が多い。川では、弥生時代後期の土器として、法仏式期の近江系の甕(53-1)や長頸壺(54-２･3)、高杯(55-4)等を確認できる。新しいものでは漆13･14群に比定される長胴甕(55-2･3)がある。

⑤区は、弥生時代中期から弥生時代後期の土器が多いが、古墳時代前期の遺構に混入した破片として出土しており、土師器だけでまとまった遺構はない。

⑦区SD-1の溝には、他の時期のものは含まず、大量の土師器が廃棄されていた。川辺の祭祀を行った可能性があり、高杯(57-14)、器台(57-18)、小型精製土器(57-11)が出土し、57-16のような装飾器台も3個体以上含んでいた。時期は漆4･5群の特徴を示している。

(西本)

Ⅳ．須恵器

本遺跡から出土した須恵器は、7～9世紀末の時期にわたる。器種としては、杯や高杯などの食膳具、壺、甕、横瓶などの貯蔵具があり、主に①区･⑥区の包含層と川から出土している。

･包含層出土の須恵器

包含層からは、杯蓋(58-1～3)、高杯蓋(58-4･5)、杯Ｈ(58-6～9)、杯Ａ(58-10～14･16･17)、杯Ｂ(58-15)、高杯(58-18･19)、壺(58-20)などが出土している。

杯蓋は、口径10.0～13.4cm、器高2.9～4.2cmを測り、天井部が回転ヘラ切りの後未調整のもの、回転ヘラ切りの後ナデ調整のもの、回転ヘラ削り調整のものがある。58-2は天井部にヘラ記号を持つ。高杯蓋は、58-4が口径13.6cm、器高4.5cm、58-5が口径15.0cm、器高4.5cmを測る。いずれも天井部に回転ヘラ削り調整を施し、扁平なツマミが付く。

杯Ｈは口径10.6～11.2cm、器高3.5～4.1cm、杯Ａは口径11.4～14.6cm、器高3.0～4.1cmを測る。杯Ａには、体部が直斜状に伸びる個体(58-10～14)と、内反気味に外傾する個体(58-16･17)がある。底部の調整は、回転ヘラ切りの後未調整のものと、回転ヘラ切りの後ナデ調整のものがあり、内面に仕上げナデを施すものもある。

高杯は、長脚無透かしの個体(58-18)と長脚2段透かしの個体(58-19)がある。58-18は、杯部に1条、脚部に3条の彫りの浅い沈線を施す。58-19は、脚部のみであるが、3条の沈線と2方向に長方形の2段透かしをもつ。

･遺構出土の須恵器

58-21は高杯蓋、58-22は椀であり、いずれも⑥区SK-21から出土した。高杯蓋は、天井部にカキメ調整、口縁部境に沈線を1条施す。58-23は若干底部の突出する杯Aであり、⑤区SK-23から出土した。58-24･25は杯蓋、58-26は壺である。58-24は⑥区SD81、58-25･26は⑥区SD-78から出土した。58-26は、体部下半を回転ヘラ削り調整で丸底に仕上げ、体部に2条の沈線を施す。58-27～30は杯A、58-31は杯Ｈである。58-27･28は⑥区SD-82、58-29は⑥区SD-86、58-30は⑥区SD-77。58-31は⑥区SD-31から出土した。

58-32は、①区SD-10･11および⑥区SD-31から出土した。天井部が丁寧な回転ヘラ削り調整であり、蓋とした(注2)。口径11.4cm、器高5.3cmを測り、内面も丁寧にナデ調整されている。体部に２条の沈線とその間に斜行する縄目を施し、沈線付近はナデ消している。

･川出土の須恵器

川からは、杯蓋(58-33)、杯H(58-34～37)、皿(58-38･39)、横瓶(58-40)、甕(58-41)などが出土している。杯Ｈは口径10.0cm前後、皿は口径16.0c前後を測る。底部の調整は、回転ヘラ切りの後未調整のものと、回転ヘラ切りの後ナデ調整のものがある。58-34は底部外面にヘラ記号を持つ。

58-40の横瓶は、口径10.0cm、器高20.6cmを測る小型の個体である。片面閉塞技法の個体であり、円盤閉塞部分が欠損している。底部側面は平底のままで仕上げている。叩き成形は行わず、体部外面はカキメ調整、底部側面の側は回転ヘラ削り調整である。

58-41の甕は、口径18.0cm、器高44.0cmを測る。口縁は短く外反し、やや胴の張る丸底の器形である。外面は叩き成形後カキメ調整を施し、内面の当て具方向は反時計回りである。底部内面の当て具痕は、径約6.5cmを測り、７条の同心円が彫りこまれ、体部内面の当て具痕よりも彫りが浅い。

Ⅴ.墨書土器

墨書土器は６点出土し、すべて須恵器である(図版第34、第57図19～24)。57-19～22･24は包含層、57-23は川から出土した。57-19･20は皿、57-21～24は杯Ａであり、57-19～23は底部外面、24は体部外面に墨書がある。57-19～23は、体部が直斜状のもので、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。57-24は、底部の突出する椀形の個体である。

墨書は、57-19が「村田」、57-21が「家人」、57-23が「卄」、57-24が「治」である。57-22は細片のため判読できない。57-20は、文字は明瞭であるが、特定できなかった。２文字とした場合、１文字目は２つの文字が重複していると考える。

Ⅵ.土師皿・陶器

57-25～30は土師皿であり、口径8.0～9.0cm前後の小皿と口径12.0cm前後の大皿がある。57-31は灰釉陶器壺の底部である。高台径6.8cmを測り、削り出し高台をもつ。57-32は施釉陶器椀である。胎土は橙色を呈し、釉調は緑白色である。

(岡田)

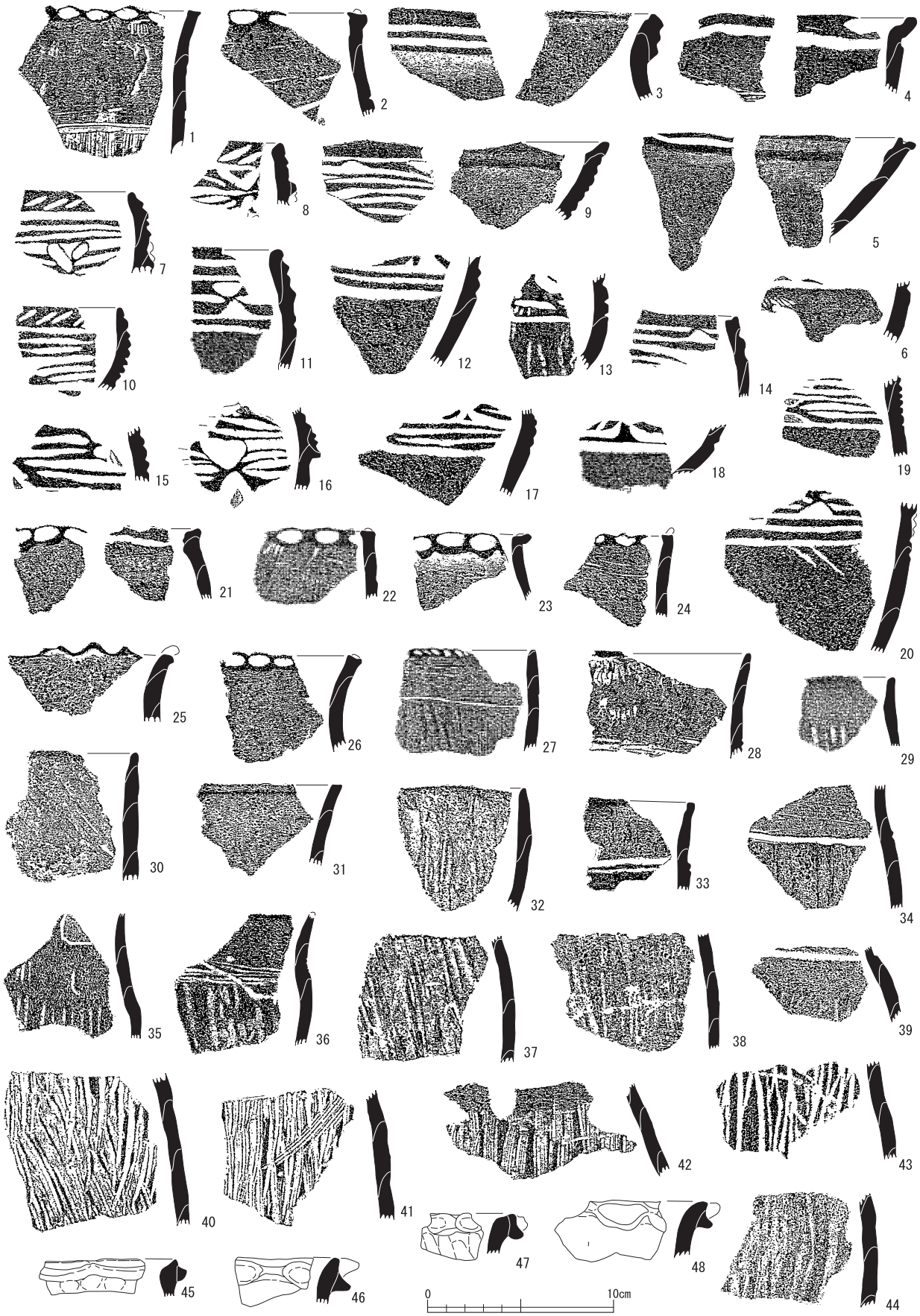
注

１．　近年、この壺を集成した角南(文８)、三好(文17)両氏の一覧表によると、近畿地方においても確認されているが、関東～東海地域で多く出土している。時期は、弥生時代後期から古墳時代前期に出土例が多いようである。北陸地方では、石川川県金沢市新保本町西遺跡(文４)から出土している。新保本町西遺跡出土壺のほうが格段に大きく、本遺跡出土壺は最大胴部径が10ｃｍ以下と小型土器の範疇に入る

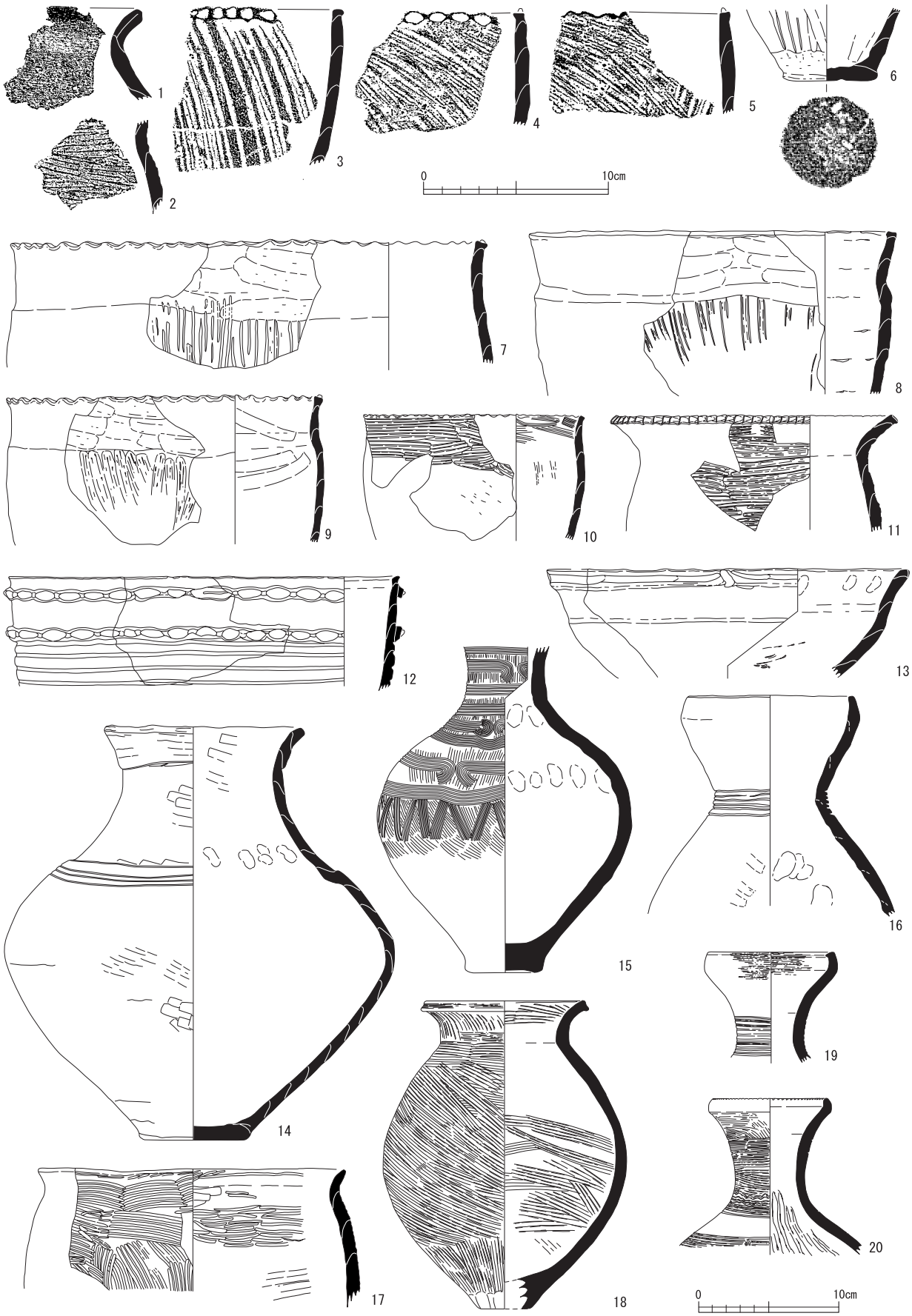
２．　58-32は杯の可能性もあり、その場合、林タカヤマ窯(文７)の杯Ｂに類似している。しかし、林タカヤマ窯のものは若干体部が開き気味であるのに対して、本遺跡のものは真っ直ぐ立ち上がる器形である。

参考文献

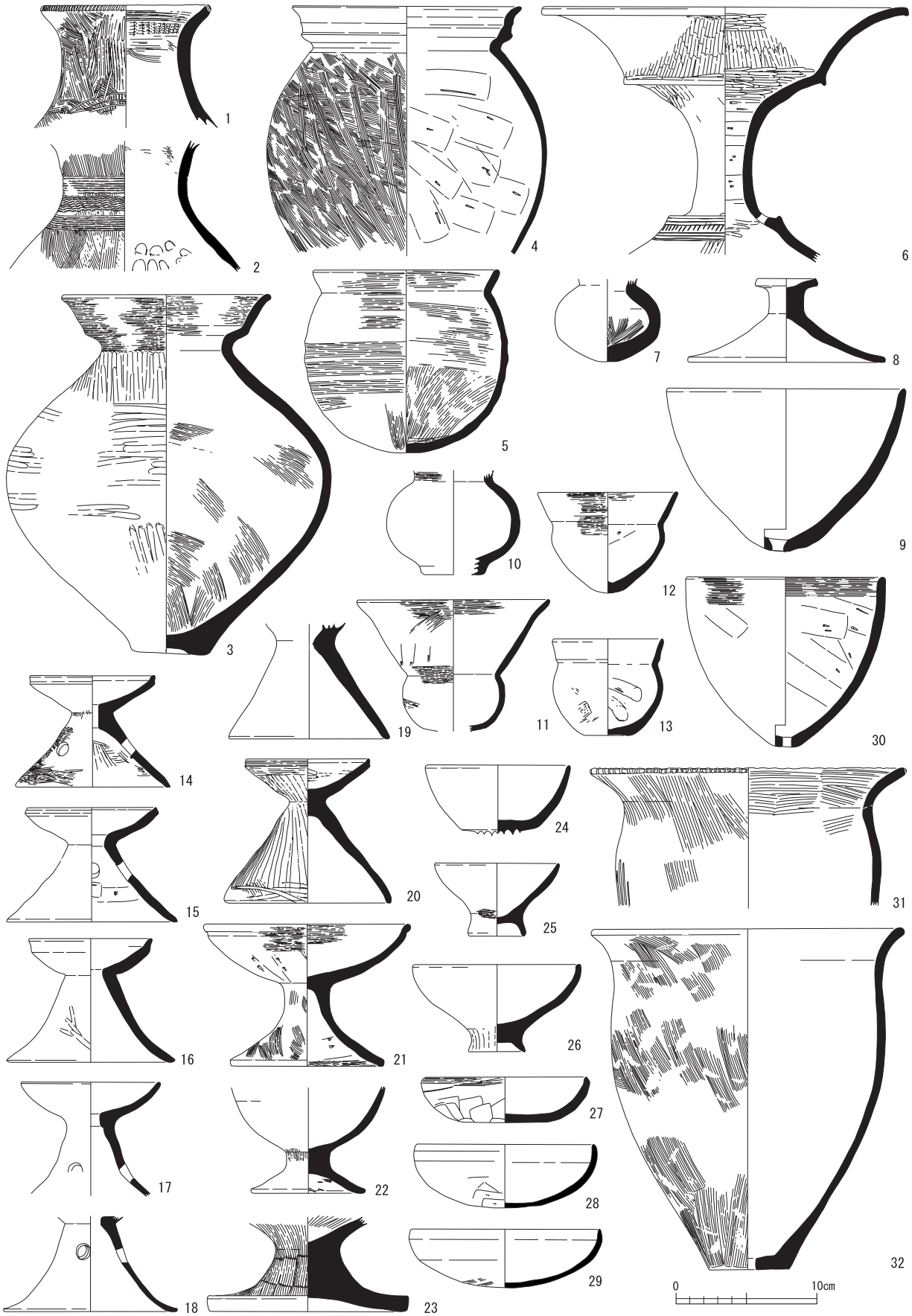
１．　赤澤徳明「第６章　弥生・古墳時代の遺物」『下黒谷遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告40集　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998年
２．　赤澤徳明　「福井県地域」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会 1996年
３．　甘粕健・春日真実『東日本の古墳の出現』山川出版社1994年
４．　金沢市教育委員会『金沢市新保本町西遺跡』Ⅲ　金沢市文化財紀要97 1992年
５．　金沢市教育委員会『金沢市西念・南新保遺跡』Ⅱ　金沢市文化財紀要77 1989年
６．　楠　正勝　「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡』Ⅳ　金沢市教育委員会 1996年
７．　小松市教育委員会『林タカヤマ窯跡-小松ドーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-』1999年
８．　角南総一郎「第4節　被籠状突帯壺について－茨木市溝咋遺跡出土の資料に接して－」『溝咋遺跡』(その１)(財) 大阪府文化財調査研究センター 2000年
９．　田嶋明人　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター 1986年
10.　高橋浩二　「古墳出現期における越中の土器様相－弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け－」『庄内式土器研究』XXⅡ　庄内式土器研究会　2000年
11.　千葉県土木部･千葉県文化財センター『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』 1982年
12.　名古屋市見晴台考古資料館『見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録』 1996年
13.　名古屋市見晴台考古資料館『見晴台遺跡第34･36･37･38次調査の記録』 1999年
14.　福島県いわき市教育委員会･(財)いわき市教育文化事業団『龍門寺遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊　1985年
15.　堀大介「古墳成立期の土器編年-北陸南西部を中心に-」『朝日山』朝日町文化財調査報告書第3集　朝日町教育委員会　2002年
16.　峰山町教育委員会･京都府埋蔵文化財調査研究センター『赤坂今井墳丘墓』京都府峰山町文化財調査報告第21集　2001年
17.　三好玄「第２節 出土遺物」『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第24　峰山町教育委員会 2004年



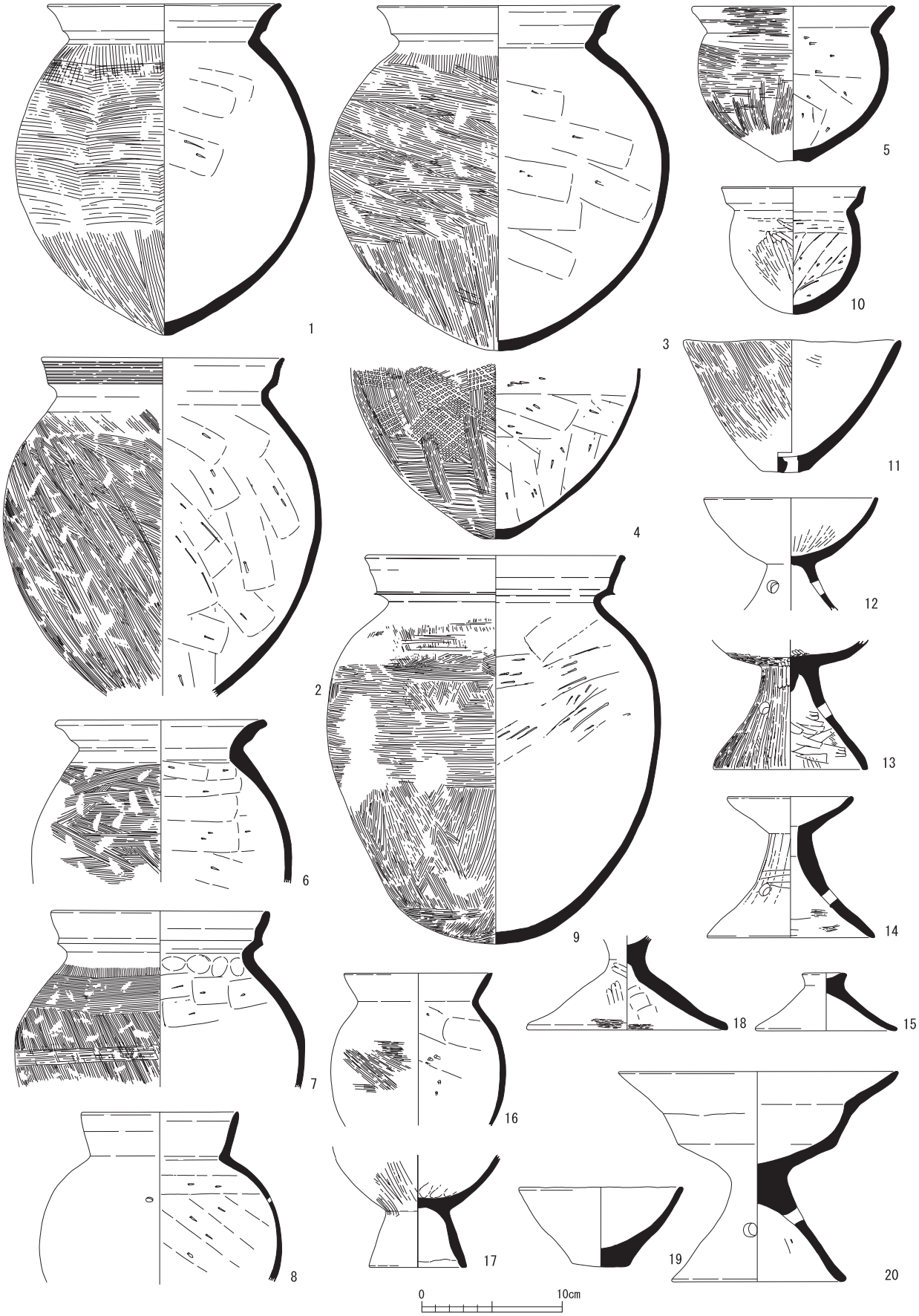
第41図　①区･⑥区包含層出土遺物 その1（縄文土器1～3･5～44　弥生土器4）（縮尺 1:3）



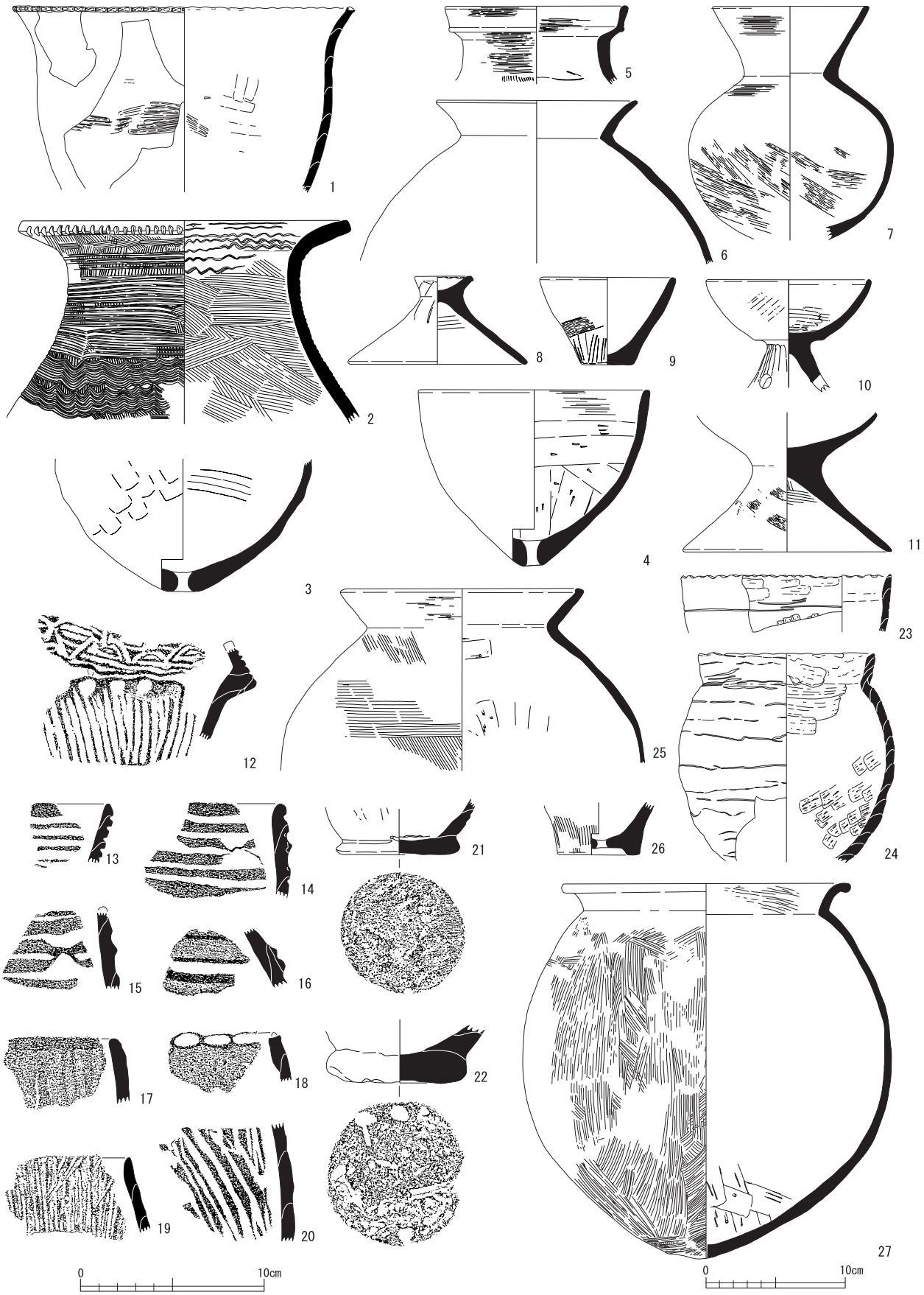
第42図　①区･⑥区包含層出土遺物 その2（縄文土器4～9･12･13、弥生土器1～3･10･11･14～20）
1～6（縮尺 1:3）、7～20（縮尺 1:4）



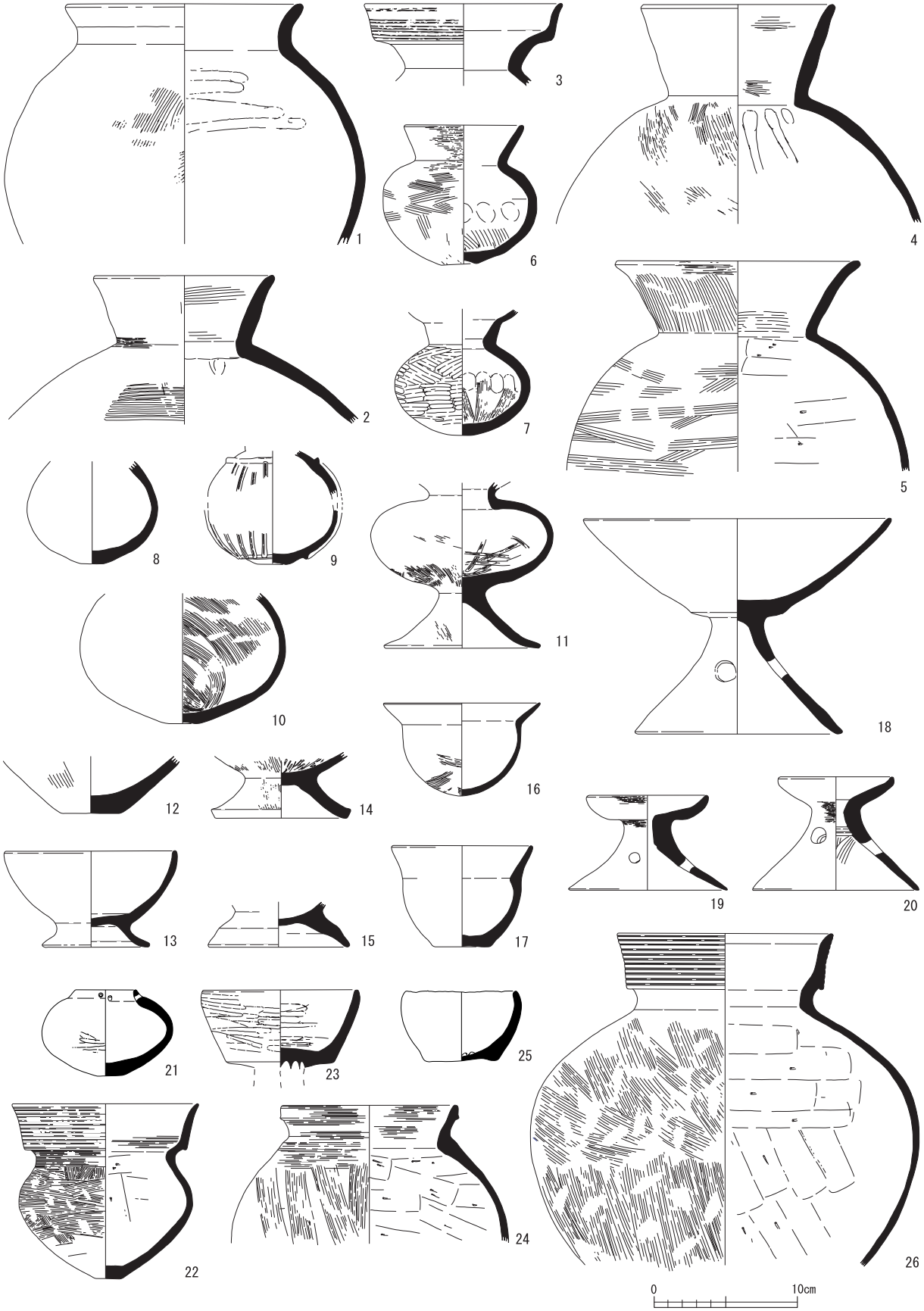
第43図　①区･⑥区包含層出土遺物 その3（弥生土器1･2、土師器3～29）
①区遺構出土遺物(SK-2出土 30、SK-5出土 31･32)（縮尺 1:4）



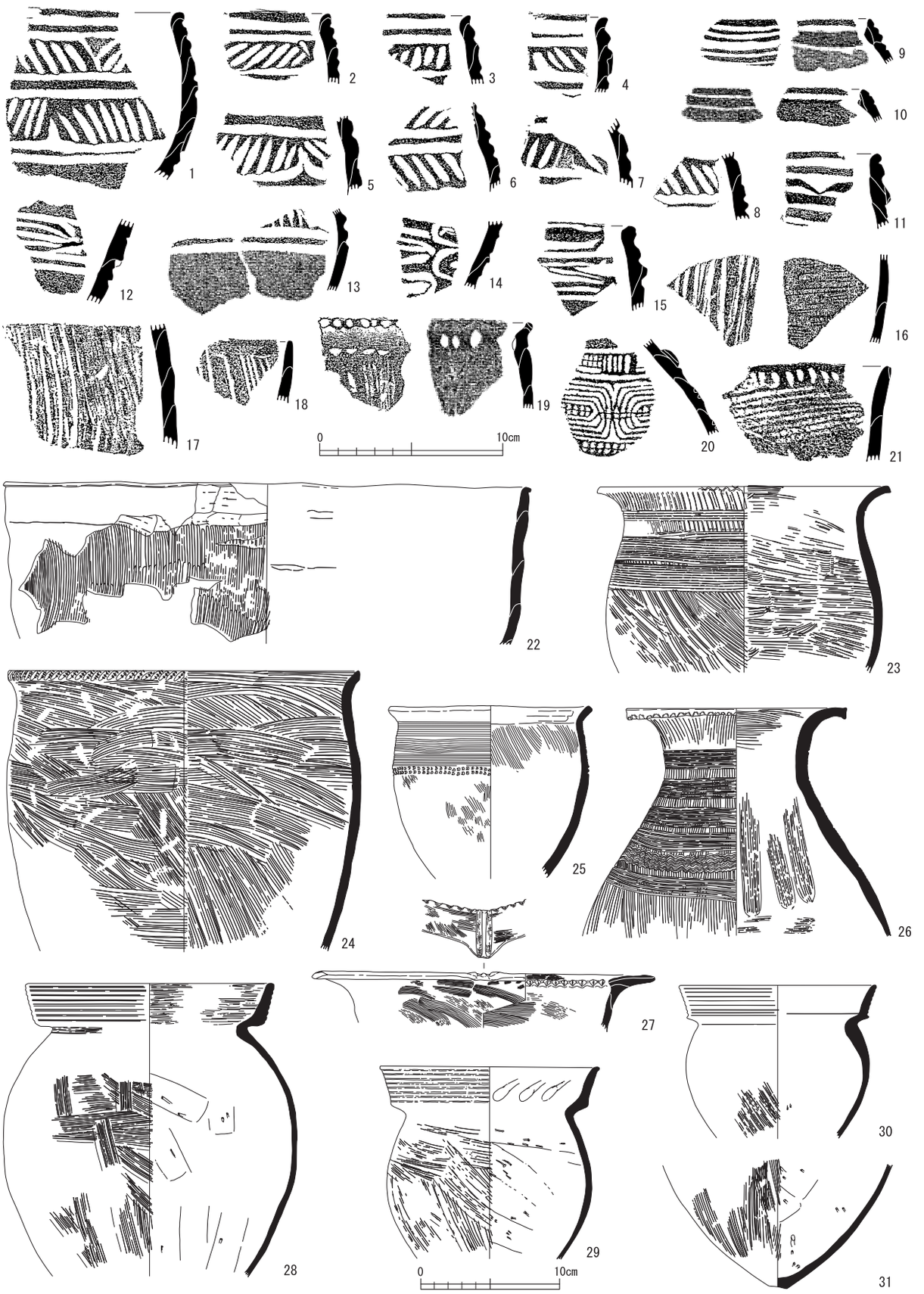
第44図　①区遺構出土遺物（SK-7出土1～5、SK-9出土6～15、SK-11出土16～20）（縮尺 1:4）



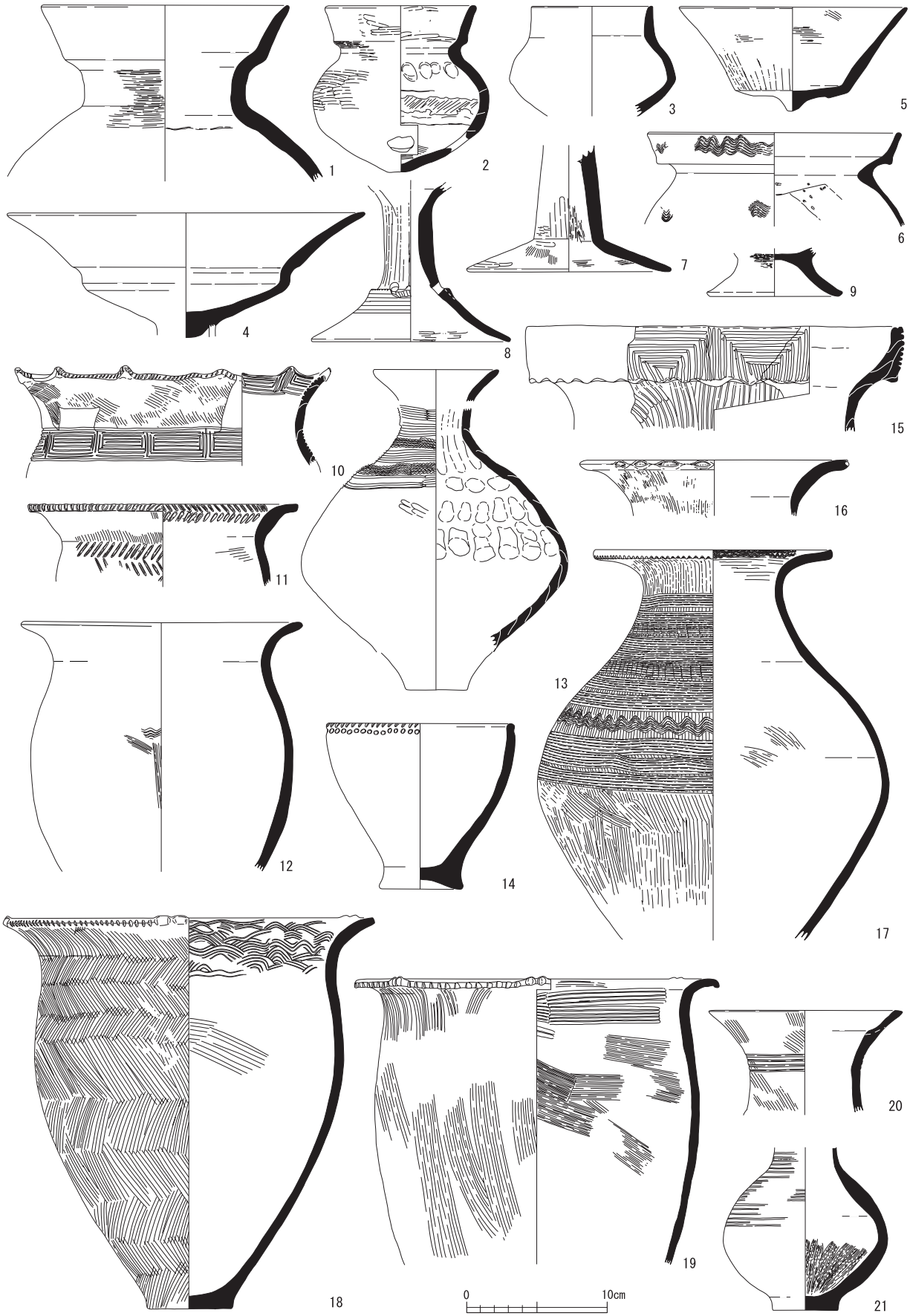
第45図　①区遺構出土遺物（SK-5出土12、SK-6出土3･4、SK-10出土1、SK-12出土 5～12、SK-13出土2･3）
⑥区遺構出土遺物（SK-21出土13～27）　12～22（縮尺 1:3）、1～11･23～27（縮尺 1:4）



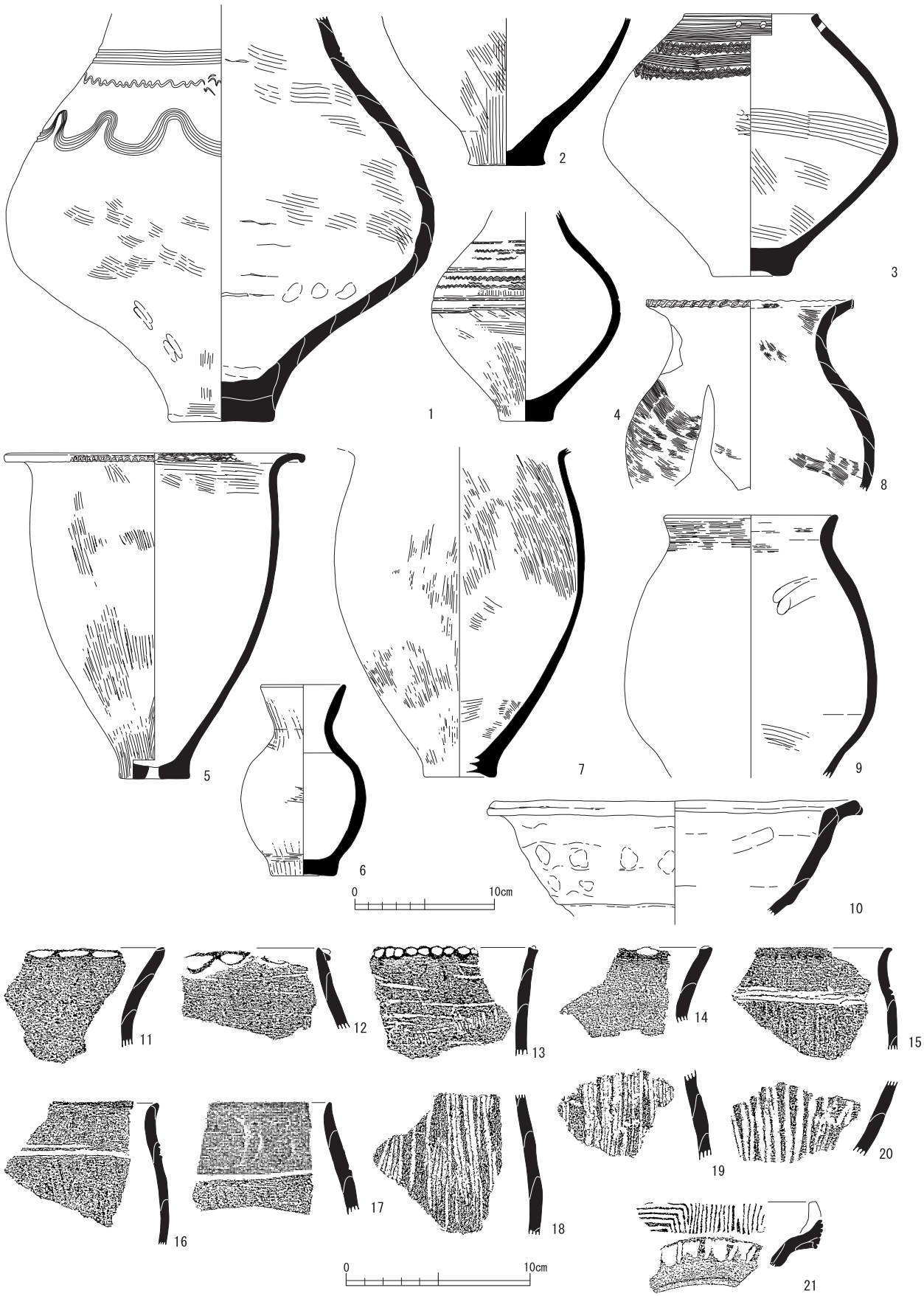
第46図　①区遺構出土遺物（SD-11出土24、SD-22出土25･26、SD-23出土21～23）
⑥区遺構出土遺物（SK-21出土1～20）（縮尺 1:4）



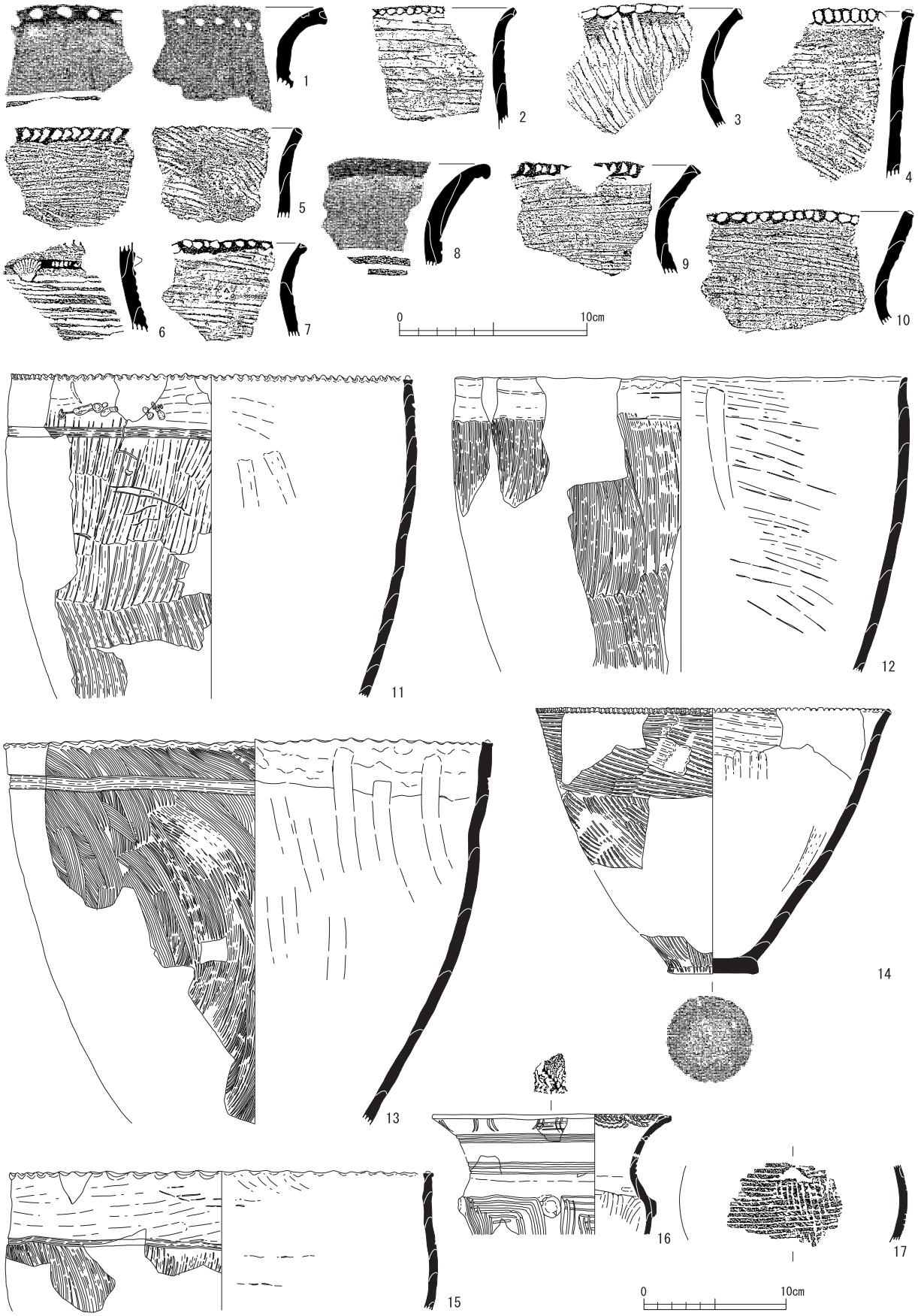
第47図　⑥区遺構出土遺物（縄文土器1～18、弥生土器19～21、SD-80出土28～31、SD-85出土22･24～27、SD-70出土23）　1～21（縮尺 1:3）、22～31（縮尺 1:4）



第48図　⑥区遺構出土遺物（SD-21出土8･9、SD-30出土10～21、SD-80出土1～4、SD-81出土6･7、SD-87出土5）（縮尺 1:4）

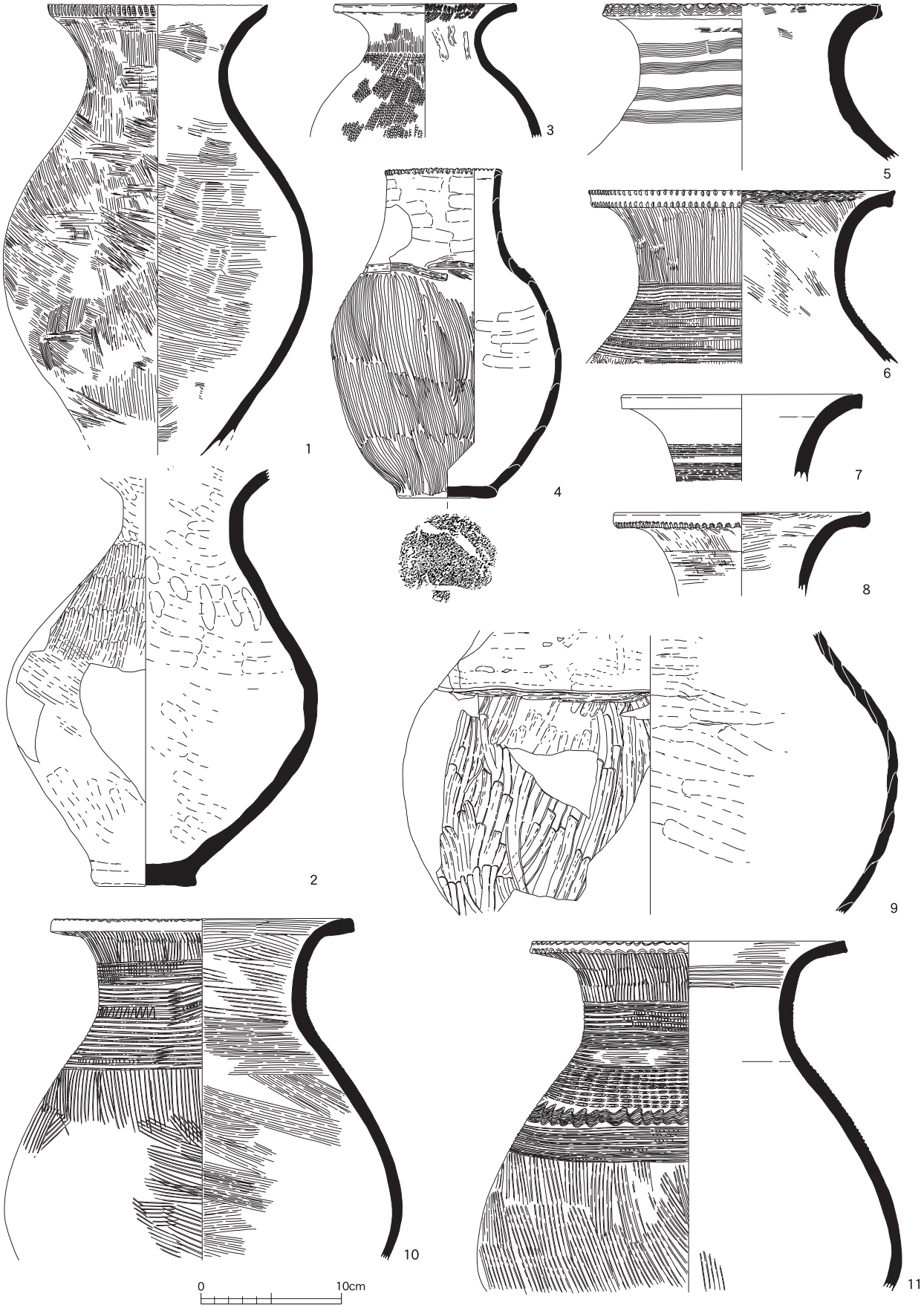


第49図　⑥区遺構出土遺物（SD-30出土1･2、SD-31出土8･9、SD-53出土10、SD-69出土3～7）
川出土遺物その1（縄文土器11～20、弥生土器21）　1～10（縮尺 1:4）、11～21（縮尺 1:3）

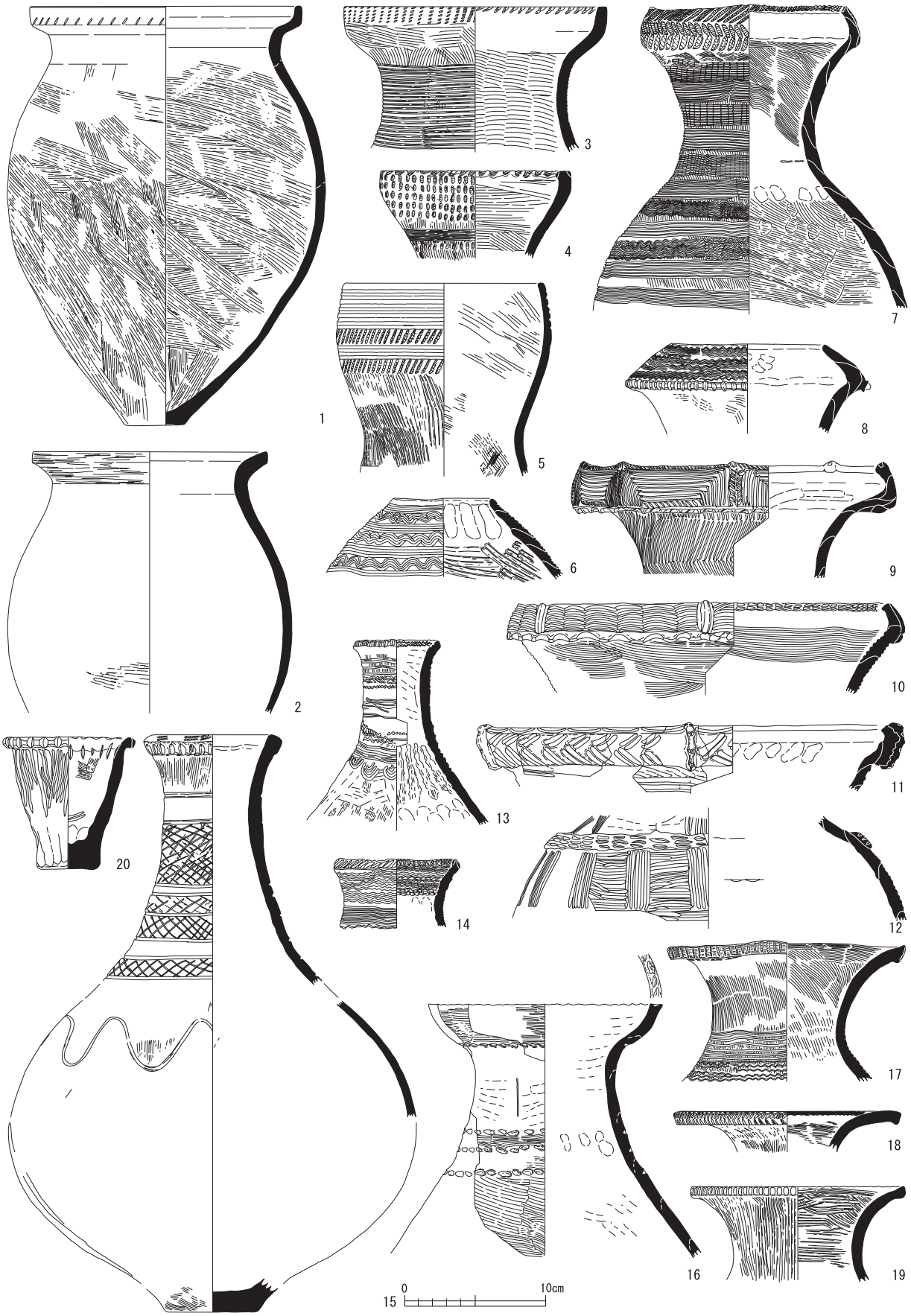


第50図　川出土遺物その2（縄文土器11～13、弥生土器1～10・14～17）　1～10（縮尺 1:3）、11～17（縮尺 1:4）

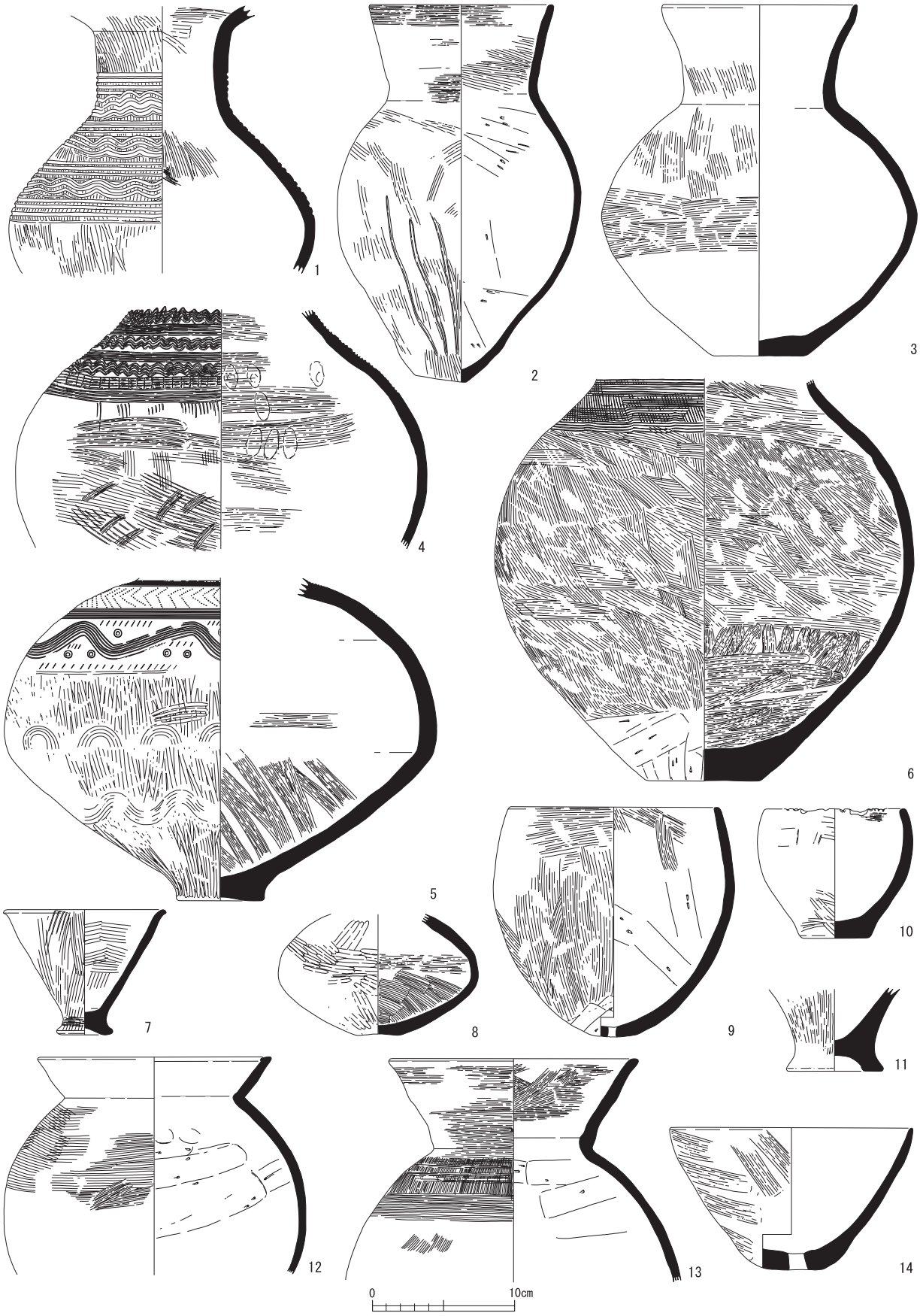
第51図　川出土遺物その3（弥生土器1～23）（縮尺 1:4）



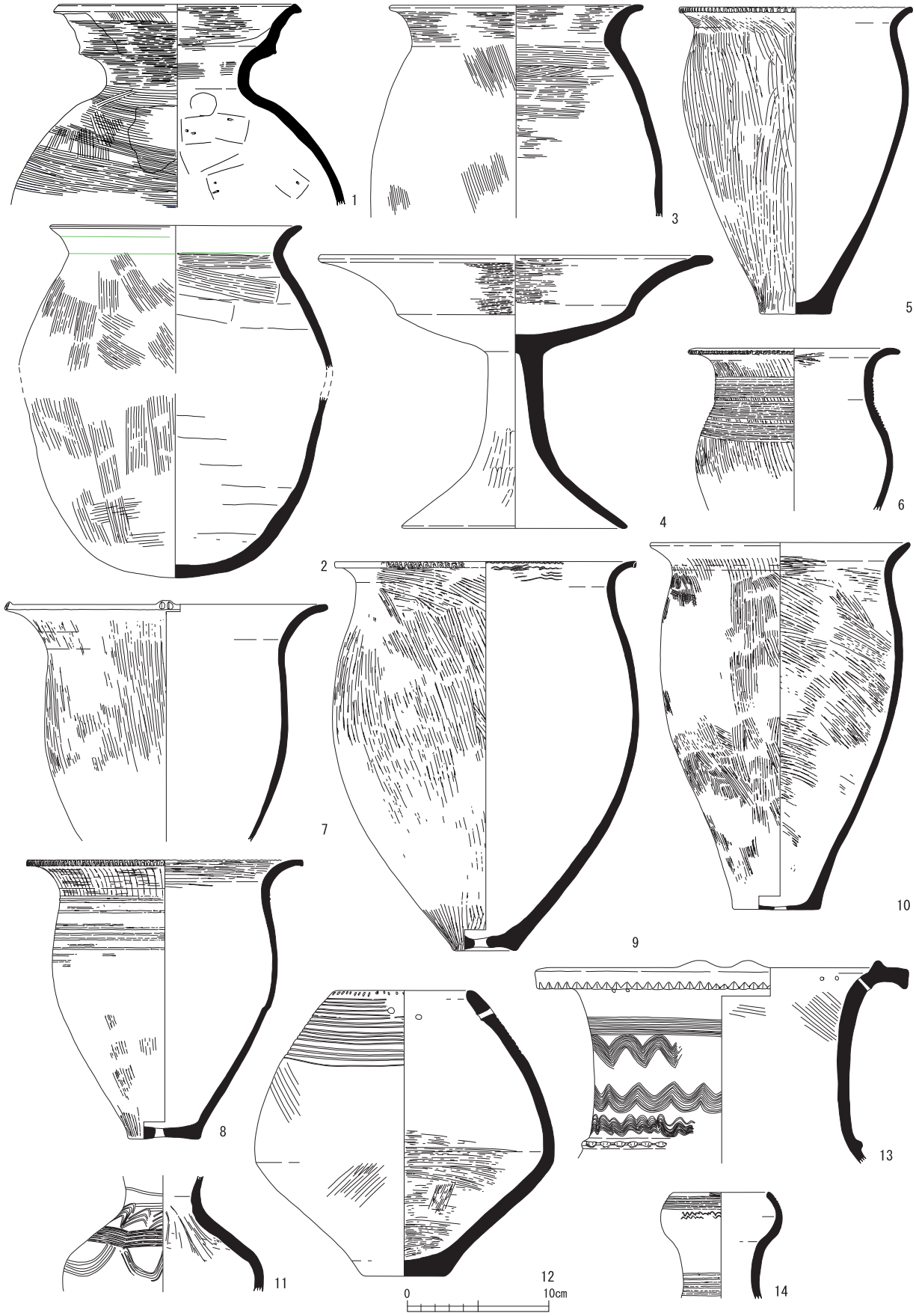
第52図　川出土遺物その4（縄文土器4、弥生土器1～3・5～11）（縮尺 1:4）



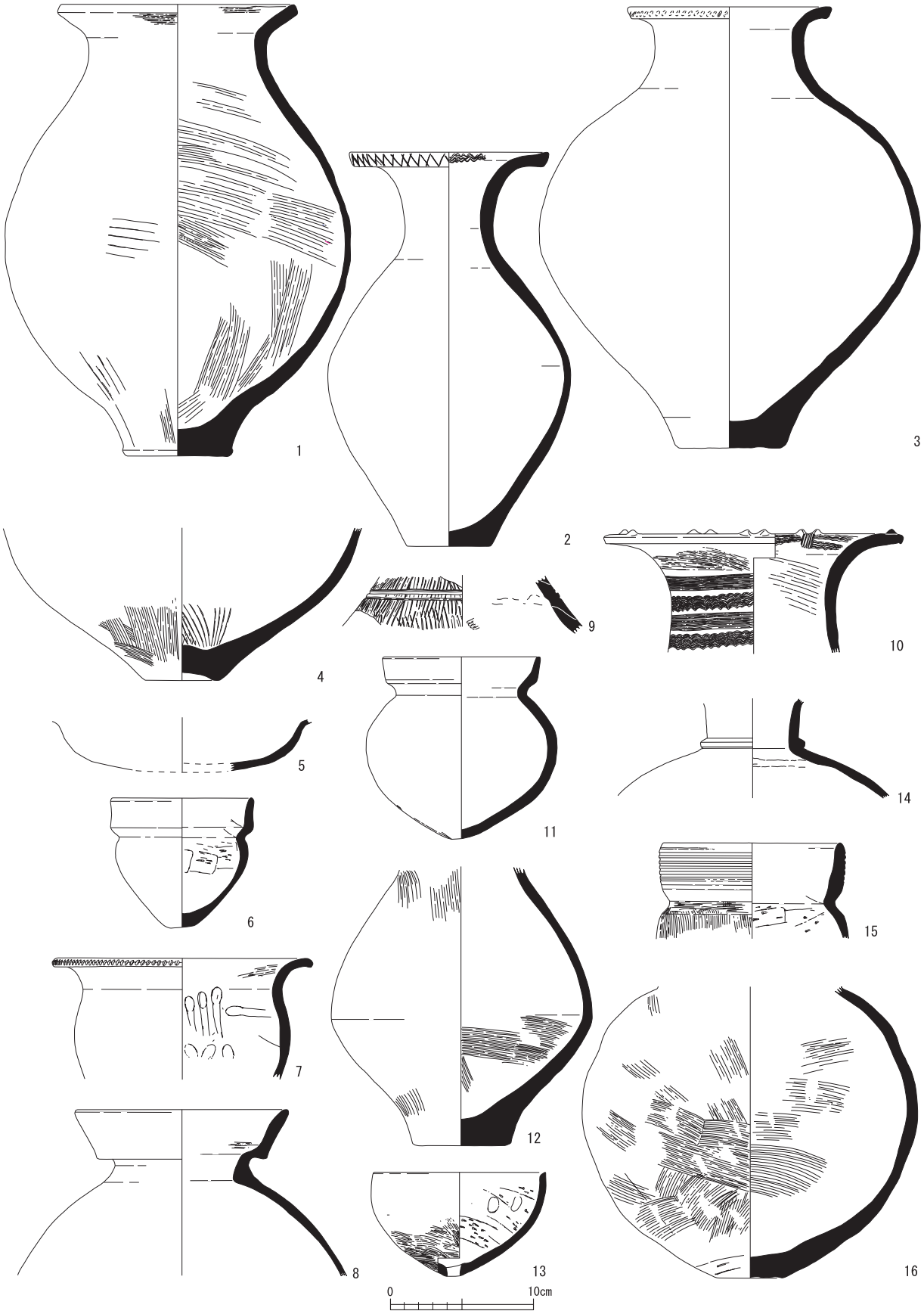
第53図　川出土遺物その5（土師器1･2、弥生土器3～20）（縮尺 1:4）



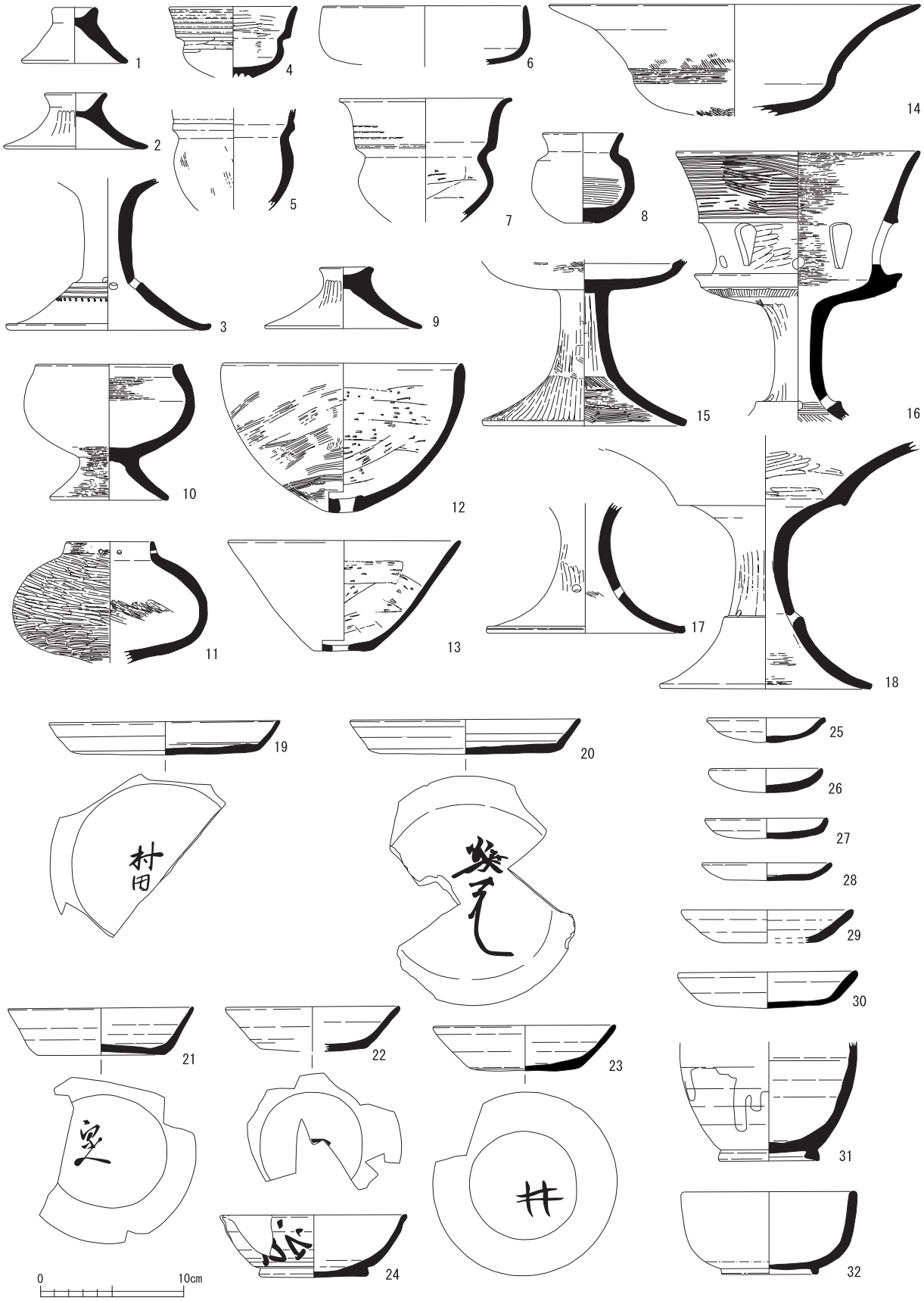
第54図　川出土遺物その6（弥生土器1･2、土師器3～14）（縮尺 1:4）



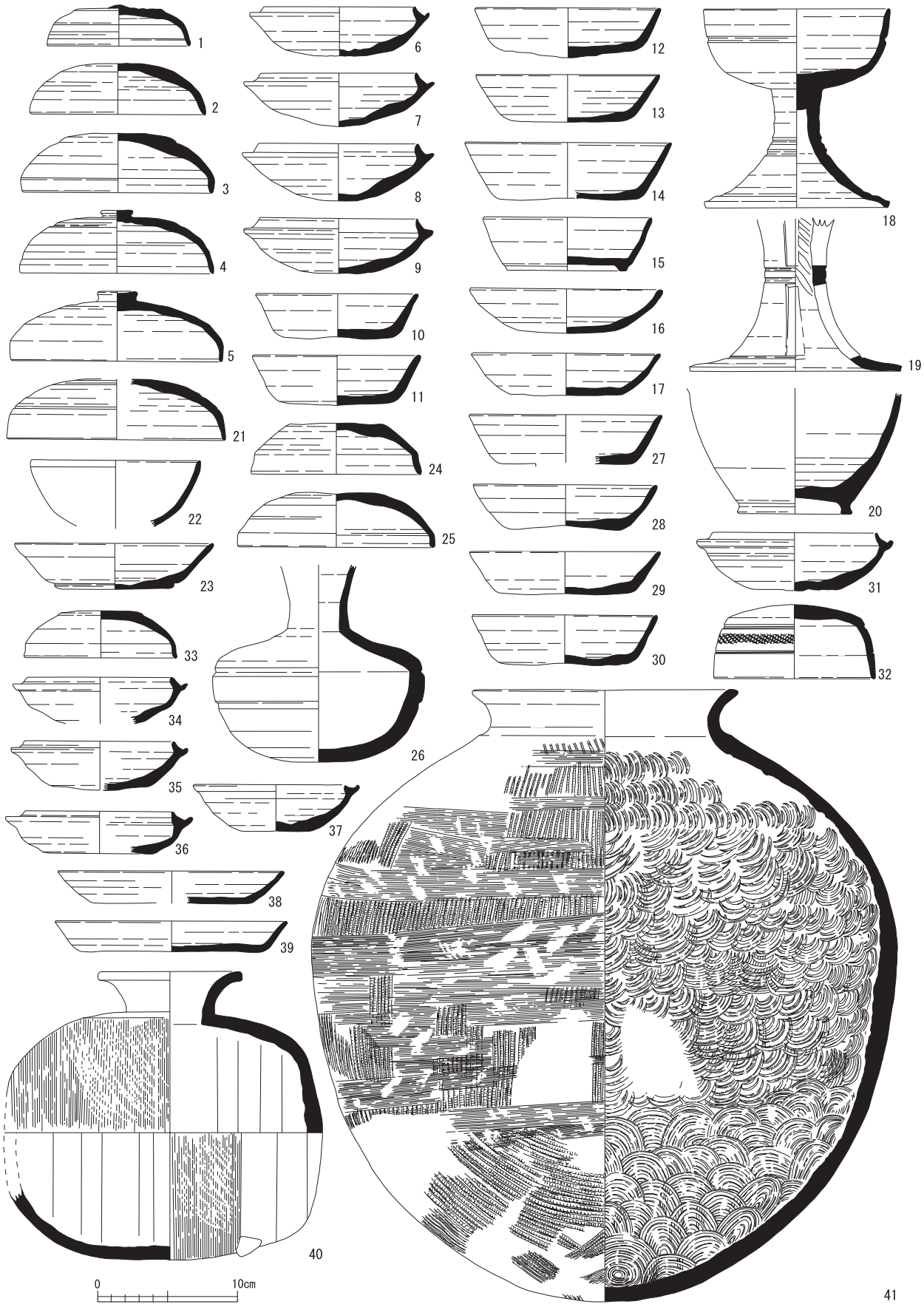
第55図　川出土遺物その7（土師器1～4）、②区遺構出土遺物（SK-1出土14、SD-15出土5～13）（縮尺 1:4）



第56図　②区遺構出土遺物（SD-15出土1～3）、⑤区遺構出土遺物（SK-2出土6、SK-5出土7･8、SK-12出土11、SK-15出土9、SK-19出土10、SK-30出土12、SD-79出土14、SD-93出土15･16、P5出土13)(縮尺 1:4)



第57図　⑦区出土遺物（SD-1出土7～13･14～18）、墨書土器、土師皿、灰釉陶器　（縮尺 1:4）



第58図　須恵器（縮尺 1:4）

第３節　土製品（図版第32、第59図）

土製品は、手捏土器、土製模造品、土偶、土錘、球形有孔土製品、土製有孔円盤、土製円盤がある。以下、概要を述べる。

Ⅰ. 手捏土器

壺(59-1・2)、鉢(59-3～6・8・9)、蓋(59-10)の器種がある。59-1は、単位性のない縦位条痕を施し、底面周縁にはケズリを施し、底部はやや上げ底気味になる。59-2は、口縁部が短く外反し、肩部が大きく張る。59-3は、内面には指による螺旋状の引き上げ痕が顕著に残る。59-4は、底部内面に接合痕が残る。59-5は、内外面の指頭圧痕が多く残る。59-6は、底部は上げ底で、口縁端部に細かい円形刺突を施す。59-8・9は、椀形の受部に脚台が付く。59-10は、外面に放射状のミガキを施す。

Ⅱ. 土製模造品

土製模造品には、臼(59-7)、鏡(59-11)がある。59-7は、外屈する口縁と脚部は引き出され、口縁部と脚部の端部に細かい刻みを入れる。59-11は、鈕孔をもち鏡面中央はやや凹む。

Ⅲ. 土偶

土偶は、⑥区の包含層からの2点出土した。59-12は、板状の体部片で、頭、腕、脚部が欠損する。断面は隅丸長方形を呈し、腹背両面に3条のヘラ描き斜行沈線を2段施す。側面(脇腹部)は、指ナデにより浅く凹む。腰部は粘土を貼付けて強調し、突起状に張り出す。体部は2本の粘土芯を結合し、巻き付けて作り出しているが、脚部は接合面の痕跡から別個に製作して接合したようである。

59-13は、胴部か脚部の破片であり、胸部以上を欠損する。断面形はレンズ形を呈し、側面に稜を有す。腹面には1条のヘラ描き垂下沈線を施す。下端は粘土を貼り付け、幅広となる。裏面はナデにより若干凹んでいる。東海地方など、近隣諸地域の資料と比較すると、59-12は縄文時代晩期後葉、59-13は縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半のものと考える。

Ⅳ. 土錘

土錘は、59-14が⑤区SK-7から出土した。両端部は欠失する。胎土は砂粒とともに赤色粒子を多く含み、二次焼成を受け被熱赤化している。

Ⅴ. 球形有孔土製品

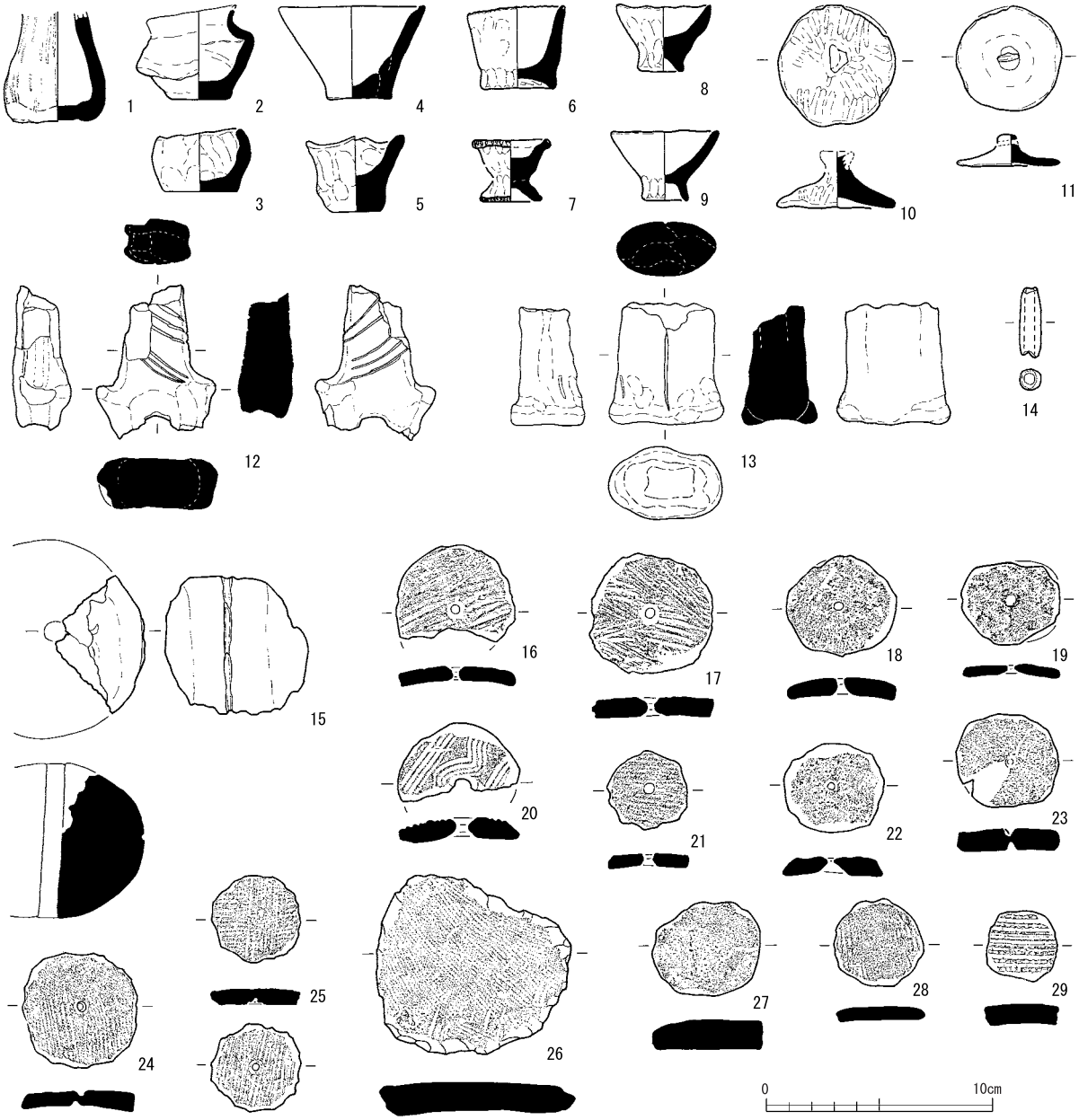
球形有孔土製品は、59-15川から出土した。扁平な球状を呈すと考えられる。面を持つ側部には、棒状工具による1条の沈線をめぐらす。中央の径9㎜の円孔には、断面に螺旋状の工具痕が残る。時期は縄文時代晩期後葉のものと考える。

Ⅵ. 土製有孔円盤

土製有孔円盤は、円形(59-17・18・20・21・24)を基調とし、楕円形(59-16・19・22)もある。大きさは、5㎝前後のものが多い。中央の円孔は、片面穿孔して未貫通のもの(59-25)、両面に穿孔して未貫通のもの(59-23・24)、両面に穿孔して貫通するものもの(59-16～22)がある(注1)。側縁の調整には、打ち欠き後、擦るもの(59-16・18・19・20・22～24)と、打ち欠いただけのもの(59-17・21)がある。59-16は縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半、59-17～20・22～25は弥生時代中期、59-21は弥生時代末～古墳時代初頭の土器片を使用している。

Ⅶ. 土製円盤

土製円盤は、円形(59-28・29)、楕円形(59-27)、不定楕円形(59-26)がある。最大径は8㎝(59-26)



第59図　土製品（縮尺1:3）

のものがある。側縁の調整には、打ち欠き後に擦るもの(59-27･28)、打ち欠きのみのもの(59-26･29)があり、弥生時代中期の土器片を使用している。土製円盤は、穿孔前の土製有孔円盤である可能性が高い。

（山本）

注

1．　出土資料の円孔内には、棒状工具による摩滅、磨耗が顕著であり、円孔横断面が台形を呈すものが多い。これは、穿孔に際して、棒状工具が傾斜した結果である円孔は、①片面のみが未貫通のもの、②両面が未貫通のもの、③両面が貫通するものの3種があり、土製円盤の一部を穿孔以前の段階とすれば、錐の弾み車の製作段階として、土製円盤→①→②→③の加工段階が想定できる。

　しかし、穿孔に要する時間を短時間であり、一度に製品として完成すると考えれば、①～③の形態差は、使用過程における段階差を表し、土製円盤は製品直前の段階であり、①段階は片面のみの使用、②段階は片面が一定の深度に達した後の反対面での使用、③段階は、使用の最終段階で、軸棒が貫通したものという想定もできる。この場合は、弓錐などの軸棒先端部の軸受けであった可能性も出てくる。

第４節　石　器（図版第35･36、第60～63図）

石器は、武器や狩猟具（石槍、石鏃）、工具（石錐、磨製石斧、砥石）、農具（石鍬、石庖丁）、調理具（石皿）などが出土した。石質は安山岩製のものが約6割を占め、他に砂岩やチャートなどがある。

石器は、ほとんどが⑥区の包含層と川から出土している。分布状況に器種別の偏差はない。縄文時代晩期の遺物包含層や遺構は、調査終了面より下位に埋没している可能性があり、出土した石器の多くは弥生時代のものが多く、一部、縄文時代の石器が混入している様相を呈している。出土した石器の詳細は第2表に示す。石器は数量が少ないため、遺物番号は第60～63図まで連番で通した。

Ⅰ. 石槍

60-1は、両面を調整し、器体の中軸が鎬状に高くなり、断面が菱形を呈す。右側縁が緩く湾曲し左右対称でないため、尖頭状の削器とも考えられる。

Ⅱ. 石鏃

60-2は、平基無茎鏃である。両面を調整し、60-1と同様に中軸が鎬状に高い。また、両側縁の上位に緩い段をもつ。60-3と60-4は、尖･円基鏃である。60-3は、薄手の剥片を素材にして、周辺を調整し、表裏に素材面を多く残す。60-5は有茎鏃で、基部が突出する。60-6は、石錐未製品の可能性があるが、薄いため石鏃未製品とした。剥片を素材にして、左側縁の裏面側と基部を調整している。

Ⅲ. 石錐

60-7は、逆三角形を呈し、基端に欠損面を残す。60-8･9は円形の基部をもち、60-8は、円形の基部から大きく屈曲して、刃部を作出り出している。60-9は、基部が右上方へやや張り出す。60-10は、左側縁に段をもち、基部が中程から右上方へ屈曲する。60-11･12は、基部と刃部の境が不明瞭で、細長い形状を呈す。60-11は、厚手なため石錐としたが、石鏃未製品の可能性もある。60-12は、表裏両側縁の調整に加え、表面の稜上から裏面側へ調整をしている。先端の断面は正円形である。

Ⅳ. 石核

60-13は、拳大の円礫が素材で、上面に打面が作り出されている。表面を作業面とし、剥片剥離されるが、器体に礫面を多く残す。

Ⅴ. 石包丁

61-14～16は、薄手の板状剥片を素材とし、紐孔をもつ。61-14は、裏面に長軸方向の擦痕があり、研磨されている。61-15は、刃部のみを研磨し、直線状の刃部を作り出している。61-16は、右側に素材面を残し、表裏とも研磨している。61-17～20は、紐孔をもたず、厚手で扇形を呈す。板状剥片を素材とし、左右側面に素材面を残す。61-17･19は外湾した刃部、61-18･20は直線状の刃部をもつ。

Ⅵ. 石鍬

61-21･22は、板状剥片を素材とし、基部から刃部へ緩く内湾して開き、撥形を呈す。61-23～25は、側辺中程のやや上位に抉入をもち、分銅形を呈す。61-25は、刃部が開かず、左側辺下半に素材面を残す。未製品ではなく、刃部が顕著に磨滅し、表裏の刃部付近に光沢が残る。

Ⅶ. 磨製石斧

61-26～30、62-31～36の太型蛤刃石斧と61-37･38の柱状片刃石斧がある。61-26～30は、平らな基部をもち、側辺がほぼ平行する。61-26～30は断面が厚く、円形に近い楕円形を呈す。61-27は周辺からの調整と敲打で基端面を整え、61-28は敲打により基端面を整える。62-31～34は、断面が扁平

な形状である。61-31は、表裏とも中軸に敲打痕が残る。62-33は、左右両側に平滑面をもち、縄文時代の定角式磨製石斧とも考えられる。62-35･36は、細くすぼまる基部をもち、平面形は長三角形である。62-35は、不明瞭な稜をもち、断面はやや扁平である。62-36の断面は円形に近い形状である。62-37･38の断面は長方形を呈す。62-37は抉りをもち、刃部が偏り、基端面は裏面側へ傾く。62-38は、側面を中心に研磨し、表面と基端に剥離面が残り、裏面には敲打痕が残る。

Ⅷ. 砥石

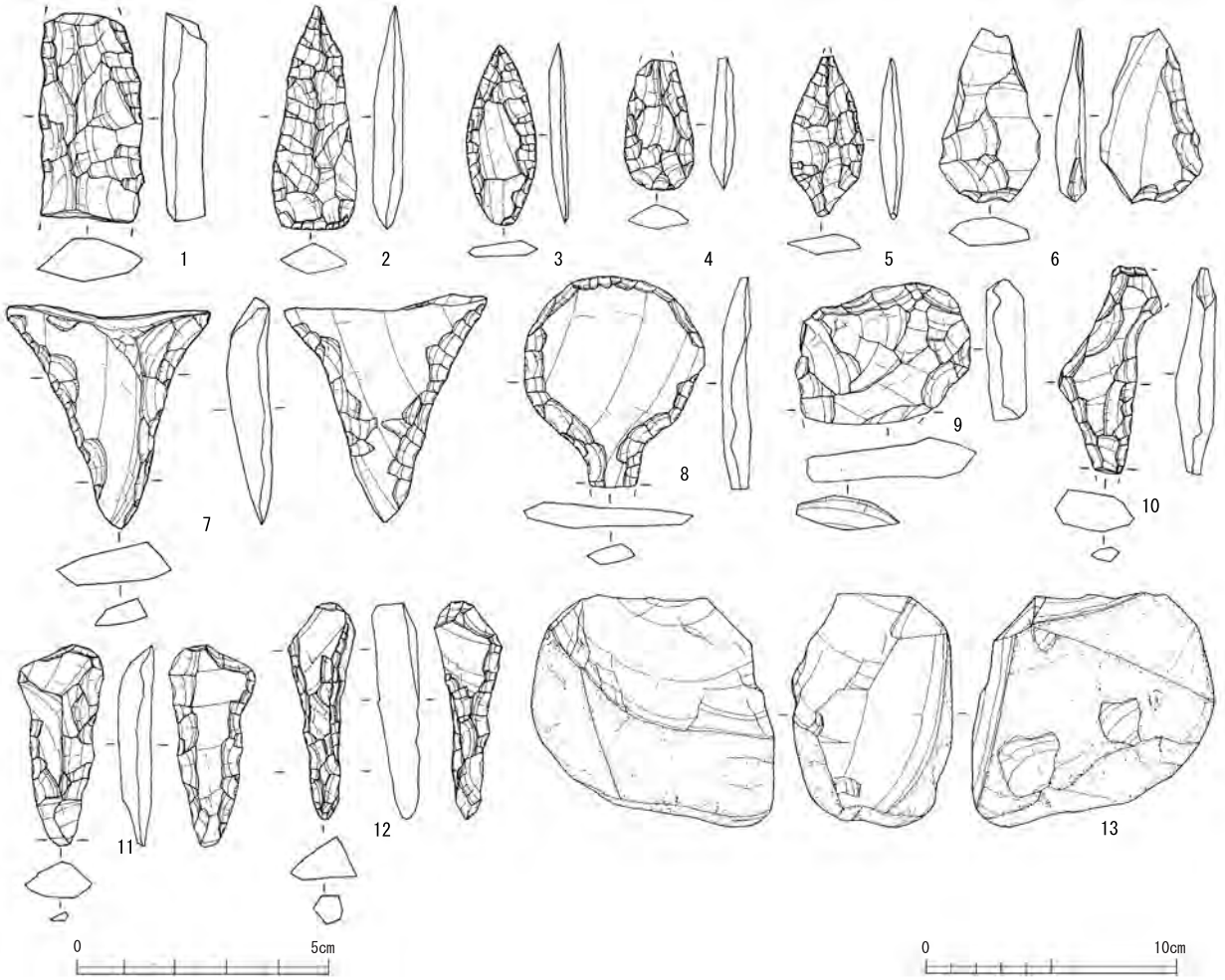
62-39･40は厚手の角形で、上下端以外が使用面である。62-40は、表面と右側面の一部が帯状に緩く凹む。62-41･42は、扁平な板状を呈し、側辺が湾曲して反る。表面と右側面が使用面である。62-42は、左側面に削り痕が残る。62-43は大形の角柱形で、上下端以外が使用面である。表面の左半が長軸方向に緩く凹む。

Ⅸ. 石皿

扁平な大形の楕円礫が素材。62-44･45は、表面中央を凹ませ、周辺に縁をもたせる。46と47は、表面中央に敲打痕がある。

Ⅹ. 凹石・敲石

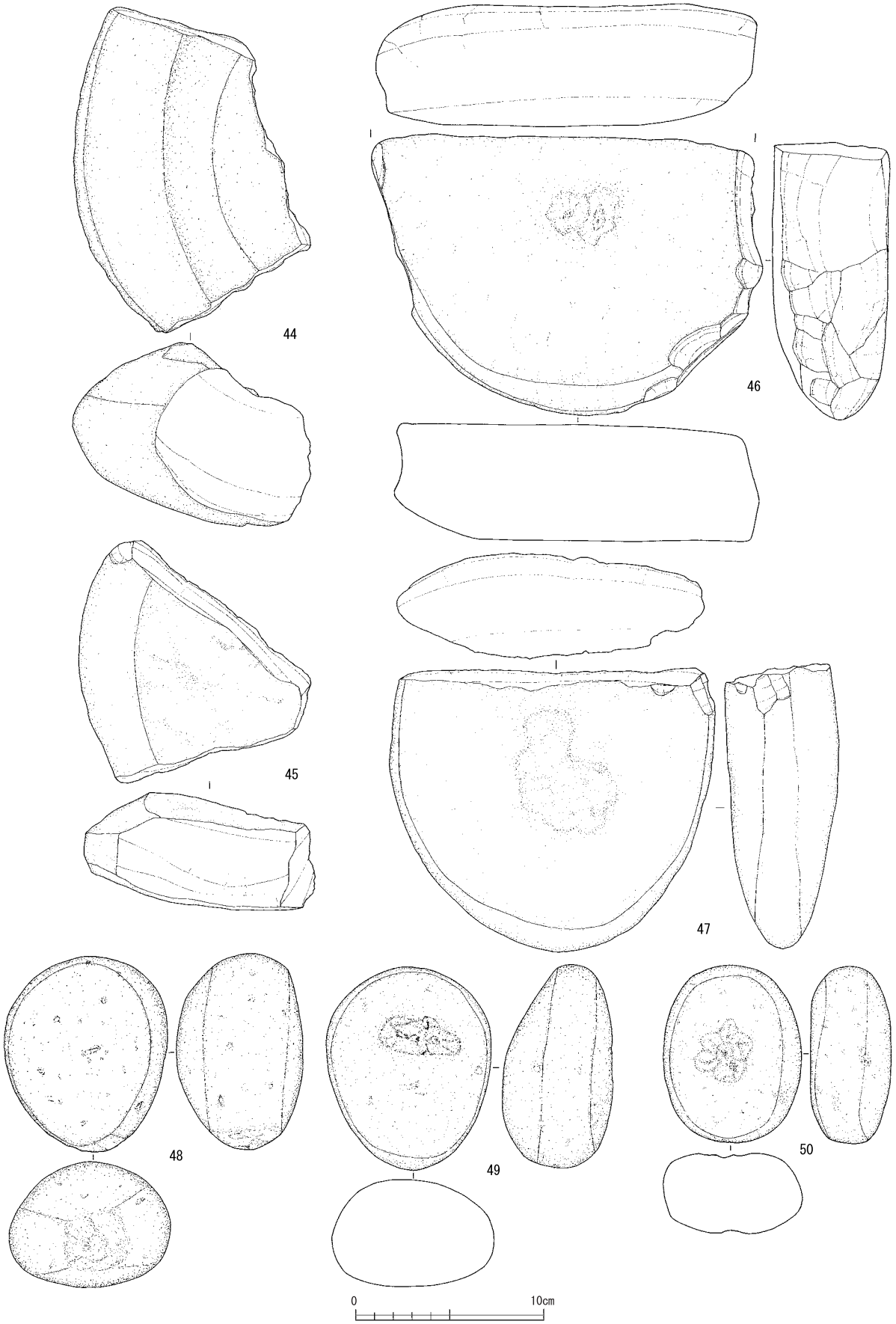
いずれも楕円礫が素材で、磨面と敲打痕からなる。48は下端、49と50は表裏のほぼ中央に敲打痕がある。



第60図　石器(1)1～12(縮尺 2:3)、13(縮尺1:3)

第61図　石器(2) 14(縮尺 1:4)、15～30(縮尺1:3)

第62図　石器(3) 31～43（縮尺1:3）



第63図　石器(4)　49～50(縮尺 1:3)

第５節　玉作り関係遺物（図版第36、第64図）

玉作り関係遺物は、全体的に少量であり、主に形割、剥片、玉鋸がある。調整や研磨はわずかで、穿孔失敗品などはない。石質は、管玉の製作に関わるものは緑色凝灰岩であるが、一部、鉄石英の材も確認している。玉鋸は紅簾片岩である。

調査区の周辺において、形割などの作業を行ったと見え、製作技術は、施溝痕をもつ形割や剥片、玉鋸の使用から弥生時代中期と考える。ただ、後出する時期の資料を含む可能性がある。詳細は第２表に示し、以下、概要を述べる。

Ⅰ. 原石

64-1は礫面が多く除去されており、形割とも考えられる。大形厚手の剥片で、角形を呈す。上端に自然面を残し、他は剥離面からなる。また、右側面下半は研磨される。

Ⅱ. 荒割

64-2は寸詰まりな厚手の剥片で、素材の縁辺が多く残る。

Ⅲ. 形割

64-3･4は幅広で、断面が三角形を呈す。側辺に面をもたず素材の縁辺が残り、器体に凹凸や反りがある。64-5･6は、縦長で両側辺がほぼ平行し、断面が台形を呈す。角柱に近い形状となる。64-6は、表面と左側面が調整されるが、凹凸や反りをもつ。64-7は、幅広で厚いサイコロ形を呈す。下端以外に表裏と直交する面をもつ。上端と両側の各面は、表裏方向に研磨され作出される。64-8･9は、両側辺がほぼ平行するが、64-8の上下端と、64-9の下端には、面を作り出していない。

Ⅳ. 剥片

64-10･11は、形割の工程において、反りを除去したり、平行面や直交面を作り出すために分割･剥離された破片である

Ⅴ. 調整

64-12は、各面がほぼ平行または直交し、整った細長の角柱形を呈す。表面と上下端面を調整している。

Ⅵ. 研磨

64-13は表裏以外を研磨し、64-14は全面に研磨しているが、断面は多角柱形ではなく方形を呈す。64-13は細形、64-14は太形の管玉未製品である。

Ⅶ. 管玉

64-15は太形で、円滑に仕上げられている。穿孔方向は識別出来なかった。

Ⅷ. 玉鋸

玉鋸の大半が破片なため、刃部があるものを図化した。64-16は、片刃のもの。刃部は、やや波状となる。64-17～19は、両刃でやや厚手である。64-17は、上下端に刃部をもち、器体が緩く反り、右端は調整され、弧状となる。64-18は、刃部に厚みをもつ。64-20･21は、両刃で薄手のもの。64-20は、刃部に斜行する擦痕と刃こぼれが明瞭に残る。

Ⅸ. 紡錘車

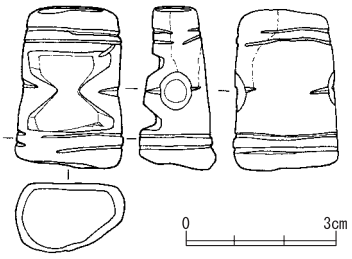
64-22は、形態の特徴から古墳時代前期のものである可能性が高い。断面は中央が厚く、裏面の周縁を面取りしている。

第64図　玉作り関係遺物（縮尺1:2）

第６節　骨角器（第65図）

出土した骨角器は弓の先端に装着する弭である。①区F3-1ｸﾞﾘｯﾄの川で、弥生中期の土器と伴出した。鹿角の切断面から芯を抜き、表面中央に鼓形の孔、両側面中央に円孔を穿つ。表面から両側面中央に1条の沈線を入れ、上下の端に2条の沈線がめぐる。

（田中）



第65図　弭（縮尺2:3）

第７節　木　器（図版第37･38、第66～69図）

木器は、主に①区･⑥区の川から出土し、時期は弥生時代後期～古墳時代前期のものである。木器の種類は、鍬･鋤･田下駄･木包丁などの農具、槽や曲物などの容器、盾･琴板･舟形･戈形･刀形などの祭祀具、紡織具、建築部材がある。なかでも祭祀具は多様であり、川が祭祀の対象であったとことを示す。木器は、未製品や割材、径5～10cmの原木が多く、材を水漬けにし、需要に応じて木器を生産していたようである。

木器は、農具、容器、紡織具、祭祀具、その他の製品に分類し、遺物番号は第66～69図まで連番で通した。以下、概要を述べる。

Ⅰ.農　具

･鍬

66-1は、①区の川から出土した直柄平鍬の未製品である。現存長40.0cm、幅18.4cm、厚さ3.0cmを測る。66-2は、⑥区の川から出土した曲柄平鍬である。ナスビ形を呈し、現存長34.7cm、幅10.8cm、厚さ1.5cmを測る。

66-3は、⑥区の川から出土した直柄狭鍬である。現存長32.2cm、幅8.0cm、厚さ2.8cmを測る。側面は直線的であり、柄孔の周囲がなだらかに隆起する。隆起を後面とすると着柄角度は115°となる。

･鋤

66-4は、⑥区の川から出土した一木鋤である。現存長35.4cm、幅10.2cm、厚さ2.0cmを測る。肩の平面形はナデ肩であり、片面を浅く抉る。

66-5は、①区の川から出土した組合せ鋤の未製品である。現存長37.9cm、幅17.0cm、厚さ1.5cmを測る。全面に幅1.5～2.0cmのチョウナ痕が残り、一方の端面に柄を装着する突起を削り出している

･エブリ

66-6は、⑥区の川から出土し、現存長10.3cm、現存幅30.0cm、厚さ1.6cmを測る。耕作面をならす代掻きに使う道具であり、鋸歯状の刃部をもつ。片面から穿孔され、表面には幅約1.0cmのチョウナ痕が残る。使用痕があり、廃棄品と考える。

･大足

66-7は、⑥区の包含層から出土した。現存長40.5cm、幅3.5cm、厚さ2.0cmを測る。方形の孔を4個設け、端部にホゾを削り出している。水田耕作時において、足裏に装着して沈み込みを防ぐ道具である。各地の出土例から、本来の形状は、方形の孔に横木を入れた格子窓のような製品であり、田下駄と組み合わせて用いたようである。

･田下駄

66-8は、⑥区の川から出土し、現存長31.0cm、幅12.6cm、厚さ1.0cmを測る。平面形は長楕円形であり、断面形は弓形である。長軸上に穿孔が2個あり、使用時に、一方の穿孔を挟んで両側面に紐をかけたような切れ込みがある。

66-9は、⑥区SD-74から出土し、現存長33.1cm、幅17.0cm、厚さ2.2cmを測る。平面形は長方形であり、一方の短辺の両端に切れ込みが入る。径約1.5cmの穿孔が6個、径約0.5cmの穿孔が5個あり、裏面に段を削り出している。大足と組み合わせて使用したと考える。

･木庖丁

木庖丁は実用品であり、石庖丁と同じく稲穂を刈る道具である。片刃の刃部には使用痕が残り、破損

よる廃棄品であると考える。66-15･16は、完形ならば、手で掴む部分に弧状の浅い樋部を設け、樋部の中に親指を固定するための二個一対の紐孔を穿っていたと考える。67-15は、①区の川から出土し、現存長10.1cm、幅5.8cm、厚さ0.4cmを測る。67-16は、⑥区の川から出土し、残存長12.9cm、幅5.4cm、厚さ0.9cmを測る。

67-17は、⑥区の包含層から出土し、現存長8.5cm、幅5.8cm、厚さ1.1cmを測る。背部に段を削り出して滑り止めにしている。

67-18は、⑥区の川から出土し、現存長10.0cm、幅7.4cm、厚さ1.7cmを測る。湾曲する背部に沿って、滑り止めの３条の平行沈線を設けているが、本来は、槽の一部を再利用した可能性もある。

Ⅱ.容　器

･槽

66-10は、①区の川から出土し、現存長26.0cm、幅13.2cm、厚さ1.8cm、高さ4.5cmを測る。左側底部付近に穿孔があり、別の道具に転用した可能性もある。

66-11は、⑥区SD-31から出土し、現存長26.7cm、現存幅6.8cm、厚さ1.6cm、高さ4.8cmを測る。66-10と同様、底部に穿孔があり、槽であったものが、田下駄等へ転用された可能性がある。

66-12は、①区の川から出土し、現存長26.0cm、幅19.2cm、高さ6.2cmを測る。逆台形の木材を加工した、盛り付け用の槽であり、完成品である。底部は長辺の両端に脚台を削り出している。

66-13は、⑥区の包含層から出土し、現存長32.0cm、幅15.0cm、高さ6.1cmを測る。厚手なつくりである。中央の長方形の抉り込みは、縦19cm、横４cm、深さ2.5cmを測る。一方の短辺内側には幅0.5cmほどの工具痕が残り未製品であると考えるが、槽以外の品、部材である可能性もある。底部は、短辺の両端に脚台を削り出し、底部隅には孔が1個ある。

66-14は、⑥区の川から出土し、現存長35.2cm、幅14.0cm、厚さ1.9cm、高さ4.0cmを測る。舟形の槽であり、器壁は薄く、底部に脚台はない。

･曲物･蓋･把手

67-19は、②区SW-2から出土した曲物底板であり、直径13.0cm、厚さ0.6cmを測る。67-20は、⑥区SK-6から出土した曲物側板であり、現存長21.5cm、幅5.0cm、厚さ0.5cmを測る。

67-21は、①区の川から出土した蓋であり、直径14.2cm、厚さ1.8cm、高さ6.6cmを測る。方形のツマミを削り出し、内面には工具痕が明瞭に残る。紐を通したような穿孔が外周に２個、ツマミ付近に３個ある。67-22は⑥区の包含層から出土した容器の把手である。輪の内側の一部に擦痕が残り、幅3.0cm、厚さ2.3cmを測る。

Ⅲ.紡織具

･紡錘車･織機

67-23は①区から出土した紡錘車であり、直径8.8cm、厚さ1.1cmを測る。断面は扁平であり、片面穿孔である。

67-24は⑥区の川から出土し、現存長21.9cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。両端が突出し、形状は中筒や腰当てに類似するが、中央に方形の穿孔があり、糸巻きの可能性もある。

Ⅳ.祭祀具

･盾形

67-27は、①区の川から出土し、現存長20.7cm、現存幅6.0cm、厚さ0.7cmを測る。盾を模した儀

式用の形代であり、大部分は欠損している。上端は山形をなし、片面に赤色塗彩が残る。長軸と直交した複数の孔は、皮を張り付ける威し紐の小孔を模しているようである。

・戈形

67-28は、①区の川から出土し、現存長13.9cm、幅2.5cm、厚さ1.0cmを測る。武器の戈を模した儀式用の形代である。刃部の長さは14cmを測り、中軸の鎬は平坦である。基部付近に方形の小孔を2個穿つ。

67-29は、⑥区の川から出土し、現存長12.7cm、幅4.0cm、厚さ0.8cmを測る。先端は欠損し、中軸に鎬がある。

・斎串

67-30は、⑥区SD-85から出土し、現存長10.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。ヘラ状の木器であり、斎串もしくは人形の可能性がある。

・儀器

67-31は⑥区の川から出土し、現存長45.8cm、幅14.3cm、厚さ1.8cmを測る。面長の木の葉形を呈し、一端が突起する。中央に楕円形の紐通しを2個穿ち、棒状の柄を装着していたと考える。

67-32は①区の川から出土し、現存長31.0cm、幅14.4cm、厚さ1.1cmを測る。木の葉形を呈し、一端が突起する。中央に半円形の紐通しを2個穿ち、棒状の柄を装着していたと考える。67-31・32の紐通し孔は両面から穿孔している(注1)。

・琴板

67-33は、⑥区の川から出土し、現存長34.0cm、幅8.6cm、厚さ1.0cmを測る。羽子板形を呈し、琴尾側には突起が7つあり、琴頭側には径1.3cmの楕円形の集絃孔がある。槽を取り付けるための溝や穿孔がないことから、板作りの琴と考える(注2)。

実用品の可能性も払拭できないが、突起の端部や根元に絃を張った痕がなく、儀式用の形代と考える。琴尾側の左端付近に径2mmの小孔が2個あり、絃高を一定に保つ雲角が付いていた可能性がある。

・舟形

67-34は、①区から出土し、現存長15.0cm、幅2.7cm、厚さ1.0cmを測る。舟を模した儀式用の形代である。断面は半円形であり、舟底は浅く抉る程度である。裏面は丁寧に磨かれている。

・刀形

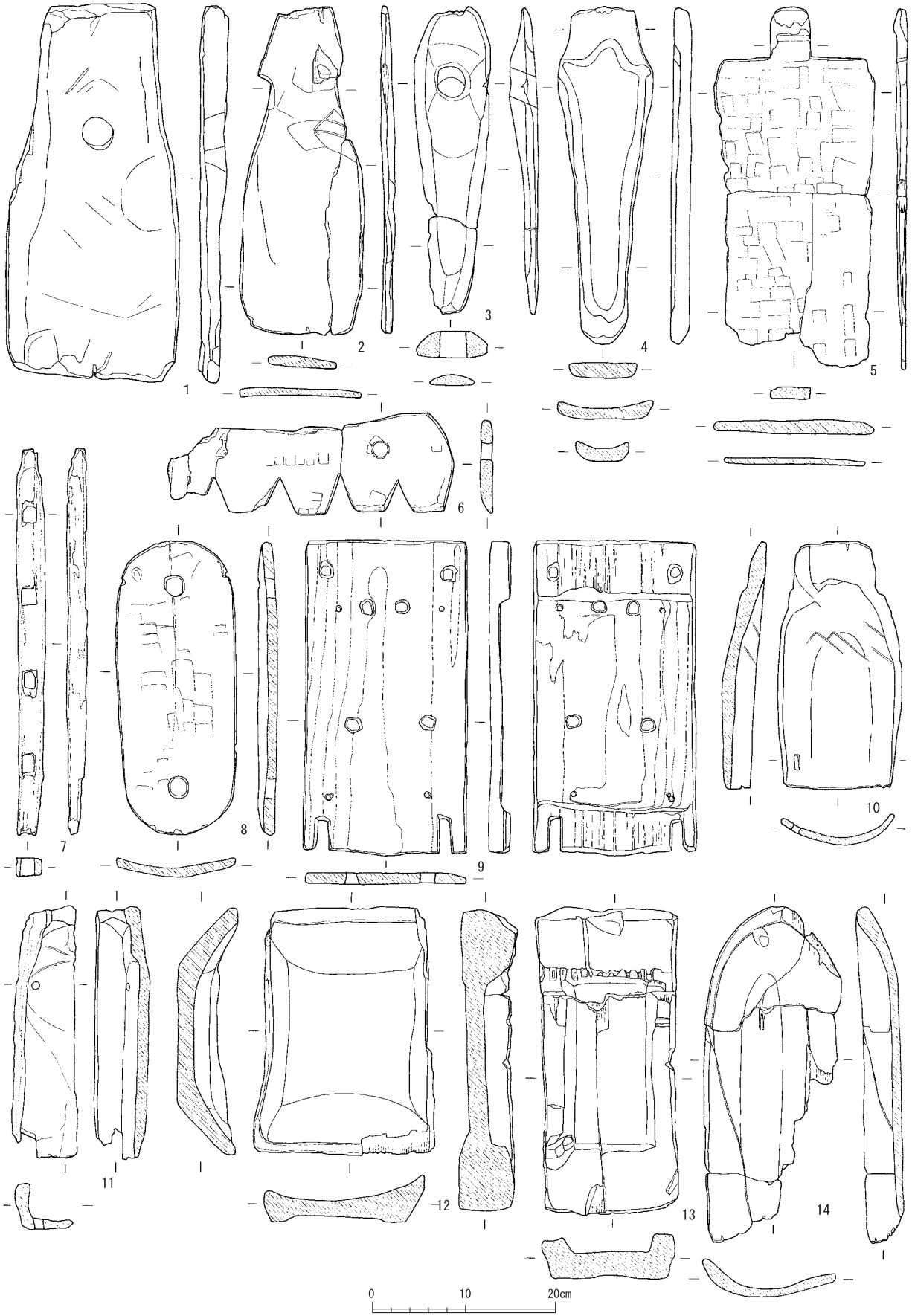
67-35は、⑥区の川から出土し、現存長21.5cm、幅3.2cm、厚さ0.9cmを測る。刀を模した儀式用の形代である。刀身の上部は欠損し、柄部のみが残る。把間は、刀身より細く削り、把頭を削り残す。刀身の断面は扁平な半円形を呈し、裏面は平坦である。

・人形

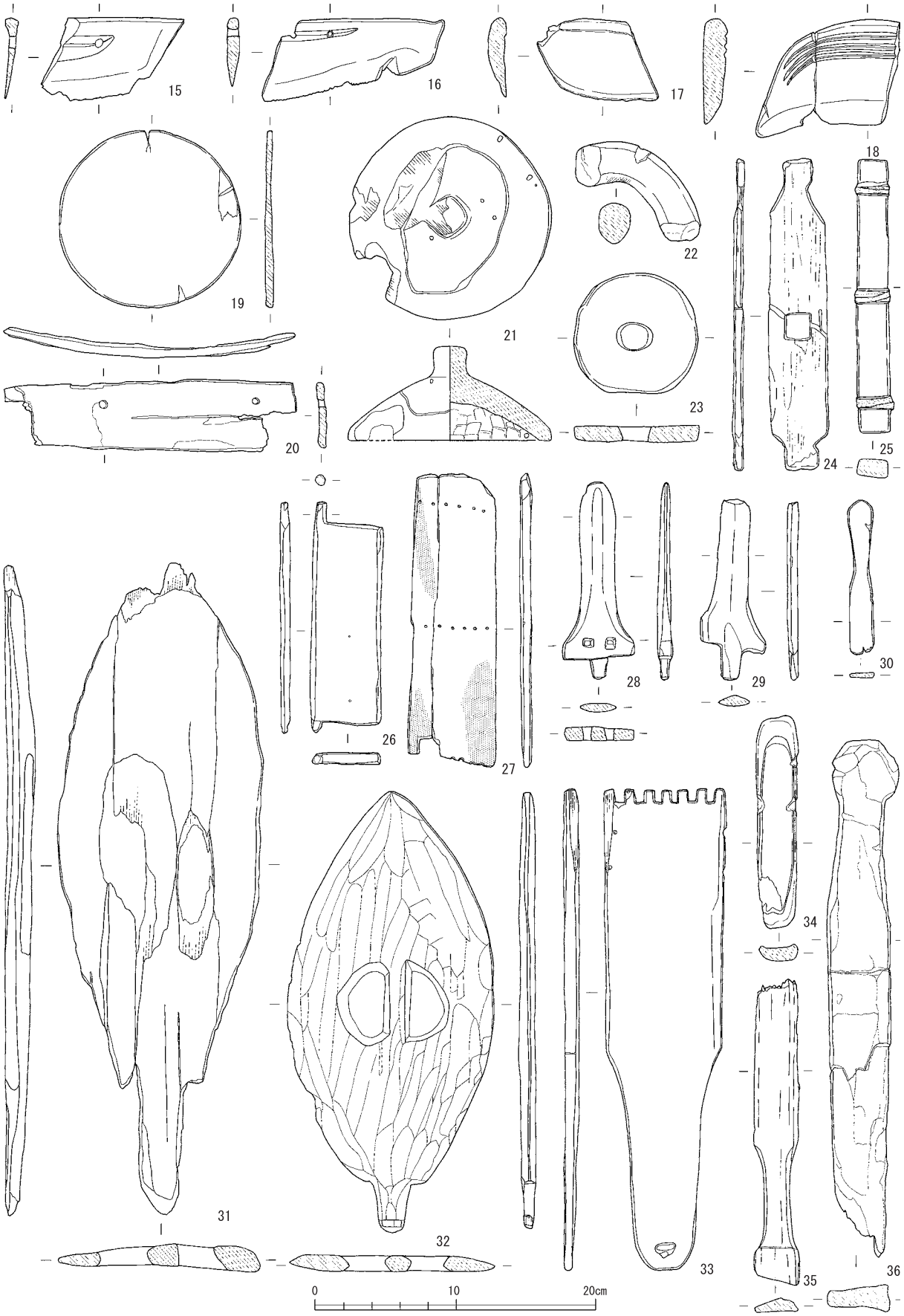
67-36は、⑥区の川から出土し、現存長36.4cm、幅4.9cm、厚さ2.0cmを測る。人を模した儀式用の形代である。下部は欠損している。端部の両側辺を削り、顔形を表現しているようである。断面は歪な長方形であり、表面に線刻や塗彩等は確認できない。

・鳥形

68-37は、⑥区の川から出土し、現存長36.5cm、幅8.9cm、厚さ1.3cmを測る。鳥を模した儀式用の形代、いわゆる鳥形木製品の可能性がある。片面が抉られ、中央に楕円形の穿孔をもつ。欠損部端にも方形の穿孔の痕が確認できる。



第66図　木器(1)　1~14（縮尺1：6）



第67図　木器(2)　15~36(縮尺 1：4)

Ⅴ.その他

･扉板

67-26は、⑥区SD-85から出土し、現存長16.3cm、幅6.2cm、厚さ0.8cmを測る。片側長側辺の上下に径0.5cmの軸摺り部を削り出している。ミニチュア品であると考える。下半に径1mmの穿孔が２個ある。

･椅子

68-38は、①区の川から出土し、現存長35.2cm、幅8.6cm、厚さ1.6cmを測る。裏面の短辺側に浅い溝を彫り、脚板をはめ込むのホゾ穴を穿つ。欠損部にもホゾ穴が確認できる。短辺端はやや丸みを帯びている。

･建築部材

68-39は、⑥区SD-75から出土し、現存長47.0cm、幅5.5cm、厚さ5.5cmを測る。端部の一方が欠損しているが、径2.5cmのホゾを削りだし、正面と左側面に幅約1.0cm、深さ1.4～2.3cmの溝を設けている。井戸枠の支柱の可能性がある。

･ミカン割材

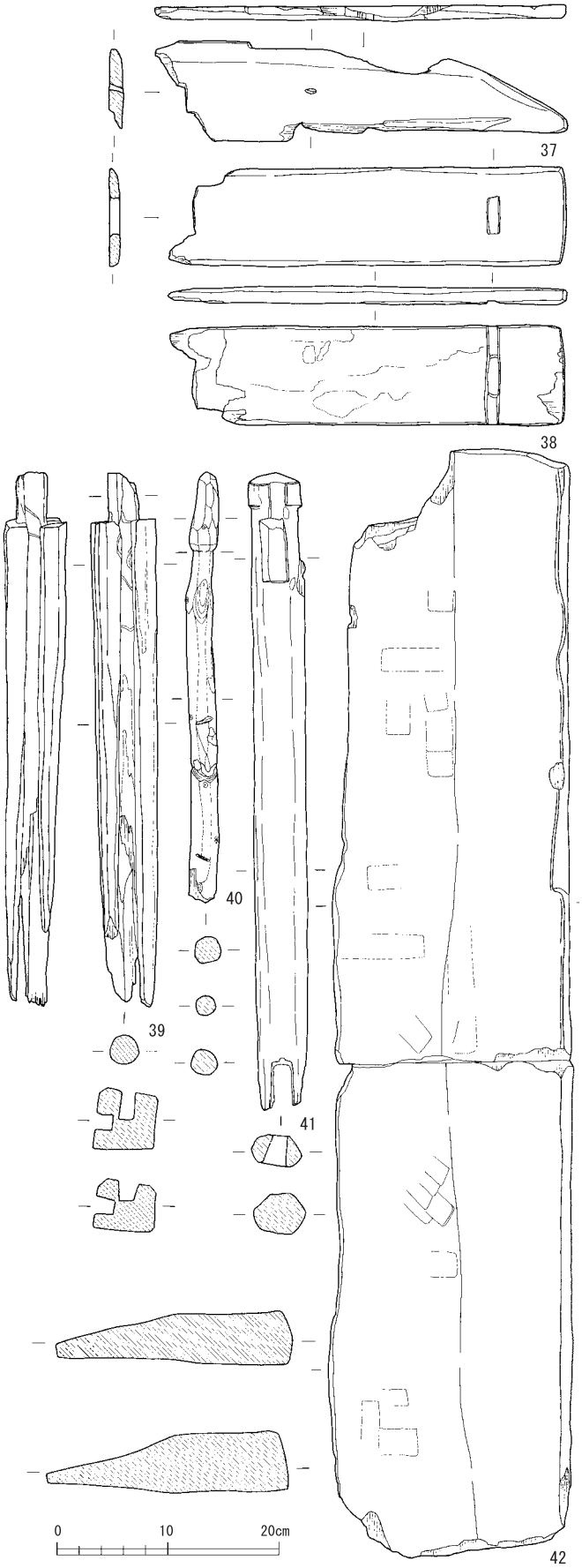
68-42は、①区の川から２つに折れて出土した大型の材である。現存長99.0cm、幅21.6cm、厚さ5.2cmを測る。木取りは柾目である。

･その他の道具･部材

67-25は、現存長19.3cm、幅2.0cm、厚さ1.5cmを測る。片面３ヶ所に幅約1.0cmの溝を彫り、樹皮を巻いている。

68-40は、⑥区の川から出土し、現存長38.0cm、径2.4cmを測る。全体を丁寧に削っており、端部を有頭状に加工し、形状から天秤棒の可能性も指摘されている。

68-41は、①区SK-9から出土し、現存長56.1cm、幅4.5cm、厚さ3.6cmを測る。端部は一方が欠損しているが、おそらく両端部とも有頭状に加工し、方形のホゾ穴を設けていたと考える。民俗事例では、機織具の構成部品のひとつに極めて酷似するものがある。

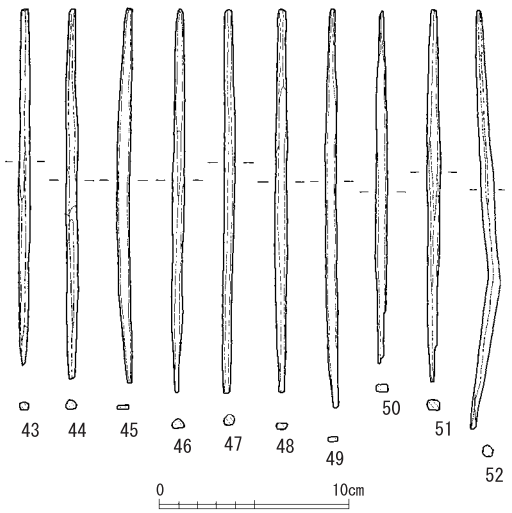


第68図　木器(3)　37～42（縮尺1：6）

・箸

69-43～49は、②区SW-2から出土し、69-50～52は①区川の上層から出土した。残存長は18.5、～22.0cmを測り、断面は扁平なものと歪な多角形のものがある。平面形は、真中が膨らみ両端、に向かって細くなる。完成品であり、儀礼に伴って捨てられた可能性がある。

（岡田）



第69図　木器(4)　43～52（縮尺1：4）

注

1.　この形状の木器は、全国的に多くの出土例があり、柄を装着して「組合せ鋤」と報告する例もあるが、掘削用の実用品と想定するには強度的に問題がある。山田氏は、鋤とすることに疑問点を示され、団扇･武器形木器と推察している（文20）。その用途については推測の域を出ていないが、儀礼や祭祀の場で使われた可能性を指摘している。本書では文20･21参考とし、儀器と表記する。

2.　板作りの琴の突起数は4つか6つに限られており、本遺跡例の7つは異例である。突起が7つある例としては、鳥取県青谷上寺地遺跡例、福岡県上鑵子遺跡例、大阪府西ノ辻遺跡例があるが、いずれも槽作りの琴である。笠原氏によれば、板作りの琴は、専用工具を必要としない工人の作品であり、対して、槽作りの琴は多数の専用工具を揃え、材の選択にも長けた工人の作品であると指摘している（文8）。

参考文献

1.　赤澤秀則編『‘99特別展森のめぐみ島根県出土木製品集成』鹿島町立歴史民俗資料館　1993年
2.　茨城県立歴史館『特別展音の考古学　音具と鳴器の世界』　1995年
3.　（財）大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡（その3･4）－茨木･学園町地区埋蔵文化財発掘調査第3次･4次報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第50集　2000年
4.　（財）大阪府文化財調査研究センター『溝咋遺跡（その1･2）－茨木･学園町地区埋蔵文化財発掘調査第1次･2次報告書－』本文編　（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集　2000年
5.　小川貴司編『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社　1988年
6.　大阪府立弥生博物館『平成12年度秋季特別展卑弥呼の音楽会-ま･つ･り･の･ひ･び･き-』大阪府立弥生博物館図録21　2000年
7.　橿原市千塚資料館　秋季特別展『古代の琴』　1992年
8.　笠原　潔　『埋もれた楽器－音楽考古学の現場から』春秋社　2004年
9.　楠　正勝　「木器」『金沢市西念･南新保遺跡Ⅲ』金沢市文化財紀要99　金沢市教育委員会　1992年
10.　滋賀県立安土城考古博物館　『平成17年度春季特別展　王権と木製威信具－華麗なる古代木匠の世界－』2005年
11.　篠原豊一「平城京右京二条三坊十坪・二条条間路」『奈良市埋蔵文化財概要報告書』奈良市教育委員会 1993年
12.　静岡県考古学会　『静岡県における原始･古代の木製祭祀具』2004年度静岡考古学会シンポジウム資料集　2005年
13.　財団法人長生郡市文化財センター『千葉県茂原市国府関連遺跡群』（財）長生郡市文化財センター調査報告第15集　1993年
14.　穂積裕昌『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』三重県埋蔵文化財調査報告115－17　三重県埋蔵文化財センター　2000年
15.　穂積裕昌『一般国道23号線中勢道路(8工区)建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2002年
16.　松浦俊和「コラムその4まつりのかたちⅢ－琴-」『開館5周年記念企画展　近江の古代を掘る　土に刻まれた歴史』大津市歴史博物館　1995年
17.　水野正好「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌』第66巻第1号　日本考古学会　1980年
18.　宮本長二郎「六大A遺跡出土建築材の復元考察」『六大A遺跡発掘調査報告-資料分析･遺物観察表･写真図版編-』三重県埋蔵文化財調査報告115－16　三重県埋蔵文化財センター　2003年
19.　夜須町教育委員会『惣利遺跡』夜須町文化財調査報告書第38集　1997年
20.　山田昌久「組合せ針葉樹製鋤の再検討」『月刊考古学ジャーナル』No.486　ニューサイエンス社　2002年
21.　山田昌久編『考古資料大観』第8巻　弥生･古墳時代　木･繊維製品 小学館　2003年
22.　山田光洋『ものが語る歴史1　楽器の考古学』同成社　1998年

第２表　遺物観察表

1. 縄文土器（晩期有文土器）

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄﾞ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
41-3	⑥区	H6-2/X(S4-6)		壺	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	乳褐色	良		内:口縁部強いナデ。口縁端部ナデ	口唇部肥厚
41-5	⑥区	J8-2	ﾄﾚﾝﾁ	浅鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	黒色/灰褐色	良	外:口縁端部単位的に途切れる沈線(ヘラ状工具) 内:口唇肥厚部凹線状沈線	外:黒色研磨	外:炭化物付着、口縁端部沈線幅狭い。
41-6	⑥区	I8-1/X(S2-57)		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色/乳褐色	良	口縁部三角形陰刻文		外面工具痕あり。
41-7	⑥区	H6-2/X(S2-61)		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	乳褐色	良	口唇部斜位短沈線	口縁端部ナデ	
41-8	⑥区	I8-1/X(S2-57)		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰色/灰褐色	良	口唇部斜位短沈線	口縁端部ナデ	
41-9	⑥区	I5-2/X(S3-2)		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良	内:口縁肥厚部凹線状沈線	外:口縁部文様施文後、丁寧なナデ。口縁端部ナデ。	
41-10	⑥区	I8-4/X(S2-58～60)		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡黄褐色/淡褐色	良		外:口唇部斜位短沈線	
41-11	⑥区	H6-1/X(S2-55)		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良		口縁端部ナデ	
41-12	⑥区	I8-1/X(S2-57)		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/乳褐色	良		外:体部ナデ	
41-13	⑥区	H6-3		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒微量	灰褐色/乳褐色	良	口縁部工事文状横位展開文	外:条痕後ナデ	
41-14	⑥区	H7-4/X(S4-1･6)		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	口縁端部沈線		
41-15	⑥区	H6-3/X(S4-1･6)		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡灰褐色	良			
41-16	⑥区	I8-2		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	口縁沈線集約部粘土貼付し突出。		
41-17	⑥区	I8-1/X(S2-57)		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/乳褐色	良		外:体部ケズリ後ナデ	
41-18	⑥区	H6-3		浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	暗灰褐色	良	口縁部紡錘区画内斜位端沈線		
41-19	⑥区	H7-4/X(S4-1･6)		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良			沈線幅狭い。
41-20	⑥区	H7-4/X(S4-1･6)		浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良			
42-12	⑥区	G6-1/X(S4-1･6)		鉢			27.6	—	7.8	粗砂粒多量	灰褐色/淡褐色	良	口縁部眼鏡状突帯２条、胴部沈線４条	外:文様施文後ナデ　直立口縁	
42-13	⑥区	I5-1/X(S3-3)	川	鉢			25.6	—	7.8	砂粒多量	淡灰褐色	良	口唇肥厚部沈線(４単位に区切る)	外:黒色磨研 内:上半横位ナデ口縁部指頭圧痕	
45-13	⑥区	I8-1	SK-21	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/灰褐色	良		口縁端部ナデ	
45-14	⑥区	J9-1	SK-21	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良		口縁端部ナデ	
45-15	⑥区	I8-2	SK-21	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良			
45-16	⑥区	I7-3/X(S2-57)	SK-21	壺	肩部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色	良	胴部上半沈線施文隆帯貼付		
47-1	⑥区	H7-4/X(S4-1･6)		浅鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒中量	灰褐色	良	三角形陰刻文とトゲ状陰刻文上下非対向。 台形状区画内に斜位短沈線充填。	口縁端部ナデ	口縁部文様上下２帯に分化48-1～8同一個体
47-2	⑥区	H6-4	SD-85		口縁部										
47-3	⑥区	H7-1	SK-21												
47-4	⑥区	H6-4	SD-85												
47-5	⑥区	H6-4	SD-85												
47-6	⑥区	H7-1/X(S4-1･6)													
47-7	⑥区	H6-4	SD-85												
47-8	⑥区	H6-4	SD-85												
47-9	⑥区	H6-4	SD-85	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色/乳褐色	良	口縁横走沈線部三角形陰刻		赤彩、口縁内粘土貼付肥厚
47-10	⑥区	H7-3	SD-85	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	乳褐色	良	内:口縁肥厚部沈線		口縁内粘土貼付肥厚
47-11	⑥区	I8-1	SD-85	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	口縁沈線集約部粘土貼付	口縁端部ナデ	
47-12	⑥区	I7-3	SD-85	浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良			
47-13	⑥区	H7-1	SK-21	浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良	口縁部縦･斜位端沈線	外:胴部研磨	
	⑥区	H6-4	SD-85			1/10以下									
47-14	⑥区	I7-3	SD-85	浅鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰色	良	口縁部工字文状横位展開文様		外:炭化物付着
47-15	⑥区	H7-4	SD-85	浅鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良	口縁端部弧線状沈線		

2. 縄文土器（晩期無文土器）

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
41-1	⑥区	J9-1/X(S2-57)		深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良	口縁端部押圧、頸部沈線(条痕工具側縁)１条	外:口縁部縦位条痕後横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
41-2	⑥区	I8-1/X(S2-57)		深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰色/淡褐色	良	口縁端部押圧、頸部沈線２条	外:口縁部横位ナデ	
41-21	⑥区	J9-1/X(S2-61)		深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡灰褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ 内:口縁部横位ナデ	
41-22	⑥区	I8-1/X(S2-58～60)		深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色/褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部縦位条痕(板状工具)後横位ナデ	
41-23	⑥区	K9-1/X(S2-57)		深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	暗灰褐色/灰褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ	口縁端強い押圧(断面L字状)
41-24	⑥区	J8-2	ﾄﾚﾝﾁ	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ	
41-25	⑥区	I5-2/X(S3-3)	川	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	暗褐色	良	口端部３個一対の小突起(押圧後ナデ)	外:口縁部ナデ	

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
41-26	⑥区	J5-1/X(S3-1)	川	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	乳褐色/黒褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ	
41-27	⑥区	J8-2	ﾄﾚﾝﾁ	深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/褐灰色	良	内側端部押引、頸部沈線１条(条痕原体)	外:口縁部横位ナデ(条痕原体)、胴部縦位条痕(板状工具)	
41-28	⑥区	K9-2/X(S2-57)		深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	頸部沈線２帯３条	外:口縁部縦位条痕後横位ナデ	
41-29	⑥区	I8-1/X(S2-57)		深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	淡褐色	良		外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
41-30	⑥区	I8-2/X(S2-57)		深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡灰褐色	良		外:斜位ナデ。口縁端部ナデ(丸み)	
41-31	⑥区	J8-6	ﾄﾚﾝﾁ	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/褐色	良		外:口縁部横位ナデ。口縁	口縁端面単位的
41-32	⑥区	J9-2/X(S2-57)		深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	口縁部すぼまる
41-33	⑥区	J8-3/X(S2-57)		深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色/暗褐色	良	頸部２条沈線	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)。口縁端部ナデ(平坦面)	
41-34	⑥区	K9-1/X(S2-57)		深鉢	頸胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	褐色/淡褐色	良	頸部沈線１条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
41-35	⑥区	I8-1/X(S2-57)		深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良		外:頸部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	内:炭化物付着
41-36	⑥区	H7-4/X(S4-1･6)		深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	淡褐色	良	頸部沈線(半裁竹管状工具)２帯４条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
41-37	⑥区	I8-1/X(S2-58～60)		深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
41-38	⑥区	G7-1/X(S4-22)		深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
41-39	⑥区	G5-1/X(S2-61)		深鉢	頸胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良	頸部沈線１条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	頸部に接合時の段あり
41-40	⑥区	I8-1/X(S2-57)		深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
41-41	⑥区	I8-2/X(S2-57)		深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
41-42	⑥区	K9-1/X(S2-57)		壺	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	外:炭化物付着
41-43	⑥区	I7-4	SD-86	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗灰色/灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
41-44	⑥区	G6-4/X(S4-1･6)		深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
41-45	⑥区	H6-3/X(S4-1･6)		壺	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡橙褐色	良	口唇部弧状突帯(指押圧)	外:頸部指頭圧痕。口縁端部ナデ。	突帯幅(弧状幅)狭い。
41-46	⑥区	J8-2	ﾄﾚﾝﾁ	壺	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	口唇部弧状突帯(指押圧)	外:頸部ナデ。口縁端部ナデ。	
41-47	⑥区	I4-1/X(S3-3)	川	壺	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	淡橙褐色	良	口唇部弧状突帯(指押圧)	外:頸部縦位ナデ(板状工具) 口縁端部ナデ。	
41-48	⑥区	H6-3		壺	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良	口唇部弧状突帯(指押圧)	外:頸部ナデ　口縁端部ナデ。	
42-4	⑥区	G5-4/X(S4-1･6)		深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗灰色/淡褐色	良	口縁端部押圧	外:縦位条痕(板状工具)	外:炭化物付着
42-5	⑥区	G6-4/X(S4-22)		深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/淡褐色	良	口縁端部押圧	外:斜位条痕(板状工具)	
42-6	⑥区	I8-2/X(S2-57)		底部			—	4.4	3.7	粗砂粒多量	淡灰褐色/淡黄褐色	良		外:胴部縦条痕(板状工具)、胴底部横位ナデ、底部ナデ 内:ナデ(板状工具)	
42-7	⑥区	I8-1/X(S2-57)		深鉢			32.8	—	9.0	粗砂粒多量	淡灰褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
42-8	⑥区	G6-4/X(S4-1･6)	SK-21	深鉢			25.0	—	11.7	粗砂粒多量	灰褐色/淡褐色	良		外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	頸屈曲部に接合時の段有
42-9	⑥区	J8-2	ﾄﾚﾝﾁ	深鉢			21.6	—	10.6	砂粒多量	暗褐色/暗灰褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ、胴部条痕(板状工具)	外:炭化物付着
45-17	⑥区	J9-2	SK-21	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具) 口縁端部ナデ(丸み)	
45-18	⑥区	I7-3/X(S2-57)	SK-21	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰色	良	口縁端部押圧	外:口縁部ナデ	
45-19	⑥区	I8-2/X(S2-57)	SK-21	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
45-20	⑥区	I8-2	SK-21	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
45-21	⑥区			底部			—	5.5	2.5	粗砂粒多量	淡灰褐色/暗灰褐色	良		外:胴部縦条痕(板状工具)、底部ナデ	底部円盤側部突出
45-22	⑥区	I7-3/X(S2-57)	SK-21	底部			—	5.0	3.0	粗砂粒多量	淡灰褐色	良		外:内:ナデ 外:底部ナデ(工具痕残る)	底部円盤側部突出
45-23	⑥区	I8-3		深鉢			15.1	—	4.1	砂粒多量	灰褐色/淡褐色	良	口縁端部キザミ(ヘラ)、頸部沈線２帯３条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
47-16	⑥区	H6-4	SD-85	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	黒灰色	良		外:縦位条痕(板状工具) 内:横位ナデ	
47-17	⑥区	I8-1	SD-85	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	淡褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
47-18	⑥区	I8-1	SD-85	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良		外:口唇部縦位条痕後幅狭横位ナデ、以下縦位条痕(板状工具)	
47-22	⑥区	H6-4	SD-85	深鉢			37.0	—	11.4	粗砂粒多量	灰褐色/暗褐色	良		外:口縁部横位ナデ、縦位条痕(櫛状工具)。口縁端部ナデ(面)	
49-11	⑥区	I4-1	川堰下	深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	暗褐色	良	口縁端部押圧	外:ナデ	口縁端押圧浅く弱い。
49-12	⑥区	I4-3	川	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗灰褐色/灰褐色	良	口縁側端部押圧	外:口縁部横位ナデ	
49-13	①区	F3-2/X(S1-10)	川	深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部縦位条痕(板状工具)後横位ナデ	外:炭化物付着
49-14	⑥区	I4-6	川堰下	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色	良	口縁端部押圧	外:口縁部ナデ	口縁部大きく開く。
49-15	⑥区	I4-3	川堰下	深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色	良	胴部縦位条痕(板状工具)、頸部沈線(ヘラ状工具)1帯2条	外:口縁部横位ナデ。口縁端部ナデ。	
49-16	⑥区	I4-3	川堰下	深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒中量	暗褐色/暗灰褐色	良	頸部沈線(ヘラ状工具)2帯3条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)。口縁端部ナデ(平坦面)	外:炭化物付着
49-17	⑥区	K7-1/X(S4-18)	川	深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	暗灰褐色/褐色	良	頸部沈線1条	外:口縁縦位条痕後横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	外:炭化物付着
49-18	⑥区	I4-3	川	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色/暗褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
49-19	⑥区	J5-3/X(S3-3)	川	深鉢	胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
49-20	⑥区	I5-2	川堰下	深鉢	頸胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良		外:縦位条痕(板状工具)	
50-11	①区	F3-1/X(S1-10)	川	深鉢			27.2	—	22.9	粗砂粒多量	暗灰褐色	良	口縁端部押圧、頸部沈線(条痕原体)1条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	
50-12	⑥区	I5-1/X(S3-3)	川堰下	深鉢			31.4	—	20.8	粗砂粒多量	黒褐色	良		外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	外:炭化物付着
50-13	①区	E1-3・4、E2-1 F1-4、F3-1・2 F4-2/X(S2-5)	川	深鉢			33.4	—	27.0	粗砂粒多量	灰褐色/暗褐色	良	口縁端部押圧、頸部沈線(条痕原体側部)1条	外:斜位条痕(板状工具)	外:炭化物付着
52-4	①区	F3-1・2/X(S1-10)	川	壺			8.4	6.9	23.5	粗砂粒多量	淡褐色/褐色	良	口縁端部キザミ(ヘラ)	外:口縁部縦位条痕後横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)、底部中央ナデ	胴部横位断面楕円形(ゆがみ有)
52-9	⑥区	I4-3	川堰下	壺			—	—	20.2			良	頸部沈線1条	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	内・外:炭化物付着
56-9	⑤区	I12-4/X	SK-15	壺			—	—	3.6	粗砂粒多量	淡褐色/黒灰色	良	頸胴部沈線2帯3条	外:縦位条痕(板状工具) 内:ナデ(板状工具)	条痕条線細い

3.弥生土器

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
41-4	⑥区	I7-4/ X(S4-1・6)		深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒 多量	黒褐色/ 灰褐色	良	内外:口縁屈曲部凹線状沈線(指)	外:黒色研磨	
42-1	⑥区	I4-3/ X(S3-3)	川	壺	口頸部	1/10以下				粗砂粒 中量	褐色	良		外:頸部横位ハケ 内:ナデ	
42-2	⑥区	J5-3		甕	頸胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒 多量	灰褐色/ 暗褐色	良		外:横位・斜位条痕(二枚貝)	
42-3	⑥区	G7-1/ X(S4-15)		深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒 多量	暗灰色/ 灰褐色	良	口縁端部押圧	外:縦位条痕(板状工具)	
42-10	⑥区	J5-1/ X(S3-2)	川	甕			15.2	—	9.0	粗砂粒 多量	淡褐色	良	口縁端部押引	外:口頸部横位条痕(二枚貝) 内:口縁部横位ナデ、胴部縦位ナデ	外:炭化物付着
42-11	⑥区	I6-3/ X(S4-1・6)		甕			19.7	—	8.2	粗砂粒 多量	淡灰褐色 /淡褐色	良	口縁端部押引	外:口 _ 胴部横位条痕(二枚貝) 内:ナデ	外:炭化物付着
42-14	⑥区	K8-3/ X(S2-57～61)		壺			13.7	7.1	29.5	粗砂粒・ 赤色粒子 多量	赤橙褐色	良	胴部上半ヘラ描直線文3条1帯	外:頸胴部横位ミガキ、底部ナデ 内:口頸部横位ナデ、胴部ナデ	口縁部肥厚し段あり、頸胴部に接合時の段あり。
42-15	⑥区	I3-1・4/ X(S3-1)		壺			23.3	4.7		砂粒 多量	橙褐色/ 灰褐色	良	頸部～胴部上半縦位ハケ後櫛描文5条8帯(直線文・流水状文・直線文-2帯、流水文状文・直線文ー1帯)、胴部下半櫛描鋸歯文	外:頸部 _ 胴部上半縦位ハケ 内:ナデ・指頭圧痕	
42-16	①区	D4-2/ X(S2-5)		壺			11.2	—	15.7	粗砂粒 多量	淡灰褐色	良	頸部ヘラ描沈線(6条)	外:口縁部 _ 胴部ナデ 内:口縁横ナデ、頸胴部ナデ・指頭圧痕	内・外炭化物付着、袋状口縁
42-17	⑥区	I3-4/ X(S3-3)	川	甕			21.7	—	10.0	粗砂粒 多量	暗灰褐色	良		外:口縁端部(ナデ丸み)、口頸部横位条痕(二枚貝)、胴部縦位条痕(二枚貝) 内:口縁部横位条痕(二枚貝)以下横位ナデ	外:炭化物付着
42-18	⑥区	J8-4/ X(S2-57)		壺		1/2	11.2	3.8	22.0	砂粒・ 粗砂粒 少量	暗黄褐色	良		外:頸部縦位ハケ後ナデ、胴部斜位ハケ 内:口縁部・胴部下半横位ハケ、胴部上半ナデ	外:炭化物付着
42-19	⑥区	I5-1/ X(S3-3)	川	壺	口頸部	口縁完形	9.0	—	7.9	砂粒 多量	黄褐色	良	頸部櫛描文４条(直線文)	外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ	
42-20	⑥区	G5-4/ X(S4-23・18)		壺	口～胴部	2/3	8.0	—	11.2	砂粒 少量	黒褐色	良	口縁端部キザミ、頸部櫛描文６条(直線文、波状文)	外:口縁部ナデ、頸部ハケ 内:ナデ	頸部シボリ痕
43-1	⑥区	I5-2/ X(S3-3)	川	壺	口頸部	1/2	10.4	—	8.6	細砂粒 少量	黄褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ 内:横位ハケ、頸部ナデ	
43-2	⑥区	I5-1	SD-75	壺	頸部	—	—	—	9.2	砂粒 少量	暗橙褐色	良	頸部櫛描文7条3帯(直線文1帯・波状文1帯・直線文1帯)	外:縦位ハケ 内:ハケ後ナデ、胴部指頭圧痕	
43-31	①区	F6-3	SK-5	甕	口～胴部	1/4	22.0	—	9.8	砂粒・ 細砂粒 多量	暗褐色	良	外:口縁端部キザミ	外:斜位ハケ 内:横位ハケ	
43-32	①区	F7-2	SK-5	甕		1/6	21.6	5.6	24.1	粗砂粒 多量	淡黄色	良		外:縦位ハケ 内:不明	外:炭化物付着、底部に穿孔あり。
45-1	⑥区	M4-2・3	SK-10	甕			23.6	—	13.4	粗砂粒 多量	暗褐色/ 淡褐色	良	口縁端部押引	外:口頸部横位ナデ、胴部横位条痕(板状工具) 内:ナデ	
45-2	①区	F5-4	SK-13	壺	口頸部	1/4	23.0	—	14.6	砂粒・ 粗砂粒 少量	淡黄橙色	良	外:口縁端部キザミ、体部櫛描文6条6帯(直線文4帯・波状文2帯) 内:口縁部櫛描文6条4帯(波状文)	外:縦位ハケ 内:横位ハケ	
45-12	⑥区		SK-5	壺	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒 多量	暗褐色	良	口縁部沈線文(三角形文・波状文)、口縁部下端押圧(指)	外:口縁部横位条痕(条痕→施文→ナデ)、頸部縦位条痕、頸部下端横位条痕 内:ナデ	口縁端部欠損、受口状口縁
45-24	⑥区	G7-4/ X(S4-1・6) I8-1・2	SK-21	甕			12.6	—	15.0	粗砂 粒・赤 色粒子 多量	淡褐色/ 反灰褐色	良		外:横ナデ 内:口縁部ナデ、胴部横位ナデ、胴部下半ケズリ	輪積み痕顕著
47-19	⑥区	K5-1	SD-77	壺	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒 多量	灰褐色	良	外:口縁端部押圧、頸部押引 内:口縁部屈曲部押圧	外:胴部縦位条痕 内:胴部ナデ	
47-20	⑥区	L5-2	SD-70	壺	胴部	1/10以下	—	—	—	砂粒 多量	灰褐色/ 赤褐色	良	胴部刺突隆帯(櫛)、沈線文(長方形文・上下対向トゲ状文)、刺突文(櫛)	内:ナデ	
47-21	⑥区	K5-1	SD-78	深鉢	口縁部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒 多量	灰褐色/ 黒灰色	良	口縁側端部キザミ	外:横位条痕(櫛状工具)	
47-23	⑥区	L5-1・2/ Ⅱ・Ⅲ	SD-70	甕	口～胴部	1/6	20.7	—	13.5	砂粒 多量	明黄橙色	良	口縁端部波状文、頸部・体部櫛描文11条3帯(直線文)	外:頸部縦位ハケ、胴部斜位ハケ 内:横位ハケ	
47-24	⑥区	I7-4 I8-1・2 I7-4 I8-2/ X(S2-58～60)	SD-85 SD-86	甕	口～胴部	1/2	25.2	—	22.2	砂粒・ 白色粒子 少量	暗黄橙色	良	口縁端部キザミ	外:ハケ(口縁部横位、胴部斜位) 内:ハケ(口縁部横位、胴上半斜位、胴下半縦位)	外:炭化物付着

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
47-25	⑥区	J8-4/ X(S2-57)		甕			14.3	—	12.4	粗砂粒 中量 赤色粒子 微量	灰褐色/ 淡褐色	良	頸胴部櫛描直線文7条3段・刺突文二個一段	外:口縁部横ナデ、胴部斜位ハケ 内:口縁部横位ナデ、胴部上半ハケ、胴部下半ナデ	
		J8-1・4	SD-85												
47-26	⑥区	J8-2	SD-85	壺	口～胴部	1/2	15.8	—	16.4	砂粒・ 粗砂粒 多量 赤色粒子 少量	淡黄橙色	良	口縁端部キザミ　櫛描文7条6帯(直線文4帯・波状文1帯・直線文1帯)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	
		J8-2・3/ X(S2-58～60)													
47-27	⑥区	J8-4	SD-85	甕			24.5	—	4.2	粗砂粒 多量	暗褐色/ 褐色	良	口縁上面押圧(二個一対・ハケ原体)、口縁屈曲部押圧(ハケ原体)	外:斜位ハケ 内:横位ハケ	内面屈曲部肥厚
48-10	⑥区	K2-3/Ⅱ・Ⅲ (S2-8～11)	SD-30	壺			22.2	—	6.7	粗砂粒 多量	暗褐色	良	口縁端部キザミ、胴部ヘラ描多重長方形文 内:口縁部ヘラ描長方形	外:斜位ハケ 内胴部横位ナデ	内:炭化物付着
48-11	⑥区	K2-2	SD-30	甕	口～胴部	1/2	19.0	—	5.8	砂粒・ 粗砂粒 多量	赤橙色	良	口縁端部キザミ　頸部羽状刺突文 内:口縁部羽状刺突文３列	外:縦位ハケ 内:横位ハケ	外:炭化物付着
48-12	⑥区		SD-30	甕	口～胴部	1/10以下	19.4	—	17.7	砂粒・ 粗砂粒 多量	黄橙色	良	外:胴部波状文	外:ハケ	外:炭化物付着 内:付着物
48-13	⑥区	Ⅱ(S2-8～10)	SD-30	壺			8.8	—	(22.9)	粗砂粒 多量 金雲母 微量	赤橙褐色 /明橙褐色	良	頸部櫛描文5条6帯(直線文1帯、直線文・波状文－2帯、直線文1帯)	外:胴部斜位ミガキ 内:頸部シボリ、胴部ナデ、指頭圧痕	
48-14	⑥区		SD-30	鉢		1/3	13.0	5.9	11.8	砂粒 多量	赤橙色	良	口縁端部キザミ、口縁部竹管文	外:口縁部横ナデ	
48-15	⑥区		SD-30	壺			26.7	—	7.5	粗砂粒 多量	淡灰褐色	良	口縁端部沈線、口縁部ヘラ描多重方形文、口縁屈曲部下端(粘土貼付突出)指押圧	外:頸部縦位条痕(二枚貝?) 内:横位ナデ	受口状口縁
48-16	⑥区	Ⅱ(S2-8～10)	SD-30	壺	口縁部	1/6	18.6	—	4.0	粗砂粒 多量	明黄橙色	良	口縁端部等間隔につまむ。	外:縦位ハケ	
48-17	⑥区	K2-3/Ⅱ・Ⅲ (S2-8～11)	SD-30	壺	口～胴部	1/3	16.7	—	27.7	砂粒 少量	暗黄橙 褐色	良	口縁端部キザミ、頸～胴部上半櫛描文6条12帯(直線文2帯・簾状文1帯－2段、直線文2帯・波状文1帯－1段、直線文3帯) 内:口縁部波状文	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部斜位ハケ	
48-18	⑥区	K2-2	SD-30	甕		3/4	26.0	6.0	27.8	粗砂粒 多量	暗黄橙色	良	口縁端キザミ 内:口縁部櫛描文(波状文)	外:ハケ(綾杉文状) 内:ハケ後ナデ?	外:炭化物付着 内:底部に付着物
48-19	⑥区		SD-30	甕	口～胴部	1/2	25.6	—	20.4	砂粒 多量	暗黄白色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ(粗)胴部横位ハケ(細)	内面に使用痕あり
		Ⅱ(S2-8～10)	SD-30												
48-20	⑥区		SD-30	壺	口頸部	1/10以下	13.0	—	7.1	砂粒 多量	黒褐色/ 淡黄色	良	頸部櫛描文４条１帯(直線文)	外:斜位ハケ	
48-21	⑥区	L2-2	SD-30	壺	頸～底部	底完形	—	4.6	11.6	砂粒 多量	淡橙色	良	胴部上半に櫛描文(直線文)	内:底部ナデ	
49-1	⑥区		SD-30	壺			—	7.2	29.2	粗砂粒 多量 赤色粒子 中量	橙褐色/ 淡褐色	良	頸部下端櫛描直線文3条1段・ヘラ描波状文1段、胴部上半櫛描波状文	外:胴部上半ミガキ、胴部下半斜位・縦位ハケ・縦位ミガキ、胴底部横位ハケ、底部ナデ 内:胴部上半横位ハケ後ナデ、胴部下半ナデ・指頭圧痕	
49-2	⑥区		SD-30	壺か甕	底部	底完形	—	5.6	10.5	砂粒・ 細砂粒 多量	暗褐色/ 暗黄色	良		外:縦位ハケ	
49-3	⑥区	J2-3	SD-69	壺		ほぼ完形	9.4	5.6	18.8	砂粒・ 細砂粒 多量	黄橙色	良	外面上半に櫛描文5条5帯(直線文1帯、直線文・波状文－2帯)	外:ミガキ 内:胴部下半横位ハケ	口縁部に二孔一対の穿孔
49-4	⑥区	I3-1/ Ⅰ(S2-15・16)	SD-69	壺	胴～底部	底1/3	—	3.5	15.1	粗砂粒 多量	淡黄橙色	良	胴部上半櫛描文5条5帯(直線文・波状文－2帯、直線文1帯)	外:縦位ハケ 内:ナデ	
49-5	⑥区	J2-3 J3-2・3	SD-69	甕		1/4	21.3	4.9	23.4	粗砂粒 多量	暗黄橙 褐色	良	口縁端部キザミ 内:口縁部櫛描文(波状文)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	底部穿孔、底部内 外:炭化物付着
49-6	⑥区	J2-3	SD-69	小型壺		1/10以下	6.0	4.6	13.7	粗砂粒 多量	淡黄橙色	良		外:胴部ハケ→ナデ→ミガキ 内:ナデ	内外:炭化物付着
49-7	⑥区	J3-2	SD-69	甕	頸～底部	底5/12	—	5.0	23.6		暗橙褐色 /橙褐色	良		外:胴部縦位ハケ、頸部ナデ、底部ナデ 内:斜位ハケ	
49-8	⑥区	K2-4 K3-4	SD-31	壺			24.7	—	13.7		暗褐色/ 暗灰褐色	良	口縁端部キザミ(ハケ原体)	外:斜位ハケ後ナデ 内:斜位ハケ	
			SD-30												

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
49-9	⑥区	H3-1	SD-73	甕	口～胴部	5/12	11.9	—	18.9	粗砂粒多量	暗橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ナデ 内:ハケ後ナデ、一部指頭圧痕残る	
		H3-1・4/X(S3-2)	SD-31												
49-10	⑥区	K4-1	SD-53	甕			25.6	—	8.3	砂粒中量	暗灰褐色/灰色	良		内:胴部ナデ、指頭圧痕	
		L6-1/X(S1-4)													
49-21	⑥区	I4-3	川	壺	口頸部	1/10以下	—	—	—	細砂粒多量	黒褐色	良	口縁部沈線文(多重方形文・縦位短沈線文)、口縁屈曲部下押圧(指)後キザミ(ヘラ)、頸部下端沈線文1条	外:ナデ 内:口縁部指頭圧痕	口縁部欠損、受口状口縁
50-1	⑥区	I5-2	川	壺	口頸部	1/10以下	—	—	—	砂粒中量	暗褐色/灰褐色	良好	外:口縁端部押圧、頸部下端沈線2条 内:刺突文(２個１対)	内外:丁寧な横ナデ	
50-2	⑥区	K6-2/X(S4-9)	川	甕	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒中量	灰褐色/黒褐色	良	口縁端部押引	外:横位条痕(二枚貝)	
50-3	⑥区	J5-3/X(S4-9)	川	甕	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	口縁端部押引	外:縦位条痕(二枚貝)	
50-4	⑥区	J8-1	SD-85	深鉢	口～胴部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/灰褐色	良	口縁端部キザミ	外:胴部斜位条痕(二枚貝？)後、口縁部横位条痕 内:ナデ	
50-5	⑥区	J5-2/X(S4-9)	川	甕	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗灰褐色/黒褐色	良	口縁端部	外:横位条痕(二枚貝) 内:斜位条痕(二枚貝？)	
50-6	⑥区	I4-3	川堰下	壺	頸部	1/10以下	—	—	—	砂粒多量	灰褐色/黒褐色	良	頸部断面三角形貼付突帯、突帯上二枚貝(サルボウ)背面圧痕	外:頸胴部に横位条痕(二枚貝)	搬入品の可能性高い。
50-7	⑥区	I4-3	川	甕	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	灰褐色	良	口縁端部押引	外:口縁部横位条痕(二枚貝)	内外面二次焼成痕
50-8	①区	F3-2	川	壺	口頸部	1/10以下	—	—	—	砂粒中量	淡橙褐色	良好		外:口頸部縦位ハケ後、横位ミガキ、頸部下端段部沈線 内:横位ミガキ	
50-9	⑥区	J6-1/X(S4-9)	川	甕	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒中量	暗褐色/暗灰褐色	良		外:横位条痕(二枚貝)	外：炭化物付着
50-10	⑥区	K6-4/X(S4-11・12)	川	深鉢	口頸部	1/10以下	—	—	—	粗砂粒多量	暗褐色/灰褐色	良	口縁端部押引	外:横位条痕(二枚貝)	外：炭化物付着
50-14	①区	F2-4/X(S1-10)	川	深鉢			24.8	5.5	18.8	粗砂粒多量	淡褐色/黒色	良	口縁端部キザミ	外:口頸部横位条痕(二枚貝)、胴部斜位条痕(二枚貝)、底部ナデ 内:口縁部横位ナデ	内・外:炭化物付着、底部周縁使用による
50-15	①区	F3-2/X(S1-10)	川	深鉢			28.6	—	10.0	粗砂粒多量	暗褐色/褐色	良	外:口縁端部押圧	外:口縁部横位ナデ、胴部縦位条痕(板状工具)	外:炭化物付着
50-16	⑥区	I4-1・I3-4/X(S3-3)	川	壺			16.7	—	8.5	粗砂粒多量 黒雲母微量	暗褐色		口縁部縦位短弧文(対向し８単位)、頸部沈線(３条１対)２段、胴部多重方形文・円形突起(８単位)内:口縁部羽状刺突文１段半、以下弧状浮文(側縁押圧)	外:丁寧なナデ後沈線文 内:頸部横位ナデ、胴部縦位ナデ	外:炭化物付着 水平口縁
50-17	⑥区	J5-2/X(S3-3)	川	壺	胴部		—	—	5.5	砂粒少量	暗灰褐色/黒褐色	良	胴部沈線文(多重方形文)・三角形陰刻文(単位的)	外:縦位ハケ後施文 内:ナデ	内・外:炭化物付着
51-1	⑥区	K6-3/X(S4-15・23・18)	川	甕	口頸部	1/6	43.4	—	6.0	砂粒多量	黄橙色	良	口縁端部キザミ　頸部櫛描文(直線文) 内:口縁部櫛描文(波状文)	外:口縁部縦位ハケ	
		L5-1/Ⅱ	SD-70												
51-2	⑥区	J5-3/X(S3-3)	川	甕	口～胴部	1/4	16.0	—	6.8	砂粒多量	暗褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ後胴部横位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	外:炭化物付着
51-3	⑥区	J5-3/X(S3-3)	川	甕			16.0	—	10.0	砂粒中量	黒褐色/淡褐色	良	口縁端部キザミ、胴部上半櫛描文5条6帯(直線文3帯・波状文2帯・直線文1帯)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	外:炭化物付着
51-4	⑥区	I4-3	川	甕			22.4	—	5.0	砂粒多量 赤色粒子中量	赤橙褐色	良	口縁端部押圧	頸部上端強い横位ナデ、頸部縦位ケズリ後横位ハケ 内:口縁部横位ナデ、胴部横位置ナデ	二次焼成により赤化
51-5	⑥区	I4-1	川堰下	甕	口頸部	1/6	22.0	—	5.0	細砂粒少量	黒褐色	良	口縁端部キザミ、頸部櫛描文(直線文)	外:縦位ハケ 内:横位ハケ	
51-6	⑥区	I5-2/X(S3-3)	川堰下	甕	口～胴部	1/6	22.0	—	14.3	砂粒多量	黄橙色	良	口縁端部キザミ 内:口縁部櫛描文(波状文)	外:縦位ハケ 内:頸部横位ハケ(粗)、胴部ハケ(横→斜)(細)	
51-7	⑥区	J5-3/X(S3-3)	川	甕	口縁部	1/6	18.0	—	4.4	砂粒微量	黒褐色/暗橙褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ後口縁ナデ 内:口縁横位ハケ、胴部指頭圧痕	
51-8	⑥区	J5-2/X(S3-3)	川	壺	口縁部	1/10以下	18.0	—	4.5	砂粒多量	暗黄灰色	良	口縁端部キザミ、口縁・頸外櫛描文(直線文)	外:縦位ハケ後口縁付近横位ハケ	

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
51-9	⑥区	J5-4/ X(S3-3)	川	甕			20.2	—	6.4	砂粒 多量	黒色/ 暗褐色	良	口縁端部押引	外:口 _ 胴部横位条痕（二枚貝） 内:口縁部横位条痕、頸部以下ナデ	外:炭化物付着
51-10	⑥区	J3-2	川	甕	口～胴部	1/6	19.5	—	10.7	砂粒 多量	橙褐色	良	口縁端部キザミ	外:頚部ナデ、胴部縦位ハケ後ナデ	
51-11	⑥区	J6-7	川	甕	口～胴部	2/3	18.6	—	14.2	砂粒 多量 赤色粒 子少量	暗褐色	良	口縁端部キザミ	外:斜位ハケ 内:ハケ(口縁部横位、胴部斜位)	外:炭化物付着
51-12	⑥区	J5-3/ X(S3-3)	川	甕			18.4	—	2.1	砂粒 多量	灰褐色/ 淡黄褐色	良	口縁端部押圧(2個1対)、口縁屈曲部押引(条痕原体)	外:横位条痕(二枚貝) 内:口縁部・頸部横位ナデ	外:炭化物付着、内面屈曲部肥厚
51-13	⑥区	J5-3/ X(S3-3) J5-4	川	甕			16.7	—	10.7	砂粒 多量	暗褐色/ 淡灰褐色	良		外:口縁部横位ナデ、胴部縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	外:炭化物付着
51-14	⑥区	I5-1・2/ X(S3-3)	川	甕	口～胴部	1/6	26.0	—	14.9	砂粒 多量	黄橙色	良	口縁端部キザミ	外:口 _ 頚部横ナデ、胴部縦位ハケ(粗) 内:横位ハケ(細)	外:炭化物付着
51-15	⑥区	J5-3/ X(S3-3)	川	甕		1/6	21.0	5.1	24.0	粗砂粒 多量	暗黄橙 褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ、底部ナデ 内:口縁部横位ハケ(粗)、胴部斜位ハケ(細)、底部ナデ	
51-16	⑥区	J6-1/ X(S3-3)	川	甕	口～胴部	1/6	28.0	—	8.5	細砂粒 多量 砂粒 少量	赤褐色/ 黄褐色 (黒色)	良		外:口縁部横ナデ、胴部斜位ハケ 内:口縁部横ナデ、頚部ハケ、胴部ヘラナデ	
51-17	⑥区	J5-2/ X(S3-3)	川	甕	口縁部	1/10以下	26.0	—	3.2	砂粒 微量	暗褐色	良		外:縦位ハケ 内:斜位ハケ後ナデ	
51-18	⑥区	J5-3・J6-2/ X(S3-3)	川	壺			22.0	—	4.1	砂粒 多量	赤橙褐色			外:口縁端部ナデ(面)、口頸部縦位ハケ後横ナデ 内:横位ナデ	二次焼成赤色化
51-19	⑥区	J5-2/ X(S3-3)	川	壺	口縁部	1/6	12.0	—	3.7	粗砂粒 微量 砂粒 少量	暗橙褐色	良	口縁端部キザミ、頚部櫛描文4条3帯(直線文･波状文･直線文)	外:縦位ハケ 内:口縁部ハケ、頚部ナデ	
51-20	⑥区	J5-2･3/ X(S3-3)	川	壺			196	—	5.6	粗砂粒 多量	橙褐色/ 淡褐色	良		外:口縁端部ナデ(丸み)後刺突(ハケ原体)、口頸部縦位ハケ後横ナデ、頚部縦位ハケ 内:横位ナデ	
51-21	⑥区	I4-2	川	壺	口縁部	1/4	15.0	—	3.7	砂粒 少量	黄褐色 (黒色)	良	口縁端部2個1組のキザミ	外:縦位ハケ(細) 内:横位ハケ(粗)	
51-22	⑥区	I4-3	川堰下	甕	口～胴部	1/3	13.0	—	7.7	粗砂粒 多量	黒褐色	良	体外に櫛描文6条3帯(直線文)	外:口縁部横ナデ 内:ナデ	外･口縁内:炭化物付着
51-23	⑥区	J5-2/ X(S3-2) I 5-1/ X(S3-3) I4-1・4	川 川堰下	甕			18.0	—	17.0	粗砂粒 多量 赤色粒 子微量	淡灰褐色 /淡褐色	良		外:口縁端部ナデ(面)、頚部横位ナデ、胴部縦位ナデ(板状工具･４条一単位) 内:口縁部横位ナデ、胴部横位ナデ	
52-1	⑥区	I4-3 I5-2 I5-1・2/ X(S3-3)	川堰下 川	壺	口～胴部	3/4	15.2	—	32.1	砂粒 多量	橙褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ後ナデ 内:口縁部･頚部ナデ、胴部横位ハケ	
52-2	⑥区	I4-2/ X(S3-3)	川	壺			—	7.0	29.1	砂粒 多量	灰色/ 淡褐色	良		外:頚部ナデ、胴部上半斜位ハケ後強いナデ、胴部下半斜位ハケ･縦位ナデ 内:ナデ･指頭圧痕	胴部水平断面楕円形 (ひずみあり)
52-3	⑥区	K6-3/ X(S4-9) K7-1/ X(S4-11・12)	川	壺			12.6	—	9.5	粗砂粒 多量	灰褐色	良		外:口縁端部ナデ(面)、頚部縦位ハケ後ナデ、胴部ハケ後縄文ＬＲ 内:口縁部縄文ＬＲ、頚部縦位ナデ、胴部ナデ	
52-5	⑥区	J5-2 J5-3/ X(S3-3)	川	壺			19.2	—	10.8	粗砂粒 多量	淡褐色	良	口縁側端部指押圧、口縁端部櫛描波状文5条以上、頚部櫛描文7条4帯（波状文）	外:頚部横位ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ナデ	
52-6	⑥区	K6-3・J5-3・ J6-2/ X(S4-9) J5-2･3、 K6-2	川	壺	口～胴部	11/12	21.6	—	12.3	砂粒 少量	橙褐色	良	口縁端部キザミ、頚部櫛描文6条4帯(直線文) 内:口縁部櫛描文6条2帯(波状文)	外:縦位ハケ 内:口縁部斜位ハケ後波状ハケ、胴部斜位ハケ後ナデ	
52-7	⑥区	J6-1/ X(S4-9)	川	壺	口縁部	1/6	17.1	—	6.2	砂粒 微量	黒色/ 暗褐色	良	頚部櫛描文７条２帯(直線文)	内:ナデ、指頭圧痕	
52-8	⑥区	I1・4-2/ X(S3-2)	川	壺	口縁部	1/4	18.0	—	6.0	砂粒 少量	暗橙褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ後ナデ 内:横位ハケ	

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
52-10	⑥区	I4-1・I4-2/ X(S3-3) J4-4/Ⅲ	川	壺	口～胴部	1/2	21.0	—	24.3	砂粒 多量	灰褐色	良	口縁端部押圧　頚部～胴部縦位ハケ後櫛描文8条4帯(直線文)	外:頚部 _ 胴部縦位ハケ、胴部下半横位ハケ 内:横位ハケ	
52-11	⑥区	J6-4/ X(S4-18・23)	川	壺	口～胴部	1/2	22.0	—	25.0	砂粒 多量	暗赤橙色	良	口縁端部キザミ、頚部櫛描文8～9条5帯(直線文2帯、簾状文・波状文－1帯、直線文1帯)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ	
53-3	⑥区	L7-4/ X(S4-5)	川	壺	口頚部	1/2	18.4	—	10.3	砂粒 多量	淡黄灰色	良	口縁内外縦行刺突文、頚部櫛描文5条(直線文)	外:口縁部横位ハケ、頚部縦位ハケ 内:頚部横位ハケ	
53-4	⑥区	I4-2・J4-3/ X(S3-3)	川	壺	口縁部	1/10以下	13.4	—	6.2	砂粒 多量	暗褐色/ 淡黄色	良	口縁端部キザミ、口縁部列点文、頚部櫛描文4条1帯(直線文)	外:縦位ハケ 内:横位ハケ	
53-5	⑥区	K6-4	SD-77	壺	口頚部	1/4	14.1	—	13.5	粗砂粒・ 赤色粒子 微量	淡黄橙 褐色	良	口縁部凹線状沈線６条、縦行刺突文・直線文(ハケ状工具)・縦行刺突文	外:縦位ハケ 内:斜位ハケ後ナデ	
		K6-4/ﾄﾚﾝﾁ													
		K7-1/ X(S4-11・12・9)	川												
53-6	⑥区	I4-1	川堰下	壺			7.0	—	5.6	赤色粒子 少量	淡灰褐色 /黒褐色	良	口縁～胴部櫛描文4条7帯(直線文・波状文－3帯、直線文－1帯)	内:口縁部指頭圧痕・ナデ (2本一単位板状工具)	無頸壺
		I4-2/ X(S3-3)	川												
53-7	⑥区	K6-2/ X(S4-9) K6-3、 J5-3、 J6-1	川	壺			13.8	—	21.6	砂粒 多量	淡褐色/ 淡灰褐色	良	口縁端部押圧(櫛原体)、口縁部斜位押圧・羽状文(櫛原体)1段、頚部～胴部櫛描文9条11段(簾状文・直線文－3帯、波状文・直線文－2帯、直線文1帯)	外:頚部上半横位ハケ、頚部下半 _ 胴部縦位ハケ 内:口縁部横ナデ、頚部斜位ハケ、胴部指頭圧痕後ハケ	受口状口縁・櫛原体は3本一単位の連体
53-8	⑥区	I4-3/ X(S3-3)	川	壺			11.0	—	6.3	粗砂粒 多量	黒色/ 淡褐色	良	口縁部櫛描文7条3帯(波状文)、屈曲部ナデ後押圧(二枚貝?)	外:頚部斜位ハケ後ナデ 内:横ナデ・指頭圧痕	袋状口縁
53-9	⑥区	I3-4 I4-2/ X(S3-3)	川	壺			21.4	—	8.2	粗砂粒 多量	淡灰褐色 /灰褐色	良	口縁端部キザミ・円形刺突(6単位)、口縁部矢羽根状文、多重長方形文(斜位短沈線充填)・綾杉文、口縁屈曲部下端押圧突帯(指)	外:頚部横位羽状条痕(櫛状工具) 内:口縁部横位ナデ、頚部ナデ	受口状口縁
		I4-1	川堰下												
53-10	⑥区	J8-2/ X(S2-59・60) H4-2/ X(S3-1)		壺			26.0	—	6.6	砂粒 多量 黒雲母 中量	暗褐色	良	外:口縁部弧状条痕(二枚貝)、棒状浮文(６単位)、口縁屈曲部下押圧突帯(指) 内:口縁端部押引(条痕原体)、頚部横位条痕(二枚貝)	外:頚部横位条痕 内:口縁部・頚部ナデ	受口状口縁、搬入品の可能性高い
		J6-3	ﾄﾚﾝﾁ												
		I5-2/ X(S3-3)	川												
53-11	⑥区	J5-2/ X(S3-3)	川	壺			28.0	—	4.8	粗砂粒 多量	灰褐色	良	口縁端部弧状沈線文、口縁部棒状浮文(刺突・二個一対)口縁部矢羽根状・弧状沈線文	外:口縁屈曲部下横位ナデ、頚部斜位条痕・横位条痕 内:口縁部強い横位ナデ・指頭圧痕	受口状口縁、沈線原体は二本一対棒状工具
53-12	①区	F3-4/ X(S2-5)	川	壺	胴部		—	—	7.3	粗砂粒 多量	灰褐色/ 暗褐色	良	胴部上端押圧突帯(条痕原体)、頚胴部縦位条痕(１６単位・櫛状工具)	外:頚胴部指ナデ、胴部上半横位条痕(縦位条痕前) 内:横位ナデ	
53-13	⑥区	J5-2・3・ J6-1・2・ J4-3/ X(S3-3)	川	壺			5.8	—	13.0	砂粒 多量	灰褐色	良	口縁端部キザミ、口～頚部櫛描文4条5帯(直線文・波状文－2帯、直線文1帯)・縦位扇形文	外:縦位ハケ 内:頚部ナデ・シボリ痕・指頭圧痕	
		J5-2/ X(S2-61) I4-2	川堰下												
53-14	⑥区	I5-1・J4-4/ X(S3-3) J5-2・4	川	壺			8.4	—	4.8	粗砂粒 中量	灰褐色	良	外:口縁端部斜位キザミ、頚部櫛描文4条6段(波状文3帯・直線文2帯・波状文1帯) 内:口縁側端部押圧、頚部櫛描文4条3帯(波状文3帯)	内:頚部指頭圧痕	
53-15	⑥区	L5-4・L6-1/ X(S1-38・39)	SD-75	壺		1/6	8.4	6.2	(41.0)	砂粒 細砂粒 石英 多量	黄褐色/ 黒褐色	良	口縁端部ハケ原体押引、口縁外指押圧、頚部沈線８本と斜格子文、胴部ヘラ描波状文	外:頚部上半・波状文付近・底部付近ハケメ、頚部ナデ、底部ナデ 内:ナデ	
		K6-2・4・ K7-1/ X(S4-9・11・12)	川												
		L5-4・L7-3/ X(S4-1・6)													

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
53-16	⑥区	J3-3 J4-2/ X(S3-3)	川	壺			15.0	—	18.0	粗砂粒 多量	淡灰褐色	良	口縁端部刺突(後ナデ)、頸部無文帯(刺突文間のハケをナデ消し)２帯	外:口縁部・胴部横位ハケ、頸部横位ナデ、口縁部下端・頸部押引(棒状工具) 内:横位指ナデ、頸部指頭圧痕	袋状口縁
		J4-4	SD-77												
53-17	⑥区	J5-4 I4・I3-4/ X(S3-3)	川	壺			16.7	—	10.0	粗砂粒 多量	灰褐色	良	口縁端部押引(ハケ原体)、胴部櫛描文４条４帯(直線文２帯・波状文２条)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、頸部斜位ハケ	櫛描波状文は重複施文
53-18	⑥区	Ⅰ4-1/ X(S3-3)	川	壺	口縁部	1/4	16.2	—	2.9	粗砂粒 微量	暗橙褐色	良	口縁端部羽状文 内:口縁部櫛描文(波状文)	外:縦位ハケ 内:ナデ・横位ハケ	
53-19	⑥区	J6-1/ X(S3-3)	川	壺	口頸部	1/6	15.0	—	6.5	砂粒 微量	暗褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ 内:横位ハケ	
53-20	⑥区	Ⅰ4-1・I3-4/ X(S3-3)	川	小型鉢			8.6	4.0	9.4	粗砂粒 多量	黒褐色・ 淡赤色/ 灰褐色	良	外:口縁端部押圧 内:頸部押圧	外:胴部上半縦位条痕、胴部下半縦位ナデ、底部ナデ 内:胴部上半横位ナデ、胴部下半指頭圧痕・工具痕	外:炭化物付着、胴部下半二時焼成赤色化
54-1	⑥区	I4-1・2 J4-1/ X(S3-3)	川	壺	頚～胴部	—	—	—	18.8	粗砂粒 多量	明黄橙色	良	頚～胴部上半櫛描文4条7帯(直線文・波状文—3帯、直線文1帯)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部縦位ハケ後ナデ	
		I4-2	川堰下												
54-2	⑥区	I4-3/ X(S2-23・30)	川	壺		ほぼ完形	12.6	3.6	26.6	細砂粒 多量 砂粒 少量	暗橙色	良	胴部にヘラで3条の線描く。	外:口縁部横ナデ、胴部縦位ハケ 内:口縁部横ナデ・横位ハケ、胴部ヘラ削り	底:炭化物付着
55-5	②区		SD-15	甕		3/4	16.4	5.0	21.8	粗砂粒 多量	暗黄橙 褐色	良	口縁端部キザミ	外:縦位ハケ 内:ナデ	外:炭化物付着
55-6	②区	K6-4	SD-15	甕	口～胴部	3/4	14.9	—	11.5	粗砂粒 多量	暗橙色	良	口縁端部キザミ、頚部櫛描文6条3帯(直線文)	外:縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	
55-7	②区		SD-15	甕	口～胴部	5/12	22.4	—	16.7	粗砂粒 多量	暗橙褐色	良	口縁端部二個一対のキザミ	外:口縁部ナデ、胴部縦位ハケ	
		K6-4	SK-14												
55-8	②区		SD-15	甕		7/12	19.3	5.1	19.7	粗砂粒 多量	淡黄褐色	良	口縁端部キザミ、胴部上半に櫛描文(直線文)(摩滅しており単位不明)	外:口縁部縦位ハケ後ナデ、胴部縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ	内外:炭化物付着、底部穿孔
55-9	②区	L6-2	SD-15	甕		1/6	20.3	4.2	27.5	粗砂粒 多量	淡黄褐色	良	口縁端部キザミ 内:口縁部櫛描文4条2帯(波状文)	外:縦位ハケ 内:ナデ	内外:炭化物付着
55-10	②区		SD-15	甕		5/6	18.2	6.0	26.0	粗砂粒 多量	暗黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部縦位ハケ 内:斜位ハケ	外:炭化物付着、底部穿孔
55-11	②区		SD-15	壺	胴部	—	—	—	8.1	砂粒 多量	黄橙色	良	櫛描文5条4帯(直線文・波状文・直線文・弧状文)		内面にシボリ痕
55-12	②区		SD-15	壺		2/3	9.4	6.0	20.2	細砂粒 多量	黄橙色	良	口縁部刺突文、櫛描文4条4帯(直線文)	外:ハケ 内:底部ナデ	口縁部に二孔一対の穿孔あり
55-13	②区	L6-3	SD-15	壺	口頚部	1/3	26.0	—	19.0	砂粒 多量	黄橙色	良	口縁端部キザミ、頚部櫛描文7条4帯(直線文1帯・波状文3帯)、頚部下部に刻み目突帯	外:口縁部横ナデ 内:ハケ	口縁に2個1組の穿孔と突起が交互にある
55-14	②区	K2-4	SK-1	壺	口頚部	2/3	6.7	—	7.5	砂粒 多量	明黄橙色	良	口縁部櫛描文7条2帯(直線文・波状文)、頚部櫛描文7条1帯(直線文)	外:ナデ 内:ナデ	
56-1	②区		SD-15	壺		1/4	16.0	7.5	31.6	砂粒 細砂粒 多量 白色粒 子少量	橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ(ほぼ摩滅) 内:胴部斜位ハケ、底部縦位ハケ	
56-2	②区	L6-2	SD-15	壺		1/2	14.0	5.8	27.6	砂粒 多量	黄橙色	良	外:口縁部山形文 内:口縁部櫛描文(波状文)	調整不明	
56-3	②区	L6-2	SD-15	壺		1/4	7.0	14.0	30.8	砂粒 粗砂粒 少量 赤色粒 子多量	黄橙色	良	口縁端部キザミ	調整不明	
56-7	⑤区	M17-3/X	SK-5	甕	口～胴部	5/12	18.0	—	8.5	砂粒 多量	暗黄褐色	良	口縁端部キザミ	内:口縁部ハケ、胴部ナデ	
56-10	⑤区	K14-1・2	SK-19	壺	口～頚部	5/6	20.8	—	8.0	砂粒 細砂粒 多量 赤色粒 子少量	黄橙色	良	頚部櫛描文6条4帯(直線文・波状文—2帯) 内:口縁部櫛描文6条3帯(波状文)、突起間ハケ状工具でナデ	外:ナデ 内:横位ハケ	二個一組の突起5組あり
56-12	⑤区		SK-30	壺	胴～底部	底完形	—	6.8	19.3	砂粒 多量	暗褐色	良		外:縦位ハケ、底部ヘラ削り 内:底部横位ハケ	

4. 土師器（弥生時代後期の土器を一部含む）

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
43-3	⑥区	I5-1/ X(S3-2) I5-4/ X(S3-1)		壺		1/3	14.2	5.5	25.6	砂粒 細砂粒 少量	黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ミガキ 内:口縁部横ナデ、胴部斜位ハケ	外:炭化物付着
43-4	①区	E6-3/X4		甕	口～胴部	口縁完形	16.0	－	17.5	砂粒 多量 小石 微量	橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ(横→斜) 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
43-5	①区	B2-3/ X(S1-7)		小型甕		1/4	13.0	－	13.0	砂粒 微量	淡黄色	良		外:口～胴部横ナデ、底部ナデ 内:口～胴部横ナデ、底部ナデ	外:炭化物付着、底部粘土紐巻き上げ痕残る(左回り)
43-6	⑥区	L7-1 L7-3/ X(S4-1･6) L7-1･2/ X(S4-9)	SD-88	器台		1/3	25.6	－	17.6	細砂粒 多量	黄褐色	良	脚部櫛描文3条2帯(直線文)、斜行短線文、脚部に透穴(円)個数不明	外:ミガキ 内:ミガキ、脚柱ヘラ削り	
43-7	⑥区	K9-2/ X(S2-61)		小型壺	胴～底部	底完形	－	1.0	5.9	細砂粒 少量	暗黄橙色	良		内:縦位ハケ	
43-8	⑥区	J8-3/ X(S2-57)		蓋		1/10以下	14.0	－	6.0	赤色粒子 少量	淡黄橙色	良		調整不明	
43-9	⑥区	G6-3/ X(S4-1･6)		有孔鉢		1/2	16.6	－	11.6	砂粒 少量	淡黄色	良		調整不明	
43-10	①区	G7-3/X		小型壺	頚～底部	1/4	－	4.6	7.4	微砂粒 少量 赤色粒子 微量	淡黄色	良		外:頚部横ナデ、底部付近ナデ	
43-11	①区	C4-1/ X(S2-4) C4-4		小型壺		3/4	13.4	－	9.4	粗砂粒 少量 細砂粒 多量	暗黄褐色	良		外:口縁端部横ナデ、胴部ヘラ削り･ナデ 内:口縁端部横ナデ	
43-12	①区	G7-3/X		小型鉢		1/6	9.9	－	7.2	細砂粒 多量 粗砂粒 微量 赤色粒子 少量	淡黄橙色	良		外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	
43-13	⑥区	L8-1/ X(S4-15)		小型壺		1/12	7.7	3.2	6.9	細砂粒 少量	黄橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部斜位ハケ後ナデ 内:ナデ･指頭圧痕	
43-14	⑥区	K7-1/ X(S4-1･6･15)		器台		1/6	8.6	10.8	7.9	細砂粒 微量	明黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	外:口縁部ナデ、脚部ミガキ 内:脚部ハケ	
43-15	①区	D5-2/X		器台		1/2	9.0	12.0	8.2	細砂粒 多量	淡黄褐色	良	脚部に透穴(円)4方向	外:口縁部横ナデ 内:脚部ヘラ削り	表面黒色(スス？)
43-16	⑥区	K7-4/ X(S4-1･6)		器台		ほぼ完形	8.6	11.6	8.8	細砂粒 少量	黄橙色	良		外:脚部ミガキ	
43-17	⑥区	J8-1		器台	口～脚部	5/12	9.7	－	8.1	細砂粒 多量	淡黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	調整不明	
43-18	⑥区	I8-1/ X(S-61) F8-1		器台	脚部	脚完形	－	12.2	6.7	砂粒 微量 赤色･白色 粒子少量	黄褐色	良	脚部に透穴(円)3方向	調整不明	
43-19	⑥区	G5-4/X		高杯？	脚部	底5/12	－	11.2	8.2	砂粒 多量	暗黄橙色	良		調整不明	
43-20	①区	E6-3/ X(S2-5) E6-4/X	SK-9	器台		ほぼ完形	8.6	11.8	10.3	粗砂粒 多量	明黄橙色	良	口縁部沈線２条	外:口縁付近ナデ、体部ミガキ(裾部ハケ後ミガキ) 内:杯部ミガキ、脚部ナデ	
43-21	⑥区	H5-4		高杯		7/12	14.4	10.8	10.1	砂粒 多量	暗灰橙色	良		外:口縁部横ナデ、杯部ヘラ削り、脚部縦位ハケ 内:口縁部横ナデ、脚部ヘラ削り、裾部ナデ	
43-22	⑥区	J9-1/ X(S4-1･6)		高杯	杯～脚部	底1/2	－	8.0	7.5	砂粒 多量	淡黄褐色	良		外:ハケ 内:脚部ヘラ削り	
43-23	⑥区	I5-1/ X(S3-3)	川	高杯？	脚部	脚完形	－	14.0	6.7	砂粒 多量	黄橙色	良		外:縦位ハケ、底部ナデ 内:縦位ハケ	
43-24	⑥区	H7-4/ X(S4-1･6)		高杯	杯部	3/4	10.2	－	4.9	細砂粒 少量	淡黄褐色	良		調整不明	
43-25	①区	E5-3/X3		小型鉢		3/4	8.8	4.0	5.2	砂粒 多量 赤色粒子 少量	淡黄色	良		調整不明	
43-26	⑥区	H9-1･H8-4/ X(S4-1･6)		鉢		1/3	11.8	4.0	6.2	細砂粒 少量	淡黄褐色 /赤橙色	良		内外:ミガキ、高台つまみ出す	
43-27	①区	D1-3･D2-3/ X(S1-7)		椀		2/3	11.4	－	3.2	白色粒子 微量 砂粒 多量	暗橙色	良		外:口縁部横ナデ、下半ヘラ削り 内:口縁部横ナデ、底部中心1本ナデ	
43-28	⑥区	I7-1/ X(S4-1･6)		椀		ほぼ完形	12.4	－	4.5	砂粒 多量	暗黄橙色 /暗橙色	良		外:口縁部横ナデ、下半ヘラ削り 内:口縁部横ナデ	

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
43-29	⑥区	I7-1/ X(S4-1･6)		椀		5/6	13.4	―	4.1	砂粒 多量	暗黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、底部ハケ 内:口縁部横ナデ	
43-30	①区	F7-4	SK-2	有孔鉢		3/4	14.0	1.8	12.0	細砂粒 多量 粗砂粒 少量	黄橙色	良		外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	底部穿孔
44-1	①区	F6-2	SK-7	甕		1/2	16.2	―	23.6	細砂粒 多量 粗砂粒 少量	橙色	良		外:口縁部横ナデ、ハケ（縦→横→底部縦） 内:口縁部横ナデ、ヘラ削り	外:炭化物付着
44-2	①区	F6-2	SK-7	甕	口～底部付近	口縁完形	17.0	―	24.1	砂粒 多量	暗黄橙色	良	口縁部擬凹線８条	外:胴部ハケ 内:口縁部横ナデ、頚部ヘラナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
44-3	①区	F6-2	SK-7	甕		ほぼ完形	17.0	―	24.6	粗砂粒 少量 砂粒 多量	橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ（縦→横→底部縦） 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着 内:煮炊き痕あり
44-4	①区	F6-2	SK-7	甕	底部	底完形	―	2.0	12.0	砂粒 多量	黄橙色	良		外:タタキ後ナデ 内:ヘラ削り	内外:炭化物付着
44-5	①区	F6-2	SK-7	小型甕		3/4	14.0	2.0	11.0	砂粒 粗砂粒 多量	橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ（横→縦） 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	
44-6	①区	E7-2 E6-3	SK-9	甕	口～胴部	口縁完形	14.4	―	11.7	細砂粒 多量 粗砂粒 少量	暗黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部横位ハケ 内:胴部ヘラ削り	口縁部付近:炭化物付着
44-7	①区	E7-1･2 F7-2/下層	SK-9	甕	口～胴部	口縁完形	15.0	―	12.6	細砂粒 多量	黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ（縦→横）後一部ナデ 内:頚部指頭圧痕、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
44-8	①区	E6-3 E7-2	SK-9	壺	口～胴部	3/4	11.0	―	12.1	砂粒 多量	黄橙色	良		外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着、体部に穿孔あり。
44-9	①区	E7-2･3/ 下層	SK-9	甕		2/3	17.9	―	27.7	細砂粒 多量	淡橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
		E7-2/ 最下層	SK-9												
44-10	①区	E7-2	SK-9	小型鉢		5/12	10.0	―	9.1	粗砂粒 多量	明黄褐色	良		外:胴部ミガキ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	
44-11	①区	E7-1	SK-9	有孔鉢		ほぼ完形	15.3	3.3	9.4	細砂粒 少量	明黄橙色	良		外:斜位ハケ 内:ハケ後ナデ	底部穿孔
44-12	①区	E7-2･3	SK-9	高杯	杯～脚部上半	1/2	12.5	―	8.0	白色粒子 少量	明黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	内:ミガキ	
44-13	①区	E7-2･3/ 下層	SK-9	高杯	底～脚部	脚部1/3	―	11.0	9.2	砂粒 多量	明黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	外:ミガキ 内:杯部ミガキ、脚部ハケ後ヘラ削り	
44-14	①区	E7-2	SK-9	器台		1/3	8.7	11.8	10.1	粗砂粒 多量	明黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	外:脚部ハケ→縦ミガキ→横ミガキ 内:脚部一部ハケメ残る	
44-15	①区	E7-2	SK-9	蓋		完形	10.0	―	4.1	砂粒 微量 細砂粒 多量	淡黄褐色	良		内外:胴部ナデ	
44-16	①区	D5-1	SK-11	小型甕		1/10以下	10.6	―	10.9	砂粒・粗砂粒 多量	明黄褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
44-17	①区	D5-1	SK-11	台付甕	底～脚部	―	―	7.0	8.0	細砂粒 粗砂粒 多量	淡黄橙色	良		外:胴部縦位ハケ 内:底部指頭痕、脚部ナデ、裾端部内側に折り返す	外:炭化物付着
44-18	①区	D5-1	SK-11	蓋		1/4	14.2	―	6.7	砂粒 多量	淡黄色	良		外:胴部ミガキ、口縁部横ナデ 内:ヘラ削り？	
44-19	①区	D5-2	SK-11	小型鉢		1/4	11.6	3.8	5.7	粗砂粒 細砂粒 少量	淡黄橙色	良		調整不明	
44-20	①区	D5-1	SK-11	高杯		1/3	20.0	12.0	15.0	砂粒 少量 赤色粒子 多量	淡黄色	良		調整不明	
45-3	①区	F6-4	SK-6	有孔鉢	底部	1/10以下	―	2.0	9.5	砂粒 粗砂粒 多量	淡黄色	良		外:ヘラ削り？ 内:ヘラナデ？	底部穿孔
45-4	①区	F6-1	SK-6	有孔鉢		1/3	16.6	1.5	12.7	砂粒 多量	淡黄色	良		外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外底部:炭化物付着、底部穿孔
45-5	①区	F5-3	SK-12	壺	口頚部	口縁ほぼ完形	13.0	―	5.3	細砂粒 赤色粒子 多量	明黄橙色	良		外:口頚部横ナデ、外ハケ 内:口頚部横ナデ	内:輪積痕
45-6	①区	E5-3	SK-12	壺	口～胴部	3/4	14.0	―	11.5	細砂粒 赤色粒子 多量	黄橙色	良		外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	内:炭化物付着

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
45-7	①区	E5-4	SK-12	小型壺		口縁ほぼ完形	11.0	－	16.7	細砂粒多量	淡黄褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ナデ 内:胴部ナデ	外:炭化物付着
45-8	①区	F5-2	SK-12	蓋		1/4	12.6	－	6.3	細砂粒多量	淡黄色	良		外:ツマミヘラ削り 内:横位ハケ	
45-9	①区	F5-2	SK-12	小型鉢		1/6	9.6	3.6	6.3	砂粒・粗砂粒多量	暗褐色	良		外:ハケ後ナデ	
45-10	①区	E5-1	SK-12	高杯	杯～脚部上半	1/3	11.7	－	7.8	細砂粒多量	明黄橙色	良	脚部に透穴(円)３方向	外:脚部ミガキ 内:杯部ミガキ	
45-11	①区	F5-3	SK-12	高杯	胴～脚部	脚完形	－	15.0	10.0	砂粒・粗砂粒少量 赤色粒子多量	淡黄色	良		外:ナデ 内:ハケ	
45-25	⑥区	L8-3	SK-21	甕	口～胴部	口縁完形	16.8	－	12.5	砂粒 細砂粒多量	暗黄褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ（斜→横） 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	
45-26	⑥区	J8-3/ X(S2-57)	SK-21	甕	底部	底3/4	－	5.8	3.7	砂粒多量	暗黄褐色	良		外:縦位ハケ	底部穿孔
45-27	⑥区	I8-2 I8-1/ X(S2-57)	SK-21 SK-21	甕		1/4	20.5	－	27.0	砂粒 微量 細砂粒 多量	暗黄橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ、底部ヘラ削り	外:炭化物付着
46-1	⑥区	J9-2	SK-21	壺	口～胴部	11/12	26.1	－	16.8	粗砂粒 微量 細砂粒 多量	明黄橙色	良		外:斜位ハケ 内:ナデ、指頭圧痕	
46-2	⑥区	I8-4	SK-21	壺	口～胴部	3/4	12.4	－	10.0	砂粒 多量 粗砂粒 少量 小石 微量	淡黄色	良		外:頚部横ナデ、胴部横位ハケ 内:口縁部横位ハケ、胴部ナデ?	
46-3	⑥区	I8-2/ X(S2-57)	SK-21	壺	口～頚部	1/6	13.7	－	5.7	砂粒 多量	淡黄橙色	良	口縁部擬凹線６～７条	外:頚部横ナデ 内:口縁部横ナデ、頚部ナデ	
46-4	⑥区	I8-3・4 I8-2/ X(S2-57)	SK-21	壺	口～胴部	口縁完形	13.1	－	15.3	粗砂粒 多量	淡黄橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部縦位ハケ 内:口縁部横位ハケ後ナデ、胴部ナデ・指頭圧痕	
46-5	⑥区	I8-4	SK-21	壺	口～胴部	口縁ほぼ完形	16.6	－	14.5	細差粒 多量 粗砂粒 微量	淡黄褐色	良		外:口縁縦位ハケ、胴部横位ハケ 内:口縁横位ハケ、胴部ヘラ削り	
46-6	⑥区	J9-2	SK-21	小型壺		完形	8.0	2.5	9.8	砂粒 細砂粒 多量	淡黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部横位ハケ 内:底部縦位ハケ・指頭圧痕	内:炭化物付着
46-7	⑥区	I7-4	SK-21	小型壺	頚～底部	底完形	－	－	8.9	赤色粒子 少量	淡黄橙色	良		外:胴部ミガキ 内:底部ナデ、指頭圧痕	
46-8	⑥区	I8-1/ X(S2-57)	SK-21	小型壺	胴～底部	底完形	－	1.6	7.2	砂粒 多量	淡黄色	良		内:底部ナデツケ	
46-9	⑥区	I8-1/ X(S2-57)	SK-21	小型壺	胴～底部	底完形	－	2.0	－	細砂粒 少量	淡黄色	良	横突帯2本と縦突帯24本あり、縦突帯にキザミあり	調整不明	被籠状突帯壺
46-10	⑥区	I8-2	SK-21	小型壺	胴～底部	底完形	－	2.0	9.1	砂粒 白色粒子 微量	淡黄橙色 /淡黄色	良		内:斜位ハケ	
46-11	⑥区	I8-2	SK-21	小型台付壺	胴～底部	底1/2	－	10.6	11.6	細砂粒 多量	明黄橙色	良		外:縦位ハケ 内:底部ナデ	
46-12	⑥区	I8-2	SK-21	壺か甕	底部	底完形	－	4.0	4.0	細砂粒 多量	黄褐色	良		外:縦位ハケ	
46-13	⑥区	I8-2/ X(S2-61)	SK-21	鉢		7/12	11.6	7.1	6.7	砂粒 多量	淡黄褐色	良		調整不明	
46-14	⑥区	I8-4	SK-21	台付鉢	脚部	底完形	－	19.2	4.3	細砂粒 多量	淡黄褐色	良		外:縦位ハケ、接合部・裾端ナデ 内:脚部ナデ、胴部ヘラ削り	
46-15	⑥区	I8-2	SK-21	台付鉢	脚部	底完形	－	9.6	3.1	砂粒 細砂粒 多量	淡黄色	良		調整不明	
46-16	⑥区	I8-4/ X(S2-57)	SK-21	小型鉢		1/6	10.8	－	6.5	砂粒 多量	暗黄褐色	良		外:ハケ	外:炭化物付着
46-17	⑥区	J8-3 I8-4	SK-21	小型鉢		5/12	9.8	3.9	7.0	粗砂粒 多量	明黄褐色	良		調整不明	
46-18	⑥区	I8-4/ X(S2-57)	SK-21	高杯		1/2	21.0	14.0	15.0	細砂粒 赤色粒子 多量	淡黄色	良	脚部に透穴(円)3方向	調整不明	

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
46-19	⑥区	I8-2	SK-21	器台		完形	8.2	11.0	6.6	砂粒 赤色粒子 多量	淡黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	外:口縁部･接合部横ナデ	
46-20	⑥区	I8-1	SK-21	器台		口縁完形	8.0	11.6	8.0	砂粒 少量	黄橙色	良	脚部に透穴(円)3方向	外:接合部横ナデ 内:脚部ハケ	外:赤色塗彩
46-21	①区	F8-1	SD-23	小型壺		完形	4.2	1.7	6.0	細砂粒 微量	暗橙褐色	良		外:ミガキ	口縁部に二孔一対の穿孔あり
46-22	①区	F7-1	SD-23	小型鉢		ほぼ完形	12.8	1.7	12.2	細砂粒 砂粒多量 粗砂粒 微量	淡黄色	良	口縁部擬凹線12条	外:口縁部横ナデ、胴部ハケ (縦→横) 内:胴部ヘラ削り	
46-23	①区	F8-1･2	SD-23	高杯	杯部	5/12	10.8	―	5.4	細砂粒 多量 粗砂粒 微量	淡黄橙色	良		外:ミガキ 内:ミガキ、底部ナデ	
46-24	①区	F2-3	SD-11	小型壺		5/12	12.0	―	9.6	細砂粒 多量	暗黄橙色	良		外:口～頚部横ナデ、胴部ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	
46-25	①区	F8-1	SD-22	小型鉢		ほぼ完形	9.7	5.6	4.9	砂粒･石英 微量	淡黄橙色	良		内:指頭圧痕	
47-27	①区	J3-2	SD-22	壺	口～胴部	口縁完形	14.8	―	23.2	砂粒･赤色 粒子 多量	淡黄橙色	良	口縁部擬凹線11条	外:頚部横ナデ、胴部上半斜位ハケ後下半縦位ハケ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
47-28	⑥区	H8-4	SD-80	甕	口～胴部	口縁完形	17.6	―	21.1	砂粒 多量	黄褐色	良	口縁部擬凹線8条	外:口縁部横ナデ、胴上半横ハケ後下半縦ハケ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	内外:炭化物付着
47-29	⑥区	G8-1 H8-3	SD-80	甕	口～胴部	1/3	15.4	―	13.8	砂粒 少量	淡黄褐色	良	口縁部擬凹線8条	外:頚部横ナデ、胴部斜位ハケ 内:口縁部ナデ・指頭圧痕、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
47-30	⑥区	H8-3	SD-80	甕	口～胴部	ほぼ完形	14.0	―	11.0	砂粒 多量 赤色粒子 少量	淡橙色	良	口縁部擬凹線7条	外:胴下半縦位ハケ 内:ヘラ削り	外:炭化物付着
47-31	⑥区	H8-4	SD-80	甕	底部	底完形	―	1.3	9.0	砂粒 多量	淡黄褐色	良		外:縦位ハケ 内:ヘラ削り	外:炭化物付着
48-1	⑥区	H8-4	SD-80	壺	口～胴部	1/2	17.4	―	12.2	砂粒 粗砂粒 多量 赤色粒子 少量	赤橙色	良		外:頚部横ナデ	
48-2	⑥区	H18-3	SD-80	小型壺		ほぼ完形	10.4	1.5	11.8	細砂粒 多量	淡黄褐色	良		外:口縁部･胴部ミガキ 内:口縁部ミガキ、頚部指頭圧痕	胴部内:漆付着、胴部外･口縁内:赤色塗彩、体部下半に穿孔、輪積痕
48-3	⑥区	H8-4	SD-80	小型壺	口～胴部	2/3	8.4	―	7.8	砂粒 少量	淡黄色	良		調整不明	
48-4	⑥区	G8-1	SD-80	高杯		口縁ほぼ完形	25.2	―	8.8	細砂粒 多量 赤色粒子 少量	淡橙色	良		調整不明	
48-5	⑥区	L7-2 L7-4	SD-87	高杯	杯部	3/4	16.1	―	7.4		淡黄褐色	良		外:横位ハケ後ミガキ 内:横位ハケ後ナデ	
		L7-1/ X(S1-4) L6-3･K6-4/ X(S3-3)													
48-6	⑥区	L7-4 L8-4 M8-2	SD-81	甕	口～胴部	7/12	18.0	―	6.7	砂粒 多量	淡黄橙 褐色	良	口縁･胴部櫛描文5～6条(波状文)	外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
		L7-4/ X(S4-15) L8-1/ X(S4-1･6)													
48-7	⑥区	L7-4	SD-81	器台	脚部	1/2	―	14.4	9.0	細砂粒 微量 赤色粒子 少量	黄褐色	良		外:脚柱部ナデ後ミガキ、脚台部縦位ハケ後ミガキ 内:ハケ	
48-8	①区	G8-2/X		器台		脚部ほぼ完形	―	13.8	11.2	粗砂粒 多量	明黄橙色	良	脚部段にキザミがあるようだが摩滅により不明、ヘラ描直線文3条、脚部に透穴(円)3方向	外:脚柱部縦ミガキ、脚部ハケ後粘土紐貼り付けて段形成 内:脚部横ミガキ	
		G8-2	SD-21												
48-9	①区	G8-2	SD-21	台付鉢	脚部	―	―	9.0	3.4	砂粒 多量	淡黄色	良		外:接合部ナデ 内:接合部ナデツケ、 裾端部:ナデ(面)	台付甕か？台付鉢か？
53-1	①区	C2-1	川	甕		5/6	19.0	4.3	29.8	細砂粒･ 赤色粒子 多量 砂粒 少量	橙色	良	外:口縁部斜行短線文	外:口縁部横ナデ、胴部斜位ハケ 内:口縁部横ナデ、横位ハケ	外:炭化物付着、受口状口縁

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
53-2	⑥区	K6-3・J6-1/ X(S4-18・23)	川	甕	口～胴部	2/3	16.5	－	18.6	粗砂粒 多量	暗橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ミガキ 内:口縁部横ナデ、胴部ナデ	
54-3	⑥区	J4-3/ X(S3-1)	川	壺		1/10以下	13.4	6.4	24.7	粗砂粒 細砂粒 多量	黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ(縦→横)、胴下半～底部ナデ	内:輪積痕 外:炭化物付着
54-4	⑥区	I4-1・2/ X(S3-3)	川	壺	胴部	－	－	－	16.7	砂粒 多量	淡黄色	良	胴部上半櫛描文4条7帯(波状文1帯、直線文・波状文－2帯、簾状文1帯、直線文1帯)	外:胴部上半縦位ハケ後ナデ、胴部下半斜位ハケ 内:ナデ・指頭圧痕	内:褐色の付着物あり
54-5	①区	E1-4	川	壺	胴～底部	底完形	－	6.0	22.8	粗砂粒 少量 細砂粒 多量	赤橙色	良	胴部上半櫛描文7条3帯(直線文2帯・波状文1帯)、竹管文、羽状刺突文、斜行短線文、胴部下半扇状文・波状文(ハケ状工具？)	外:ミガキ 内:ナデ	
54-6	①区	C2-3/下層	川	壺		底完形	－	8.0	28.2	砂粒 多量	暗黄橙色	良	頚部付近櫛描文(直線文)	外:胴部斜位ハケ、下半ヘラ削り、底部ヘラナデ 内:胴部ハケ(横位→斜位)、下半ナデ	内外下半:炭化物付着
54-7	①区	E2-1	川	鉢		1/6	11.0	－	8.8	粗砂粒 多量	暗黄灰色	良		外:縦位ハケ、つまみ下横ナデ 内:横位ハケ	
54-8	⑥区	G4-2/ X(S3-2)	川	小型壺	胴～底部	底完形	－	3.0	8.5	細砂粒 微量	黄橙色	良		外:ミガキ 内:底部横位ハケ、胴部ナデ	
54-9	①区	F2-3・E1-4/ X(S1-10) F2-2	川 SD-16	有孔鉢		2/3	14.4	3.4	16.2	砂粒 細砂粒 多量	橙色	良		外:口縁部横位ハケ→胴部縦位ハケ、底部付近ヘラ削り 内:口縁部ハケ、胴部ヘラ削り	底部穿孔、外:炭化物付着
54-10	⑥区	I5-1/ X(S3-3)	川	鉢		1/6	9.6	4.6	9.1	砂粒 多量	淡黄褐色	良	口縁端部キザミ	外:上半ハケ後ナデ、下半ハケ後ミガキ 内:口縁部横ナデ	
54-11	⑥区	I4-4/ X(S3-3)	川	台付鉢	底部	底完形	－	6.6	5.8	粗砂粒 多量	暗橙褐色	良		外:縦位ハケ 内:胴部・脚部ナデ	
54-12	⑥区	K7-1/ X(S4-18・23)	川	甕	口～胴部	口縁完形	16.0	－	15.2	砂粒 微量 細砂粒 多量	暗橙褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部横位ハケ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
54-13	⑥区	K6-4 K7-1/ X(S4-11・12) M7-3	川 SD-77 SD-87		口～胴部	口縁ほぼ完形	17.4	－	15.6	細砂粒 少量 白色粒子 多量	灰色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ(縦→横) 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	
54-14	①区	F1-3/ E1-4	SD-10 川	有孔鉢		1/2	17.0	4.3	10.0	砂粒 多量 赤色粒子 少量	黄橙色	良		外:ナデ 内:ナデ	底部穿孔
55-1	⑥区	K6-2/ X(S4-11・12)	川	壺	口～胴部	1/2	16.4	－	14.2	粗砂粒 赤色粒子 白色粒子 少量 小石 微量	淡黄色	良		外:口縁部ハケ後横ナデ、胴部ハケ(縦→横) 内:口縁部横ナデ、頚部横位ハケ、胴部ヘラ削り	口縁部内外・胴部外:炭化物付着
55-2	①区	E1-3・4	川	甕		1/3	17.2	－	10.0 12.7	細砂粒 多量 粗砂粒 少量	暗黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部縦位ハケ 内:胴部ナデ、頚部付近横位ハケ	内:輪積痕
55-3	⑥区	H4-2/ X(S3-1) H4-2/ X(S3-1)	川	甕	口～胴部	3/4	17.4	－	15.0	細砂粒 多量	淡黄褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部縦位ハケ 内:口縁部横ナデ、胴部横位ハケ	
55-4	⑥区	J5-2・3/ X(S4-13)	川	高杯		1/4	27.6	15.6	19.3	微砂粒 多量	赤橙色	良		外:口縁部横ナデ、脚部ミガキ 内:口縁部横ナデ	
55-4	⑤区	N18-2		壺	底部	底完形	－	5.2	10.6	砂粒 赤色粒子 多量	赤橙色/ 黒褐色	良		外:底部付近縦位ハケ、底部ナデツケ 内:底部縦位ハケ	
55-5	⑤区	L16-1/X		高杯			－	－	3.5	細砂粒 多量	淡黄褐色	良		調整不明	
55-6	⑤区	H10-3	SK-2	小型鉢		7/12	9.6	2.0	9.1	砂粒 多量 雲母 少量	淡黄褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ナデ 内:胴部ヘラ削り	

No.	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
56-8	⑤区		SK-5	壺	口～胴部	口縁完形	14.6	―	11.5	細砂粒 多量	淡黄色	良		調整不明	
56-11	⑤区	I12-4	SK-12	壺		1/10以下	10.8	1.8	12.8	細砂粒 多量 粗砂粒 微量 赤色粒子 少量	暗黄橙色	良		調整不明	
			SK-5												
56-13	⑤区	I12-4	P5	有孔鉢		5/6	12.0	―	7.2	細砂粒 多量	淡黄褐色	良		外:ハケ 内:ヘラ削り、指頭圧痕	
56-14	⑤区	N18-3・4	SD79	壺		―	―	―	6.8	細砂粒 多量	暗黄褐色	良	屈曲部に突帯	外:頚部横ナデ、胴部ナデ 内:頚部横ナデ、胴部ナデ	
		N18-1・2	SD-90												
		N18-1・2/ X9	SD-92												
56-15	⑤区	N18-2 N18-4/下層	SD-93	甕	口頚部	3/4	12.4	―	6.7	砂粒 多量	淡黄褐色	良	口縁部擬凹線６条	外:胴部縦位ハケ 内:ヘラ削り、口縁部横ナデ	
		N18-2	SD-90 SD-92												
		N19-1													
56-16	⑤区	M18-4	SD-93	壺	胴～底部	底完形	―	5.0	20.4	細砂粒 赤色粒子 多量	黄橙色	良		外:斜位ハケ、底部付近ヘラ削り 内:横位ハケ	外:炭化物付着
57-1	⑦区			蓋		完形	7.0	―	3.9	砂粒 多量	暗黄橙色	良		調整不明	
57-2	⑦区	J38-2/X2		蓋		3/4	9.4	―	3.9	砂粒微量 赤色粒子 少量	淡黄橙色	良		外:ミガキ	
57-3	⑦区	F37-3/X2		器台	脚部	底3/4	―	13.6	10.6	細砂粒 多量 赤色粒子 少量	淡黄色	良	脚部直線文・刺突文、脚部に透穴(円)4方向	調整不明	
57-4	⑦区	F37-4/X2		小型 台付鉢		5/6	8.6	―	5.0	細砂粒 少量	橙褐色	良	口縁部擬凹線5～6条	外:ミガキ 内:ミガキ	
57-5	⑦区	F37-4/X2		小型鉢	胴部	―	―	―	7.0	細砂粒 多量	淡黄橙色	良	口縁部沈線1条	外:縦位ハケ	沈線に赤色塗彩残る
57-6	⑦区	F37-4/X2		椀？		1/6	14.0	―	4.1	細砂粒 少量	暗橙褐色	良		調整不明	
57-7	⑦区	E34-3	SD-1	小型鉢	口～胴部	5/12	11.6	―	8.6	砂粒 少量	暗黄橙色	良	口縁部擬凹線(摩滅により条数不明)	外:口～頚部横ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	外:炭化物付着
57-8	⑦区	E34-3	SD-1	小型壺		ほぼ完形	5.7	2.4	6.3	砂粒 細砂粒 多量	淡黄色	良		外:口縁部横ナデ、底部指頭圧痕 内:胴下半ハケ、胴上半指頭痕	
57-9	⑦区	D33-4/Ⅱ	SD-1	蓋		完形	10.6	―	4.3	白色粒子 微量	淡黄橙色	良		外:ミガキ	
57-10	⑦区	D34-4	SD-1	小型 台付鉢		ほぼ完形	10.0	8.0	9.5	砂粒 細砂粒 多量	赤橙色	良		外:脚部ナデ 内:ナデ	
57-11	⑦区	E34-3 E33-3/Ⅱ	SD-1	小型壺		ほぼ完形	6.0	―	8.5	細砂粒 多量 白色粒子 少量	黄褐色/ 黒褐色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ミガキ 内:胴下半ナデ	口縁に２孔１対の穿孔あり、 外:赤色塗彩
57-12	⑦区	E34-3 E33-2/Ⅱ	SD-1	有孔鉢		3/4	16.4	―	10.5	砂粒 多量	明黄橙色	良		外:口縁部横ナデ、胴部ハケ後ナデ 内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	底部穿孔
57-13	⑦区	D33-1	SD-1 SD-2	有孔鉢		1/2	16.0	4.0	7.8	砂粒 多量	淡黄褐色	良		内:口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り	底部穿孔
57-14	⑦区	D33-4/Ⅱ	SD-1	高杯	杯部	1/2	25.6	―	7.8	細砂粒 赤色粒子 少量	淡黄橙色	良		外:ハケ後ミガキ一部強くナデ	
57-15	⑦区	E34-3	SD-1	高杯	脚部	3/4	―	13.6	11.5	砂粒 少量	黄橙色	良		外:脚部ハケ後ミガキ 内:脚部ハケ後ナデ	脚柱部内面にシボリ痕
57-16	⑦区	D34-4 D34-4/Ⅱ	SD-1	装飾 器台	口～脚 柱部	1/4	17.0	―	18.5	赤色粒子 少量	淡黄橙色	良	口縁部擬凹線20条、受部に涙滴形と円形の透穴交互に6方向ずつ、脚部に透穴(円)3方向	外:受部・脚柱部ミガキ、受部底ハケ後ナデ 内:受部ナデ、脚部ハケ	垂下帯剥離
57-17	⑦区	D34-4	SD-1	器台	脚部	底2/3	―	13.6	9.1	細砂粒・ 赤色粒子 少量	黄橙色	良	脚部に透穴(円)３方向	外:ミガキ 内:ハケ	
57-18	⑦区	E34-1・3 D34-4 D33-4/Ⅱ	SD-1	器台	脚部	底5/6	―	14.7	16.8	細砂粒 多量	明黄橙色	良	脚部に透穴(円)３方向	外:ミガキ 内:受部ミガキ、脚部ハケ	

5. 須恵器

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
58-1	①区	D1-3/ X(S1-7)		蓋		5/12	10.0	—	2.9	白色粒子 砂粒 微量	青灰色	良好		外:天井部回転ヘラ切り未調整	
58-2	⑥区	K5-1/ X(S3-1)		蓋		1/2	12.4	—	3.6	白色粒子 少量	灰色	良好		外:天井部回転ヘラ削り	天外面にヘラ記号あり
58-3	⑥区	M7-3/ X(S4-1･6)		蓋		1/3	13.4	—	4.2	白色粒子 微量	灰白色	不良		外:ナデ	
58-4	①区	F6-2/X		蓋		1/10以下	13.6	—	4.5	白色粒子 少量	青灰色	良好	浅い沈線？	外:天井部回転ヘラ削り	
58-5	⑥区	J9-2･J7-4/ X(S2-57)		蓋		1/6	15.0	—	4.5	白色粒子 多量 小石 微量	青灰色	良好		外:天井部回転ヘラ削り	
58-6	①区	F3-1/X		杯H		完形	10.6	7.6	3.5	白色粒子 少量	灰白色	不良		外:底部回転ヘラ切り後ナデ	
58-7	①区	F2-4/X F2-4/X		杯H		1/2	11.0	—	3.8	白色粒子 少量	灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り後ナデ	
58-8	①区	F2-3/X F2-3/X		杯H		ほぼ完形	11.2	—	4.1	砂粒 微量	乳白色	不良		外:底部回転ヘラ切り未調整	
58-9	⑥区	K6-4/ X(S4-1･6)		杯H		1/2	11.2	5.6	4.0	白色粒子 多量	灰色	良		外:底部回転ヘラ切り後ナデ 内:中心ナデ	外面に自然釉
58-10	①区	D1-2/X		杯A		ほぼ完形	11.4	8.4	3.3	白色粒子 微量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	
58-11	①区	C1-4/X		杯A		1/4	11.8	8.0	3.6	白色粒子 多量	灰色	良好		外:底部ナデ	内面に褐色の付着物あり。
58-12	⑥区	L6-2/ X(S4-1･6)		杯A		1/10以下	13.0	9.0	3.5	白色粒子 少量 砂粒 微量	灰色	良		外:底部回転ヘラ切り後ナデ	
58-13	①区	E4-4/ X(S2-4)		杯A		完形	13.0	8.0	3.4	白色粒子 少量	灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り後ナデ 内:中心3本ナデ	ヘラ差込み痕あり、口縁に自然釉
58-14	⑥区	G2-1/ X(S3-1)		杯A		1/2	14.6	10.4	4.1	白色粒子 少量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整 内:中心ナデ	
58-15	⑥区	J7-3/ X(S2-61)		杯B		1/2	11.8	8.6	3.8	白色粒子 少量	青灰色	良		外:底部回転ヘラ削り 内:中心ナデ	
58-16	⑥区	G4･5-4/ X(S4-1･6)		杯A		2/3	13.6	6.8	3.2	白色粒子 微量	淡黄灰色	不良		外:底部回転ヘラ切り後ナデ 内:中心ナデ	口縁に自然釉
58-17	⑦区	I37-4/X		杯A		1/3	13.0	8.0	3.0	白色粒子 少量 砂粒 微量	青灰色	良好		外:底部ナデ	
58-18	①区	A2-2 B2-1		高杯		1/10以下	13.2	13.0	14.2	白色粒子 多量 砂粒 微量	赤青灰色	不良	沈線杯部1条、脚部2条あり	裾端部:ナデ(面) 外:杯部底回転ヘラ削り	
58-19	①区	E6-3/X F5-4/X E6-1/X		高杯	脚部	脚1/2	—	15.0	10.8	白色粒子 多量	青灰色	良好	沈線3条、透穴(長方形)2段2方向にあり。	裾端部:ナデ(面)	自然釉かかる。
58-20	①区	E3-1･2/X E3-1/X		壺	胴部下半～底部	底完形	—	8.0	8.6	白色粒子 少量	灰色	良好		外:胴部下半回転ヘラ削り	体部に自然釉、肩部焼膨れ目立つ。
58-21	⑥区	J4-2 J9-2/ X(S2-61)	SK-21	蓋		1/3	15.4	—	4.3	白色粒子 少量	青灰色	良好		外:天井部カキメ	
58-22	⑥区	I8-3	SK-21	椀		1/6	12.0		4.7	砂粒 少量	淡黄色	不良		調整不明	
58-23	⑤区	K14-1・4	SK-23	杯A		1/6	14.0	8.4	3.3	白色粒子 微量 砂粒 少量	淡橙色	不良		外:底部回転ヘラ切り未調整	全体的に磨滅気味
58-24	⑥区	L7-4 L8-1/ X(S4-1･6)	SD-81 SK-22	蓋		ほぼ完形	12.0	—	3.6	白色粒子 少量	灰色	良好		外:天井部回転ヘラ削り 内:中心ナデ	
58-25	⑥区	K6-1	SD-78	蓋		1/10以下	14.0	—	3.9	白色粒子 多量 砂粒 少量	灰色	良好		外:ナデ	
58-26	⑥区	K6-1	SD-78	壺	頸～底部	口縁以外完形	—	—	14.0	白色粒子 砂粒 少量	青灰色	良好	体部に沈線２条	外:胴部下半回転ヘラ削り	上半に自然釉
58-27	⑥区	I7-1	SD-82	杯A		1/6	13.6	9.6	3.5	白色粒子 微量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	
58-28	⑥区	I7-1 I6-3	SD-82	杯A		1/2	13.0	8.4	3.2	白色粒子 微量	灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	
58-29	⑥区	J7-3	SD-85	杯A		1/2	13.4	9.4	3.1	白色粒子 少量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り後ナデ	
58-30	⑥区	K4-3	SD-77	杯A		2/3	13.0	9.4	3.6	白色粒子 微量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	内面に重ね焼痕あり
58-31	⑥区	I3-4	SD-31	杯H		1/6	11.6	6.6	4.2	白色粒子 少量	灰白色	不良		外:底部回転ヘラ切り未調整	

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	文様	調整	備考
58-32	①区	F-4/X	SD-10	蓋		1/4	11.4	9.4	5.3	白色粒子微量	灰色	良好	外面に沈線２条とその間に刺突文	外:底部回転ヘラ削り	部分的に自然釉
		F2-1・2	SD-11												
		E3-1/X													
	⑥区	G2-1・2・3/X	SD-31												
58-33	①区	C1-4	川	蓋		1/10以下	10.4	—	3.3	白色粒子微量	灰色	良好		外:天井部回転ヘラ切り後ナデ	
58-34	①区	B1-4	SD-4 SD-5	杯H		2/3	10.0	—	3.3	白色粒子微量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	底部外面にヘラ記号あり。
		C1-4	川												
		B2-2/X C1-4/X D2-1/X													
58-35	①区	C1-3	川	杯H		1/4	10.5	—	3.5	白色粒子少量	灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	全面に自然釉かかる。
		B2-2/X C2-1/X													
58-36	①区	E1-4	川	杯H		5/12	10.4		3.0	白色粒子微量	灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り後ナデ	
		F2-4/X													
58-37	⑥区	J6-1/ X(S2-61)	川	杯H		1/6	—	5.0	4.3	白色粒子少量	青灰色	良		外:底部回転ヘラ切り未調整	
58-38	⑥区	J5-3/ X(S2-61)	川	ⅢA		1/10以下	16.0	11.6	2.3	白色粒子多量	灰色	良		外:底部回転ヘラ切り後ナデ	
58-39	①区	D1-1	川	ⅢA		1/2	16.4	13.0	2.2	白色粒子微量	青灰色	良好		外:底部回転ヘラ切り未調整	
58-40	①区	D1-3/ X(S1-7)	川	横瓶		ほぼ完形	10.0	—	20.6	白色粒子多量	灰色	良好		外:胴部カキメ、底部側面回転ヘラ削り 内:底部側面指頭圧痕	体部に自然釉
		C2-1/X													
58-41	①区	C1-3・4/ X(S1-7) C2-2・D1-2/X	川	甕		3/4	18.0	—	44.0	白色粒子多量	灰色	良		外:タタキ後カキメ 内:同心円状当て具痕	

6. 墨書土器

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	調整	備考
57-19	⑥区	J8-3 J7-3/ X(S2-61)		ⅢA		1/10以下	16.0	13.0	2.3	白色粒子少量	青灰色	良好	外:底部回転ヘラ切り後ナデ 内:中心1本ナデ	底外面に墨書「村田」
57-20	⑥区	I7-4/ X(S2-61)		ⅢA		1/2	15.6	13.4	2.4	白色粒子多量	青灰色	良好	外:底部回転ヘラ削り後ナデ	底外面に墨書あり。判読不明
57-21	⑥区	I3-4		杯A		5/12	12.8	8.8	3.3	白色粒子少量	灰色	良	外:底部回転ヘラ削り後ナデ	底外面に墨書「家人」
57-22	①区	D2-4/X		杯A		1/10以下	12.0	7.4	3.1	白色粒子多量	灰白色	不良	外:底部ナデ	底外面に墨書あり。判読不明
57-23	①区	D1-1	川	杯A		5/6	12.6	7.8	3.2	白色粒子少量 砂粒微量	灰白色	不良	外:底部回転ヘラ切り後ナデ 内:中心1本ナデ	底外面に墨書「＃」
		F4-3/ X(S2-4)												
57-24	⑥区	K8-4 K9-2・4/ X(S2-61)		杯A		1/4	12.6	7.2	4.3	白色粒子少量	青灰色	良好	外:底部回転ヘラ切り後ナデ 内:中心1本ナデ	側外面に墨書「治」、底部中心にスノコ痕あり。

7. 土師皿・陶器

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/層位	遺構	器種	部位	残存率	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	調整	備考
57-25	⑥区	M5-4/ X(S1-38・39)	SD-75	土師皿		3/4	8.0	—	1.7	細砂粒微量	黄橙色	良	調整不明	
57-26	⑥区		P15	土師皿		3/4	7.8	—	1.7	粒子微細	黄白色	良	調整不明	
57-27	⑥区	M5-4	SK-25	土師皿		完形	8.4	—	1.4	粒子微細	赤橙色	良	外:口縁部横ナデ 内:口縁部横ナデ、底反時計回りにナデ後中心1本ナデ	
57-28	⑦区			土師皿		1/4	9.0	6.0	1.2	粒子微細	橙色	良		
57-29	②区	K2-2	SK-11	土師皿		1/3	11.7	6.8	2.3		暗黄褐色 /淡黄褐色	良	内外:口縁部横ナデ	
57-30	⑥区	M5-4/ X(S1-38・39)	SD-75	土師皿		完形	12.4	9.0	2.5		淡黄橙色	良	内外:口縁部横ナデ	
57-31	⑥区	J6-4/ X(S2-61)	川	灰釉壺	底部	底完形	—	6.8	8.3	白色粒子砂粒少量	灰色/ 深緑色	良好	外:胴部下半回転ヘラ削り、削り出し高台	
		K7-2/ X(S4-1・6)												
57-32	①区	F5-3/X		施釉陶器　椀		1/10以下	11.6	6.8	6.8	細砂粒微量	橙色/ 緑白色	良	外:底部回転ヘラ削り、削り出し高台	底部釉なし。

8. 土製品（1）（小形土器）

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ	遺構	種別	口径	底径	器高	残存状況	色調	焼成	胎土	調整	文様	備考
59-1	⑥区	I4-3	川堰下	壺	―	3.4	(4.8)	口縁部欠損	橙褐色 黒褐色	良好	粗砂粒多量	外縦位条痕		ケズリにより底部やや凹む。
59-2	⑥区	I8-3		壺	3.6	2.6	(4.0)	口縁部1/10	淡黄灰色	良	細砂粒少量 黒雲母小量	ナデ		ゆがみ著しい。
59-3	⑤区	H10-3/	SK-2	鉢	(3.5)	3.2	2.7	完形	黄白色	良	粗砂粒多量	外面指ナデ 内面らせん状に指頭圧痕		
59-4	⑥区	I8-4	SK-21	鉢	6.2	2.8	4.0	完形	黄褐色	良	細砂粒多量	内外面ナデ		底部逆位粘土充填製作
59-5	⑥区	I8-2	SK-21	鉢	4.4	2.2	3.3	完形	黄褐色	良好	粗砂粒多量	指ナデ、指頭圧痕		
59-6	①区	F4-1	川	鉢	4.2	3.0	3.2	1/3	暗橙褐色	良	粗砂粒少量	外面指ナデ、指頭圧痕	口縁端部円形刺突	
59-7	⑥区	I4-4/ X(S3-3)	川	高坏	3.2	2.8	2.7	口縁一部欠	橙褐色	良	粗砂粒多量	外面指ナデ、指頭圧痕	口縁・脚端部にキザミ	
59-8	①区	L2-2	SD-1	鉢	4.0	1.8	2.9	1/3	暗橙褐色	良	粗砂粒少量	脚部指頭圧痕		
59-9	①区	E7-2	SK-9	鉢	4.6	1.8	3.0	1/6	淡黄褐色	良	細砂粒少量	脚部指頭圧痕		
59-10	⑥区	J8-4/ X(S2-57)		蓋	5.2	―	(2.4)	つまみ部欠損	灰褐色	良	粗砂粒少量 黒雲母小量	内外面ミガキ		ツマミ頂部凹む

9. 土製品（2）（土偶・土製模造品）

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ	遺構	種別	最大長	最大幅	最大高	重量	残存状況	色調	焼成	胎土	文様	備考
59-11	⑥区	I8-1	SK-21	鏡形 土製模造品	4.8	―	1.4	10.8	紐部欠損	黒褐色 淡褐色	良	細砂粒微量		紐孔あり。
59-12	⑥区	H7-1/ X(S4-1･6)		土偶	(6.9)	(5.2)	―	(59.2)	胴部片	暗褐色	良	粗砂粒多量 黒雲母微量	3条1単位のヘラ描斜沈線を表裏面に2段配す。	側部に凹線状のくぼみ有り。
59-13	⑥区	I 8-1/ X(S2-57)		土偶	(5.2)	(5.1)	―	(75.7)	胴脚部片	淡橙褐色	良	粗砂粒多量 赤色粒子微量	表面中央部にヘラ描縦位沈線を垂下する。	脚部裏面は凹む。

10. 土製品（3）（土錘・有孔球形土製品・土製有孔円盤・土製円盤）

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ	遺構	種別	最大長	最大幅	重量	孔径	残存状況	調整	平面形	端面調整	文様	備考
59-14	⑤区	J13-4	SK-7	土錘	(3.0)	(1.0)	(2.6)	0.4	両端欠損		―	―		
59-15	⑥区	I5-4/ X(S3-3)	川	有孔球形土製品	(5.1)	(6.2)	(130.2)	0.9	1/4	指ナデ	円形	―	側部に棒状工具沈線	断面楕円形の扁平な球状を呈す。
59-16	⑥区	K3-4/Ⅲ	SD-31	土製有孔円盤	4.2	0.4	(6.6)	1.0	一部欠	(摩滅)	楕円形	打欠後擦		
59-17	⑥区	I4-2/ X(S3-3)	川	土製有孔円盤	5.3	0.8	28.3	1.0	完形	内外ハケ	略円形	打欠		
59-18	⑥区	J2-4	SD-30	土製有孔円盤	4.8	0.7	15.1	0.8	完形	内外ハケ	略円形	打欠後擦		内外面炭化物付着・二次焼成痕あり。
59-19	⑥区	I5-2	川堰下	土製有孔円盤	5.2	0.5	(17.0)	0.8	3/4	外条痕	楕円形	打欠後擦		内外面に炭化物付着する。
59-20	⑥区	I4-2/ X(S3-3)	川	土製有孔円盤	5.2	0.8	(13.8)	1.2	1/2		略円形	打欠後擦	櫛描文直線文・波状文	
59-21	⑥区	J5-1/ X(S3-3)	川	土製有孔円盤	3.6	0.5	6.3	0.7	完形	外ハケ	円形	打欠		外面に炭化物が多量付着する甕胴部片である。
59-22	⑤区	K13-3 J13-4	SK-18	土製有孔円盤	4.4	0.7	13.1	1.4	完形	(摩滅)	楕円形	打欠後擦		
59-23	⑥区	I1-3/ X(S3-1)		土製有孔円盤	4.6	0.8	(19.4)	0.5	一部欠	内外ナデ	楕円形	打欠後擦		
59-24	⑥区	I5-1/ X(S3-3)	川	土製有孔円盤	5.1	0.7	24.0	0.5	完形	内外ハケ	略円形	打欠後擦		
59-25	⑥区	J5-3/ X(S3-3) J6-2	川	土製有孔円盤	3.9	0.6	10.3	0.3	完形	内外ハケ	略円形	打欠		
59-26	⑥区	I4-2	川	土製円盤	8.6	1.3	95.4	―	完形	内外ハケ	不正楕円形	打欠		弥生土器の壺胴部片である。
59-27	⑥区	I6-1/ X(S3-1)		土製円盤	4.9	1.3	29.3	―	完形	(摩滅)	楕円形	打欠後擦		
59-28	⑥区	K6-3/ X(S4-23･18)	川	土製円盤	3.9	0.5	9.9	―	完形	外ハケ	略円形	打欠後擦		
59-29	⑥区	G4-2	SK-13	土製円盤	3.0	0.8	9.7	―	完形	ハケ	略円形	打欠	櫛描直線文	

11. 石器

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	種別	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/遺構・層位	形態	石質	長さ	幅	厚さ	遺存
60-1	石槍	⑥区	L6-2 / SD-78		安山岩	4.1	2.1	0.9	上下欠
60-2	石鏃	①区	F3-3		チャート	4.4	1.7	0.6	完形
60-3	石鏃	⑥区	I4-1		安山岩	3.5	1.4	0.3	完形
60-4	石鏃	⑥区	L7-2 / X	両面に調整	安山岩	2.6	1.4	0.5	先端欠
60-5	石鏃	⑥区	I7-3/ SK-21	両面に調整	安山岩	3.2	1.5	0.5	先端欠
60-6	石鏃未製品	⑥区	K4-1 / SD-53		安山岩	3.4	2.0	0.6	完形
60-7	石錐	⑥区	H7-1/ X	刃部は磨滅	安山岩	4.5	4.0	0.9	完形
60-8	石錐	⑥区	J4-4 / 川		安山岩	4.2	3.6	0.6	刃部欠
60-9	石錐	⑥区	G8-4		安山岩	2.8	3.5	0.8	刃部欠
60-10	石錐	⑥区	L3-3 / SD-31	基部の両側縁が磨滅	安山岩	4.1	2.0	0.8	刃部欠
60-11	石錐	⑥区	K3-3/ X		安山岩	4.0	1.7	0.7	完形
60-12	石錐	⑥区	K4-1/ SD-53	右側面上部と基端に礫面を残す	安山岩	4.3	1.4	0.9	完形
60-13	石核	⑥区	N18-2 / X	刃こぼれ	チャート	6.2	6.4	4.2	完形
61-14	石庖丁	⑥区	G2-1 / SD-31		粘板岩	3.9	2.1	0.6	大半欠
61-15	石庖丁	⑥区	J9-1/ X		粘板岩	5.8	6.3	0.3	左半欠
61-16	石庖丁	⑥区	H6-1/ X2		安山岩	7.0	3.8	0.9	大半欠
61-17	石庖丁	⑥区	J5-3 / 川	表面の右側中心に平坦調整	安山岩	11.8	13.8	2.0	一部欠
61-18	石庖丁	⑥区	I4-1/ 川	刃こぼれ	安山岩	9.7	8.3	1.6	左半欠
61-19	石庖丁	⑥区	J9-1 / X	刃こぼれ	安山岩	9.0	11.8	1.0	完形
61-20	石庖丁	⑥区	I4-3/ 川	刃こぼれ	安山岩	3.8	7.0	1.0	大半欠
61-21	石鍬	⑥区	H7-2/ X	基端に素材面を残す。両側辺湾曲部に潰れ	安山岩	12.5	9.1	2.9	刃部欠
61-22	石鍬	①区	G5-3/ X		安山岩	14.9	10.4	1.5	完形
61-23	石鍬	⑥区	H4-4/ X	基端に素材面を残す。両側辺抉入部に潰れ	安山岩	16.6	14.5	2.4	完形
61-24	石鍬	⑥区	H7-1/ SK-21	基端に素材面を残す。	安山岩	12.5	9.9	1.8	下半欠
61-25	石鍬	⑥区	J9-2/ X2		安山岩	19.3	11.1	2.0	完形
61-26	磨製石斧	⑥区	J4-4 / 川		砂岩	13.4	6.9	4.9	半欠
61-27	磨製石斧	⑥区	I3-4/ 川	表裏面に左上方へ斜行する擦痕	安山岩	9.5	6.2	4.9	下半欠
61-28	磨製石斧	⑥区	G8-1/ SD-80		安山岩	9.1	6.8	4.6	下半欠
61-29	磨製石斧	⑥区	J6-1/ 川	表裏面に左上方へ斜行する擦痕	安山岩	7.6	3.4	4.2	大半欠
61-30	磨製石斧	⑥区	L1-2/ SD-13		砂岩	6.3	6.3	4.9	上半欠
62-31	磨製石斧	⑥区	G1-4/ SD-91	刃縁に潰れ	砂岩	11.3	7.4	5.2	完形
62-32	磨製石斧	①区	F3-1/ 川	刃縁に潰れ	砂岩	8.9	6.7	4.4	基部欠
62-33	磨製石斧	①区	F6-1/ SK-6		砂岩	10.0	5.6	2.5	完形
62-34	磨製石斧	⑥区	I7-3/ SX-21		砂岩	6.0	6.1	3.1	上半欠
62-35	磨製石斧	⑥区	I5-1 / X	裏面に左上方へ斜行する擦痕	砂岩	12.7	5.4	3.6	刃部欠
62-36	磨製石斧	⑥区	H6-3/ X		砂岩	13.1	5.4	4.9	刃部欠
62-37	磨製石斧	⑥区	L3-3 / SD-32		砂岩	9.6	2.9	3.2	完形
62-38	磨製石斧	⑥区	I3-4 / X	右側面に刃部から右上方へ斜行する擦痕	砂岩	9.0	3.7	3.7	完形
62-39	砥石	⑥区	K2-2/ SD-48		砂岩	7.9	6.9	5.6	完形
62-40	砥石	⑥区	SD-29		凝灰岩	8.2	7.8	7.4	完形
62-41	砥石	⑥区	Ⅰ4-3/ 川	表面に斜行する擦痕	砂岩	9.6	11.1	4.0	完形
62-42	砥石	⑥区	K6-4 / X	表面に長軸方向の擦痕	凝灰岩	18.7	7.3	5.1	完形
62-43	砥石	⑥区	I4-4/ 川		砂岩	29.7	6.4	5.3	完形
63-44	石皿	⑥区	J5-4 / 川下層		砂岩	17.3	12.6	9.7	大半欠
63-45	石皿	⑥区	J5-3 / 川下層		安山岩	12.9	12.3	6.3	大半欠
63-46	石皿	⑥区	L7-2/ 川		花崗岩	14.7	20.9	6.1	上半欠
63-47	石皿	①区	D5-2/ SK-11		砂岩	15.0	17.3	6.0	上半欠
63-48	凹石・敲石	⑥区	K8-3/ SD-85		砂岩	10.3	8.6	6.6	完形
63-49	凹石・敲石	⑥区	G7-4 / X		安山岩	10.7	8.7	5.8	完形
63-50	凹石・敲石	⑥区	G7-4 / X		安山岩	9.4	7.3	4.2	完形

12. 石器の組成（Ⅰ）　出土地点

調査区		材質	石槍	石鏃	石錐	石核	剥片	砕片	石庖丁	石鍬	石鍬調整剥片	磨製石斧	砥石	石皿	凹石敲石	計	出土地点
①区	遺構内	安山岩					2			2						4	SD-12、SK-6・11・12、P94・97
		砂岩										5		1		6	
	遺構外	安山岩					6			2	2					10	C4、D3・D5、E3・E5～7、F3・F5～7、G5・G6
		砂岩										1				1	
		ﾁｬｰﾄ		1			3	1								5	
		ﾒﾉｳ					3									3	
⑤区	遺構内	安山岩					1									1	SK-20
	遺構外	安山岩			1											1	K15、M16、N18
		ﾁｬｰﾄ				1										1	
		ﾒﾉｳ					1									1	
⑥区	川	安山岩			1		9		4	1		6		1	1	23	
		花崗岩												1		1	
		砂岩							1			2	2	1		6	
		ﾁｬｰﾄ					1									1	
		頁岩											1			1	
		粘板岩							3							3	
		ﾒﾉｳ					1									1	
	他遺構	安山岩	1	1	2		13			3	5	2				27	SD-13・15・25・28・29～32・48・53・68・70・77・78・80～86・91、SK-4・21、SK-21
		砂岩										10	3		1	14	
		ﾁｬｰﾄ					2	1								3	
		粘板岩							2							2	
		凝灰岩											2			2	
		ﾒﾉｳ					7									7	
	遺構外	安山岩		3	3		15	1	2	16	2	1	1		2	46	G3～8、H4・6～9、I3～6・8・9、J1・7～9、K1～3・7・8、L3・7～9
		砂岩										8	1		1	10	
		ﾁｬｰﾄ					4									4	
		粘板岩							1							1	
		ﾒﾉｳ					7									7	
⑦区	遺構内	砂岩											1			1	SD-1
		凝灰岩											1			1	
		ﾒﾉｳ					2									2	
	遺構外	ﾒﾉｳ					1									1	F37
総数（点）			1	5	7	1	78	3	13	24	9	35	12	4	5	197	

13. 石器の組成（Ⅱ）　石材

種別／材質	石槍	石鏃	石錐	石核	剥片	砕片	石包丁	石鍬	石鍬調整剥片	磨製石斧	砥石	石皿	凹石敲石	計
安山岩	1	4	7		46	1	6	24	9	9	1	1	3	112
花崗岩												1		1
砂岩							1			26	7	2	2	38
ﾁｬｰﾄ		1		1	10	2								14
頁岩											1			1
粘板岩							6							6
凝灰岩											3			3
ﾒﾉｳ					22									22
総数（点）	1	5	7	1	78	3	13	24	9	35	12	4	5	197

14. 玉作り関係遺物

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	器種	調査区	地点	形態	石質	長さ	幅	厚さ	残存
64-1	原石	⑥区	J4-4　/ 川	上端中央と裏面上半に斜行する施溝痕あり。	緑色凝灰岩	8.8	4.4	3.6	完形
64-2	荒割	⑥区	I7-3 / SK-21		緑色凝灰岩	4.6	4.7	2.8	完形
64-3	形割	①区	F5-1 / X		緑色凝灰岩	3.5	2.5	1.9	完形
64-4	形割	⑥区	L8-1 / X		緑色凝灰岩	3.2	3.0	2.0	完形
64-5	形割	⑥区	J5-2　/ 川下層	表面と右側面の上端、裏面下端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	5.7	2.5	2.1	完形
64-6	形割	①区	F5-2 / X		緑色凝灰岩	4.6	2.5	2.1	完形
64-7	形割	⑥区	L5-1 /　SD-70		緑色凝灰岩	2.2	2.0	1.8	完形
64-8	形割	⑥区	K3-1 / SD-31	裏面右端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	4.2	1.8	1.8	完形
64-9	形割	⑥区	SD-30	右側面の上端と左端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	3.1	1.6	1.4	完形
64-10	剥片	⑥区	J2-3 / SD-30第2面	左側面と裏面の上端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	1.4	1.3	1.0	完形
64-11	剥片	⑥区	I4-1 / 堰	裏面上端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	1.6	1.4	1.2	完形
64-12	調整	①区	F5-4 / X	表面上端と右側面左端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	2.5	0.8	0.7	完形
64-13	研磨	⑥区	J3-4 / X	裏面上端に施溝痕あり。	緑色凝灰岩	2.4	0.6	0.5	完形
64-14	研磨	⑥区	I5-1 / X		緑色凝灰岩	3.5	1.3	1.0	完形
64-15	管玉	⑥区	L6-3 / SD-77		緑色凝灰岩	4.0	1.3	-	完形
64-16	玉鋸	①区	D3-2 / X	刃部は磨滅。	片岩	3.4	6.2	0.4	左半欠
64-17	玉鋸	⑥区	J4-4　/ 川下層		紅簾片岩	4.2	3.4	0.3	左半欠
64-18	玉鋸	⑥区	H7-2 / X		紅簾片岩	2.3	3.0	0.5	大半欠
64-19	玉鋸	⑥区	L5-1 / SD-70		紅簾片岩	1.8	3.1	0.3	大半欠
64-20	玉鋸	①区	F6-1 / X		片岩	2.9	3.6	0.2	大半欠
64-21	玉鋸	⑥区	J3-4 / SD-31		紅簾片岩	2.5	3.2	0.2	大半欠
64-22	紡錘車	⑥区	L6-1/ SD-75		滑石	2.7	3.9	1.5	下半欠

15. 玉作り関係遺物の組成（Ⅰ） 出土地点

調査区		石質	原石	荒割	形割	剥片	砕片	調整	研磨	管玉	玉鋸	計	出土地点
①区	遺構内	緑色凝灰岩				1						1	SD-39、SK-12
		ﾋｽｲ				1						1	
		紅簾片岩									1	1	
	遺構外	緑色凝灰岩		1	2	2		1				6	D3、E2･4～6、F5･6
		紅簾片岩									1	1	
		片岩									4	4	
⑤区	遺構内	緑色凝灰岩				2						2	SD-64･66･91、SK-10･17
		片岩									3	3	
	遺構外	緑色凝灰岩					1					1	M16
⑥区	遺構内	緑色凝灰岩	1	3	7	11	4			1		27	SD-30･31･48･69･70･75･77･79、SK-9･21
		紅簾片岩									6	6	
		片岩									10	10	
	遺構外	緑色凝灰岩		1	1	4			2			8	G6、H7･9、I3･5･7･8、J3、K2、L7
		紅簾片岩									3	3	
		片岩									1	1	
総数（点）			1	5	10	21	5	1	2	1	29	75	

16. 玉作り関係遺物の組成（Ⅱ） 石材

種別／石材	原石	荒割	形割	剥片	砕片	調整	研磨	管玉	玉鋸	計
緑色凝灰岩	1	5	10	20	5	1	2	1		45
ﾋｽｲ				1						1
紅簾片岩									11	11
片岩									18	18
総数（点）	1	5	10	21	5	1	2	1	29	75

17. 木器

※層位のXは包含層を示す。単位はcm

番号	種類	法量(cm) 現存長	最大幅	最大厚	高さ	調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/遺構	材質･木取り	備考
66-1	鍬	40.0	18.4	3.0	-	①区	E1-3 / 川	コナラ属アカガシ亜属・板目	未製品　円形柄孔径3.5cm。
66-2	鍬	34.7	10.8	1.5	-	⑥区	K6-2/川 (S4-9)	コナラ属アカガシ亜属・板目	
66-3	狭鍬	32.2	8.0	2.8	-	⑥区	K6-2/川 (S4-9)	コナラ属アカガシ亜属・板目	円形柄孔径3.5cm。
66-4	鋤	35.4	10.2	2.0	-	⑥区	J5-4/ 川	樹種未鑑定･柾目	
66-5	鋤	37.9	17.0	1.5	-	①区	E1-3 / 川	コナラ属アカガシ亜属・板目	未製品
66-6	エブリ	10.3	30.0	1.6	-	⑥区	I4-4 / 川上層	コナラ属アカガシ亜属・板目	円形柄孔径1.6cm。
66-7	大足･枠	40.5	3.5	2.0	-	⑥区	J6-1 / 川	樹種未鑑定･板目	
66-8	田下駄	31.0	12.6	1.0	-	⑥区	J6-4 / 川	スギ・柾目	径2cmほどの穿孔2つあり。 側面に切り込みあり。
66-9	田下駄	33.1	17.0	2.2	-	⑥区	G2-2 / SD-74	スギ・柾目	径0.2～1.8cmの穿孔11あり。
66-10	槽	26.0	13.2	1.8	4.5	①区	E1-4 / 川	スギ・柾目	0.5×1.5cmの穿孔あり。田下駄に転用か。
66-11	槽	26.7	6.8	1.6	4.8	⑥区	G2-1/ SD-31	樹種未鑑定･板目	径0.8cmの穿孔あり。底部内面抉る 田下駄に転用か。
66-12	槽	26.0	19.2	3.5	6.2	①区	F3-2 / 川	スギ・柾目	
66-13	槽	32.0	15.0	5.9	6.1	⑥区	J6-1 / 川	樹種未鑑定･柾目	未製品。径1.2cmの穿孔あり。
66-14	槽	35.2	14.0	1.9	4.0	⑥区	J6-3/ 川 (S4-23･18)	ケヤキ・柾目	
67-15	木庖丁	10.1	5.8	0.4	-	①区	B2-3 / 川	ムクロジ・柾目	片面から刃部を削る。紐孔、樋あり。
67-16	木庖丁	12.9	5.4	0.9	-	⑥区	K6-3/ 川 (S4-11･12)	クワ属・柾目	片面から刃部を削る。紐孔、樋あり。
67-17	木庖丁	8.5	5.8	1.1	-	⑥区	L7-3/ 川 (S4-1･6)	ムクロジ・柾目	片面から刃部を削る。背部に段をもつ。
67-18	木庖丁	10.0	7.4	1.7	-	⑥区	I4-1/ 川 (S3-2)	樹種未鑑定･柾目	三条の沈線あり。片面から刃部を削る。
67-19	底板	径13.0	-	0.6	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定･柾目	留め具痕3ヶ所あり。
67-20	曲物	21.5	5.0	0.5	-	⑥区	K1-4 / SK-6	樹種未鑑定･柾目	径0.5cmの穿孔2つあり。
67-21	蓋	径14.2	-	1.8	6.6	①区	E3-2 / 川	ケヤキ・柾目	径0.2～0.6cmの穿孔6つあり。 1ヶ所貫通せず。
67-22	把手?	-	3.0	2.3	-	⑥区	L8-1/X (S4-15)	樹種未鑑定･柾目	摩擦痕あり。
67-23	紡錘車	径8.8	-	1.1	-	①区	川	樹種未鑑定･柾目	
67-24	織機	21.9	4.2	0.8	-	⑥区	J5-1/ 川 (S4-13)	スギ・柾目	
67-25	道具	19.3	2.0	1.5	-	⑥区	川	スギ・柾目	3ヶ所に樹皮を巻く。
67-26	扉板	16.3	6.2	0.8	-	⑥区	J8-1 / SD-85	スギ・柾目	ミニチュア品か。

番号	種類	法量(cm)				調査区	ｸﾞﾘｯﾄ/遺構	材質・木取り	備考
		現存長	最大幅	最大厚	高さ				
67-27	盾形	20.7	6.0	0.7	-	①区	C2-1 / 川	モミ属・板目	片面に赤色塗彩あり。
67-28	戈形	13.9	2.5	1.0	-	①区	D1-3 / 川	スギ・板目	1辺0.4cmの方形穿孔2つあり。
67-29	戈形	12.7	4.0	0.8	-	⑥区	J5-3 / 川 (S2-52～54)	スギ・柾目	先端部欠損。
67-30	斎串	10.8	1.8	0.4	-	⑥区	J8-1 / SD-85	樹種未鑑定・板目	斎串もしくは人形か。
67-31	儀器	45.8	14.3	1.8	-	⑥区	J4-3 / 川 (S2-52～54)	樹種未鑑定・板目	
67-32	儀器	31.0	14.4	1.1	-	①区	D1-4 / 川	ヒノキ・板目	表面を丁寧に磨く。
67-33	琴板	34.0	8.6	1.0	-	⑥区	K7-1 / 川	スギ・柾目	琴尾側に突起7つあり。楕円形の集弦孔あり。琴尾付近に0.2cmほどの穿孔2つあり。
67-34	舟形	15.0	2.7	1.0		①区		樹種未鑑定・板目	
67-35	刀形	21.5	3.2	0.9	-	⑥区	J6-1/X (S4-11・12)	樹種未鑑定・柾目	
67-36	人形	36.4	4.9	2.0	-	⑥区	L8-4	樹種未鑑定・柾目	
68-37	鳥形	36.5	8.9	1.3	-	⑥区	J5-3/川 (S4-9)	樹種未鑑定・板目	0.5×1cmの穿孔あり　破損部にも穿孔一部残る。
68-38	椅子	35.2	8.6	1.6	-	①区	D2-2川下層	樹種未鑑定・板目	
68-39	建築部材	47.0	5.5	5.5	-	⑥区	L5-4 / SD-75	樹種未鑑定・柾目	角の部材
68-40	不明品	38.0	径2.4	-	-	⑥区	川	芯持ち丸木	端部に有頭状の加工を施す。天秤棒か。
68-41	不明部材	56.1	4.5	3.6	-	①区	E6-3/SK-9	樹種未鑑定・柾目	両端付近に2×5cmほどの穴あり。織機部材か。
68-42	ミカン割材	99.0	21.6	5.2	-	①区	D1-3 / 川	樹種未鑑定・柾目	大型の割材。
69-43	箸	18.6	0.5	0.4	-	②区	K2-2 / 川	樹種未鑑定	SW-2からは図示したもの以外に4点出土。
69-44	箸	19.4	0.6	0.5	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定	
69-45	箸	19.6	0.6	0.25	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定	
69-46	箸	20.1	0.6	0.5	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定	
69-47	箸	20.1	0.6	0.6	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定	
69-48	箸	20.0	0.6	0.4	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定	
69-49	箸	20.9	0.5	0.25	-	②区	K2-2 / SW-2	樹種未鑑定	
69-50	箸	18.5	0.6	0.4	-	①区	D1-4 / 川最上層	樹種未鑑定	川の最上層からは図示したもの以外に1点出土。
69-51	箸	19.5	0.7	0.5	-	①区	D1-4 / 川最上層	樹種未鑑定	
69-52	箸	22.0	0.6	0.6	-	①区	D1-4 / 川最上層	樹種未鑑定	

第５章　まとめ

第１節　遺構のまとめ

・糞置荘ついて

「糞置」の名で、古代荘園を彷彿とさせる糞置遺跡であるが、今回の調査においても、奈良時代の糞置荘に関わる成果は、須恵器や墨書土器など、公的な施設の存在を予見させる遺物はあったものの、明確な荘園関連の遺構は見出せず、東西に伸びて、下層に須恵器と木片を含む⑤区南端のSD-93(第37図)だけがその可能性を含む。

ただし、これまでの調査区は、平成11年度に実施した調査区(文13)以外は、全て荘園域の条里から西へ外れており、⑦区だけが「上寺田」の字名で、天平神護二年開田絵図の西境と最も接近しているにすぎない(文4)。荘園に対する考古学的解釈は端緒についたばかりであり、その内容は未知数と言っても良い。

・墓域について

墓域は、弥生時代中期と弥生時代後期～古墳時代前期に時期の大別される、①区・⑥区の遺構に限ると、弥生時代中期の墓としては、土壙墓(⑥区SK-13、⑤区SK-9)、木棺墓(⑤区SK-19)を確認することができた。⑥区SK-13と⑤区SK-19は不整な長楕円の平面形を呈し、いずれも少量の土器片を上層に含んでいた。⑤区SK-19においては粘土質になった木棺の痕跡を確認することができた。

弥生時代の墓は、昭和49年度調査区に集中して築かれたようであり、Ⅱ期には大型の壺や甕、または、底部穿孔ある小型甕を用いた土器棺墓、Ⅲ期には土器を副葬した土壙墓、Ⅳ期には単体の土壙墓に加え、環状に配置された土壙墓が2群存在したことなどが報告されている(文2・7・8)。

弥生時代前期から中期の墓域は、川の南岸の舌状微高地中心域に形成され、川の北岸は散発的に利用したようである。

弥生時代後期～古墳時代前期の墓としては、方形周溝墓(⑥区SX-1～3)があり、①区・⑥区の土坑(①区SK-4～7・9・10～12、⑥区SK-2～5・7～12・15～20・25、⑤区SK-2・5・12)も、穴の大きさに比べ土器片は散在して含まれているものが多く、これらもこの時期の土壙墓の可能性がある。

土坑は不整円形のものが多く、長楕円形(①区SK-5、②区SK-10・12)のものもある。ただし、①区SK-9は完形の祭祀土器や木片も含む大型土坑であり、墓とは異なり、集落祭祀に関連するものと考える。全体的にこの時期の墓は、舌状微高地北側の外縁や、川の対岸に展開することが判明した。

・集落について

弥生時代の集落遺構は、溝(⑥区SD-30～32・53・69・70・82、②区SD-15)である。⑥区SD-30は、発掘当初、⑥区SX-1・2の南辺をかすめて東西に伸びる溝と考えていたが、土器の出土状況や層位を再検討すると、⑥区SD-32とした溝と一体のものと見え方が適切である。SX-1・2の南辺をかすめるJ2-4　ｸﾞﾘｯﾄからM2-2ｸﾞﾘｯﾄに向かって流れる溝は、SD-69の延長と見た方が自然であろう。そのため、第48図中の⑥区SD-30出土資料は、第49図中の⑥区SD-69出土資料と時期を同じくする資料と考え、ここで修正したい。

②区SD-15も弥生中期の土器を非常に多く含み、なお東西に延びることが予想され、①区SD-69

も西へ延び、一見、西側一帯に集落が広がるように見えるが、④区においては黄褐色砂質土を地山とする遺構はなく、遺物を含む遺構はT2ｸﾞﾘｯﾄの④区SK-7までであった。⑥区南側の水田においては試掘の結果、遺物密度が高いことが既に判明している。以上の所見から、弥生時代中期の居住域は、ある程度の幅をもって、川の北岸に沿って展開していると考え、集落の中心域は、現在の半田集落と重なる可能性が高い。

中期の初頭、櫛描文系土器が普及する時期には、著名な石川県小松市八日市地方遺跡(文1)、同羽咋市吉崎次場遺跡(文11)といった拠点集落において、敵の敵や水害を防ぐための環濠が出現しているが、八日市地方遺跡のように川に接続した環濠を想定すると、⑥区SD-69や②区SD-15などがそれに相当する機能をもつようである。

弥生時代後期～古墳時代前期の集落遺構も溝(①区SD-18・21・22、⑥区SD-21・31・80・87、②区SD-1、⑤区SD-79・93、⑦区SD-1・4)である。⑥区SD-31は堰に伴うものであり、②区SD-1も水田への用水路と考える。⑥区SD-80は溝の幅や深さが一定でなく、土坑が連続して切り合った結果とも捉えられる。

山麓に近接する⑦区SD-1は古墳時代前期の土器が大量に廃棄され、祭祀用土器も顕著であることから川辺のマツリの様相を捉えることができた。⑦区の成果により、川を隔てた舌状微高地東側にも、別集落が展開することが確実となった。

今回の調査では、直接、居住を示すような竪穴住居等は確認できず、時期不明の掘立柱建物を2棟(①区SB-1、⑤区SB-1)、⑦区D31・32ｸﾞﾘｯﾄにおいて柱穴群を検出したのみであった。昭和49年度調査区においては、竪穴住居は明確な形が検出されず、主柱穴だけが多く検出され、中には、棟を支える副柱をもつ多角形(六角形)竪穴住居らしき遺構も存在したことが報告されている(文7)。掘立柱建物に関しては、多くが、①区SB-1のように梁間1間、桁行3間を測る小規模なものが多く、棟方向は舌状微高地の縁辺に沿うものが多かったとされるが、ほとんどが時期不明とされている。

・川について

①区・⑥区を北東から南西に流れる川は、昭和49年度調査区の東端で確認された川の続きであり、遺跡が立地する地形が舌状微高地であることを再認識できた。包含層を除去すると、川の南側には、古墳時代前期の土器集中区(①区SK-11・12、⑥区SK-21)が検出され、本来の川の南岸を暗示するかのように廃棄されていた。

川の中からは、昭和49年調査区と同様に多くの遺物が出土し、一部包含層も含む川の上層では奈良～平安時代の須恵器、中層では弥生時代後期～古墳時代前期の土器と木器、下層では縄文時代晩期、弥生時代前期～中期の土器を主に含むという、おおよその傾向をつかむことができた。

しかし、川の中層に関しては、調査中の浸水が著しく、第4章述べたように①区・⑥区ともに層位を細分して遺物の時期的前後関係を判別するまでには至らなかった。

川の中で検出した①区「水場遺構」と⑥区の「堰」は、標高約6.5mの川底面に構築された施設であり、水場遺構の方が若干深い位置にある。堰は、⑥区SD-31へ給水を目的としていたようであり、弥生時代中期の層を構築面としているため、時期は弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えているが、木器の未製品を水漬けにする貯木機能もあったと積極的に評価すれば、弥生時代中期に遡る可能性もあり、厳密には判断しがたい。

水場遺構は、木の実を加工した作業場であり、足場となる自然木周囲の堆積土は、トチやクルミの皮に加えて縄文時代晩期の土器を含み、未検出の川の南岸に向かって沈み込むと予想される。

第２節　遺物のまとめ

今回の出土遺物を概観すると、縄文時代から奈良･平安時代にわたる時期のものが出土しているが、大部分は、弥生時代中期と弥生時代後期～古墳時代前期の土器が総量を占めている。特に弥生時代中期においては、土器だけでなく石器、玉作り関連遺物、木器などを確認し、昭和49年度(1974)調査から30年以上の時を経ても、糞置遺跡は、県内屈指の弥生時代中期の遺跡として遜色ない内容を包括していた。縄文土器･弥生土器については、付章を参照していただき、ここでは、過去の調査成果も含めて、他の遺物ついて述べる。

･土製品について

土製品は、手捏土器、土製模造品、土偶といった祭祀具と、球形有孔土製品、土製有孔円盤、土製円盤が多く、昭和49年度の調査では、上記の土製品に加えて、弥生時代後期前葉の時期とされる塗彩された人面土器、鳥形土器、家屋状蓋形土製品といった特殊品が出土している。県内では敦賀市吉河遺跡においてもⅡ～Ⅲ期の鶏形土製品1点が報告されている。人面土器は再葬墓に見られ、鳥形土器や家屋状蓋形土製品は葬送に関連するものと考えられが、これら弥生時代の形象土製品は、未だ全国的に類例が少なく、さらなる検討を必要とする。土製有孔円盤や土製円盤は、土器片の周囲を打ち欠い弥生時代中期から古墳時代前期までの土器を再利用している。昭和49年度の調査では、その形状から「紡錘車」として報告され、中期後葉前半の土壙墓から副葬品として出土している(注1)。

･石器について

出土した石器は弥生時代中期のものが多く。木器の加工具として磨製石斧、柱状片刃石斧、石錐などがある。石皿、敲石、石鏃、石鏃なども含めれば、石器は、縄文的組成を基本として、石庖丁といった稲作に必要な石器だけが加わるように見える。石庖丁は磨製で、刃部が外湾刃(61-17･19)となるものと、直線刃(61-15･18･20)となるものの2種類があり、外湾刃は片刃、、直線刃は両刃を主体としている。打製のものは、昭和49年度、平成11年度の調査区でも出土しており、長方形の形状をもつものや、刃部のみを磨研したものが弥生時代前期前葉のものとして報告されている(文7)。

･玉作り関連遺物について

玉作り関係遺物は、濃緑色の硬質な緑色凝灰岩を用い、紅簾片岩製の玉鋸で施溝分割して管玉を生産するといった、北陸における弥生中期の典型的な玉生産を示している。玉材としては、軟質な緑灰色の緑色凝灰岩や鉄石英なども確認している。玉錐などの微細な遺物は確認できなかったが、石製紡錘車(64-22)は、玉材穿孔工具のはずみ車である可能性もある。住居などの遺構に伴うものはなく、管玉の完成品(64-15)のなどは古墳時代前期の墓に伴うものと考える。

･木器について。

木器は、主に①区･⑥区の川から出土し、形状や用途が推定できる品で約50点を確認した。他にも未掲載となった加工痕の残る建築部材や板材を含めれば、100点を有に超し、昭和49年度調査区の川だけでも約360点の木器が出土したことが報告され(文7)、川の中で原木や材を水漬けにし、木の樹脂やクセ、虫を除いた後に、需要に応じて自給的生産を行っていたようである(注2)。

今回の調査で出土した木器は、層位的には弥生時代後期～古墳時代前期のものであるが、木庖丁などは中期後葉の時期に遡る可能性もある。実用品においては、製品の廃棄品だけでなく未製品もあり、川を生産と消費の両面で最大限に利用したことが読みとれる。未製品の鍬(66-1)・鋤(66-5)、連続整形し

た荒割り材(図版第5)やミカン割材68-42には、若干のチョウナ痕が確認できるが、やや鋭さに欠け、平坦面は、木を割り裂いて作りだし、一部を柱状片刃石斧などを用いて修正を加えているように見える。鋤(66-4)、エブリ(66-6)、儀器(67-32)にはチョウナ痕が明瞭に残るが、これらも鉄製利器による加工痕かは判別し難い(注3)。しかし、木庖丁(66-15～17)(注4)、蓋(67-21)、織機(67-24)、扉板(67-26)といった実用品や、盾形(67-27)、戈形(67-28･29)、琴板(67-33)などの祭祀具は、薄い板材や小型の刳り物の「細工品」とも言うべき品であり、鉄製利器の存在を十分に想定させる。樹種鑑定ができたものは一部にとどまったが、材質から見ると、鍬、鋤、エブリといった水田を作る道具には、コナラ属アカガシ亜属といった固い木が用いられ、木庖丁もムクロジ、クワ属の木といった耐久性のある材を選択している。農具でも田下駄や棒状工具など、複雑な加工を必要とする木器にはスギを選択し、用途に応じて木材を使い分けている。

･土師器について

土師器は、弥生時代終末～古墳時代前期のもので占められ、①区･⑥区の包含層および川の南岸に位置する①区土器集中区SK-11･12、⑥区土器集中区SK-21に膨大な量が廃棄されていた。土坑や溝の資料としては①区SK-7･9･11･12、⑥区SD-8、⑦区SD-1などがまとまった量を含んでいる。甕は在地の擬凹線甕や布留系甕は少なく、球形に膨らむ山陰系甕が多い。器種においては、小型品が多く器台、高杯、鉢などが目立つ。壺は二重口縁壺もあるが加飾されたものはなく、直線状に外方へ延びる口縁をもつ在地のものがほとんどである。特殊なものは、①区SK-7出土の甕(44-4)であり、胴部外面下半をタタキ、内面をケズリ調整をしているものがある。

･須恵器について

須恵器は、7～9世紀末の時期にわたるが。蓋(58-1～5･21･32)、杯(58-6～9･31･34～37)、高杯(58-18･19)、壺(58-26)、甕(58-41)、横瓶(58-40)などは副葬品の須恵器と考えられ、平地においても7世紀初頭前後の後期古墳が存在していたことを示唆している。

注

1.　鳥形土器については、環状土壙墓群近くの弥生時代後期前葉の10号土坑(一辺1.7mの方形土坑)から壺4個、甕3個体以上の土器をともなって出土している。
2.　類似例として、愛知県春日井市勝川遺跡(苗他地区)(文12)において、弥生中期末の木製品加工場がSD01遺構、SX01遺構として報告されている。
3.　文1にて、現在の木地師にとっては、鉄器がなくとも、加工用の石斧でかなりの形状ができるとされている。
4.　吉崎･次場遺跡(文11)で平行四辺形の翼状をした完形品が報告されている。

参考文献

1.　石川県小松市教育委員会編『八日市地方遺跡-小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』Ⅰ　第1分冊(本文･写真図版編)　石川県小松市教育委員会　2003年
2.　梅川光隆･田辺昭三「福井県 糞置遺跡」『探訪弥生の遺跡』畿内･東日本編　有斐閣　1989年
3.　大塚初重･石野博信･石川日出志･武末純一･森岡秀人『シンポジウム日本の考古学3　弥生時代の考古学』学生社　1998年
4.　金田章弘「(2)東大寺開田地図と条里プラン」『福井県史』資料編16下　福井県　条里復原図-解説編-　1992年
5.　湖西線関係遺跡調査団･田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』本文･図版編　滋賀県教育委員会　真陽社　1973年
6.　田辺昭三「糞置遺跡」『遺跡を掘る』角川書店　1983年
7.　田辺昭三･梅川光隆「糞置遺跡」『福井県史』資料編13考古　福井県　1986年
8.　田辺昭三･梅川光隆「糞置遺跡」『福井市史』資料編1　考古　1990年
9.　中司照世「福井県 吉河遺跡」『探訪弥生の遺跡』畿内･東日本編　有斐閣　1989年
10.　中司照世「吉河遺跡」『福井県史』資料編13考古　福井県　1986年
11.　橋本澄夫「石川県 吉崎･次場遺跡」『探訪弥生の遺跡』畿内･東日本編　有斐閣　1989年
12.　樋上昇「愛知県 勝川遺跡」『探訪弥生の遺跡』畿内･東日本編　有斐閣　1989年
13.　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『福井県埋蔵文化財調査報告第56集　糞置遺跡』　2001年
14.　同『吉河遺跡発掘調査既報』　1986年
15.　平安京調査会編　『東大寺領糞置荘（条里遺構編）』北陸自動車道関係遺跡調査報告会　福井県教育委員会第7集　1976年
16.　山田隆一「交流からみた北陸弥生文化」『平成17秋季特別展　北陸の玉と鉄 -弥生王権の光と影- 』大阪府立弥生文化博物館　2005年

付　章　糞置遺跡の縄文土器･弥生土器の検討

第１節　縄文土器の検討（第70図）

本遺跡出土の縄文土器は、晩期後葉～末にかけての時間幅を有す。出土資料の大半は河川出土であり、一括性をもつ遺構出土資料はほとんどない。出土量も他の資料に比べて少なく、特に有文土器は僅少である。県内の他の調査例を見ても、遺構出土資料は未だ十分ではなく、出土土器群の様相や変遷過程の把握には至ってないのが現状である(注1)。そのため、ここでは、基礎作業として、型式学的分類を試み、大略的ではあるが、編年的位置付けや土器群構成の検討を行ってみたい。

Ⅰ．縄文土器の分類

分類にあたり、縄文土器を有文土器と無文土器に大別し、器種や器形、文様や調整の特徴から分別した。なお、対象資料はすべて破片であり、細分項目(類･種)の分類基準は一定ではない。

・有文土器

浅鉢を主体とし、若干の壺も認められる。出土量は無文土器と比較して少ない。器形復元個体が少なく破片資料を主体とするため、器種や口縁部形態、文様などにより第1群～第7群土器に分類した。以下にその内容を述べる。

第1群土器…壺を一括する。文様や部位により以下に細分する。

1類　口縁部が短く外反し、肥厚口唇部に横走沈線を配すもの。口縁部内面にも強い横位ナデによる凹部を有す。胴部最大径が口縁部径と同等以上になると考えられる。

2類　横走沈線を施す貼付隆帯を肩部にめぐらすもの。

第2群土器…口縁部が直線的に立ち上がる鉢。文様により以下に細分する。

1類　口頸部に2条の眼鏡状突帯、胴部に多重横走沈線を配すもの。

2類　口縁部に多重横走沈線を配すもの。

第3群土器…ボウル状を呈す浅鉢で、末端が流水状となる曲線的な工字状文を配す土器。

第4群土器…ボウル状を呈す浅鉢で、併行沈線と三角形陰刻による工字状文を配す土器。口縁部形態と文様により１～４類に細分する。

1類　口縁部が強く内湾し、粘土貼付により肥厚する口縁内端面に沈線を配すもの。

2類　口縁端部に沈線やナデによる凹みを有し、三角形状の工字文を配すもの。

3類　工字状文内に充填的な沈線を配さないもの。口縁部文様帯は屈曲部上半に位置する。

4類　口唇部に斜位短沈線を施し、工字状文内に充填的な多条の沈線を配すもの。口縁部文様帯は屈曲部全域に及ぶ。

5類　口縁端部を欠失する口縁部･胴部片を一括する。

第5群土器…ボウル状を呈す浅鉢で、平行沈線により区画された上下2段の区画帯内に三角形陰刻と充填的な斜位短沈線を配す土器。口縁部文様帯は屈曲部全域におよぶ。

第6群土器…口縁部が直線的に大きく開いて立ち上がる浅鉢。文様により以下に細分する。

1類　口縁端部が肥厚し、口縁部に平行沈線と三角形陰刻による工字状文を施すもの。

2類　口縁内面が肥厚し、端部に単位的に途切れる沈線を配すもの。

第7群土器…頸部に段を有し、口縁部が緩やかに外反する浅鉢。口唇部に狭い文様帯（いわゆる口外帯）を有し、４単位の区切文と横走沈線を配すもの。

・無文土器

深鉢を主体とし、壺も若干認められる。有文土器と比較して出土量が多く、器形復元個体も多い。器種や器形や調整などにより、以下、第8群～第12群土器に分類した。

第8群土器…外面にナデを施し、頸部から大きく外反する口縁部を有する深鉢。端部調整から以下に細分する。

1類　端部に押圧を施すもの。

2類　端部にナデによる面を有すもの。

3類　端部に単位的な突起を有すもの。指による押圧後ナデにより整形される。

第9群土器…外面に板状工具による縦位条痕を施し、口縁部に横位ナデによる無文部を有す深鉢。口縁端部押圧の有無や頸部横走沈線の有無が認められる。器形や口縁部形態により以下に細分する。

1類　頸部下端に段を有し、口縁部が外反する器形。最大径は口縁部もしくは胴部となる。

2類　胴部から内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。最大径は胴部となる。

3類　張り出す胴部から内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。最大径は胴部となる。

4類　張り出す胴部から内湾して立ち上がり、口縁部が外反する。最大径は胴部となる。口縁部の外反が強いもの(Ａ種)、弱いもの(Ｂ種)が認められる。

5類　胴部から内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が直立ないし緩やかに内弯するもの。最大径は胴部となる。

6類　底部から直線的に立ち上がり、口縁部が直立するもの。最大径は口縁部となる。口縁部に無文部を有すもの(Ａ種)、有さないもの(Ｂ種)にさらに細分される。

第10群土器…外面に板状工具による縦位条痕を施し、底部から直線的に立ち上がり、口縁部が直立ないし緩やかに内湾する器形を呈す深鉢。縦位条痕は第9群土器と同様であり、器形は第9群第5類土器と近似する。口縁無文部や頸部横走沈線は有さない。口縁端部押圧の有無がある。

第11群土器…外面に斜位条痕を施し、底部から直線的に立ち上がり、口縁部が直立もしくは緩やかに内弯する器形を呈す深鉢。条痕は、第9群と近似する板状工具のほかに、異なる原体のものも認められる。器形は、第9群第5類土器、第10群土器と近似する。

第12群土器…外面に斜位の強いナデを施し、口縁部が直立する深鉢。第９群土器における横位ナデとは明確に異なる。口縁端部はナデによる丸みを有す。

第13群土器…外面に板状工具による縦位条痕を施す壺。頸部下端(肩部)に横走沈線を配し、口頸部に横位ナデによる無文部を有すものを基調とする。器形や法量、無文帯の有無により以下に細分する。

1類　口頸部が長く胴部があまり張らない小形のもの。

2類　胴部が球形に近く張り出す大形のもの。

3類　頸部に無文部を有さないもの。

第14群土器…口唇部に弧状に突帯を貼付し、押圧を施す壺。突帯押圧幅により以下に細分する。

1類　突帯押圧幅が広いもの。

2類　突帯押圧幅が狭いもの。

Ⅱ．編年的位置付け

本遺跡出土資料は、破片を主体とするため土器全体の構成など不明な点も多い。また、県内において比較検討できる資料も少ないが、以上の分類基準によって有文土器、無文土器の位置付けを述べてみる。

･有文土器

有文土器の主体を占める浅鉢のうち、第4群･第6群･第7群土器は、広義の浮線文系土器群と考えられる。このうち第4群･第6群土器は、上下対向する三角形陰刻の粘土貼付による突起状の肥厚、第4群1類土器口縁内面の肥厚などから、大洞Ａ式に併行するとみなされる(注2)。

第7群土器は、体部文様を施さないが、いわゆる「口外帯」を有し、頸部に括れを有す器形から新相を示し、「浮線文土器第3段階」(石川1985)に位置付けられ、大洞A’式に併行するとみなされる(注3)。

第2群1類土器は、眼鏡状隆帯から、第3群土器は、流水状の工字状文から、両者は大洞Ａ式に併行するとみなされる(注4)。その他、壺と考えられる第1群土器は、石川県御経塚遺跡(文8)、第5群土器は、石川県下野遺跡(文27)、同柴山出村遺跡(文26)に類例が認められ(注5)、石川県の「下野式」や「長竹式」(文17)に関連するものと考える。

これらの主体を占める大洞Ａ式併行期とされる土器群を、型式学的連続性の検証により、詳細な時間的前後関係に置くことは現状では困難であり、後続する大洞A’式併行土器群との関係も不明である。

分類した土器群の文様における差異は、前段階(大洞C２式併行期)から引き継ぐ文様の系列を示し、同時に、第4群、第5群、第6群土器の器形に認められる差異も時間的差異を示すものではなく、器種(系列)差を示すと考えられる。

ただし、第4群3類土器と4類土器に認められる差異、つまり、口縁部文様帯幅の狭広や工字状文を構成する沈線の多少、および、文様帯として口唇部を明確に意識した斜位短沈線(注6)の有無は、両者の時間的差異を示している可能性がある。

以上、有文土器の保有する時間幅は、晩期後葉～末に位置付けられ、大洞Ａ式併行期を主体とする。なお、土器の胎土や色調の肉眼観察からは、明確な搬入品は判別できなかった。

･無文土器

第8群1類土器は、外反する口縁部形態や口縁端部の細長い押圧などから、北陸系「下野式」に併行する無文土器と考えられる(注7)。第8群2類土器は、口縁端部の三個一対の突起から、北陸系「中屋式」ないし「下野式」の突起に関連する可能性もある。

出土量の主体を占める第9群土器･第10群･第13群土器は、越前地域において、いわゆる「糞置式」(文22)と呼称される土器群に相当する。第11群･第12群土器は、器形において第9群5類土器に近似するが、調整方法や工具に斉一性が認められる第9群土器とは異なるために、別系列の土器である可能性もある。

第14群土器は、背の高い突帯の貼付方法から、東海系突帯文土器群(五貫森式など)とは明確に異なる。口縁部片のみであり、他部位の調整など不明であるが、搬入品の可能性は低い。

以上、出土状況からは一括性を認められないが、これら無文土器は、有文土器の胎土に近似することもあわせて、有文土器と同様に晩期後葉～末の時間幅のものと判断される。

Ⅲ．無文土器の変遷について

第9群土器･第10群･第13群土器は、口頸無文部、胴部縦位条痕という斉一性が認められる。これらの土器群には、主体となる深鉢(第9群･第10群)と、若干の壺(第13群)があり、器形により細分を行った。

深鉢では、口縁部が外反するもの(1類・2類)と、直立ないし内湾するもの(5類・6類)に大きく二分できる。この器形の差異は、時間的前後関係に起因するのではなく、前段階から引き継ぐ器種(系列)差と考える(文24)。この前提に立てば、外反口縁器形においては、頸部で屈曲し、外反するもの(1類)が型式学的に古相を示し、頸部の段が無くなり、緩やかに外反するもの(2類)が新相を示すと判断される。

内湾・直立口縁器形において、最大径が口縁部にある4類には、縦位条痕を櫛状工具(Ａ種)を用いたものや、細く密な条痕(Ｂ種)で施して口縁無文部を作り出さないもの(Ｂ種)が認められる。これらの差異は、時間的差異と考えられ、緩やかに内湾するもの(5類)から直立口縁(6類)への変遷が想定される。

胴部が張り出し、内傾して立ち上がる器形(3類・4類)においては、外反口縁部の強弱が時間的差異を示すと考えられ、外反の弱いもの(3類・4類Ａ種)から、短く外反するもの(4類Ｂ種)への変遷が想定できる。

壺の第13群土器に認められる器形差は、器種(系列)差と考えられるが、3類土器の縦位条痕(間隔が広く細い)の差異や、口頸無文部をもれないことを考慮すれば、1・2類土器と比較して新相を示すと考える。

第10群土器も第9群5類土器と同様の器形を呈すが、口縁無文部はない。この差異は、無文部の生成や消失に関連する時間的前後の差異ではなく、同時期の同一系統内の系列的差異と考える。両者に認められる無文帯や頸部沈線の有無は、半精製土器、粗製土器に相当するが、半精製土器が圧倒的に多い点は、検討を要す。

第11群土器は、第9群土器の内湾・直立口縁器形(系列)に相当し、その斜行する条痕から第8群1類土器と併行する可能性がうかがえる。

第14群土器には、口縁突帯幅の長短があり、時間的差異とも考えられるが、他の要素が連動するかどうかは不明である。

Ⅳ．小　結

以上、縄文土器の編年的位置付けと土器群構成についての概略を述べた。無文土器の主体を占める第9群・第10群・第13群土器については、器形による複数の器種の系列と、器形変化に基づく変遷を想定した。これら無文土器は、近隣地域と比較して強い在地性が認められる。対して、有文土器については、その系統性や系列について明確に把握できず、在地性が認められるかどうかは不明である(注8)。

越前地域における縄文時代晩期中葉土器群は、北陸系中屋式の強い影響下にあり、中屋式土器分布圏の外縁に位置している。続く縄文時代晩期後葉～末にかけての無文土器の在地化は、中葉～後葉の北陸系土器分布圏から分離を意味する。その背景として、西日本における弥生文化(遠賀川式土器)の漸位的な展開が関係する可能性を考えたい。そのためにも有文土器の様相の把握は今後の課題となろう。

第２節　弥生土器の検討（第71・72図）

弥生土器は前期・後期の土器を若干含むものの、主体は中期である。ここでは、資料数が豊富な中期中葉(畿内第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式併行期)の土器群について、土器群構成および変遷についての検討を

Ⅰ．土器系統の分別

弥生時代中期の土器群は、器種や器形あるいは文様・調整において大きく差異が認められ、系譜の異なる土器群で構成される。この系譜の異なる土器群を、「系統」(文3)として整理すれば、櫛描文系土器、条痕文系土器、沈線文系土器の3系統に大別できる。

このうち、櫛描文系土器の出土量が最も多く、器種が多様であることから、主体となる土器系統と判断する。櫛描文の種類や構成には、間隔を空けずに直線文を施す複帯構成のものや、直線文と波状文を交互に施した単体構成を主体とする。その他に、直線文や波状文と組み合わせた簾状文や擬流水文などもある。これら櫛描文の種類や構成の多様性は、系譜の地域的差異、あるいは、時間的差異を示す可能性もあり、系譜の地域的差異を示す場合には、櫛描文系土器の細分も想定できる。

条痕文系土器は、「岩滑式」に類似する受口状口縁を呈す広口壺および、甕・深鉢がある。これらは、前節において提示した縄文時代晩期土器群の系譜を引くものではなく、濃尾平野を中心とする東海地方の影響を受け成立した土器系統と考える。

沈線文系土器には、いわゆる「大地式」の壺や、指による沈線を施すもの(注10)があるが、出土数が少ないため一括した。「大地式」の壺は、その文様から縄文時代から系譜を引くと考える。しかし、それは、越前地域において縄文時代からの系譜を引いて成立するのではなく、他地域で成立し(注11)、その影響を受けて展開していった、独立した系統土器と考える。

その他には、「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」(文5)と呼称される系統土器や、中部地方の「阿島式」系の長頸壺などが搬入品としてある。

以上、弥生時代中期の土器は、若干の搬入品を除き、周辺地域の影響を受けて成立した、複数の系統土器の集合であり、それぞれが在地土器(注12)として展開していく時期と考える。

Ⅱ．時間的推移の把握

弥生土器の時間的推移を想定するにあたり、主に型式学的方法により、中期中葉土器群を古相・新相に大別する。なお、土器の変化の方向性の把握には、当地での編年案(文2・19)とともに、系統構成が類似する濃尾平野を中心とする東海地方の編年(文5)を参考とした。

・櫛描文系壺

無頸壺を含め、比較的胴部が張るものを主体とする。算盤玉状のもの(48-13・17、49-3など)も認められるが、いずれも最大径が胴部中央部に位置する。胴部下半に最大径を持つもの(49-1)は、比較的新相を示すと考える。

広口壺には頸部形態により、①胴部上半から緩やかにすぼまり頸部が曲線的に立ち上がるもの(52-5、52-6など)、②頸部が垂直ぎみに立ちあがり、口縁部下端と胴部上端に稜があるもの(52-10・52-11など)、が認められる。②は、頸部を明確に意識して製作しており、①と比較して頸部が若干長い。両者において、口縁部形態や櫛描文の種類や構成などの差異は明確ではなく、器種差の可能性もあるが、これら短頸の広口壺の祖形を遠賀川系土器(42-14)に求めれば(注13)、その頸部形態の類似から型式学的に①が古相を示し、②が新相を示すものと理解できる。

受口状口縁の壺には、口縁部の櫛原体による羽状刺突文、口縁端部のキザミ目(53-7)、口縁屈曲部の押圧(53-8)が確認でき、条痕文系の影響や変容がうかがえる。この変容過程、つまり、条痕文系の櫛描文系化を段階的時間差と捉えれば(注14)、新相に位置付けられる。同様に細頸壺のうち、受口状口縁(42-19・20)、袋状口縁(55-14)を条痕文系からの影響や変容とすれば、それぞれ新相に位置付け

られる。なお、受口状口縁の壺42-16は、胴部が大きく張らない器形において53-7と同様であるが、短い頸部を有し、ヘラ描沈線を巡らすことから、古相を示す可能性がある。

・条痕文系壺

受口状口縁を呈す広口壺は、条痕原体の視察から、調整工具は二枚貝と櫛状工具に分けられる。前者の口縁部には、二枚貝による弧線文(53-10)や棒状工具による羽状文(53-11)を施すのに対し、後者は、ヘラ状工具などによる重方形文(53-9、48-15)など、沈線文系と同様の集合沈線(注15)による文様が施されるものを主体とする。さらに、口縁部が長くなり直立するもの(48-15)や口縁部が開き内湾気味のもの(53-16)も認められる。これらの器形・文様に認められる差異は、時間的差異を示すものと考えられ、おおむね二枚貝条痕のものが古相、櫛状工具のものが新相を示すと考えられる。

・沈線文系壺

施文具においてヘラ状工具と櫛状工具の２種が認められる。資料数が少ないためもあり、器形や文様差などと連動する施文具の変化はうかがえない。50-16に認められる口縁部の対向する短い縦位弧線文を、「大地式」の壺に認められる横位の弧線文からの変化、つまり、弧線文の基点終点のみ施したものとみなせば、新相に位置付けられる。また、ハケ調整を施す48-10も、櫛描文系土器の影響とみなせば、おおむね新相と考えられる。

・「阿島式」系壺

搬入品と考えられる長頸壺1点がある。中部地方からの直接的な搬入か、あるいは、その影響を受けた他地域からの搬入か明確ではない。ヘラ描斜格子文を充填した区画帯を配す頸部が、袋状に張り出さない点から、新相と考える。

・櫛描文系甕

時間的差異を抽出するには出土数が少ないため、無文甕(ハケ調整の甕)を主体に検討を行う。主な器形には、①頸部のくびれが強く、胴部が張る器形(55-9など)、②頸部のくびれが弱く、胴部があまり張らない器形(48-18など)、③頸部のくびれが強く、胴部があまり張らない器形(53-5など)が認められる。器形③は、口縁部が「く」字状に外反し、胴部下半がやや細長の器形を呈すこと(注8)から新相に位置付けられる。口縁部形態には、逆「L」字状に外屈するもの(51-10)、外屈・外反するもの(48-19・49-5など)がある。後者が主体となるが、遠賀川系土器の甕に系譜を求めれば、前者が古相を示すと考える。後者の外反・外屈口縁には、口縁部の長短や屈曲の強弱の差異が認められる。これらの差異のみでは段階的時間差として明確に分離できないが、広口壺の口縁部形態の差異と類似するため、この口縁形態差は、時間幅を有して並存するものとみなされる。

そのほか、48-11の横位羽状のハケ調整および、51-6の口縁端部の指押圧は、条痕文系からの影響ないし変容がうかがえる。壺と同様に、条痕文系の櫛描文系化を段階的時間差と考えるならば、それぞれ新相に位置付けられる。また、口縁部が鍔状に肥厚する48-27において、二個一対の単位的な押圧は、無文甕の口縁端部の押圧に相当し、屈曲部内面の押圧は、条痕文系(52-12)の内面の押圧に相当すると考えられることから、新相と判断する。

・条痕文系甕・深鉢

二枚貝条痕を主体とするが、壺などで認められる櫛状工具による条痕はない。条痕施文方向には、部位により異なるものと全面同一方向のものが認められる。前者は口頸部が横位、胴部が縦位のもの(42-17など)があり、後者は縦位(50-3)のものと横位のもの(42-11)が認められる。このうち、強

く外反外屈する横位条痕を施すもの(42-11・51-9)は、より古相を示すと考えられ、口縁部が外反し縦位条痕を施すもの(50-3)は、櫛描文系無文甕と同様な器形・調整とみなせば、より新相を示す可能性がある。

・沈線文系甕

指による沈線を施すもの(41-4)の１点のみである。短く外屈する口縁部などから、おおむね古相と判断する。

Ⅳ.　土器様相の把握

これまで各土器系統土器群に認められる時間的推移を、主に型式学的方法から「古相」、「新相」として相対的に分別した。ここでは各系統土器群を包括して、各様相の特徴をまとめる。

古相…　櫛描文系の広口壺においては頸部が短く、外反する口縁部は頸部と一体となり成形される。細頸壺は主要器種とはならない。条痕文系土器は、二枚貝条痕を主体とし、受口状口縁の広口壺には搬入品が認められるとともに、甕・深鉢も器種として存在する。以上の内容から、古相の土器様相は、櫛描文系土器を主体とするが、条痕文系土器・沈線文系土器も独立した系統として展開するものと想定される。

新相…　櫛描文系の広口壺は、直立して成形され、古相に比べ若干頸部が長くなる。また、細頸壺が主要器種として確立すると考えられる。そのほか、受口状・袋状口縁の櫛描文系壺が認められ、条痕文系から櫛描文系への変容が顕著に認められる。広口壺における頸部意識の背景には、このような壺における器種分化や確立が影響するとも考えられる。条痕文系の受口状口縁の広口壺には、沈線文系土器の文様が施されるとともに、条痕原体も二枚貝から櫛状工具におおむね変化する。甕は、無文(ハケ調整)甕が主体となり、条痕文土器は衰退し系統として断絶するものと考えられる。そのほか、「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」系統土器や「阿島式」系長頸壺もおおむね該当するとみなされる。

以上の内容から、条痕文系土器・沈線文系土器は、櫛描文系土器の強い影響を受け、衰退あるいは変容し、独立して展開する系統ではなくなる。櫛描文系土器はその過程において、受口状口縁壺・細頸壺などの器種を分化・確立するとともに、甕では無文(ハケ調整)甕が主体となり、明確に櫛描文系が主軸系統となる。

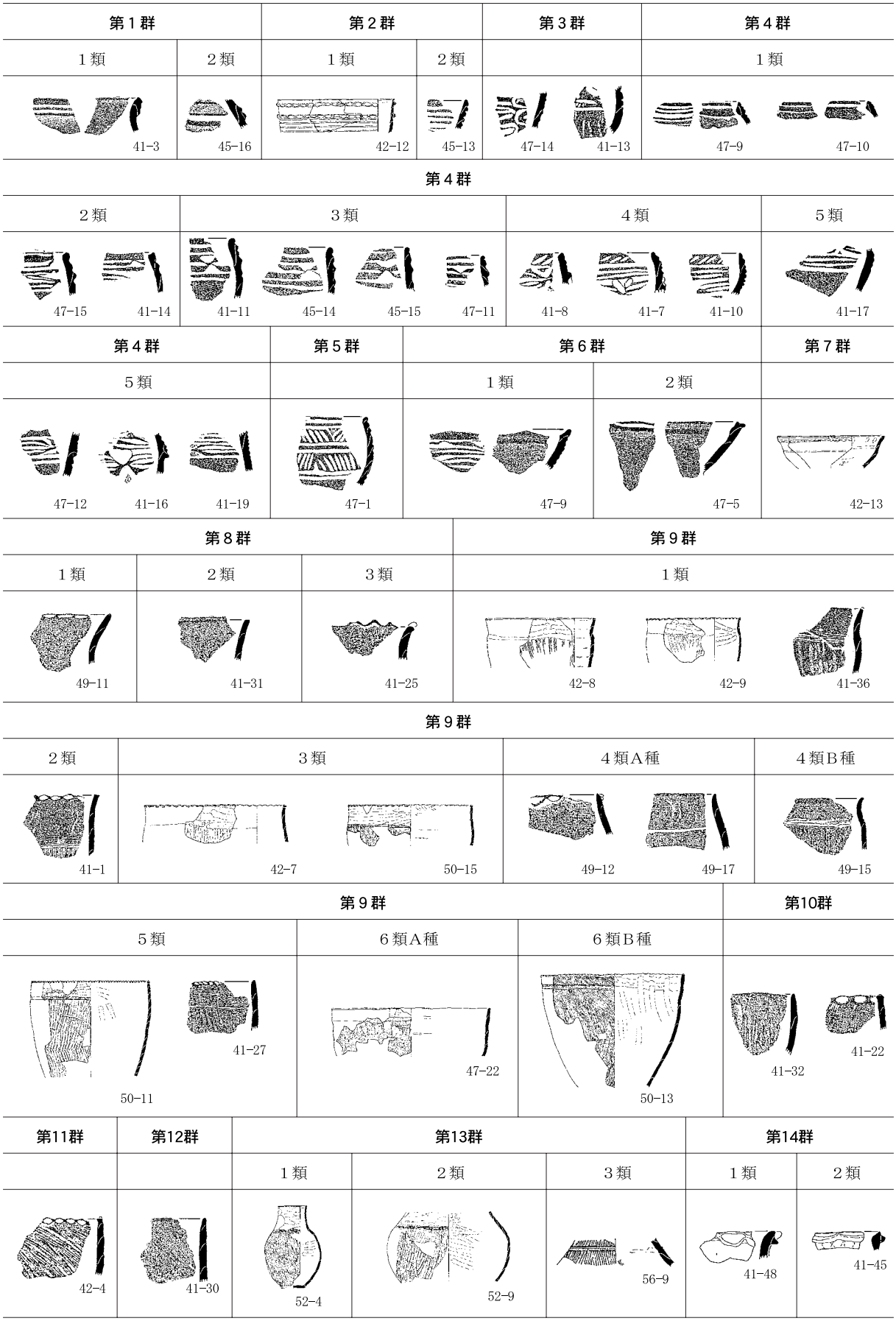
以上が、本遺跡出土中期中葉土器群における様相の大略である。編年的位置付けとしては、古相は畿内第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式前半、新相は第Ⅲ様式前半～後半に相当すると考える。

Ⅴ．おわりに

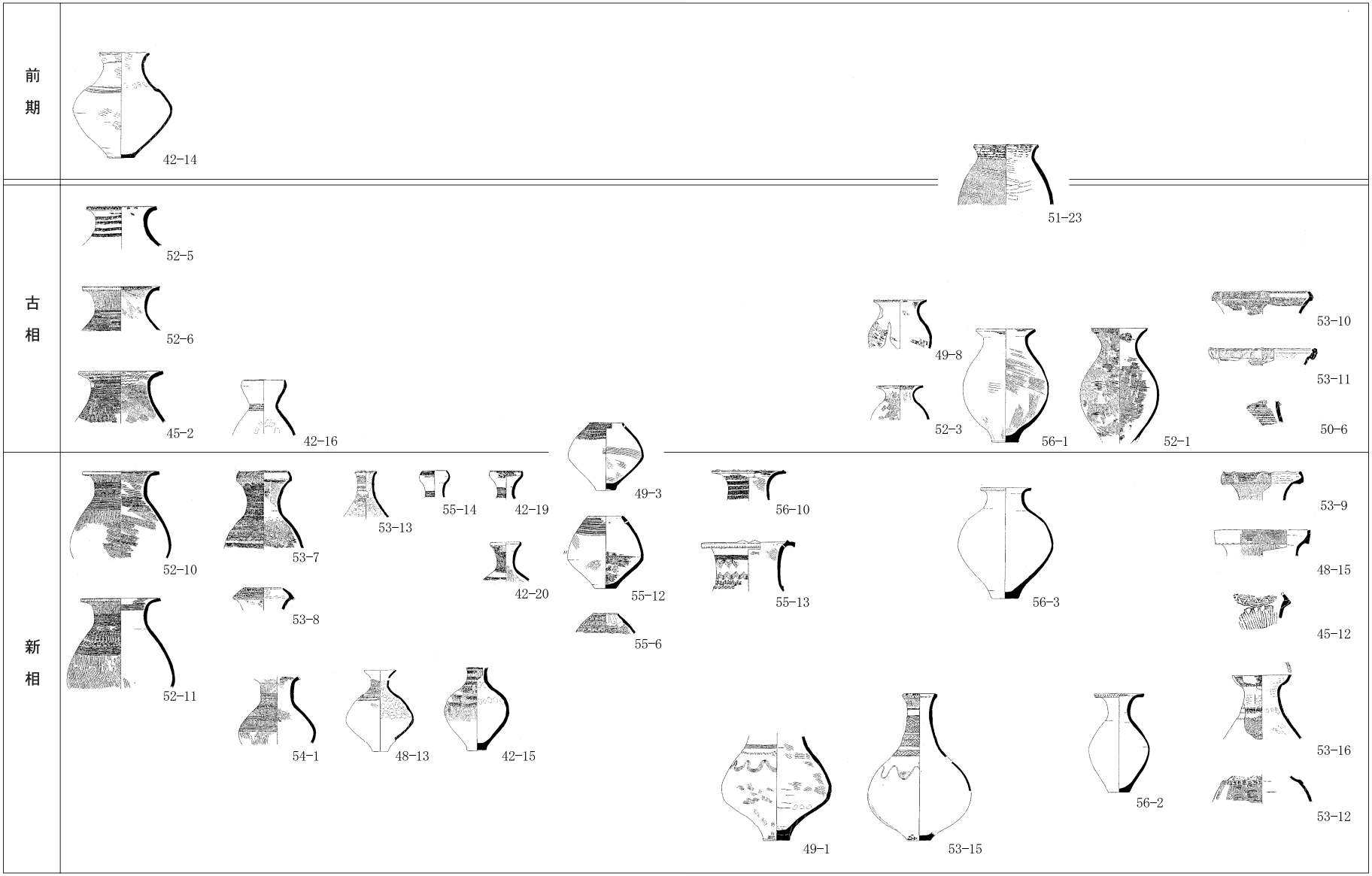
今回の検討は、図化資料のみを対象に行ったため、限られた系統や土器組成の一部のみを対象とした様相の把握に止まる。さらに、良好な遺構、層位的な一括資料による検討は行い得なかった。そのため、異系統土器群の併行関係および器種の消長の把握には問題が残ると考える。また、土器各個において、型式学的により古相、あるいは、より新相とみなされる例が認められることや、周辺地域の編年案(文2・18)を対比すれば、さらに細分は可能である。

これらの問題については、今後、越前地域における調査事例の増加による資料の蓄積を待ち、今回提示できなかった資料を含めた詳細な検討を行うことにより、編年的枠組みの整備を進めて明らかにしていきたい。

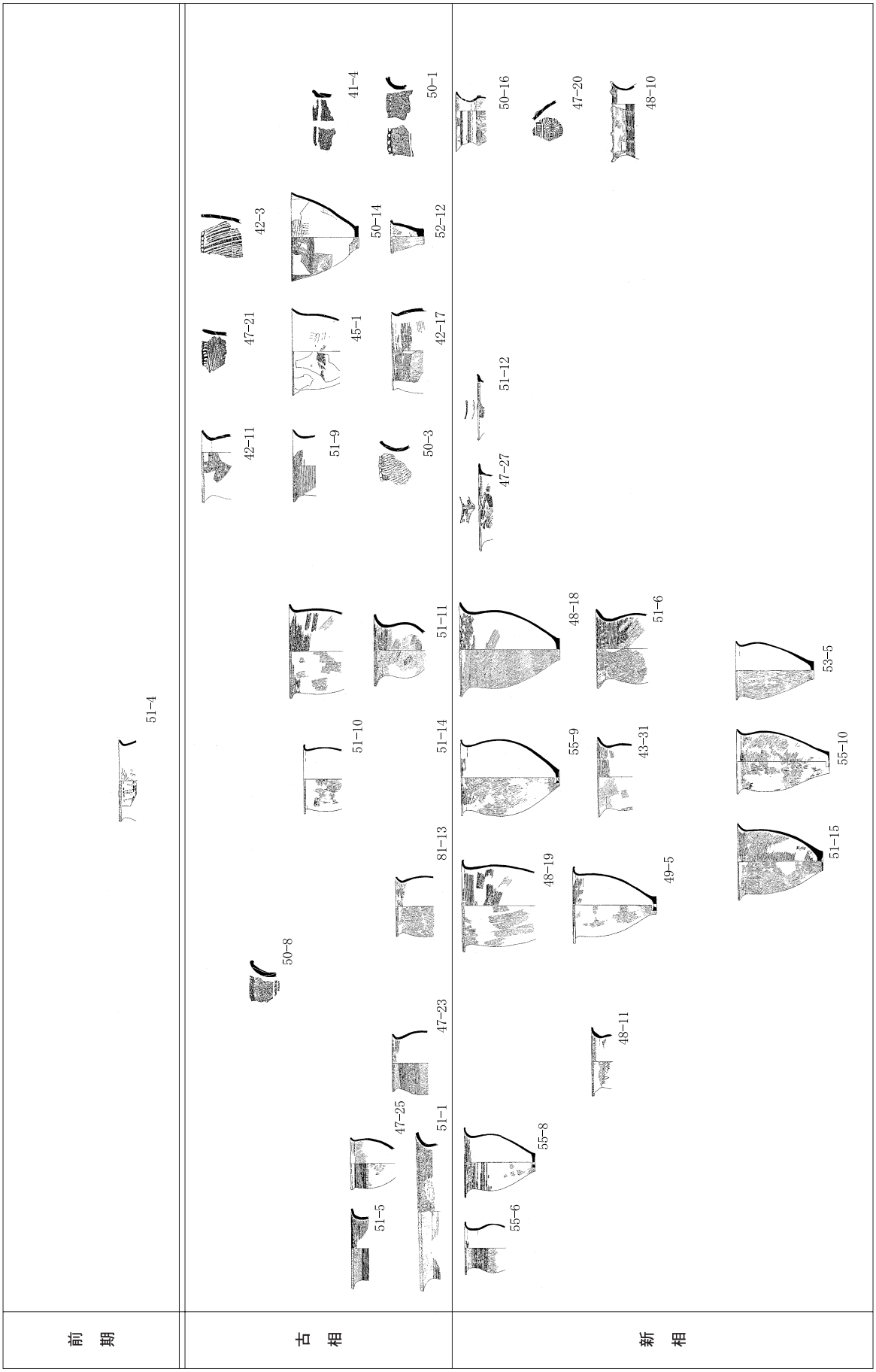
(山本)



第70図　縄文土器分類図



第71図　弥生土器変遷図(1)



第72図　弥生土器変遷図(2)

注

1.　県内においては、豆谷氏の勝山市大島田遺跡出土土器についての検討(文21)がある。
2.　県内における類似資料出土遺跡には、坂井町大味地区遺跡群(文14)、勝山市大島田遺跡(文21)、永平寺町金剛丸･成仏･木原町遺跡(文1)などがある。
3.　県内における類似資料出土遺跡には、福井市甑谷遺跡Ｄ地点(文19) がある。
4.　眼鏡状隆帯を持つ鉢は、県内において坂井町大味地区遺跡群(文20)・同坂井兵庫地区遺跡群 (文14) などがあり、口縁部が内屈する器形が主体となるが、本例は口縁部が直立する。この器形上の差異は、器種的差異なのか時間的差異なのか現状では把握できていない。
5.　第5群土器の文様系譜として、坂井町大味地区遺跡群(文20)出土の浅鉢(ｐ23－44)の２段構成の三角形文があげられる。
6.　口唇部の斜位短沈線は、縄文の置き換えとも考えられる。
7.　文25で検討した第24群2類土器が該当すると考えられる。
8.　資料数の豊富な中部地方・北越地方などの遠隔地域土器群と直接対比すれば、大枠の時間的位置付けは可能である。しかし、破片資料各個の器形や文様構成・文様要素の類似をもって、安易にそれらと同一とみなしてしまい、前代の土器群からの変遷過程や系統性、系列を軽視してしまう危惧がある。
9.　本文を記すにあたり、県埋文赤澤徳明氏の助言・協力を得た。
10.　42-4は、器形や沈線施文具の違いなどから、「大地式」を主体とする沈線文系土器とは別の系統に属すものと考えられる。浅い凹線状ではなく、強く施される点が異なるが、北陸系の「矢木ジワリ式」の影響も考えられる。
11.　前節でも認められるように、縄文時代晩期後葉～末の土器様相は不明な点が多い。現状においては、当地に出自・系譜が求められる他地域土器群とは、器形や文様・製作技法などに差異が認められると判断し、本遺跡および周辺で製作された広義の意味での在地土器とした。狭義の意味での在地土器とは、当地域のみで成立・展開し分布する土器群(在地系土器群)であり、本遺跡においては明確に確認できない。
12.　50-1は、櫛描文系ではなく、他の系統に属す可能性がある。
13.　本遺跡出土の遠賀川系の広口壺は1点のみの出土であり、他地域から影響を受けて成立した在地土器であるのか、あるいは搬入品であるのか判断できなかった。そのため、本遺跡において遠賀川系土器の系譜が中期中葉まで継続するかどうかは不明である。なお、以下に検討する甕においても同様である。
14.　近似する器形において、文様描出方法が異なる場合は、施文具を置き換えた個体として同時期で併行関係をもつと考えられるが、器形、形態が大きく異なるため、変容もしくは土器系統が変更したものとして段階的時期差と捉えた。
15.　坂井兵庫遺跡群(文14)などで、口縁部形態などから古相と考えられる段階において、口縁部にヘラ状工具による弧線文などを施す例も認められる。よって、重方形文などの集合沈線により文様を施すものについては、後出性があると判断した。
16.　いわゆる「瀬戸内系甕」に近似するものとみなした。

参考文献

1.　天井康昭編『金合丸・成仏・木原町遺跡』永平寺町教育委員会　1995年
2.　赤澤徳明「第Ⅲ部　編年編　福井県地域」『ＹＡＹ！弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会　1996年
3.　石黒立人・宮腰健司「第Ⅲ部　編年編　尾張（付：美濃)」(文2)
4.　石川日出志「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37-4　1985年
5.　加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社　2002年
6.　宝珍伸一郎編『大島田遺跡』勝山市教育委員会1991年
7.　清水町教育委員会『甑谷』2002年
8.　高堀勝喜『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会　1983年
9.　田辺昭三・梅川光隆「糞置遺跡」『福井県史』資料編13考古　福井県　1986年
10.　田辺昭三・梅川光隆「福井県糞置遺跡」『探訪　弥生の遺跡』畿内・東日本編　有斐閣　1989年
11.　田辺昭三・梅川光隆「糞置遺跡」『福井市史』資料編１考古　福井市　1990年
12.　寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　1990年
13.　永井宏幸「沈線文系土器について」『朝日遺跡Ｖ』（財）愛知県埋蔵文化財センター1994年
14.　中川佳三編『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ（遺物編）』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2005年
15.　久田正弘「第23群土器下野式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986年
16.　久田正弘「北陸西部の大洞Ｃ２式～大洞Ａ´式直後の土器編年」『東日本における稲作の受容』第１分冊　東日本埋蔵文化財研究会　1991年
17.　久田正弘「北陸地方西部の土器の動き」『氷遺跡発掘調査資料図譜』第3冊 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会　1998年
18.　福海貴子「第Ⅵ章第１節八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ｉ』　石川県小松市教育委員会　2003年
19.　古川登「越前における弥生時代中期の土器編年」『甑谷』清水町教育委員会　2002年

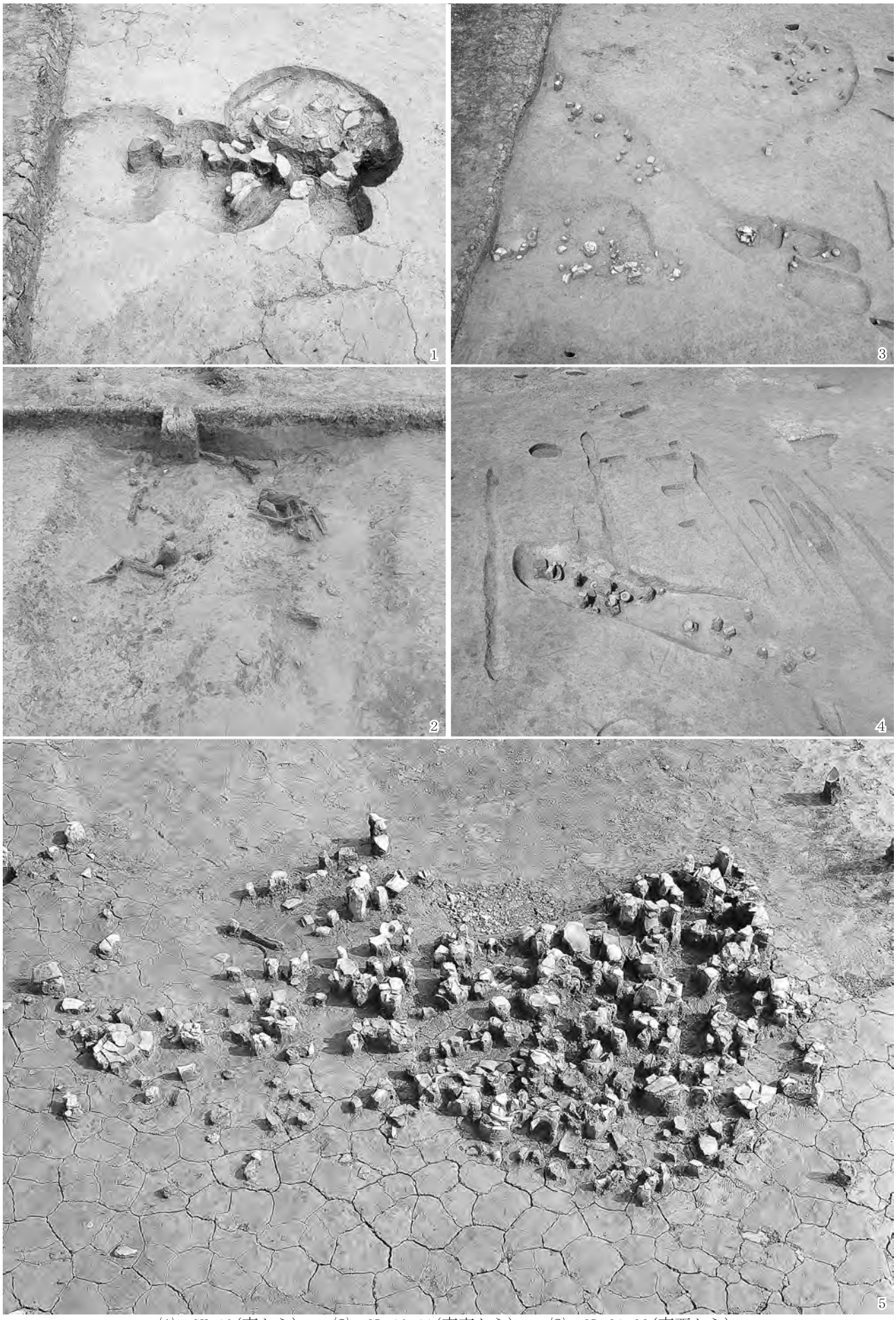
20. 本多達也編『大味地区遺跡群』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1999年
21. 豆谷和之「付章　大島田遺跡出土土器の編年的検討」(文6)
22. 豆谷和之「糞置式土器について」『文化財論集』1994年
23. 南洋一郎「糞置遺跡」(文9)
24. 山本孝一「第２章第２節　縄文時代晩期後半土器群の検討」(文14)
25. 山本孝一「第2章第3節弥生時代前期・中期土器群の検討」(文14)
26. 湯尻修平「柴山出村式土器について」『北陸の考古学』　石川県考古学研究会　1983年
27. 吉岡康暢「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』第56号第4号　1971年

図　　版

⑴　①区遠景（北から）　　⑵　①区遠景（南西から）

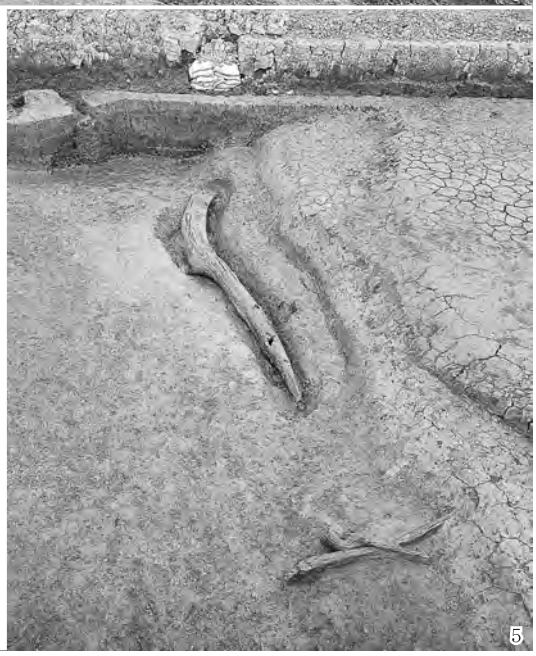
図版第二　遺　構　①区

(1)　①区全体(南から)　(2)　SB－１(南から)　(3)　SB－１P76(南西から)　(4)　SK－５(南から)
(5)　SK－６(南から)　(6)　SK－７(南から)　(7)　SK－９(北西から)



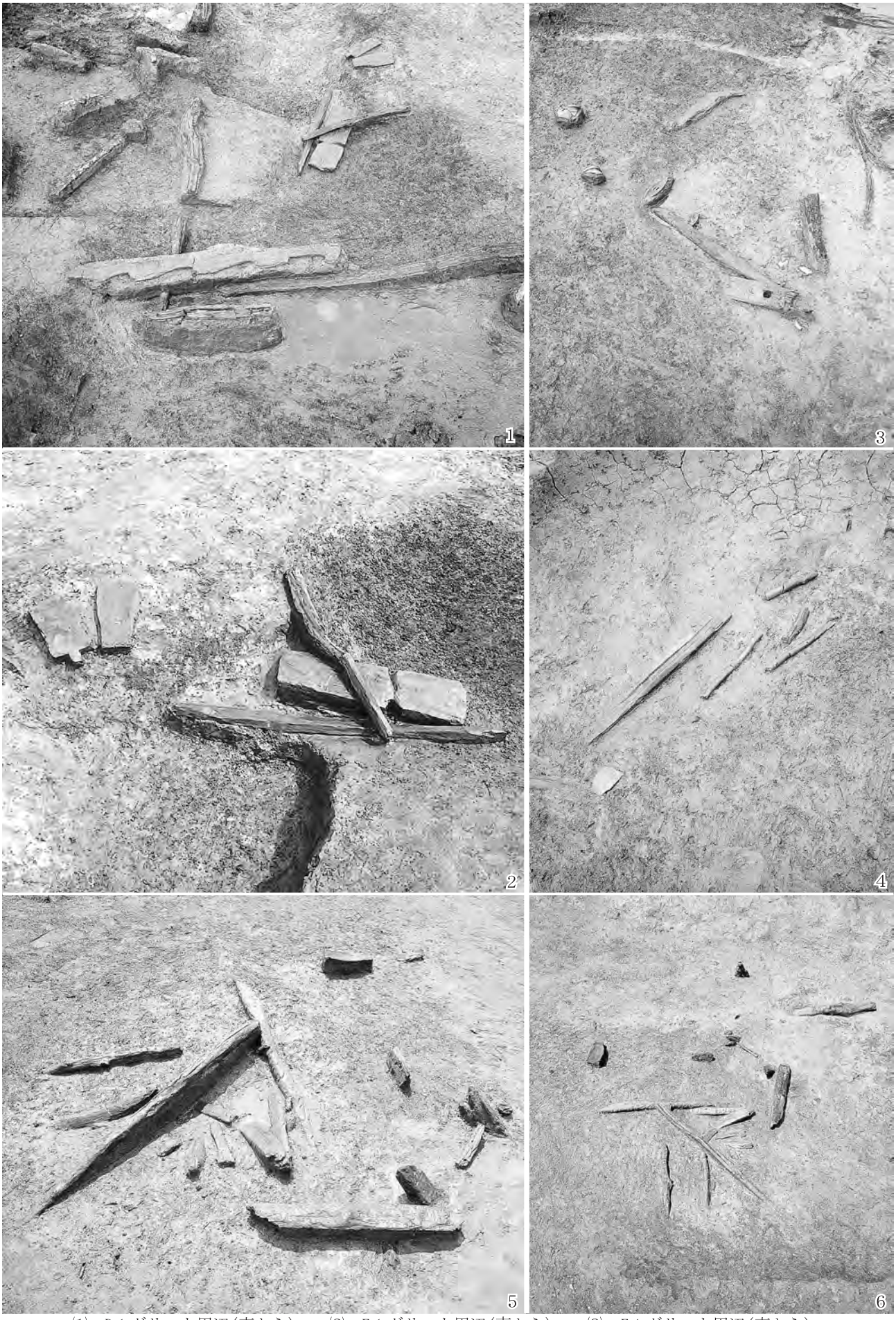
(1)　SK-10(南から)　(2)　SD-10・11(南東から)　(3)　SD-21・22(南西から)
(4)　SD-23(南から)　(5)　SK-11(南西から)

図版第四　遺　構　①区



⑴　SK-12（南から）　⑵　弥生～古墳時代川底面（東から）　⑶　川の木器出土状況（西から）
⑷　水場遺構（東から）　⑸　川の木器出土状況（B３グリットS３付近）（西から）

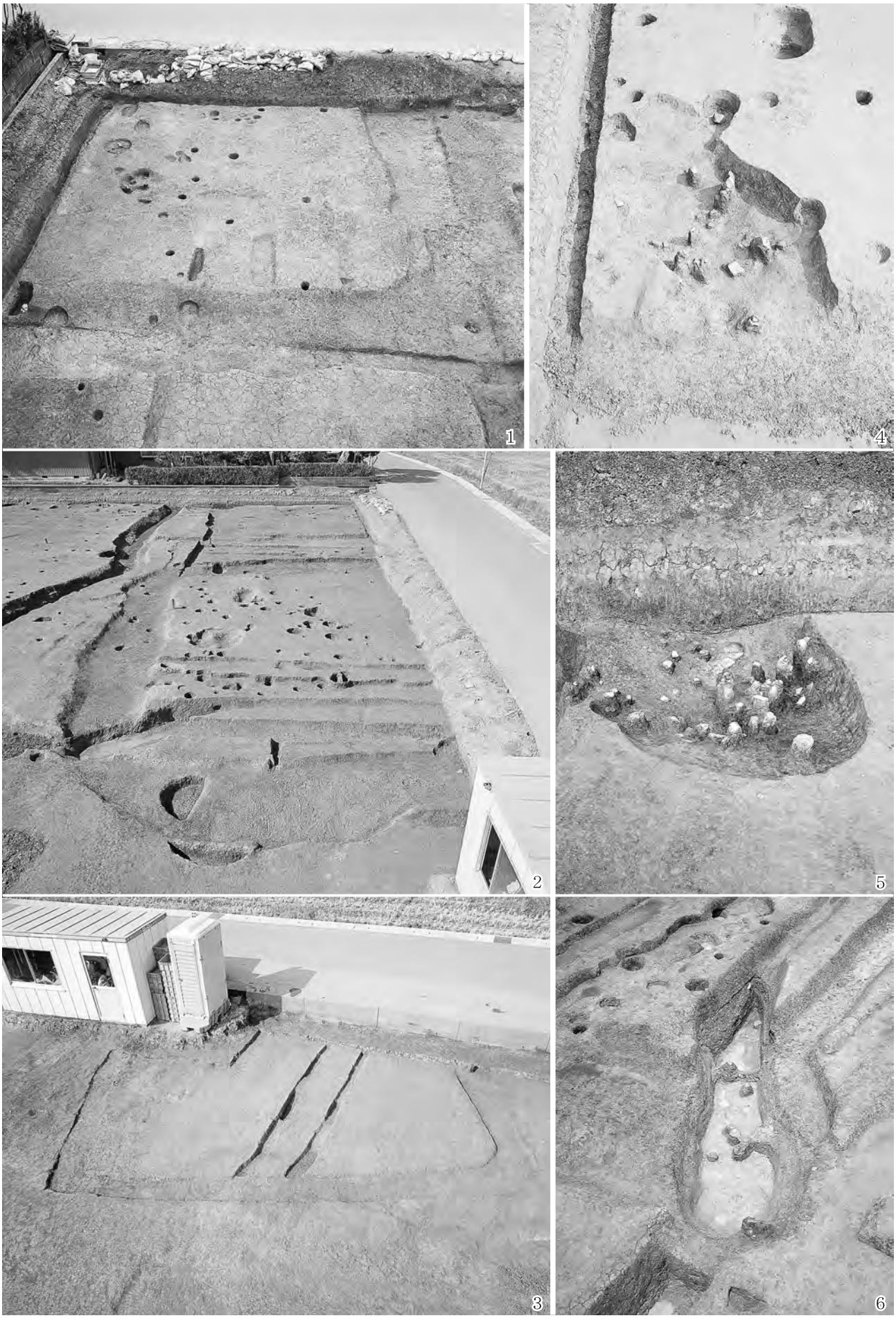
図版第五　遺　構　①区　川の木器出土状況



⑴　D１グリット周辺(東から)　⑵　E１グリット周辺(南から)　⑶　E１グリット周辺(東から)
⑷　E１グリット周辺(南から)　⑸　B３グリット周辺(東から)　⑹　B３グリット周辺(南から)

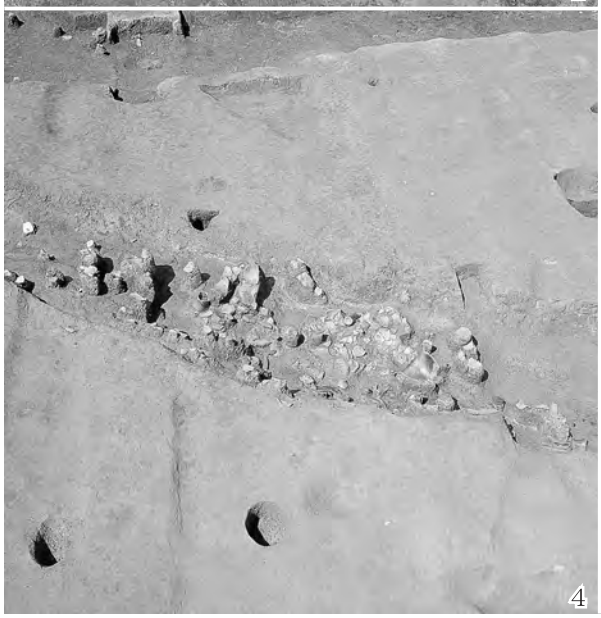
図版第六　遺　構　⑥区

⑴　⑥区遠景（北から）　　⑵　⑥区遠景（南西から）

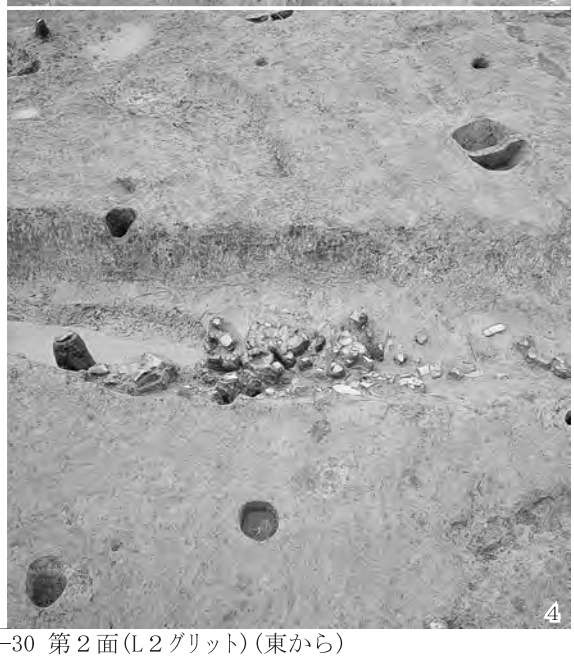


(1)　SX－１（南から）　(2)　SX－１（東から）　(3)　SX－３（南から）
(4)　SK－９（南から）　(5)　SK-10（東から）　(6)　SK-13（南から）

図版第八　遺　構　②区



(1)　SK-21(Ⅰ7・Ⅰ8グリット)(西から)　(2)　SK-24(南東から)　(3)　SK-22(南から)
(4)　SD-30 第１面(K２グリット)(南西から)　(5)　SD-30 第１面(J２グリット)(南から)

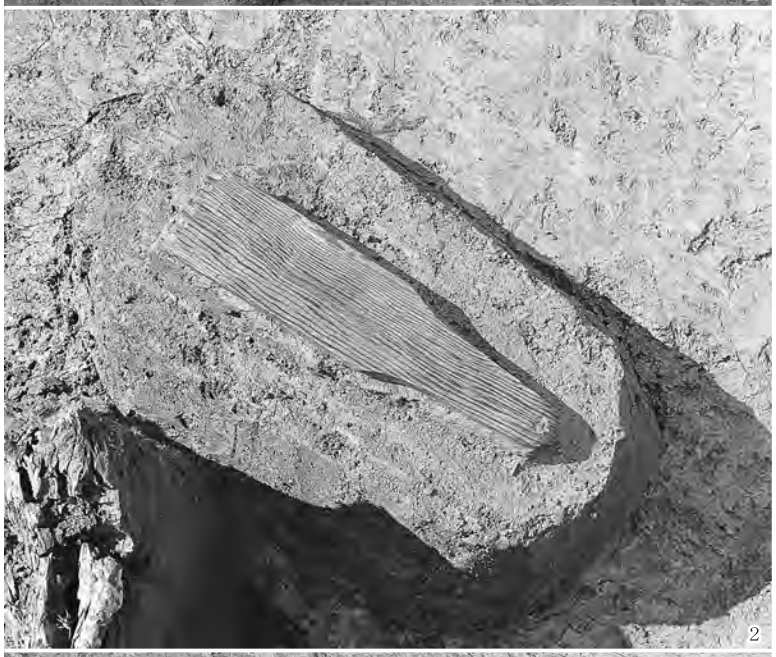


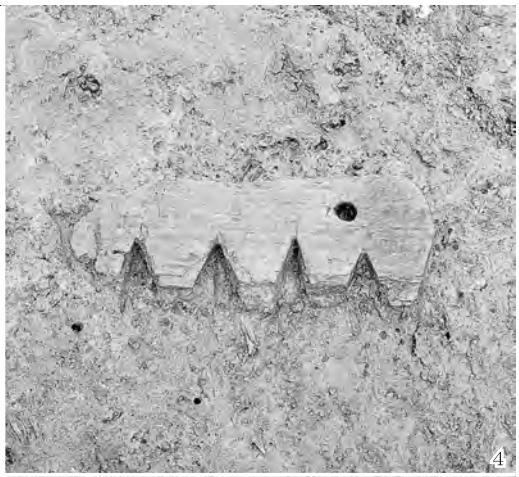
⑴　SD-30 第１面(Ｋ２グリット)(東から)　⑵　SD-30 第２面(Ｌ２グリット)(東から)
⑶　SD-30 第２面(Ｌ２グリット)(北から)　⑷　SD-30 第２面(Ｌ２グリット)(南から)
⑸　SD-30 完掘(Ｊ２・Ｋ２グリット)(東から)

⑴　SD-32 完掘(東から)　　⑵　SD-69 第１面(南から)　　⑶　SD-69 第２面(南から)

(1)　SD-70 第１面(南から)　(2)　SD-74(南から)　(3)　堰出土状況(北東から)
(4)　堰(北西から)　(5)　堰(北西から)　(6)　堰(南西から)

図版第一二　遺　構　⑥区　川の木器出土状況



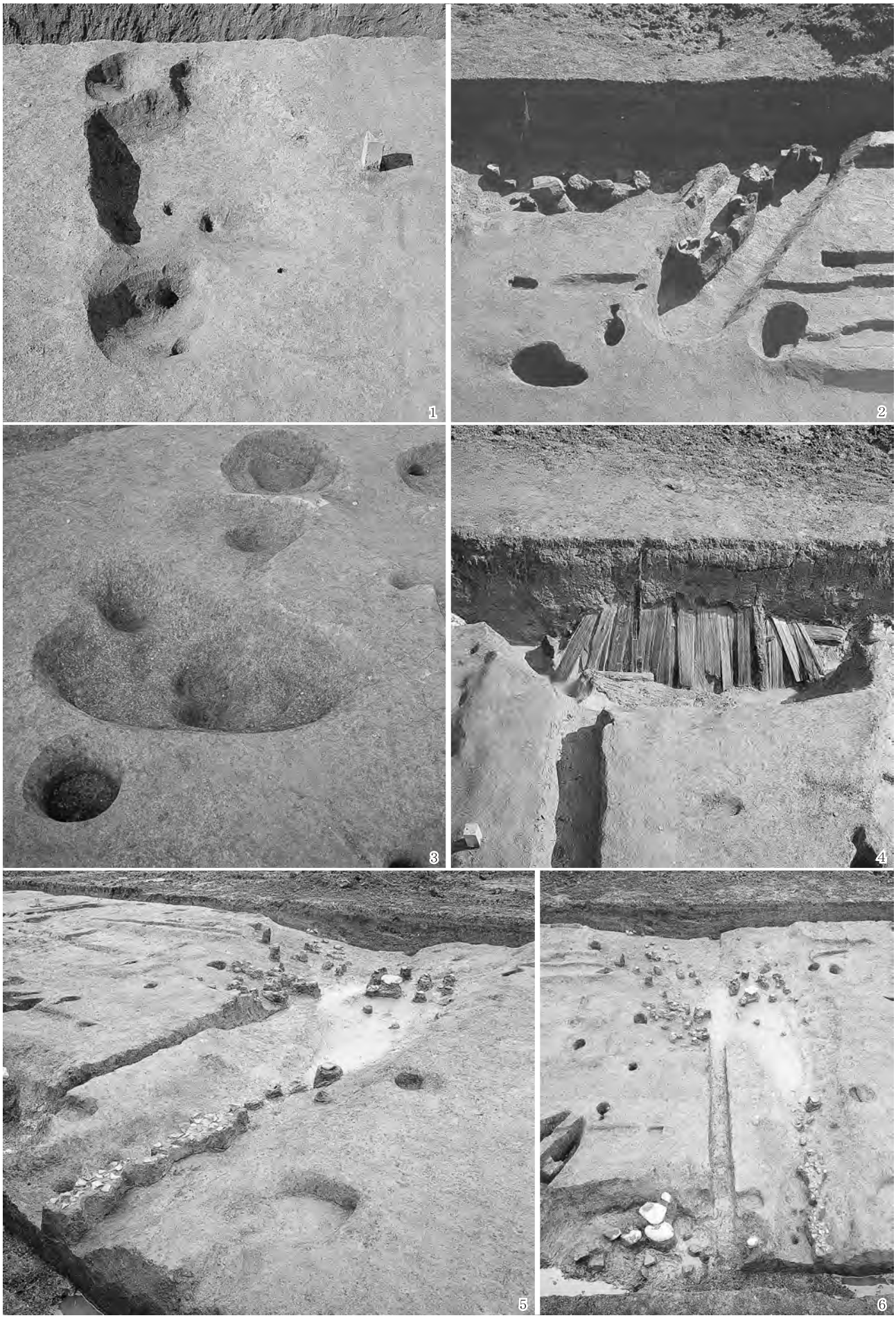


⑴　Ｊ５・Ｊ６・Ｋ６グリット周辺（南から）　⑵　66-33 琴板（東から）　⑶　66-２　鍬（南から）
⑷　66-６（南から）　⑸　66-13 槽（北西から）　⑹　66-13付近出土 板材（南東から）　⑺　66-８　田下駄・板材（南東から）

⑴　L７・L８グリット周辺（南から）　⑵　J５グリット周辺（南から）　⑶　68-42 割材（南東から）
⑷　67-24 機織具（南から）　⑸　SD-80（東から）　⑹　SD-84（東から）

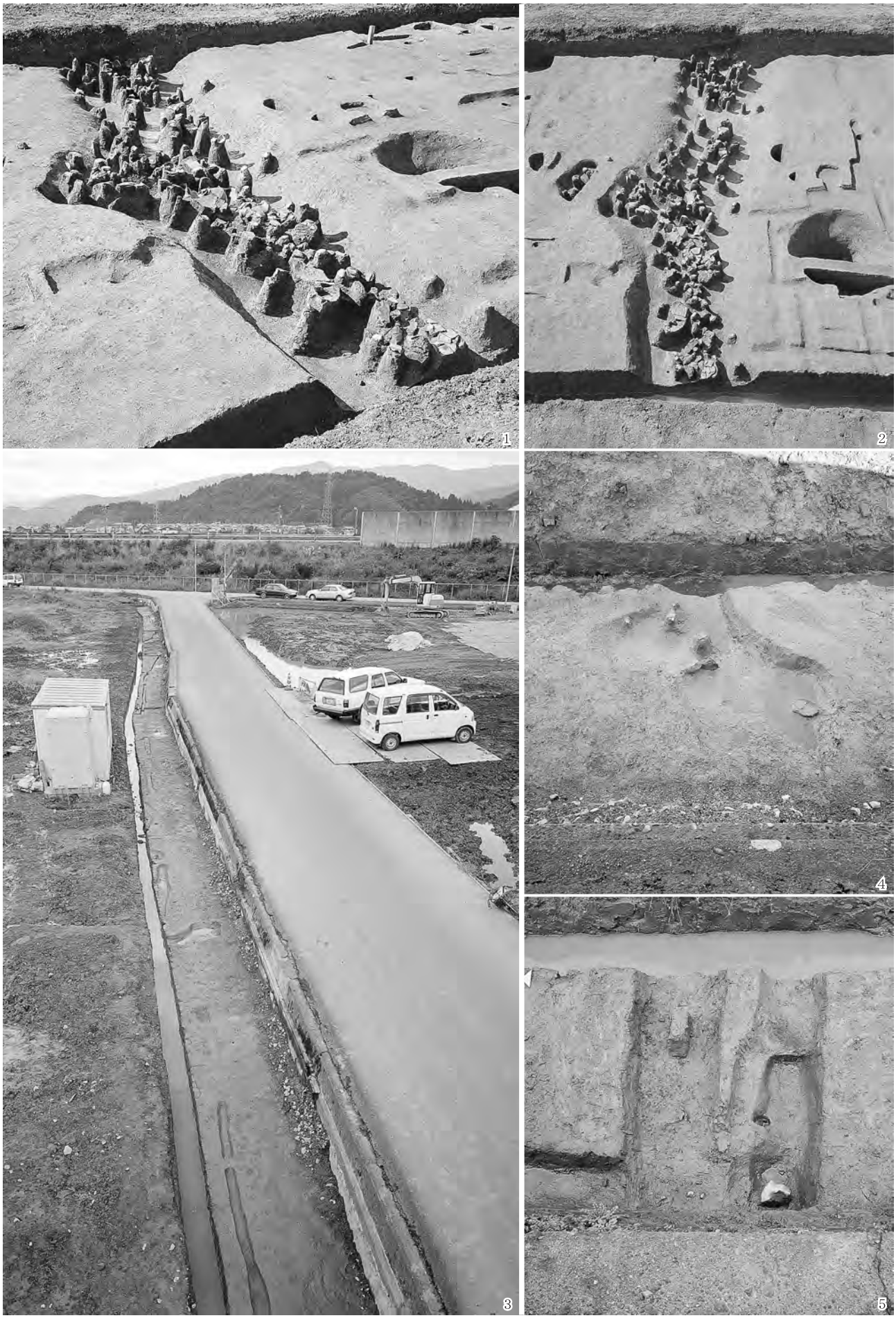
図版第一四　遺　構　②区

(1)　②区全体(南から)　(2)　SK-1(南から)　(3)　SK-6(南西から)　(4)　P24 柱根(東から)　(5)　SK-9(東から)



(1)　SK-８(東から)　(2)　SK-10・11(北西から)　(3)　SK-17(南西から)
(4)　SW-２(北西から)　(5)　SD-１(北東から)　(6)　SD-１(東から)

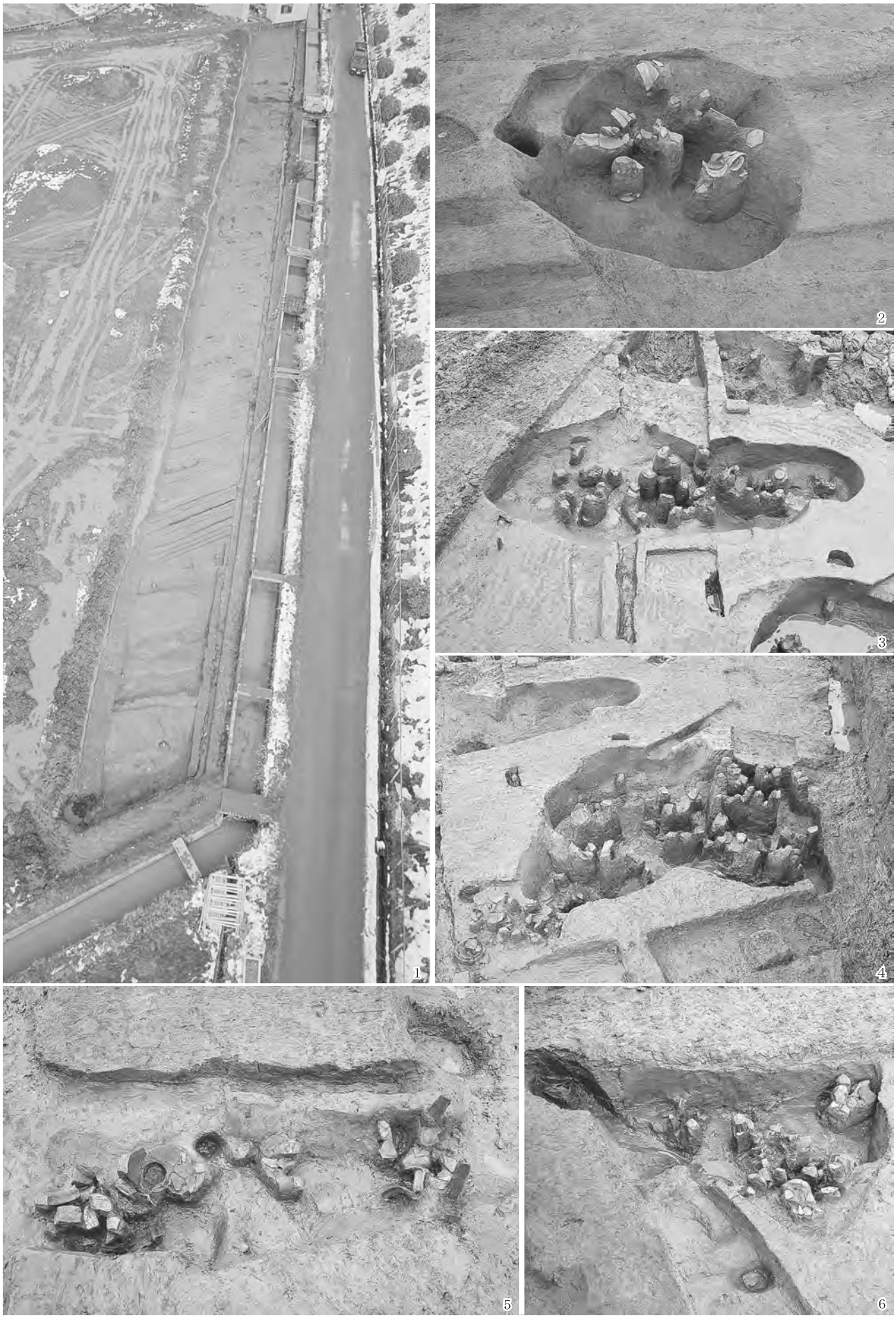
図版第一六　遺　構　②区・③区



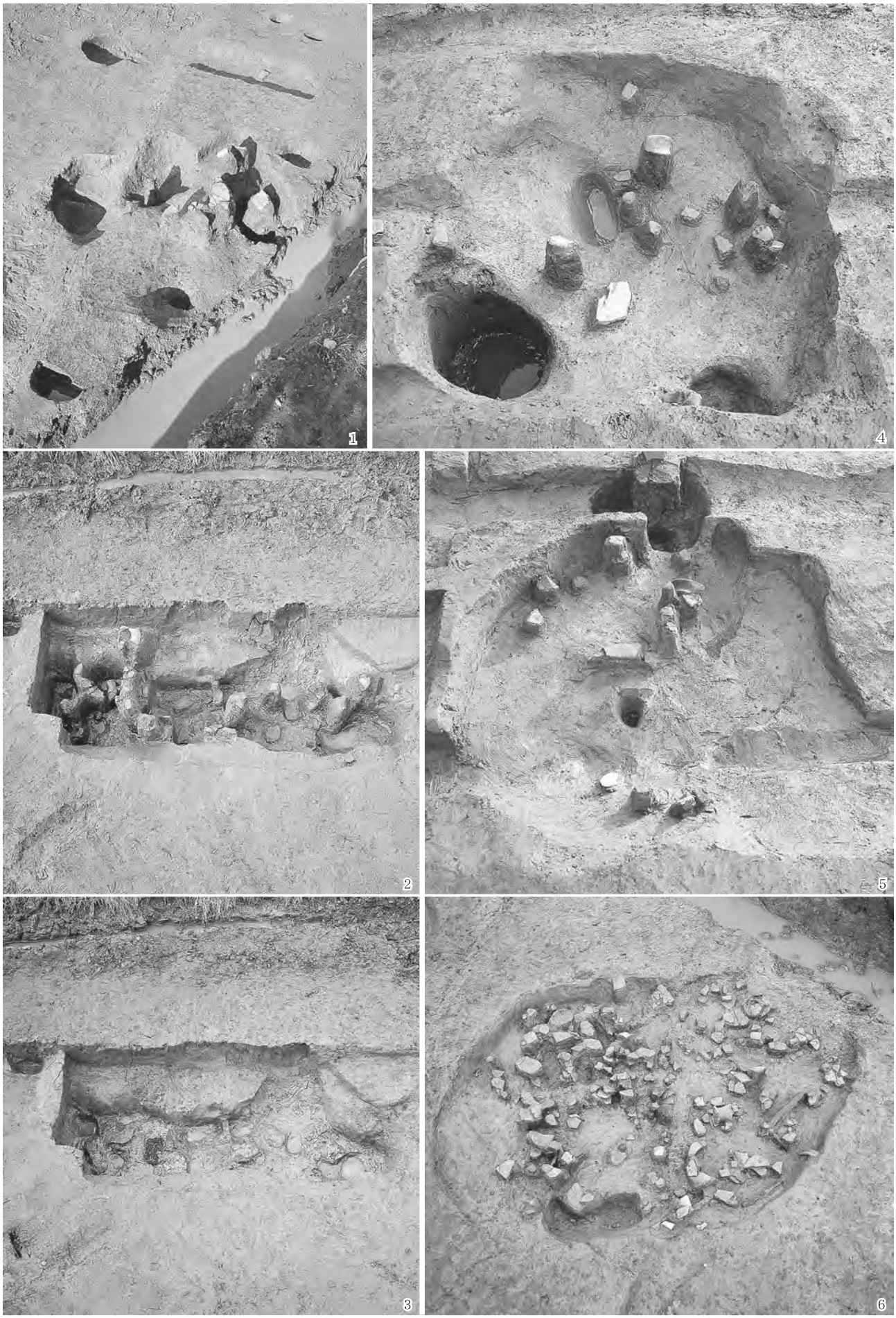
(1)　SD-15(南東から)　(2)　SD-15(北西から)　(3)　③区全体(北西から)　(4)　SK-1(南西から)　(5)　③区 SD-6・7(南西から)

(1)　④区全体(西から)　(2)　P1(北から)　(3)　SK-2・3(南東から)　(4)　SK-１(北から)　(5)　SK-１　拡張区(南から)

図版第一八　遺　構　⑤区



⑴　⑤区全体(南西から)　⑵　SK-２(北東から)　⑶　SK-９(南から)
⑷　SK-10～12(南西から)　⑸　SK-13(北西から)　⑹　SK-14(南から)



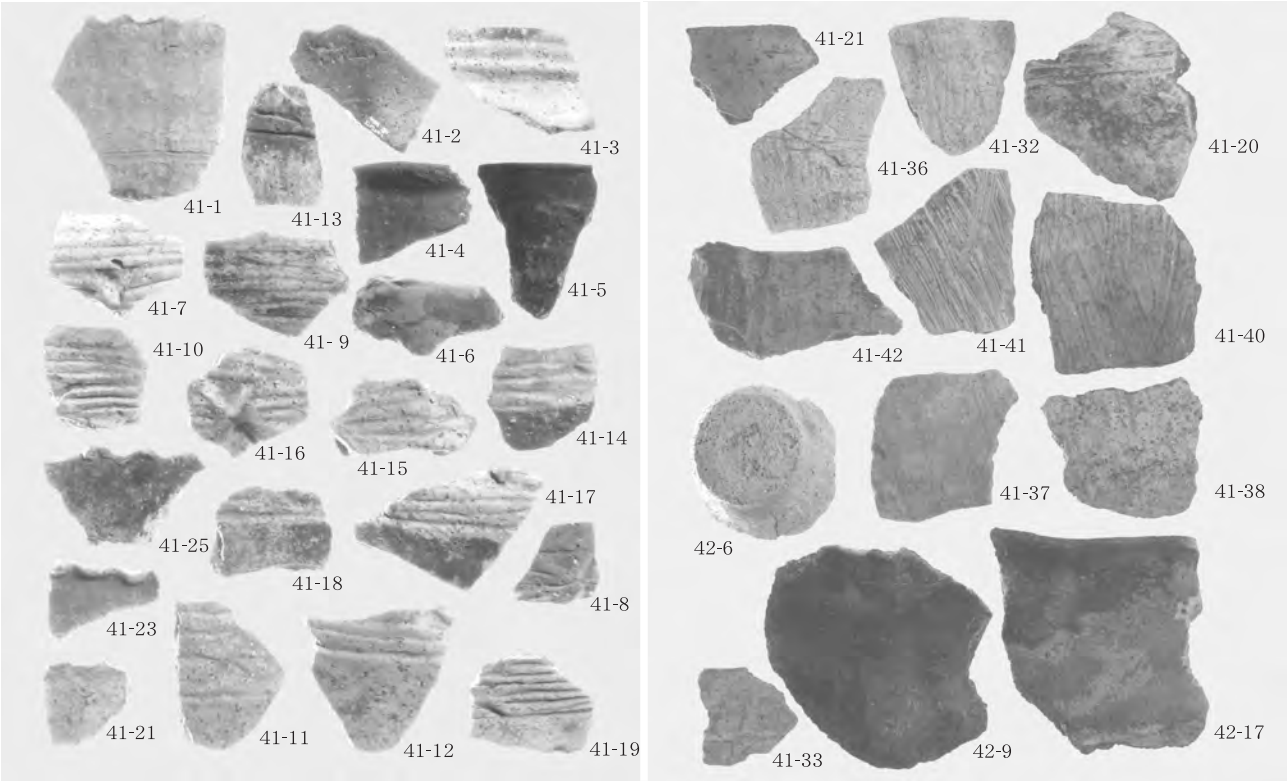
(1)　SK-16(南から)　(2)　SK-19 第１面(南東から)　(3)　SK-19 第２面(南東から)
(4)　SK-20(北から)　(5)　SK-18(北東から)　(6)　SK-21(西から)

図版第二〇　遺　構　⑤区

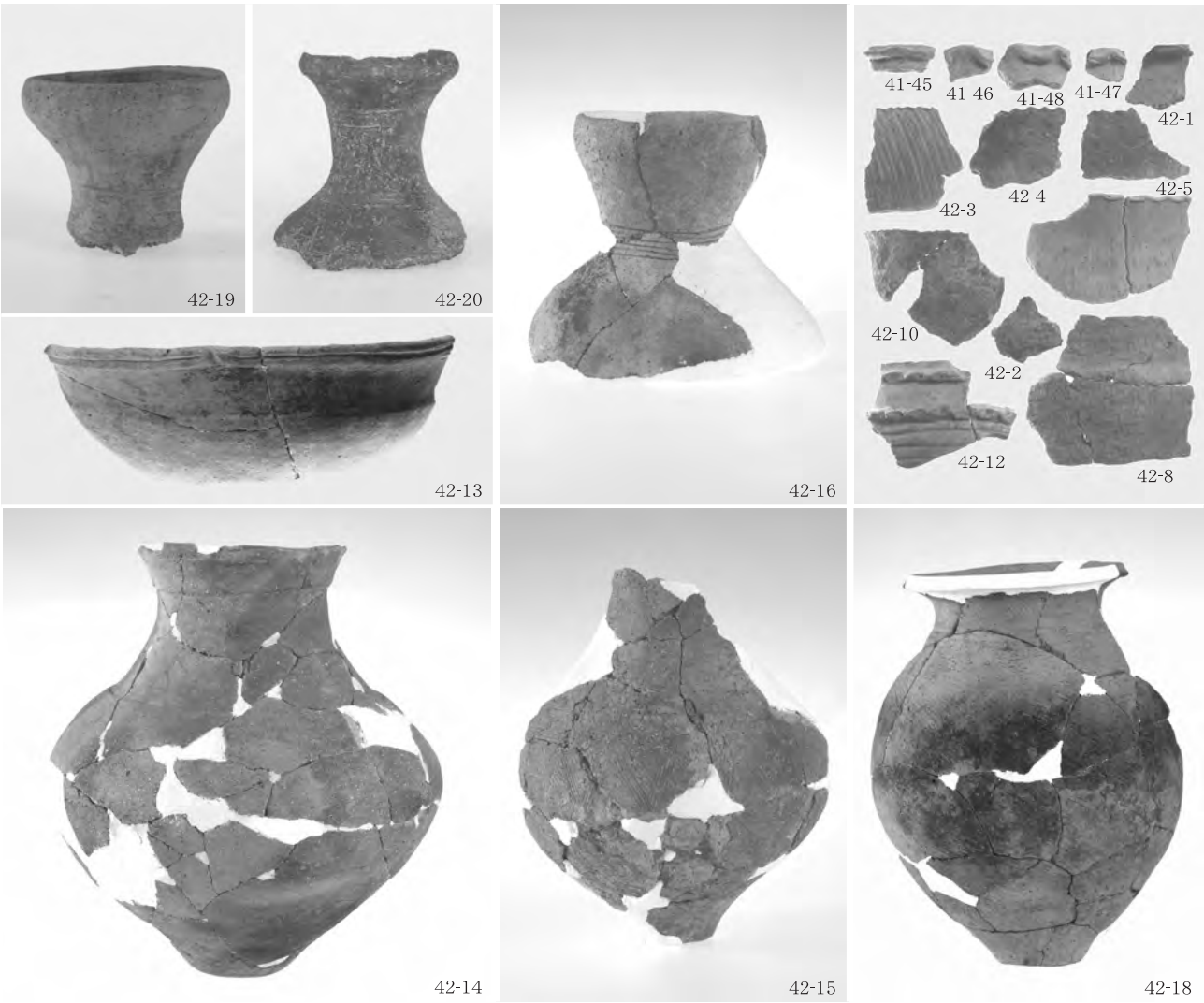
⑴　SK-31・32（南から）　⑵　SK-93（北西から）　⑶　SD-89～92（北西から）　⑷　SD-90～93（北西から）

(1)　⑦区全体(北から)　(2)　⑦区全体(西から)　(3)　SD－１　第１面(西から)
(4)　SD－１　第２面(南東から)　(5)　SD－４(西から)

図版第二二　遺物　土器　①区・⑥区包含層出土　縄文土器　弥生土器



(1)縄文土器



(2)弥生土器

図版第二三　遺　物　土器　①区・⑥区包含層出土

43-3

43-4

43-6

43-16

43-14

43-23

59-2

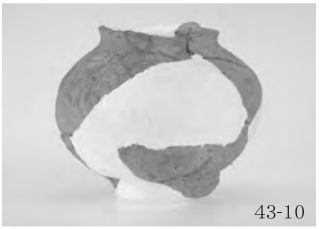
43-15

43-17

43- 8

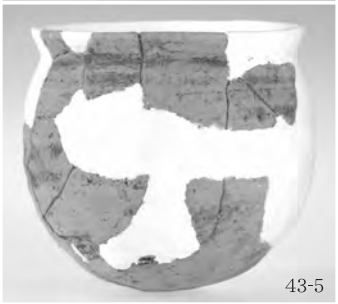
43-7

43-24

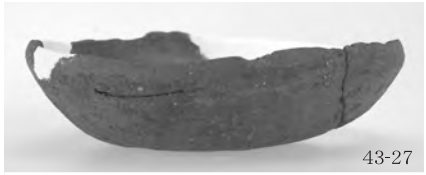

43-10

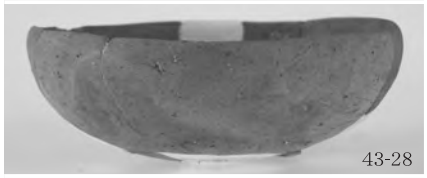
43-21

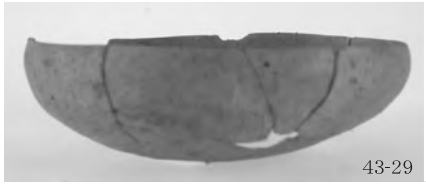
43-20


43-5

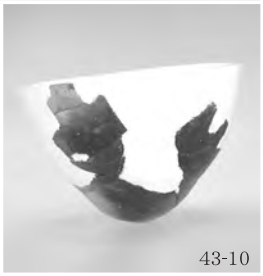
43-13


43-27


43-28


43-29

43-12


43-10

43-26

43-25

43-11

図版第二四　遺物　土器　①区遺構出土

43-32

(1)　①区 SK－5

43-30

(2)　①区 SK－2

44-1

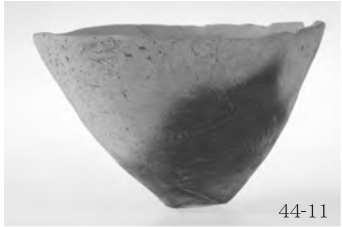
43-3

44-2

43-4

44-5

(3)　①区 SK－7

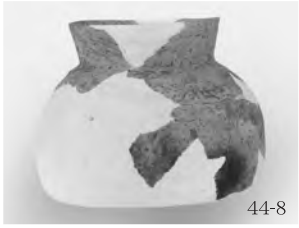

44-11

44-13

44-15

44-16

44-10


44-8

44-14

44-18

44-9

44-6

44-7

(4)　①区 SK－9

44-20

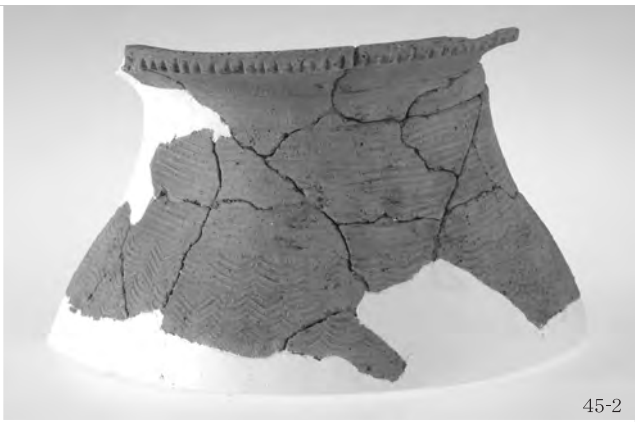
(5)　①区 SK－11

図版第二五　遺物　土器　①区・⑥区遺構出土

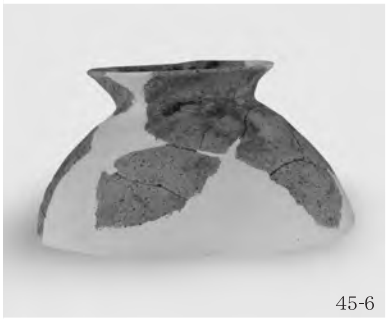
45-8

45-5

45-7

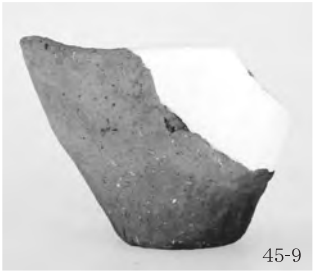

45-2

(4)　①区 SK-13

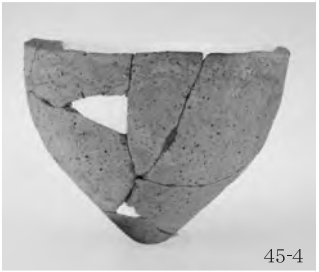

45-6

45-10

(1)　①区 SK-12


45-9

(2)　①区 SK-12


45-4

(3)　①区 SK-6

46-19

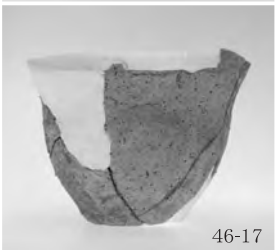
46-9

59-4

46-4

46-20

46-13


46-17

46-1

46-11

46-6

46-7

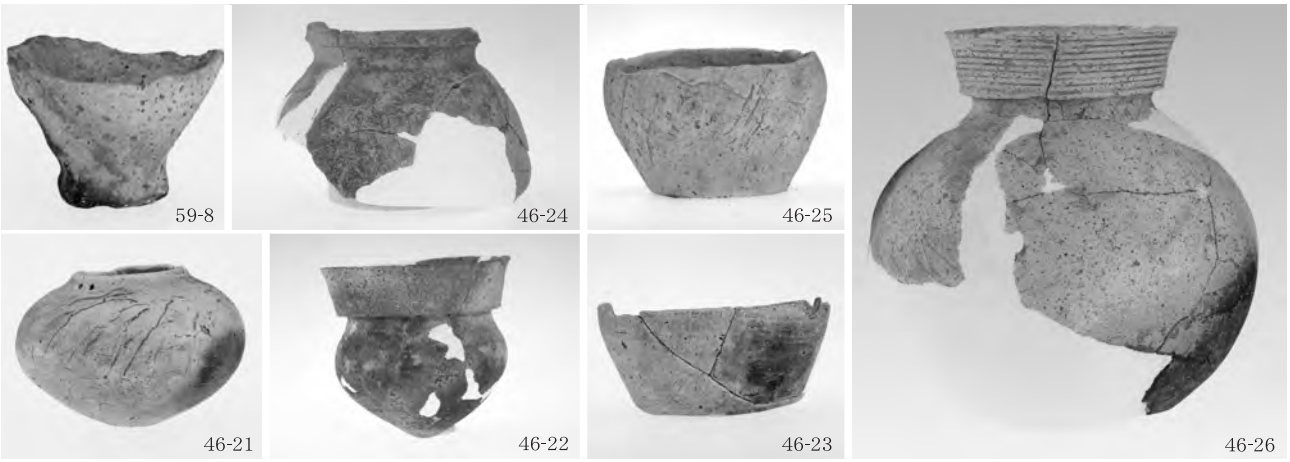
45-27

46-18

46-5

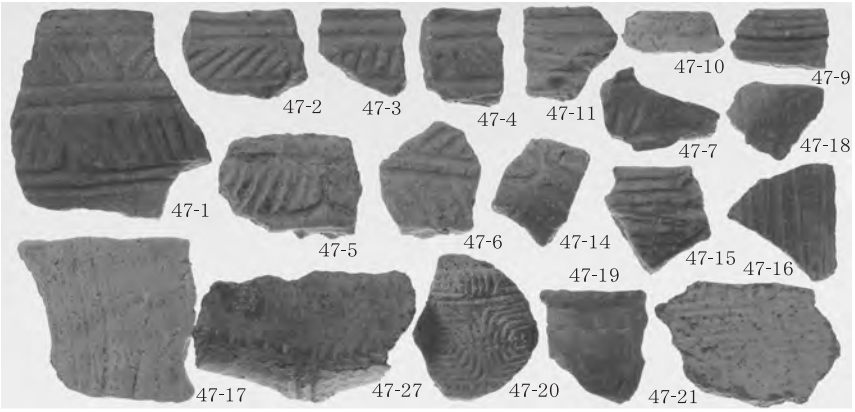
(5)　⑥区 SK-21

図版第二六　遺物　土器　①区・⑥区遺構出土

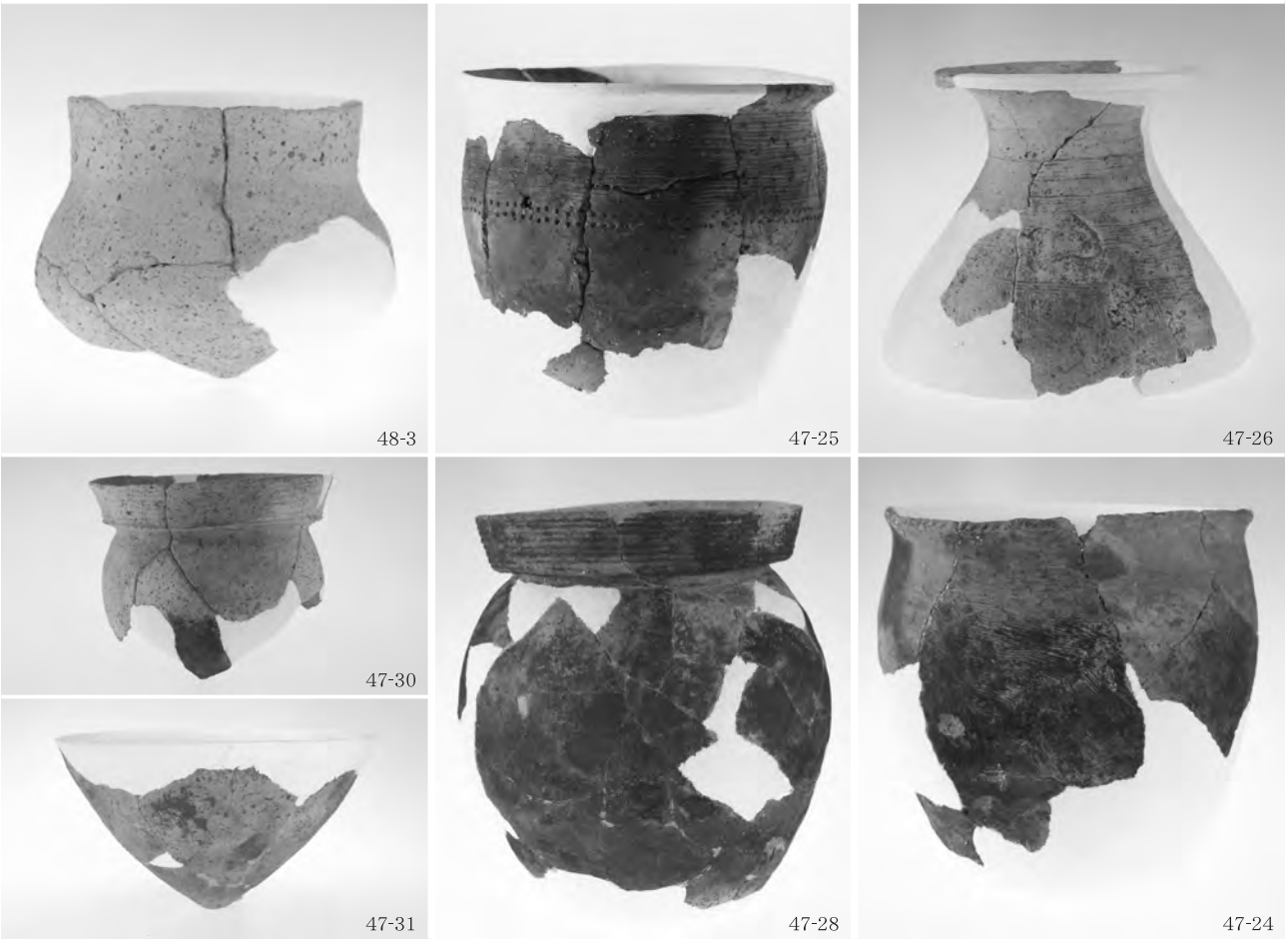


(1)　①区 SD−1・11・22・23

(2)　⑥区 SD−70

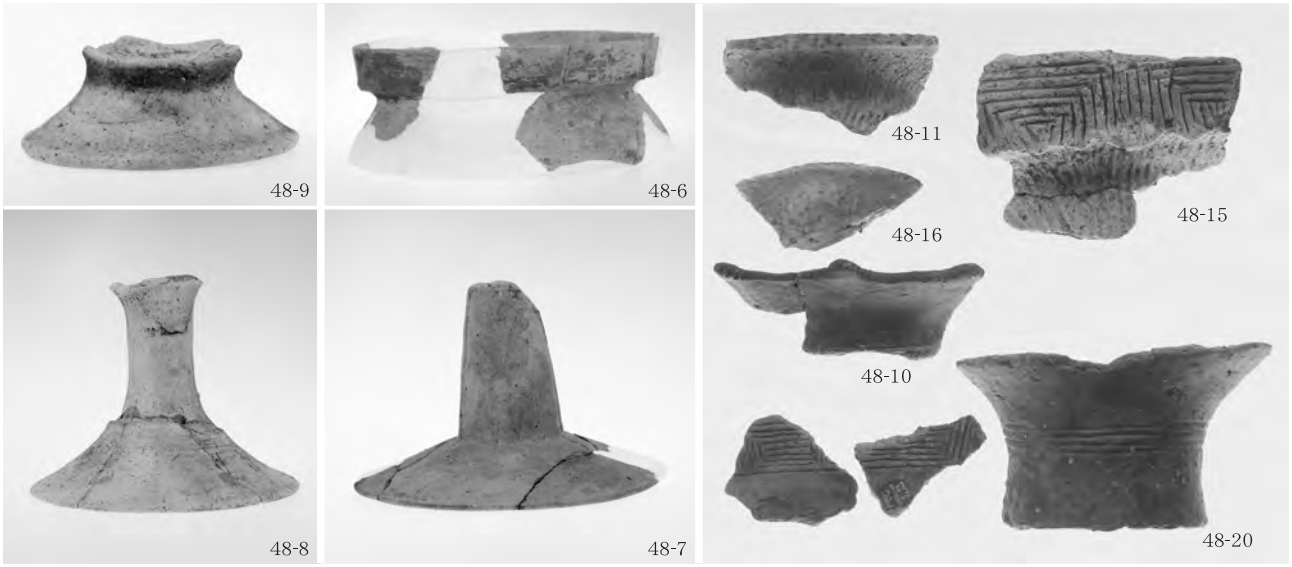


(3)　⑥区 SD出土　縄文土器、弥生土器

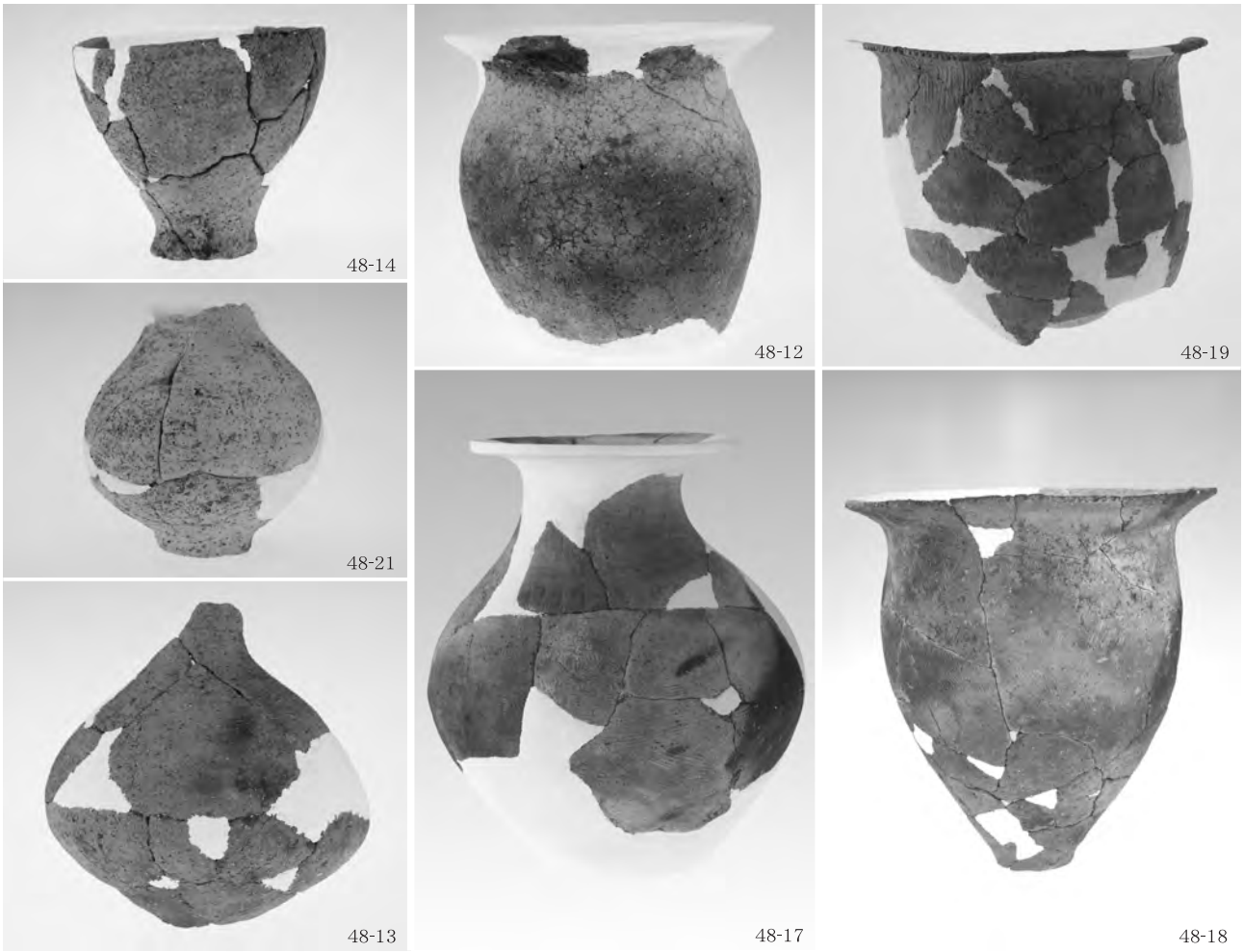


(4)　⑥区 SD−80、SD−85

(1)　⑥区 SD-80



(2)　①区 SD-21　　(3)　⑥区 SD-81　　(4)　⑥区 SD-30

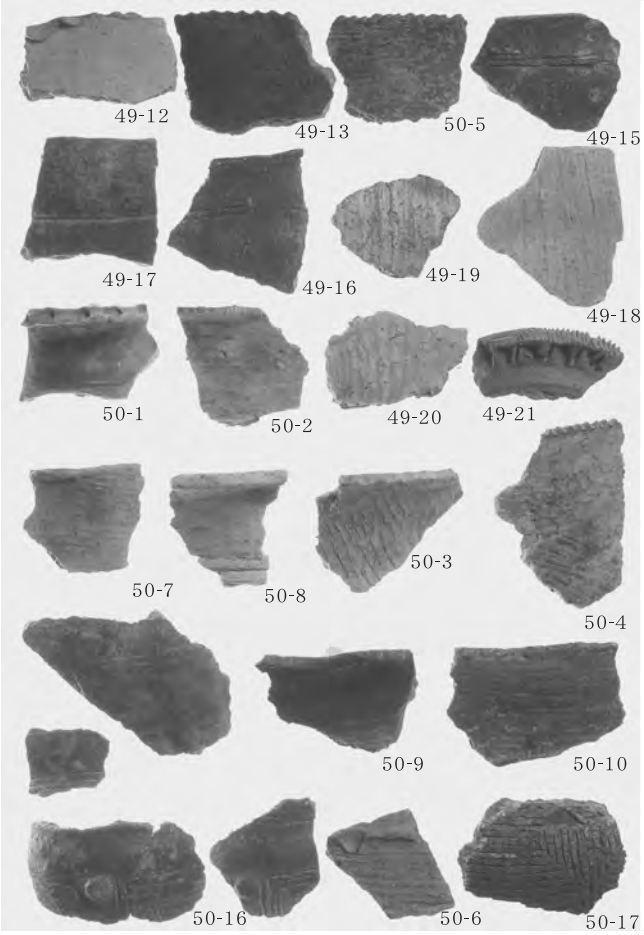


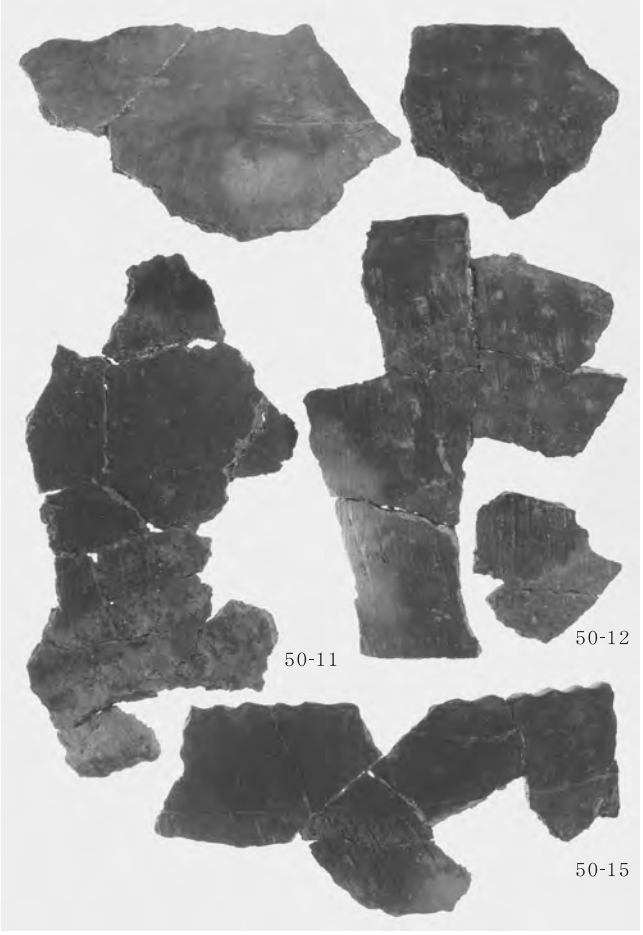
(5)　⑥区 SD-30

図版第二八　遺物　土器　⑥区遺構出土　①区・⑥区川出土

(1)　⑥区 SD-30　　(2)　⑥区 SD-31

(3)　⑥区 SD-69

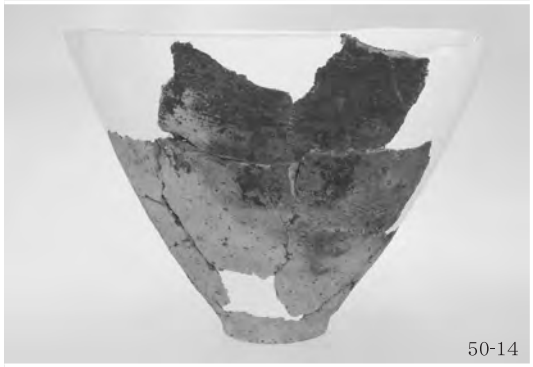




(4)　①区・⑥区川出土縄文土器、弥生土器

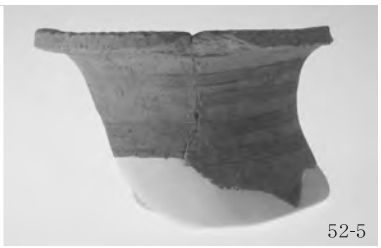
図版第二九　遺物　土器　①区・⑥区川出土

50-13


50-14

51-11

51-15


52-5

51-3

51-23

52-10

52-6

52-6

52-1

52-11

52-4

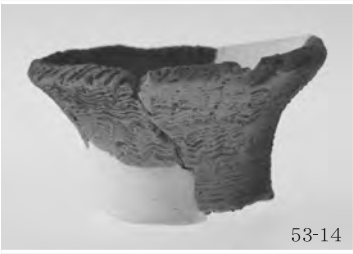
52-2

図版第三〇　遺物　土器　①区・⑥区川出土

53-14

53-1

53-7


53-14

53-13

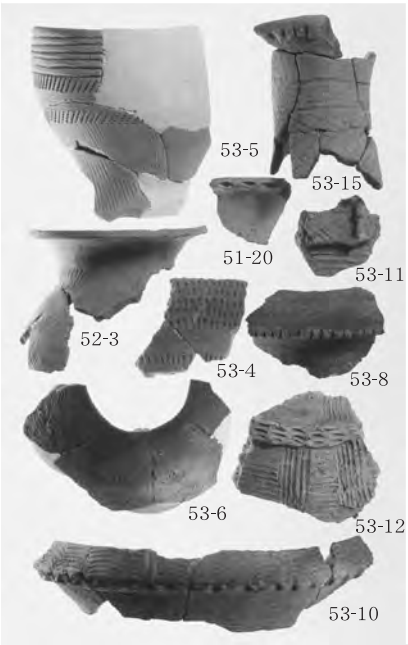
53-2

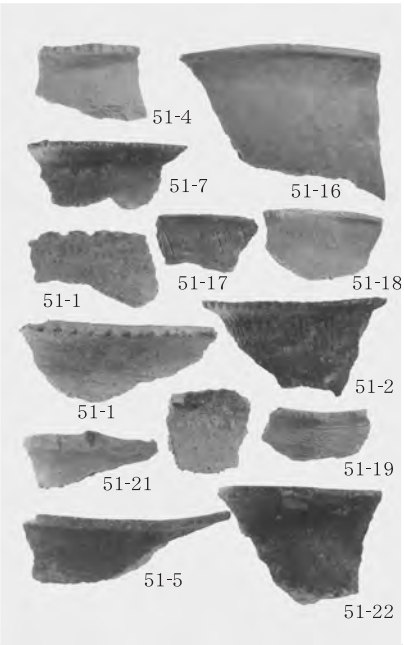
53-16

53-20

53-3

53-17

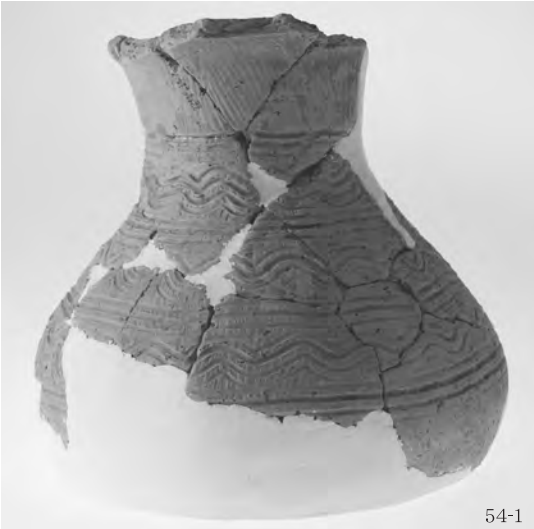




53-9

53-9

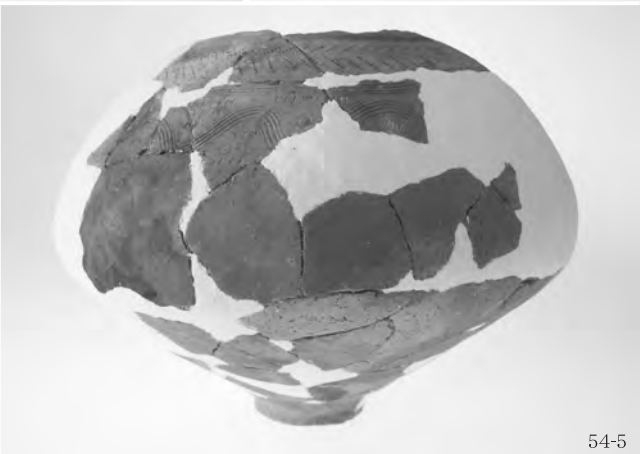
図版第三一　遺物　土器　①区・⑥区川出土


54-1

54-2

54-3

54-4


54-5

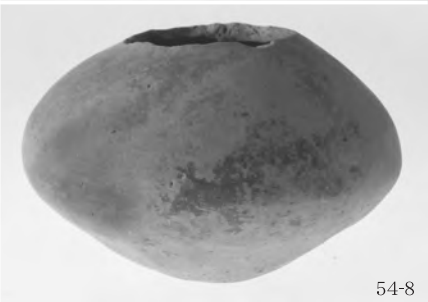
54-12

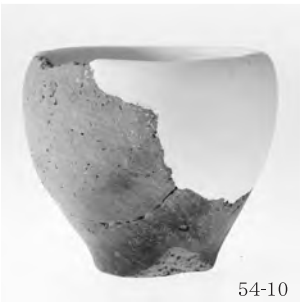
54-13

55-4

55- 3

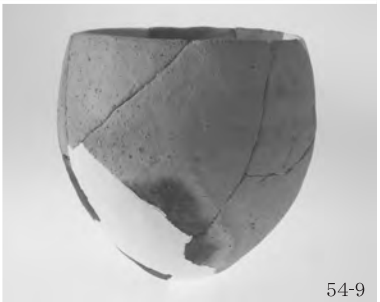
55-1


54-8

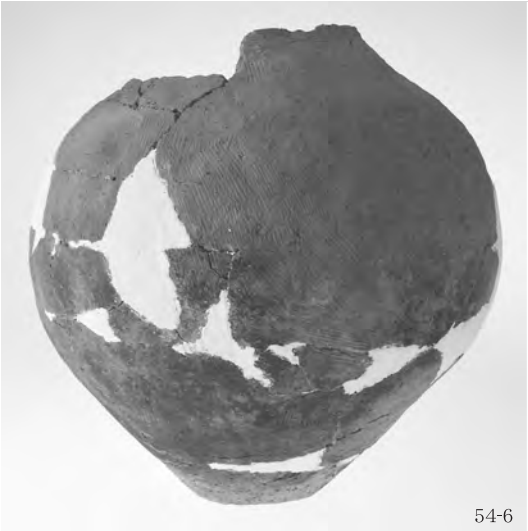

54-10

54-7

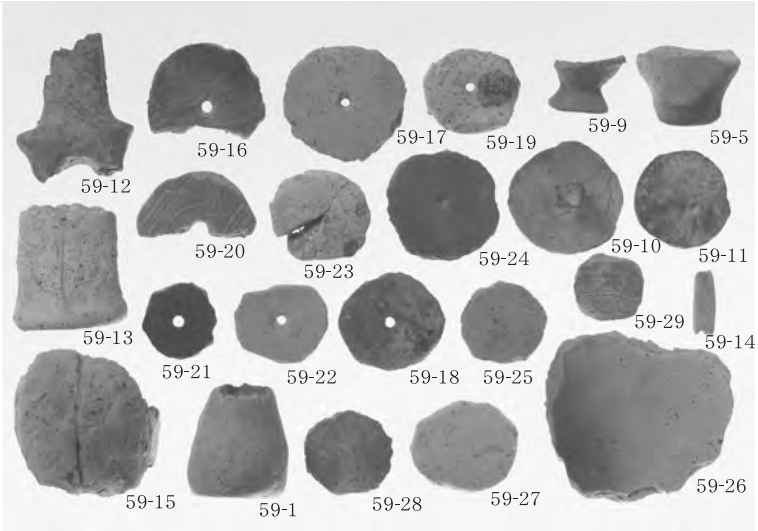
54-14


54-9

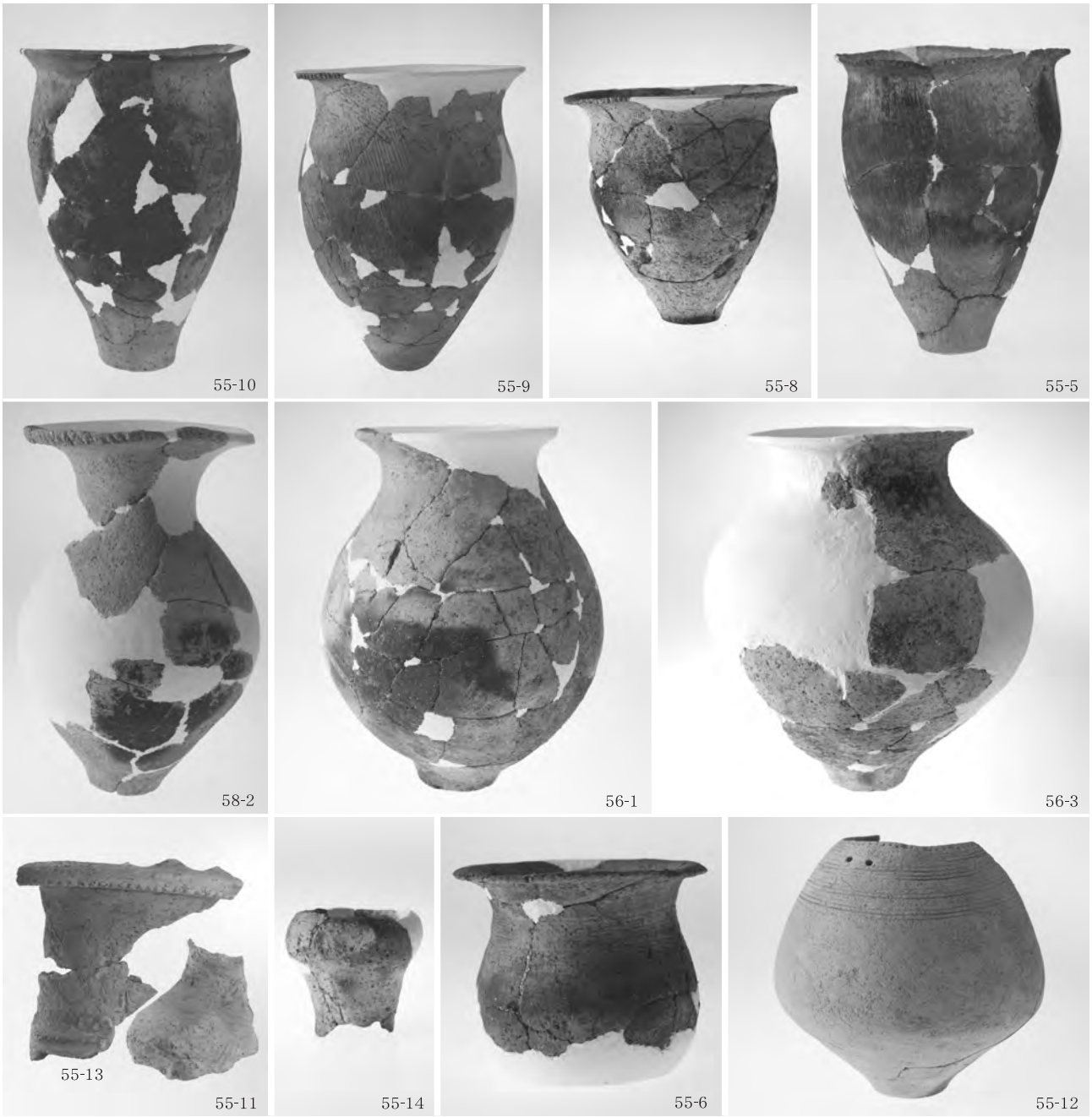
図版第三一　遺　物　土器　①区川出土、②区遺構出土



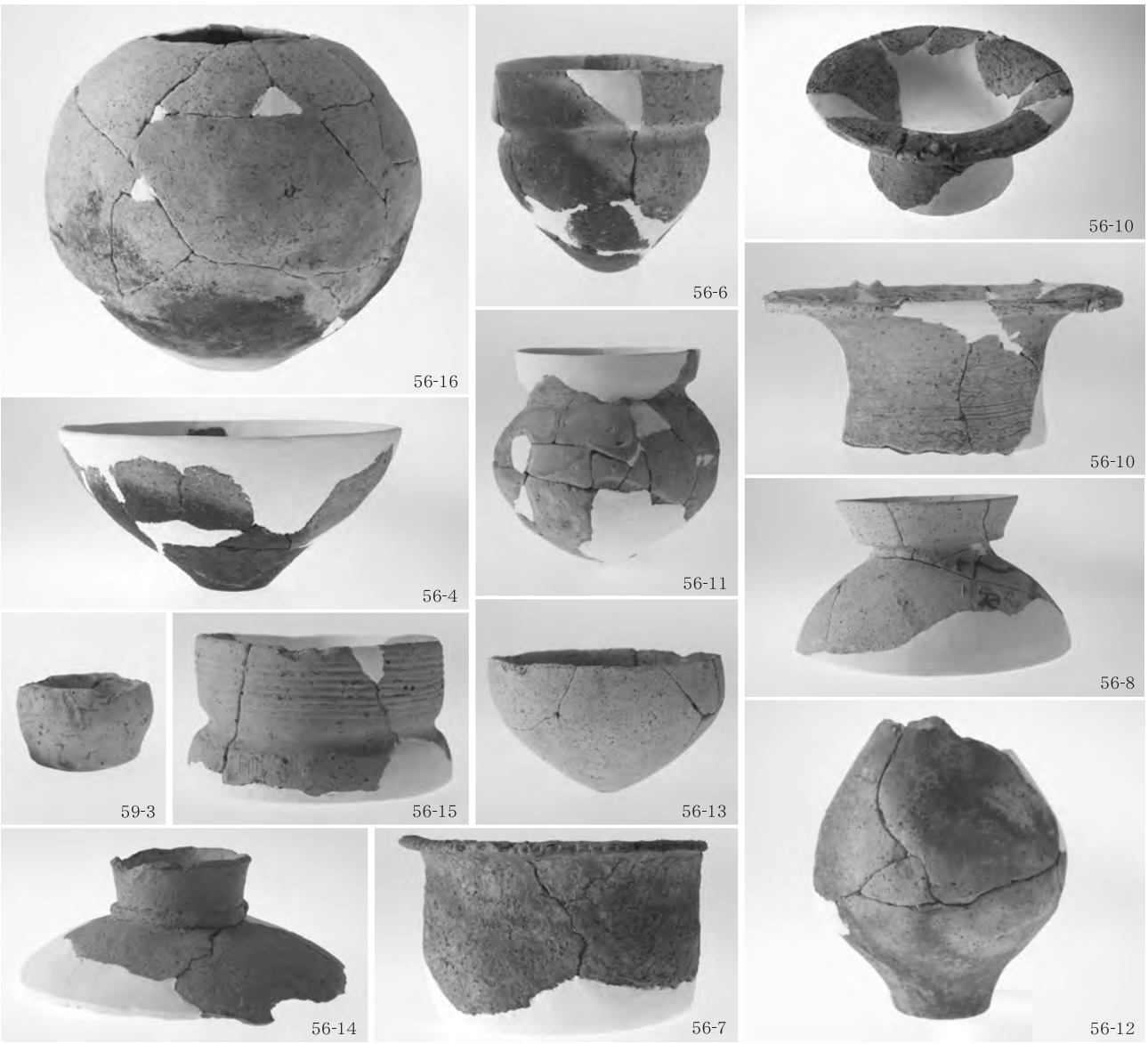
(1)　①区川出土



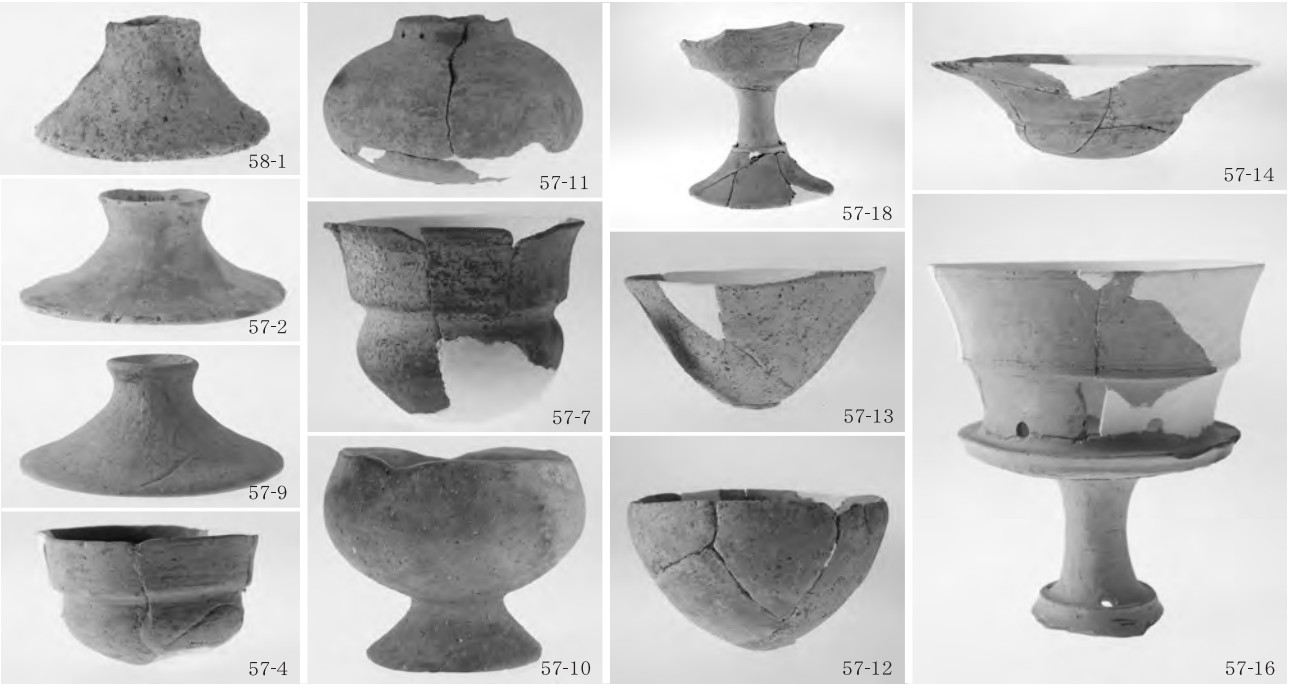
(2)　土製品



(3)　②区 SK－1、SD－15

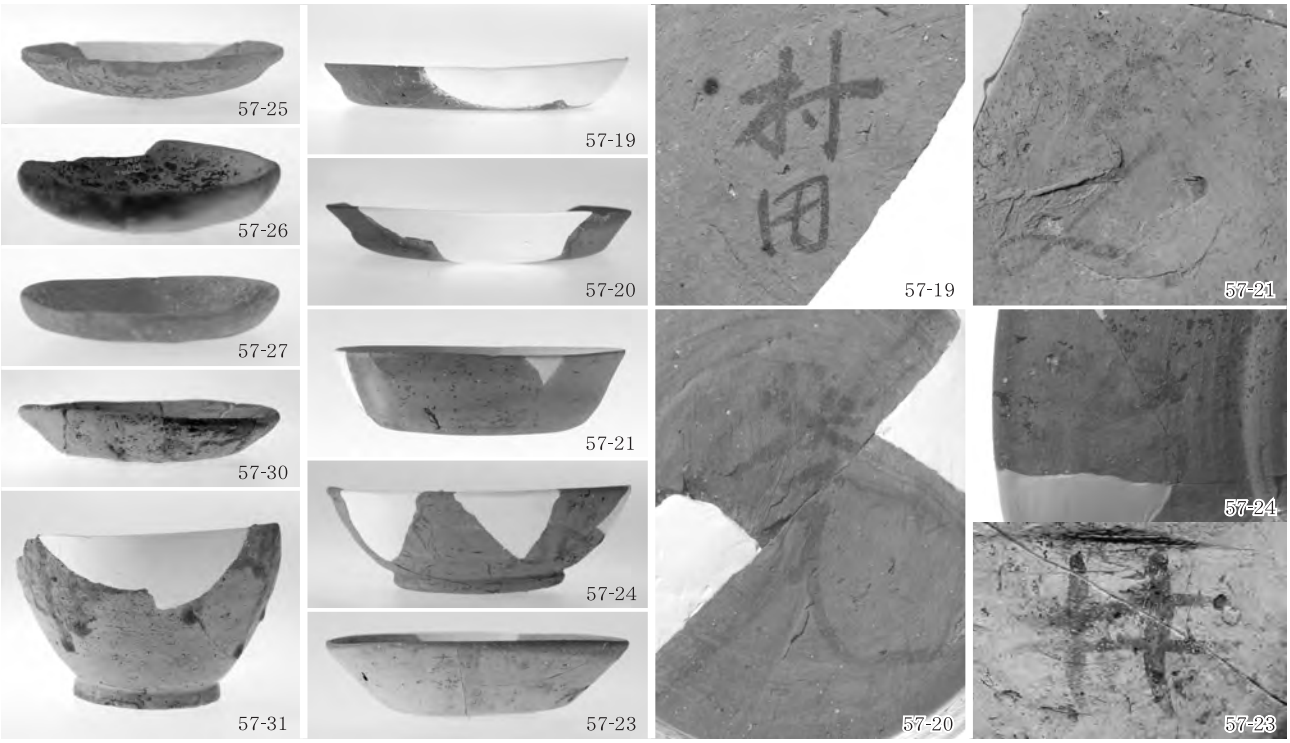


(1)　⑤区遺構出土

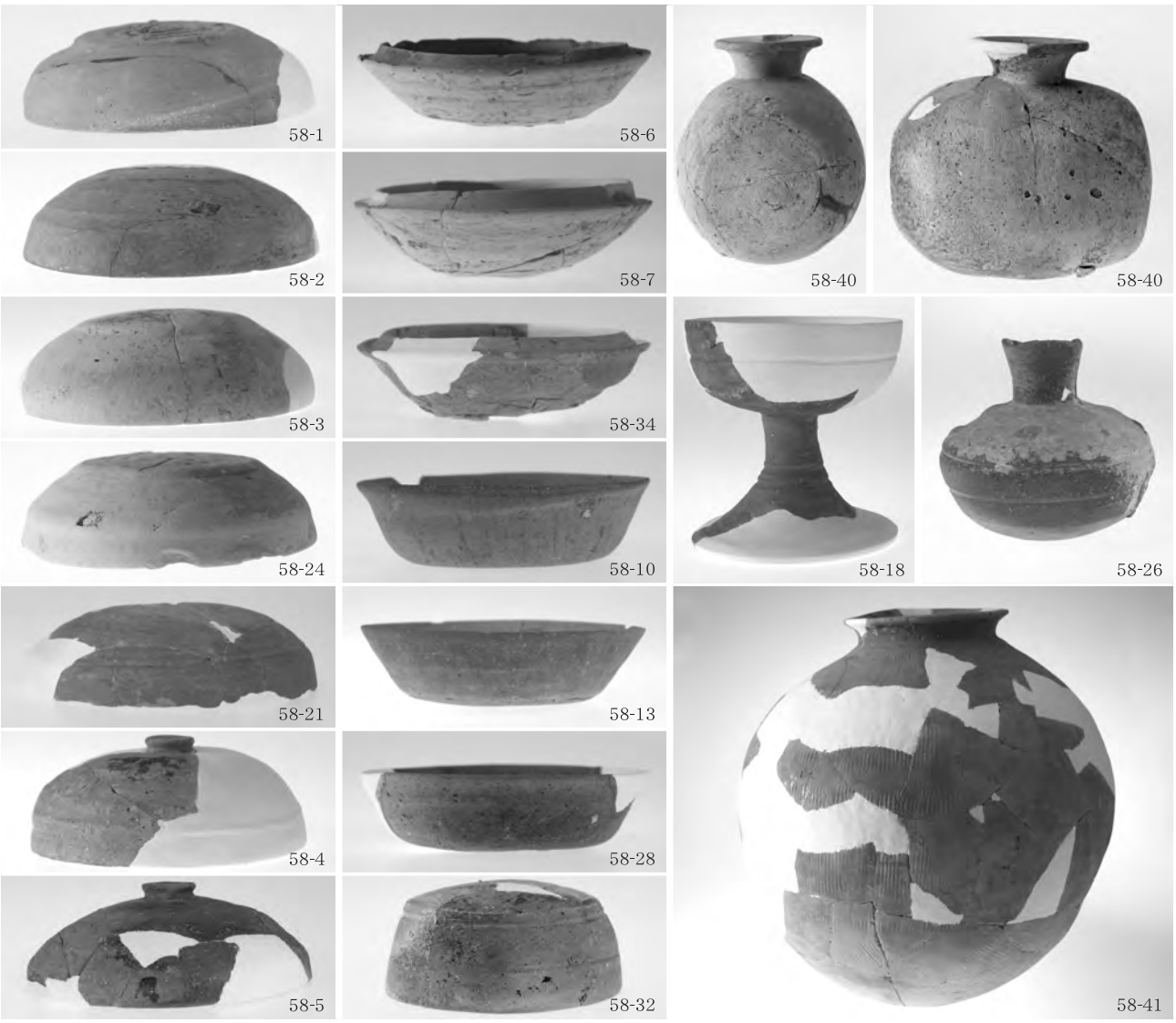


(2)　⑦区遺構出土

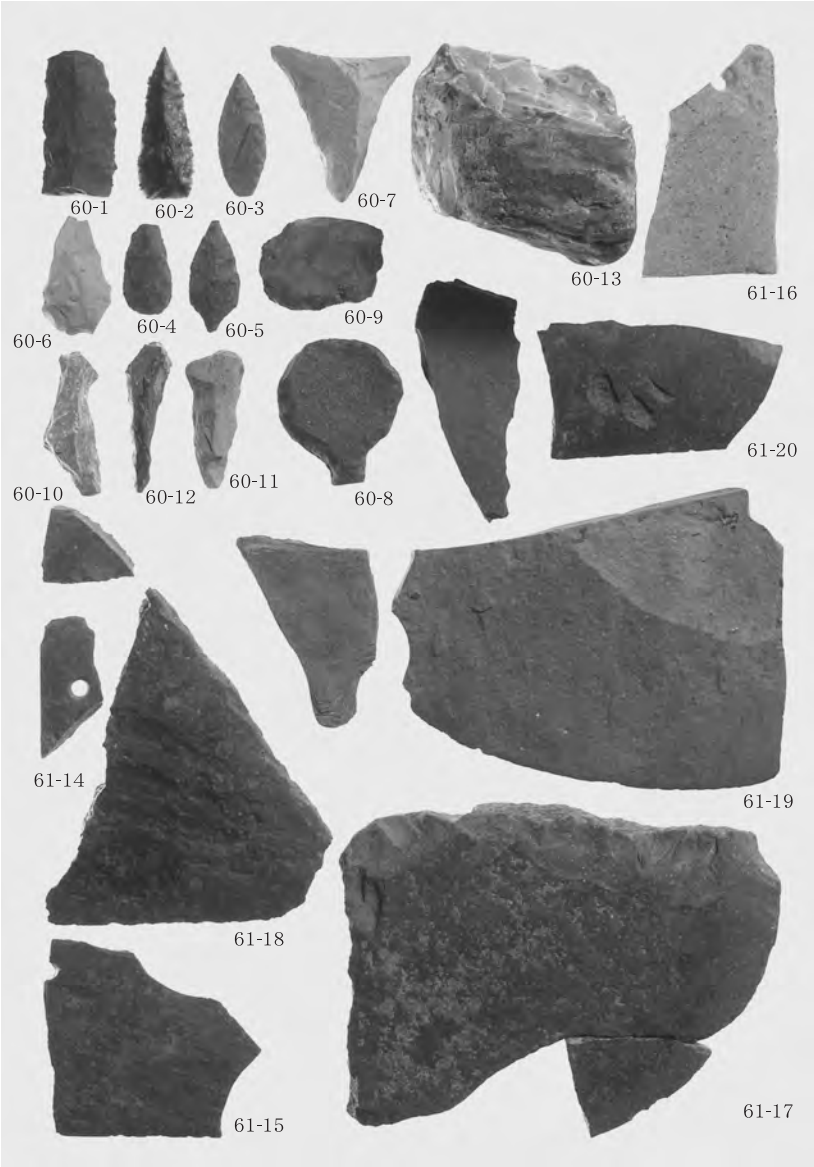
図版第三四　遺物　墨書土器・須恵器・土師皿・灰釉



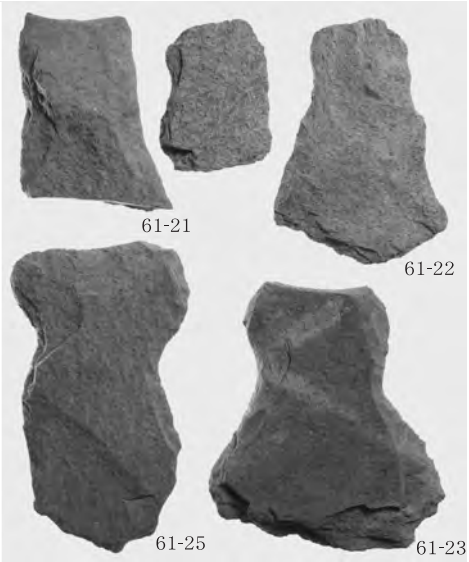
(1)　土師皿・灰釉　　(2)　墨書土器



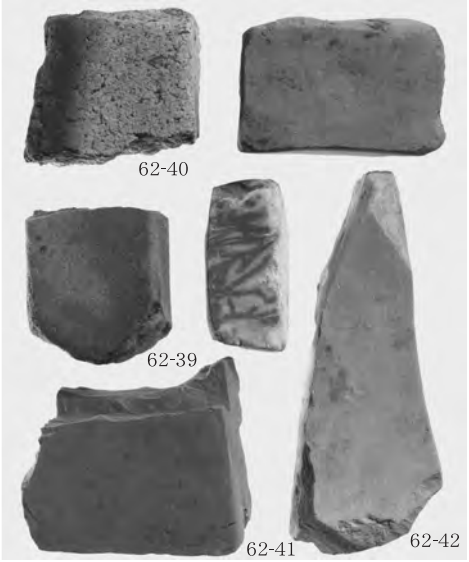
(3)　須恵器



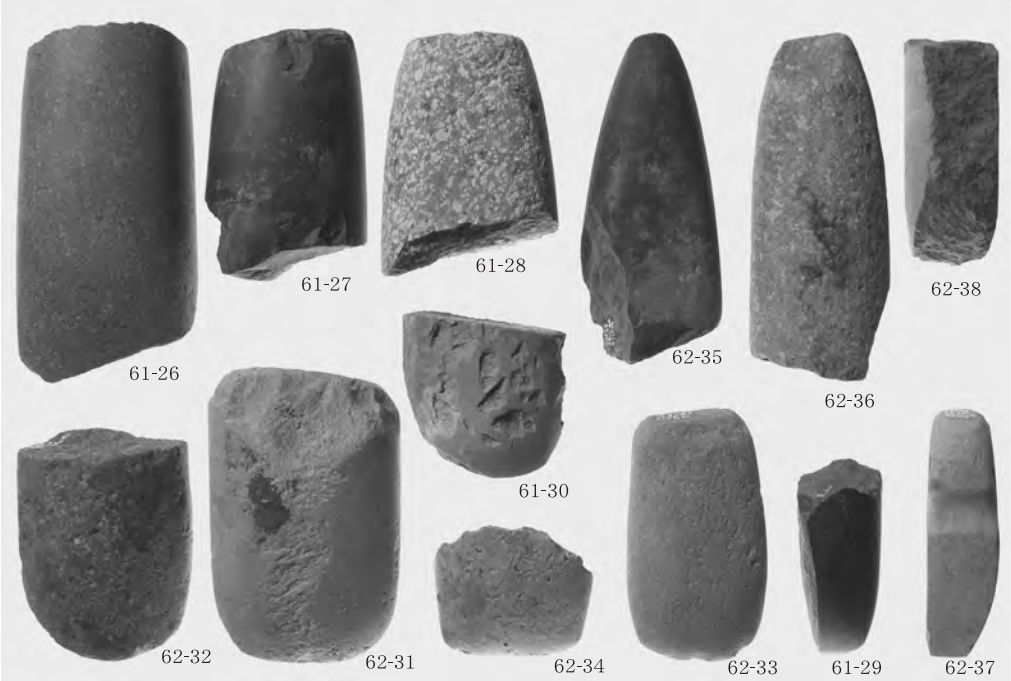
(1)　石槍、石鏃、石錐、石核、石庖丁



(2)　石鍬



(4)　砥石

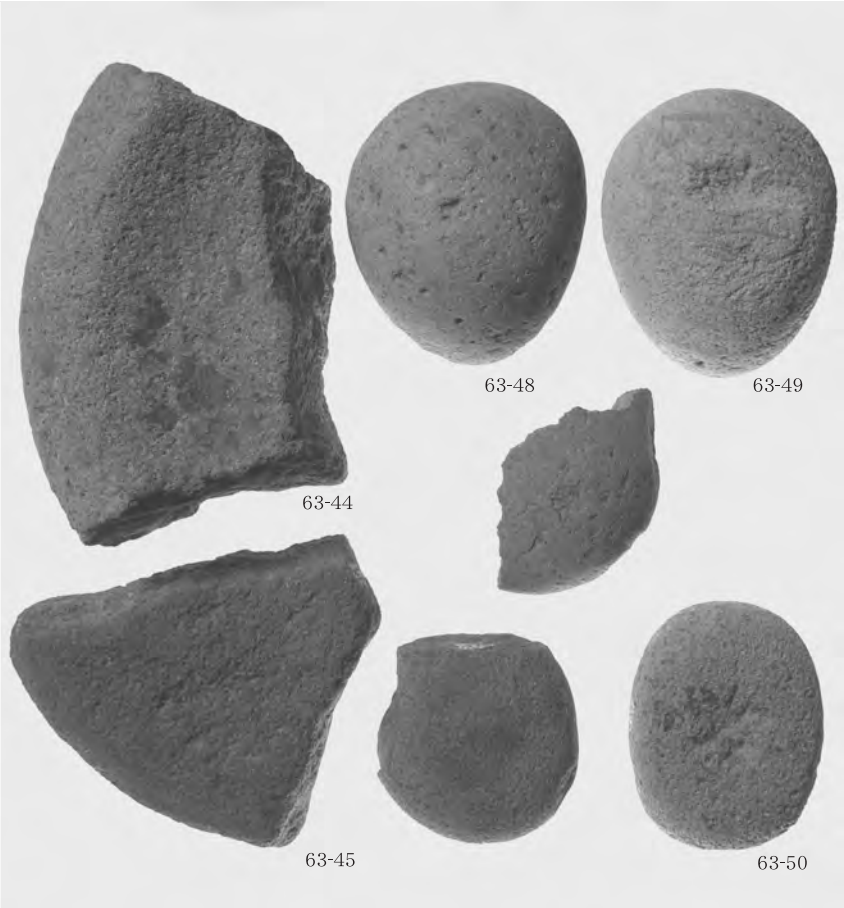


(3)　磨製石斧

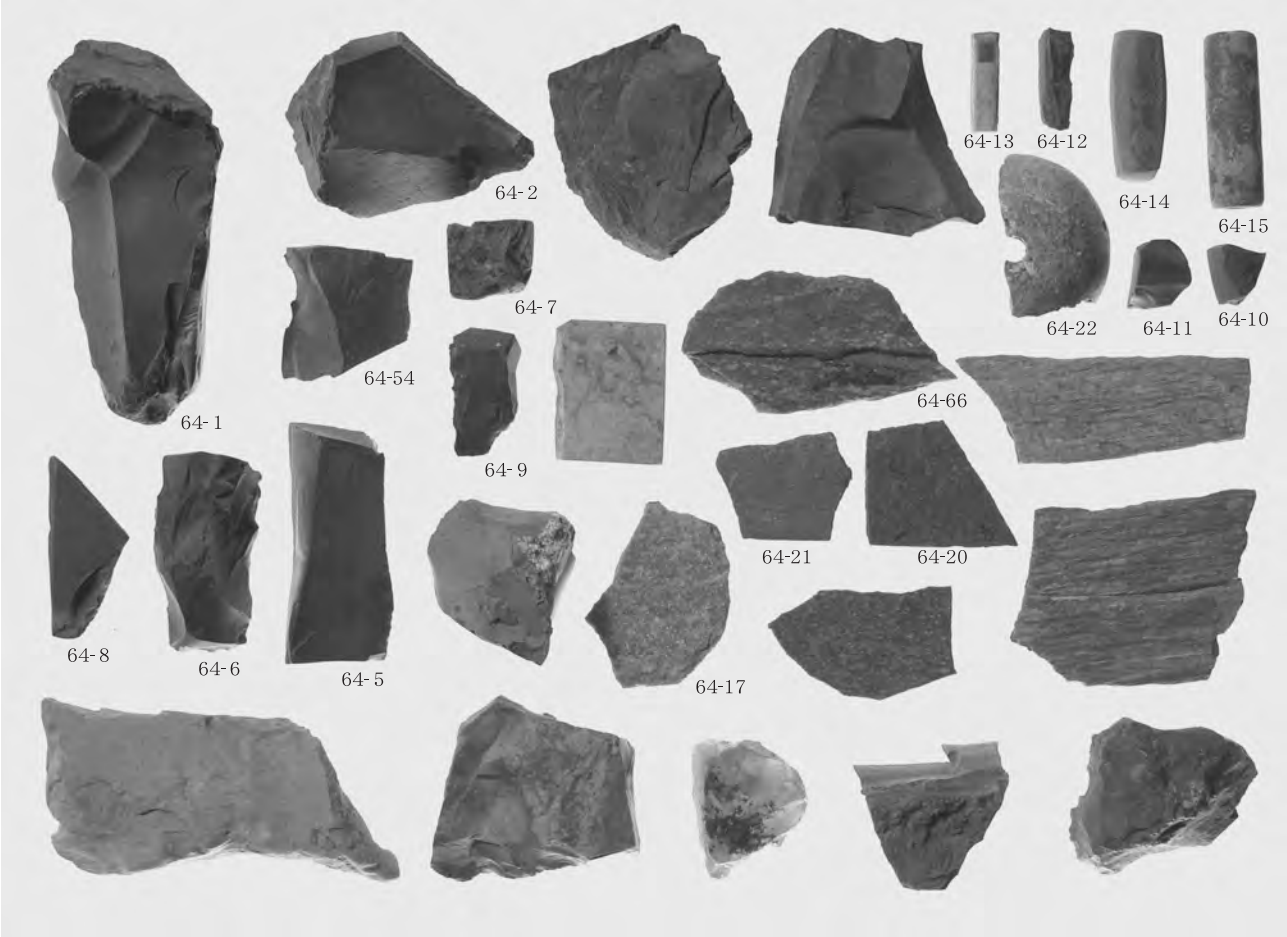
(5)　砥石

図版第三六　遺物　石器(Ⅱ)・玉作り関係遺物

(1)　石皿

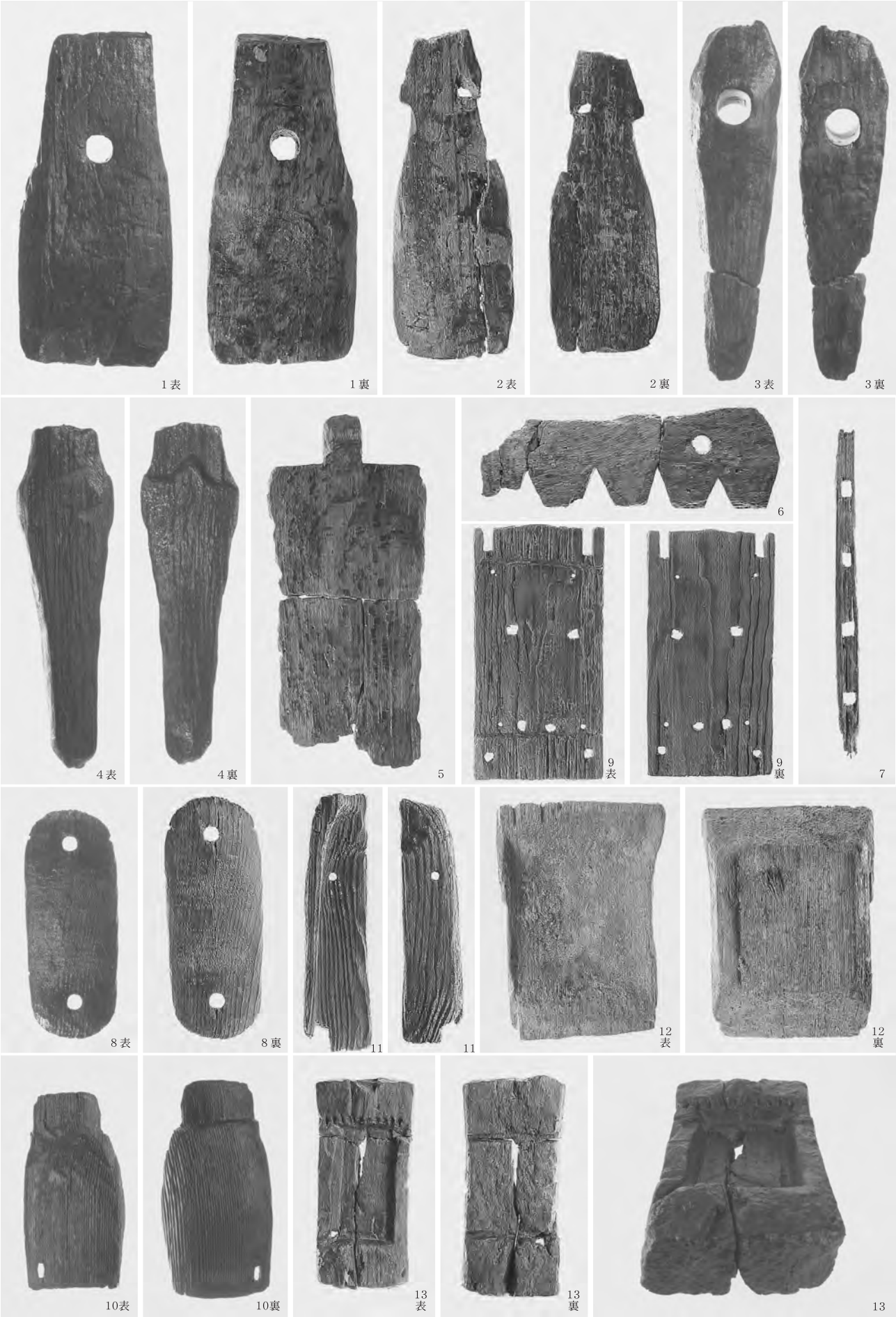


(2)　石皿、凹石、敲石

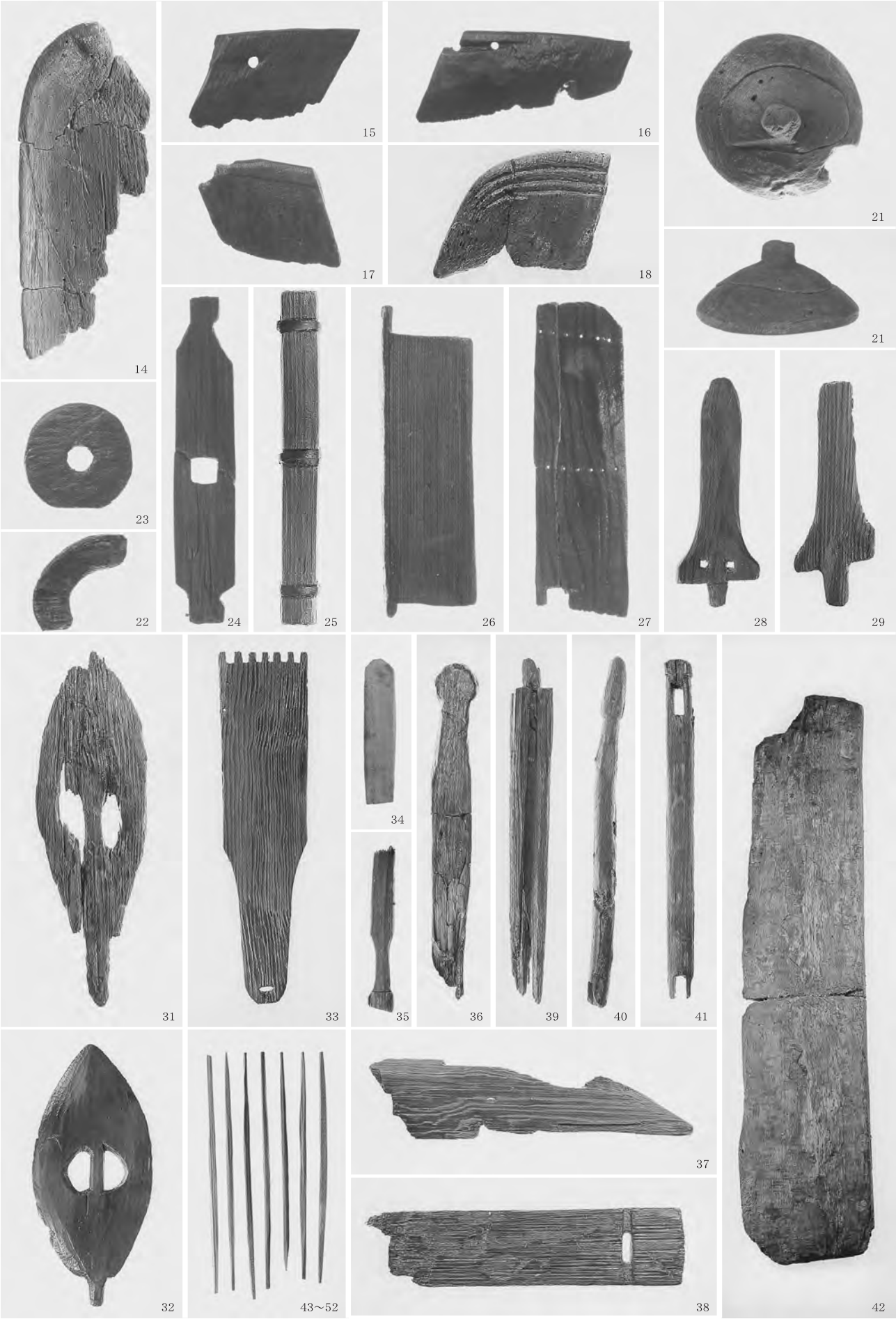


(3)　玉作り関係遺物

図版第三七　遺物　木器（Ⅰ）


1表
1裏
2表
2裏
3表
3裏
4表
4裏
5
6
9表
9裏
7
8表
8裏
11
11
12表
12裏
10表
10裏
13表
13裏
13

図版第三八　遺物　木器（Ⅱ）


14
15
16
21
17
18
21
23
22
24
25
26
27
28
29
31
33
34
35
36
39
40
41
32
43～52
37
38
42

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くそおきいせき
書 名	糞置遺跡
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	福井県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 90 集
編 著 者 名	冨山正明　鈴木篤英　山本孝一　田中勝之　岡田幸　西本智子
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒910-2125　福井県福井市安波賀町4-10　　TEL　0776-41-3644
発 行 年 月 日	西暦2006年 3月 30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
糞置遺跡	福井県福井市 半田・二上町		01181	36度 00分 14秒	136度 13分 24秒	20020402～ 20040331	7,010	県営圃場整備事業担い手育成型(区画整理)半田地区に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
糞置遺跡	墓域	縄文時代 晩期	水場遺構	縄文土器	
	集落	弥生時代 中期 後期	自然流路 溝 土坑	弥生土器 石器 獣骨	
	集落 墓域	古墳時代 前期	方形周溝墓 自然流路 溝 土坑	土師器 木器	

福井県埋蔵文化財調査報告　第90集

糞置遺跡

県営圃場整備事業担い手育成型
(区画整理)半田地区に伴う調査-

平成18年3月20日　印刷
平成18年3月30日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152　福井市安波賀町4-10
印刷　足羽印刷株式会社
〒918-8231 福井市問屋町3丁目212番